

バカとテストと召喚獣～オレと兄さんとFクラス～

アカツキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

観察処分者である吉井明久には同じ高校に通う双子の弟がいる。

二年Fクラスに吉井双子が揃った時、この学園に何をもたらすのか？

これはもしも吉井明久に双子の弟がいたら？というIFストーリーです。

目次

プロローグ	1
試験召喚戦争編	
これがFクラス	4
Fクラスの同士達	10
Fクラスの戦力	16
作戦会議は屋上で	22
Dクラス戦！	27
Dクラス戦決着	31
交渉難航中？	36
弁当殺人事件（未遂）	42
Bクラス戦に向けて	47
Bクラス戦！①	53
Bクラス戦！②	60
Bクラス戦！③	65
Bクラス戦！④	71
楽しい戦後対談	75
倒すために	81
Aクラス戦交渉	87
Aクラス戦！①	93
Aクラス戦！②	99
Aクラス戦！③	105
Aクラス戦を終えて……	110
ラブレター事件	116

清涼祭編

清涼祭準備

128

出し物決定！（遅くね？）

134

転校する？それとも転向する？

140

雄二の発見と見解

145

学園長と3人のバカ

152

清涼祭スタート

161

銘刀誕生……？

170

営業妨害

175

机調達

181

VS代表コンビ？

187

Aクラスへ

190

女装した男性に対して痴漢は成立する？

199

チャイナドレス

203

四回戦に向け

210

勝利に犠牲は付き物

214

準決勝に向け

221

やはり勝利に犠牲は付き物

225

暴走と救出

233

ババア召喚

242

勉強しよう

249

決勝戦の朝は早い

255

舞台は整った

263

決勝戦！

271

祭の終わり

277

終わりの終わり

285

閑話

雄二&霧島さん結婚大作戦！

①

289

雄二&霧島さん結婚大作戦！

②

294

雄二&霧島さん結婚大作戦！

③

302

雄二&霧島さん結婚大作戦！

④

310

I F 並行世界の物語

317

バカ+プールⅡ？

①

323

バカ+プールⅡ？

②

329

文月学園お昼の放送

334

バカ+プールⅡ？

③

341

バカ+プールⅡ？

④

355

バカ+プールⅡ？

⑤

361

バイトしよう

①

372

バイトしよう

②

378

バイトしよう

③

387

バイトしよう

④

393

学力強化合宿編

平和な朝に贈る悲鳴

404

平和だった朝 平和だった二人

409

いざ卯月高原へ

420

調査と乱入と冤罪と

430

折檻と情報交換と……

436

録音機 悪戯 ダメ絶対

443

Fクラス出撃！	453
朝の未遂事件！	459
よし、味方を増やそう	465
他クラスとの交渉	470
囿という名の生贄	475
メッセージと土下座！	483
撮影会	489
三日目の終わりは……夜襲！?	496
睡眠不足の四日目	507
いざ女子風呂へ！	516
激突!?! 明久VS光正!?!	525
停学期間中編	
停学期間Ⅱ平和	533
補充テスト IN Aクラス	539
対決!?! 光正VS鉄人！	546
紫乃、現実を見る	554
紫乃、現実に後悔する	559
デートは中止!?!代わりに……	567

プロローグ

この学園に入学して二度目の春。桜が咲き誇る坂道を上がっていったところにオレが通う校舎はある。

「全く。なんでこんなところに学校なんて建てたんだ？ここに建てたやつはバカじゃねえのか？」

悪態をつきながら……というか、ほぼ毎日のようにしている気もするが関係ない。桜が咲こうと思うことは変わらないということだ。

そして、そんな桜の舞い散る景色の中に一人佇む男がいた。

「鉄人。おはようございます。本日もご苦労ですね」

「今、鉄人と言っただろ？」

「ええ、文句ありますか？」

「名前で呼べ。後先生を付けろ」

この人は鉄人こと西村宗一教諭。生活指導の鬼でトライアスロンを趣味としている先生だ。

オレの中ではこの人は就く職を間違えていると思っている。きつと格闘家でも充分にやっていけただろう。まあ、そんなの個人の自由だからとやかく言うつもりはないけど。

「はいはい。分かりましたよ西村教諭」

「……はあ。去年から思うが本当に、貴様は性格が悪いな……」

「性格が悪いかもしれない。でもそれだけで、素行不良というわけではない。でしょ？」

別に制服を着崩しているわけでも（着崩してもカツコイイと思わない）髪を染めているわけでも（いや、髪の毛痛むじゃん）ましてやピアスをつけているわけでも（うん。痛そうというか、痛いよね絶対）ない。見た目は普通なのだ。どこにでもいそうな平凡な高校生男子。

「全く……まずは、目上の人に対する言葉遣いをだな……」

「あ、大丈夫です。その辺は上手くやっていますので」

「これだから、性格が悪いやつは……」

「ははは、それで？立ち話もいいですけど渡すもの渡してもらえますか？」

朝早くから西村教諭が校門の前に立っていたのにはわけがある。

クラス編成の発表のためだ。

え？紙で貼り出せばよくない？とか思っている人たち。これはそう言うことでは無いのだ。学校側もこんな面倒くさい方法を取るのにはわけがある。まあ、その訳は後に分かると思うから今はおいとい
て……

「受け取れ」

西村教諭が茶封筒を差し出してくる。

この中に自分の所属クラス。つまりA〜Fクラスのどこに所属するかが書かれている。

この学校のクラス分けは至ってシンプル。春休みすぐに行われた振り分け試験。そこでの点数が高いものから順にAクラスへ振り分けられる。一クラス五十人だからAクラスには振り分け試験での上位五十人が所属するわけだ。

「残念だったな。何分この学校の決まりでな」

「いえいえ、仕方ないこともありますって。別にオレはルールを破つてまで上のクラスに入るつもりはありませんよ」

『吉井光正……Fクラス』

「あの時の試験監督だった先生は退職になった」

「そうですか」

「でも、俺にはお前の取った選択は賢い選択とは思えなかったが」

「ははは、西村教諭。一つ言っておきますよ——オレは他人が思っているほどできた人間じゃないですから」

そう。オレはできた人間じゃない。だから、感情に任せて選択することもある。

「そうか。……ところで兄の方はどうした？」

「多分やっとなら起きたぐらいじゃないっすか？別に起こす道理もないんで」

「……遅刻するんじゃないだろうな？」

「さあ？オレには答えられないですね。じゃあ、そう言うことで」
「ああ、今年も楽しめよ。吉井弟」

こうして、オレの……吉井光正の二年生の生活は幕を開けるのだっ
た。

試験召喚戦争編

これがFクラス

時間にもゆとりがあるように家を出てきたんだ。この際Aクラスの設備でも見に行きますか。

なんだ？このバカでかい教室は？そもそもこの広さからして教室かも怪しいが……

いや、広さだけでない。設備も充実している。充実し過ぎてる！
クラスに冷蔵庫？それに各個人にエアコン？もう頭がおかしいんじゃないだろうか？

「……………」

おっと、オレとすることが少し見入っていたそうだ。教室の中からこちらを見る視線を感じる。

よし、自分のクラスまで退散しよう。

二年F組と書かれたプレート……は？……ここが教室？ちよつと古い物置とかじゃなくて？入るの嫌になってきたんですけど……

よし、深呼吸をしよう。そうすればこの物置も普通の……Aクラス並とは言わない。中学校の時のような普通の教室に変わるはず………変わんねえよクソが。

いやいや、きつと中は綺麗とかそういうパターンだ。ほら、人を見かけによらないとか、ちよつと見た目が悪い料理でも味は一流とか……そういうパターンだ。そうに違いない。

そう思うくとして勢いよくドアを開ける。そこで目にしたものは……

薄汚れた黒板

ひび割れた窓

腐った畳（マシなものもある）

今にも壊れそうな卓袱台や教卓に綿の入ってない座布団

「予想より酷すぎるだろう！」

「おいおい。吉井家では、発狂することが流行りか？」

そう言つて、声をかけてきたのは背が180cmより高く、短い髪を逆立てたてがみのように見える……

「そんなわけないだろ。雄二」

「だろうな。光正」

オレと兄さんの悪友、坂本雄二だ。

「よく、兄さんと間違えなかつたね」

「当たり前だ。明久はこんな時間に来ねえし、そもそもそんなにお前から似てねえし」

「だよー」

黒い髪に少し細くならんでいると勘違いされてもおかしくない目元

うん。双子と言うのにまず顔つきがそこまで似てない。見分けるのは簡単だろう。

というか、似ているのは髪型ぐらいで、初見では双子と思われることはほぼないしな。

本当はこの髪型も少し変えたいんだよね……まあ、今はいいや。面倒だし。

「それに中身もそこまで似ていねえしな。纏っている空気？とかも違うし。というか、お前の学力の半分を明久に分けてやりたいぐらいだぜ」

「そうしたらバカと呼ばれないかもね」

「まあ、予想外の戦力も手に入ったしな」

「ん？ということは雄二がクラス代表？」

「そうだ」

「えーつと？戦力って試召戦争のことか？」

「ああ。もちろんだ」

試験召喚戦争。通称試召戦争と言われるもの。

前提として文月学園で受けるテストは一年生の最初のテストと一学期の期末試験を除き点数の上限がない。一時間という制限時間で解けるだけ解く。能力次第で点数が上がっていくのだ。

そして、この学園には科学とオカルトと偶然によって完成された『試験召喚システム』が存在する。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステム。

ここで重要となる点数だが、まあAクラスの生徒一人に対してFクラスの生徒が三人……いや、四、五人でも厳しいかもしれない。まあ、そんなレベルだと思ってくれて構わない。

「まあ、お前みたいな例外がいてくれれば勝算はある」

雄二の言うように例外が存在する。存在するというより、存在出来ると言った方がいいか？クラス分けというのは振り分け試験の成績だけを見て行われる。一年次の成績とかは一切考慮されない。つまり、点数操作をすれば、本来Aクラスレベルの人でもC、Dとかに行けるわけだ。

もつとも、そんな点数操作をする人はそういないし、オレの場合、途中退席で無得点扱い。強制最下位でFクラス行きというわけだ。

「頼りにしてるぜ。光正」

「兄さんも頼ってやれよ」

「ああ、もちろん。明久も頼りしてるさ」

「やれやれ、オレはあそこにも座るか」

雄二と話しているうちに続々と人が集まるFクラス。何人か見知った顔もあるようだ。

これから戦友として、ともに戦う同士たち。オレはチャイムが鳴るまでその同志たちを眺めることにした。(しかし、兄さんはチャイムが鳴るまでに現れなかつたことを記す……おい！)

先生が遅れている。

そう情報が入ったのは少し前のことだ。いや、先生だけじゃなくて兄さんも遅れてるんだけど。

まあ、そんなことはおいといて、クラス代表である雄二が教壇の上からオレたちクラスメイトを眺めている。

ガラツ

お、先生が来たのか？

「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

どうやらウジ虫兄さんだったようだ。というか、ちよつと遅れたつて普通に遅刻だから。後反省する気がないみたいだし。

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

クラス代表……普通の学校で言う学級委員長とか議長とか言い換えると分かりやすいだろうか？

しかし、この文月学園にとって二年生以降のクラス代表というのは重要な意味を持っている。

まず試召戦争における役割が違う。一部の例外を除き、試召戦争は基本『相手のクラス代表を打ち取った方の勝利』つまり、クラス代表というのは、王様のような存在だ。そして、オレたち兵士は王様を守り、相手の王様を狩るそんな立場だ。

後は、権力の大きさか？このクラスのことに関する大抵の決定権を持っている。まあ、こっちは他の学校のトップの役職とさして変わらないだろう。

「席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

「はい、分かりました」

「うーっす」

おっと、気付いたら担任の先生と思わしき人物が。

……ふむ、何だろうか。この人は街の中に平然というおっさんみただい。

「おはようございます。この二年Fクラス担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原教諭はそう言って汚い黒板に名前を書こうとして、やめた。え？チョークすらろくに用意されていないの？じゃあ、あの黒板の存在意義は何？景観？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

不備……ないと思ってるの？不備しかないだろ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

え？もうこの環境に慣れたの？そもそも椅子がなくて代わりに座布団（年季の入ってる）にはツツコミはないのか？

「あー、はい。我慢してください」

おいおい、綿ぐらい入れておけよ。

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

もういい。机じゃなくて卓袱台というツツコミは控えよう。

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

……え？直してくれないの？

「窓が割れていて風が寒いんですけど」

あーあの窓、割れていたんだ。どうりで寒いと……

「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきますよう」

……新しい窓にした方がいいと思うけどな……あ、そうだ。

「福原先生。布と綿と後、糸も支給して置いてください」

「分かりました。それくらいなら頑張つて頼んでみます。大きさと分量とか指定があれば言ってください」

「分かりました」

よし、これさえそろえば大丈夫だ。放課後、ちよつと見に行くか。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

うん。酷いね。それも設備だけじゃなくて対応まで酷いよ。これがFクラスか。

Fクラスの同土達

「では、自己紹介でも始めましょうか」

自己紹介。する必要があるので本当に分からない。有名な奴（いい意味でも悪い意味でも）は名前を覚えられやすいし、目立たない影のような存在は名前を覚えられにくい。

オレはある程度猫を被って一年生の時過ごしていたからそう覚えられはしてないだろう。まあ、今年は猫を被る気なんて、さらさらねえけど。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

おっと、秀吉もいたのか。秀吉も去年、兄さんと同じクラスの友で、兄さん経由である程度仲良くなつた記憶がある。秀吉も双子で弟という立場から、オレとは気の合うかもしれない。もともと、秀吉の双子の姉はAクラスの上位でうちの兄さんとは天と地ほどの差があるけど。

「……………土屋康太」

うん。また、オレの友達だ。彼も去年兄さんと同じクラスで後は言わずもがな。というか、オレの兄さん経由の友達全員このクラスにいるじゃん（別に一年生のとき、ボッチだったわけでは無い）。うん。それにしても、相変わらず無口だ。うーん。個性に溢れた友達が多いな。

「島田美波です。海外育ちで、日本語での会話は出来るけど読み書きが苦手です」

ふーん。所謂帰国子女ってやつかな？もしかして、兄さんが言っていたドイツからの帰国子女ってもしかして、島田さんのこと？あーそういうえば、兄さん。何故かこの学校入った最初の方フランス語を勉強していたつけ？いや、ドイツ育ちなのに何故フランス語？

「——趣味は吉井明久を殴ることです☆」

おっと、聞き逃せない言葉が聞こえたぞ。何かすっごい兄さんの天敵と成りゆるる人だな。まあ、オレはブラコンじゃないから『兄さんに暴力を振るうなんて許さない！』とか言うつもりもない。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

『ダアアーリーリーン!!』

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

おっと、あのバカな奴がアホなことやらかしやがった。非常に不愉快なんだけど。あんな野太い声でダーリンなんて聞きたくねえ。ああ、耳に残りそうだ。っと……

「吉井光正。その吉井明久の双子の弟。区別するため気軽に光正って呼んでください。以上」

平凡な自己紹介。しかし、吉井明久の双子の弟という言葉だけで、場が戦慄……するわけがなかった。よかった、みんな一様にスルーしてくれたようだ。

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

あー彼女が来たか。まあ、このクラスに配属って知っていたけどさ。

「丁度よかったです。今自己紹介しているところなので姫路さんもお願致します」

「は、はい!あ、あの姫路瑞希といいます。よろしく願致します……」

「はいっ!質問です!」

え?自己紹介って、質問ありだったの?そのシステム初めて知ったんだけど。

「何でここにいますか?」

彼女……姫路瑞希は成績が凄い。入学して最初のテストで学年二位を記録(ちなみに、オレは四位で五位と一点差だった)。その後も上位一桁以内に常に名を残すほどだ。

普通なら疑問があるだろう。なんせ、Aクラスにいるはずの彼女が最下層のFクラスにいるのだから。

「そ、その……試験中に高熱を出してしまいました……」

うん。知ってる。姫路さんが途中退席で0点になったということ
は。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでこのクラスに……』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったって聞いて心配で実力が出しきれなくてな』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

おっと。これは想像以上のバカばつかだ。

そんな中姫路さんは逃げるように雄二の隣……って、オレの後ろか
よ。その席についた。

雄二、姫路さん後兄さんの三人で会話を始めるが興味がない。

……って思っていた時期もありました。

「おい明久。声を殺してぎめぎめと泣くな」

何故か、兄さんが泣く事態が発生。まあ、理由は分かっているけどさ。
オレもさすがに唯一好きになつてくれたり興味を持ってくれた子
が男だったら泣く自信あるし。

「そこの人たち、静かにしてくださいね」

どうやら、後ろの三人の会話がヒートアップし、先生のところまで
聞かれたようだ。

そのせいで、パンパン、と軽く教卓を叩いて先生が警告してきたの
だ。

「あ、すいませ——」

バキイツ、バラバラバラ……

……何という事でしょう。教卓が一瞬にしてゴミクズに早変わり
です。

「えー替えを用意してきます。少し待っていて下さい」

先生が出ていってすぐ、何故か兄さんと雄二も廊下に出ていく。
まあ、気にも留めないが。

「あの、光正君……ですよね？」

おっと、気付かれてしまったようだ。いや、前にいるから気付く

なつて方が無理な話か。

「振り分け試験のときはありがとうございました」

「お礼なら兄さんに言ってくれ。オレは何もしていない。ただ、振り分け試験が面倒で途中退席しようとした時にタイミングが被っただけだ」

そうオレは何もしていない。だから、お礼を言われる筋合いはない。

「ふふ、相変わらず器用なくせにそういうところは不器用ですね。そういう不器用な優しさを持っているあたり、さすが双子ですね。もちろん、吉井君にも感謝してますよ。それで光正君……」

あの兄さんなら姫路さんに感謝されたって、街中を走り回りそうだ。うん。面白そうだけど絶対に兄弟と思われたくないな。

「何で私と距離を取ろうとしてるんですか!?!」

あはは………ばれたか。

「……そ、そんなことない。というか、いい加減兄さんのことも名前前で呼んでやれよ。吉井君なんて他人行儀だろ?」

「そ、それは……恥ずかしいと言いますか……」

「お、光正も姫路と知り合いだったのか?」

「あ、雄二か」

どうやら、雄二と兄さんが帰ってきたようだ。

「まあね。というか、何話していた?」

「ああ、ちよつと面白いことをな。まあ、後で分かるさ」

このいやらしい笑みは……うん。間違いなく何かやらかすぞ……

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人です」

「了解」

あれから、先生戻ってきて気付いたら自己紹介も雄二の番まで回っていた。

そして、ゆっくりと教壇に向かっていくがその姿にいつものふざけた雰囲気は見当たらない。そして、教壇に立ち、振り向く。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

いつもなら、ここでふざけた発言をする者が居るだろう。しかし、彼の姿を纏う雰囲気を見て口を開く者は誰もいなかった。

「赤ゴリラ〜」

ただ一人。オレを除いては。

「はっ倒すぞ」

「好きなようにって言ったのに?」

「赤ゴリラは却下だ」

「へいへい」

全く……好きなように呼んでくれって言ったのに。

「さて、皆に一つ問いたい」

我らがFクラスの代表は、ゆっくりと全員の目を見るように告げる。

間の取り方が上手い。そのせいで、全員の視線を自分に誘導している。

そして雄二はそれを確認したうえで、各所に視線を散らす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸置き、静かに告げる。

「――不満はないか?」

『大ありじゃあっ!!』

我ら二年Fクラス魂の叫びだ。

「だろう?俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからってあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?』

まあ、不満は抱いてないって言ったら嘘になるけどさ……でも、Aクラスへ行けるチャンスはみんな平等にあったよね?

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは代表としての提案なのだが――」

あれ？これはまさか……

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
ですよー。オレたちの代表は戦争の引き金をひいたのだった。

Fクラスの戦力

Aクラスへの宣戦布告。

これはFクラスにとって現実味の乏しい提案である。

オレですら、この提案は無謀という言葉が似合うと思っっている。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

案の定と言うべきかクラスメイトからは否定の言葉が出てくる。

さすがにバカのFクラスであっても、Aクラスとの差が絶望的であることは理解しているようだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

反対意見が多い中雄二は宣言する。その表情には自信が溢れていた。

「ふーん。根拠は？」

オレはそう聞く。こういう時は否定的な意見を述べるだけじゃダメだ。根拠の有無。そして、その根拠が本当に正しいか。これを確認する必要がある。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。今からそれを説明してやる」

勝つことのできる要素……か。相手はAクラス。ある程度強いカードじゃなければ根拠にならないけど……

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振って否定のポーズを取る。さすがと言うべきか？堂々と恥も外聞もなく女子のスカートの中を除く人間がここに存在している。うちの手鏡から必死に覗こうとしていた時期のあった兄さんと雲泥の差だ。

「土屋康太、こいつがああ有名な寡黙なる性識者だ」

「……………!! (ブンブン)」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。しかし、ムツツリー二という名前はこの学年なら誰でも知っている。もはや、共通認識だ。男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以って挙げられる名だ。

『ムツツリー二……………だど?』

『馬鹿な、ヤツが……………?』

『だが見ろ。あそこまで明らかかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………』

『まさにムツツリーの名に恥じない姿だ』

さすがムツツリー二だ。自分の下心丸出し行動を今だ隠そうとしている。しかも堂々とだ。

「???'」

ちなみに姫路さんの頭には疑問符が浮かんでいるが……………つて、ちよつと待つて。何でムツツリー二が戦力になるか言つてなくない!?

そう思う中雄二の話は続く。

「姫路とその吉井弟は説明するまでもない。皆もその力は良く知っているはずだ。うちの二大戦力だ。期待している」

二大戦力ねえ……………これで、ムツツリー二がどういふ戦力か説明するのをカットしやがった。ついでにオレたちも。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいる』

『それに、賢い方の吉井もいるんだ』

『この二人ならAクラスにも負けていない』

『姫路さんさえいれば何もいらぬ』

おい誰だ。さつきから、場違いなことを言い続けている奴は。

「木下秀吉だつている」

秀吉は学力では名前を聞かない。ただ、他のことで有名だ。演劇部のホープだとかまあ、いろいろと。

『おお……………!』

『アイツ確か、木下優子の……………』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうだな』

『あいつって、小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか?』

『もしかしてうちのクラスにはAクラスレベルが三人も……!』

さすが雄二。誘導が上手い。

今上がった5人は誰一人として学力のことも、召喚獣のことも言っていない。それなのに、こんなにも勝てるかもと思わせ、士気を上げるとは……場を支配する力がこのFクラスの中で群を抜いている。

さあ、このクラスの士気を上げた今、次は誰の名前を出す?

「それに吉井明久だっている」

そして士気は一気に下がった。

「ちよつと雄二! どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ!」

『誰だそいつ?』

『さあ? 賢い方の吉井は知っているけど』

なるほど。うちの兄さんはオチ扱いか。

「知らねえなら教えてやる。こいつはバカな方の吉井で文月学園初の観察処分者だ」

『それってバカの代名詞じゃねえのか?』

「ああ、バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二!」

ここで観察処分者いうものを説明しよう。

観察処分者とは、成績不良、学習意欲に欠け、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分の事だ。

まあ、仕事といえば教師の雑用係で、力仕事とかそういった雑用を行う。普通の召喚獣は物に触れる事は出来ない。しかし、観察処分者の召喚獣は特例として物に触れる特別製だそう。

これだけ聞いたなら羨ましいと思うかもしれない。

しかしそんな甘い処分では無いのだ。
理由としてまず、召喚獣というのは教師の立会いがないと喚び出せない。

これは、オレら普通の召喚獣もそうだし、兄さんの特別仕様の召喚獣でもそう。

つまり、自分が使いたい時に使えない。使えるのは教師の監視がある時だけでそこに自由なんてものは存在しない。

次に召喚獣の負担の一部が操る本人にフィードバックするから。

オレらの召喚獣は戦ってダメージを受ければ点数が減る。しかし、召喚者本人にダメージが来るわけでは無い。だから、自分の召喚獣がどれだけダメージを受けても、またどれだけ酷使しても、痛みや疲労がフィードバックすることは無い（ただし、召喚獣を操る集中力による疲労は別）。

しかし、兄さんの召喚獣がもし、戦争でダメージを受けたら、その一部が兄さんの身体にも返ってくるのだ。

自分の為には使えない上に疲労や痛みを感じる。まあ、罰にはふさわしいか。だからこそ、ペナルティであり、バカの代名詞であろう。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ?』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

血気盛んで喧嘩をフツかけるタイプならこんなこと関係なしに喜々として戦場へはせ参じるが、生憎うちの兄さんはそんなタイプでは無い。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

大胆にスルーしたなー

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!』

「ならば全員筆ペンを執れ!出陣の準備だ!」

『おおーっ!!』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない!Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおおーっ!!』

「お、おー……」

戦うのは面白そうだけど……あんまり、いい気がしないな……

だって、Aクラスに勝ってしまったら彼女がこの教室を使うことになってしまう。それだけは嫌だ。……って、何であいつの心配しているんだろう？

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者へとなって貰う。無事大役を果たせ！」

雄二が兄さんにそんな事を言っているが……

「下位勢力の宣戦布告の使者つて大抵酷い目に遭うよね？」

どうやら小学生と同レベルの脳みそを持つ兄さんでも、それぐらい分かっているみたい。

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

極悪非道、自分の作戦のためなら友人をも平然と騙し、捨て駒にする男。

「大丈夫だ。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

雄二のどこを見て信じると？これで信じるほど兄さんはバカでは無い——

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

——と信じていたオレがバカでした。これだから、うちのバカは

……

「ああ、頼んだぞ」

雄二がそう言うのと兄さんは誇らしげな表情のまま、我らがFクラスのクラスメートの歓声と拍手に送りだされ、教室を出て行った。

「で？お前は止めなくてもよかったのか？光正」

「別に。行くという決断を下したのも、騙されて行ったのも兄さんの自己責任。オレには関係ない」

「やっぱり、分からねえ。何でお前程の男が明久を兄さん呼びなのかが」

「とか言いつつ実際、分かっているんですよ？ 兄さんを兄さんと呼ぶだけの価値がある人にはあるということ。だから、Aクラスに勝つための戦力として名を上げたんでしょう？」

「さあな。さて、作戦でも考えようか。お前も手伝え光正」

「はいはい。雄二代表？」

その後、ボロボロになって、兄さんが帰ってきたのは言うまでもない。

作戦会議は屋上で

オレ、雄二、兄さん、秀吉、ムツツリーニ、姫路さん、島田さんの七人は屋上に集まってミーティングをはじめていた。

無論招集をかけたのは我らが代表雄二である。

「明久。ちゃんと宣戦布告してきたな？」

「一応今日の午後には開戦予定と告げてきたけど」

今日の午後……って、もうすぐじゃん。え？明日とかじゃないの？

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久。今日の昼ぐらいはまともな物食べろよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

そういえば、兄さんって去年弁当を作ってあげた記憶も、ましてや持たせた記憶もないんだけど、何食べていたんだろう？不思議だ。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べてると言えるのか？」

「何が言いたいのさ」

「……明久の主食って水と塩だろ？」

「きちんと砂糖も食べてるよ！」

自分の実の兄……本当は人間では無いのではないだろうか？

主食が水と塩と砂糖って……一体……。

「それは食べるとは言いませんよ……」

「……正確には舐めるが正解」

いや……うん。その舐めると食べるの些細な違いよりも……よく生きてるね。

「まっ、飯代を遊びに使いまわお前が悪いな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「じゃが、明久よ。光正はこうして、弁当を持ってきておるぞ」

当たり前だ。その兄さんと違ってオレはれっきとした人間。水と調味料だけでは健康を害してしまう。だから、朝少し早起きして作るのだ。え？昨日の夕飯の残りを入れればいいって？この兄さんが

いるから夕飯が余ると思つたら大間違いだよ。

「こ、光正の方が仕送りが多いんだよ」

「それは兄さんが母さんに成績を定期的に報告していないから。というか、それ抜きにしても仕送りは充分もらってるはずだよ。違う?」

あーそういうえば母さんが、あまりに成績を報告しないと兄さんの仕送りを止めるって言つてた気がするけど……まあ、いいか。

「というか、お前は明久の分を作つてやらないのな」

「はあ?夕食でオレの分を少し分けてやつてるんだから朝と昼ぐらい自分で調達して来いよ」

「……明久。弟に食事を分けてもらつて生きているとか……惨めじゃないのか?」

「ぐっ……べ、別に歳が離れてないからセーフで……」

何がセーフだ何が。まあ、夕食を提供する代わりに兄さんのゲームをやらせてもらつているからオレ的には兄さんの利用価値があると思つている。

「……あの、もしよかつたら私がお弁当作つてきましようか?」

「……」

え?…この兄さんに……だよな。

「本当にいいの?僕、お昼に塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ」

「はい。明日のお昼でよければ」

姫路さんは相変わらず兄さんに優しい。いや、誰にでも優しいんだろうけど……なぜだろう?オレの頭の中で危険を知らせるアラームが鳴り響いているんだけど……しかも何故か今になって、姉さんの存在を思い出しているし……やべえ。姉さんを思い出すと震えが……。

「良かったな明久。手作り弁当だぞ?」

「うん!」

「……ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

何故か不機嫌な島田さん。まあ、オレとしてはどうでもいいけど

……

「あ、いえ！皆さんにも……」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなければ」

うーん。さっきの予感が当たるとも限らないし、ここは作ってもら
うが吉か。……食費節約できるし。

「それは楽しみじゃのう」

「……………（こくり）」

「お手並み拝見ね」

「まあ、どれくらい腕前は気になるし」

上手い下手も含めてであるが。

「とりあえず、試召戦争の話をしよう。時間も限られているしな」

「雄二。一つ気になったんじやがどうしてDクラスなんじや？」

「確かに、段階を踏むならE、最初から勝負するならAじゃねえのか
？」

「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ」

「つまり、Eクラスは相手でない」と

「でも、僕らよりクラスが上だよ？」

確かにクラスは上だ。でも、クラスが上⇨学力があるわけでも、こ
ういう試召戦争に強いとは言いい切れない。特にこつちには作戦を考
える司令塔と高い点数を持ち、相手代表の首を一撃で狩れるカードが
何枚かある。確かに、Eクラスとは戦うのは無駄かもな。

「明久見てみる。ここにいるメンバーを」

雄二が兄さんに集まったメンバーを見ると言い、兄さんは全員の顔
を見回し言う……

「美少女が二人、馬鹿が二人。後、ムツツリが一人に性格の悪い弟が一
人いるね」

「誰が美少女だと!?!」

「どうして、雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう!?!僕だけじゃツツコミ切れないよ
!?!」

「オレは性格悪くねえぞ。むしろ良くねえか？」

「そこ!?!というか光正はどこからどう見ても性格悪いでしょ!」

そうかな? まっすぐ純粋で性格良いと思うんだけど。

「まあまあ皆落ち着くのじゃ」

オレは最初から落ち着いている。一番うるさいのは兄さんだ。

「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

「姫路や光正に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

ですよー知ってた。

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「今はその時じゃないってこと。ほら、兄さんがいくらバカでも最初からボスに挑まないでしょ?それと同じ」

「まあ、初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ?

それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

「あ、あの!」

「ん?どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけたって……吉井君と坂本君は前から試召戦争について話し合ってたんですか?」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為にって明久に相談されて――」

「それはそうと!」

やれやれ。兄さんも相変わらずか。というか普通に聞こえたんだけど。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

当たり前である。

「負けるわけないさ」

そして、兄さんの心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………(グツ)」

「ジャイアントキリング……………楽しそうだな」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。

Fクラスという底辺のクラスで強者Aクラスを引きずり下ろす。

オレはがらにもなく、ワクワクしていた。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、オレたちは勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦!

昼休みの終わるチャイムが鳴り響く。そして、それは僕らFクラスとDクラスの戦争の開始を意味するものであり……

「回復試験をお願いします」

「右に同じく」

「科目はどうしましょう?」

「現代文からお願いします」

「右に同じく」

オレたち点数無い組の回復試験の開始を意味するものである。

回復試験は試召戦争中に受けられるテストのこと。文字通り、召喚獣の点数を回復するものだが、正確には違う。点数が回復するとは限らない。では、どういう場合に回復しないのか?簡単だ、このテストを受けに来た時より低い点数を取ればいい。この回復試験は普段の試験と違い切り上げが可能。要するに一時間まるまる回復試験に当てる必要はないのだ。だから……

「先生。次、古典」

「……失礼ですが、切り上げるの早くありませんか?」

「いえ、主人公の気持ちとか脇役の気持ちとか一切わかんないんで」

「は、はあ……」

どれくらい経っただろうか?いや、実際そんなに経っていないと思うが、秀吉たち先攻部隊が全員補充試験に来ている。うん。つまり今戦っているのは兄さんたち中堅部隊。

「先生。化学切り上げます」

「分かりました。……………はい。採点終了です」

点数は……まあ、こんなものか。それにしてもさすが高橋教諭。採点の速さに定評があるお方だ。

さあ、ダッシュで戦場へ……

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

この声は……須川君だっけ？でも、何故放送室に？

《船越先生、船越先生》

???何故、船越教諭？一体戦場では何が起きているんだ？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

……あ、偽情報だこれ。だって、兄さんは中堅部隊の隊長を任されている。そんな兄さんが試召戦争を放っておいてあの船越教諭を待つはずがない。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越教諭。数学の教師で四十五歳女で独身。婚期を逃し、生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった。あー、兄さんが体育館裏に行こうものなら、兄さんの貞操が危険にさらされるだろう。まあ、どうでもいいけど。

「なんか……戦場に向かいたくないな」

こうしてオレは独断で、教室に戻ることを決めた。

『須川ああああああっ！』

尚、遠く彼方より、犠牲となった我が兄さんらしき人の声が聞こえた気がしたが……無視しよう。

「お、光正か。戻ってきたんだな」

「ほい、これ今のオレの点数一覧」

「……………酷いものが混ざってるが気のせいかな？」

「予想の範疇だろ？それで作戦は？」

「ああ、下校している生徒が見えたら始めるつもりだ」

「了解だ」

「さて、そろそろ明久を回収に行くか」

「そうだね」

兄さんも無事(?)回収出来て、もうすぐ下校時間。ん?オレの役目はって?そんなの……

キーンコーンカーンコーン

下校時間を知らせるチャイムが鳴り響く。すると、AクラスやBクラスなどの他クラスから人が出てき始めた。よし……

バンツ!

「Fクラス吉井光正。Dクラスの代表に化学で……」

「Dクラスの中野が受けます。試獣^{サモ}召喚!」

「近衛部隊か……まあいい。試獣^{サモ}召喚」

『Fクラス 吉井光正

化学 312点

VS

Dクラス 中野健太

化学 81点』

オレの召喚獣がその姿を現すが……

「武器多すぎじゃね?」

背中には両手長剣が一本と両手槍が一本。左右の腰にレイピアと太刀が一本ずつ。黒いコートの左右の内ポケットには短剣が一本ずつ。計五種八本の武器がある。ただし、盾とかそういうものはなさそうだ。

「Dクラス……ここに後三人を残して、残りは廊下出てFクラスに攻め

込むぞー！」

『了解！』

……バカめ。これが狙いなんだよ。この単独強襲はDクラスの代表を教室の外に追い出すことが重要だ。

「布施先生。もう少し教室の中に入りましょう。廊下までフィールドの影響が出ると厄介です」

「わ、分かりました」

これでフィールド同士が干渉しなくて済む。

干渉というのは簡単に言えば、違う科目のフィールド同士がぶつかって両方ともキャンセルされること。これを戦略に組み込んでワザとやることはあるが今は意味がないどころかマイナスだ。

「『試^サ獣^モ召喚』」

『Dクラス モブ×3』

化学 78点&92点&87点』

「さあ、ゲーム開始だ！」

オレの召喚獣は両手長剣を持ち、四人に向かって突撃する。

『ごっちは四人だ負けられるかよ！』

『それに点数の合計なら私たちが上でしょ！』

『ここで貴方を倒します！』

『Dクラスに挑んだことを後悔させてやる！』

四人の召喚獣とオレの召喚獣がそれぞれの得物を手に交錯する

……

Dクラス戦決着

Dクラス代表 平賀源二 討死

この報せをオレは四人との戦いが終わった直後に聞いた。え？戦いはって？そんなの……

『Fクラス 吉井光正

化学 7点

VS

Dクラス モブ×4

化学 Dead』

僅差だけど勝利しました。さてと、雄二のところに行くか。

雄二を見るとFクラスの面々に囲まれてしきりに握手を求められていた。

Dクラスという上のクラスを打ち破れたのは間違いなく、雄二が指揮したからであろう。

そんな中、兄さんも雄二に握手をしようとしていて……

「ぐあっ！」

手首を捻り上げられていた。そして……

ゴトツ

兄さんの握り込んでいたであろう包丁が床に落ちた。いやいや、おかしいよね。何で、包丁を持つてるの？どうせ調理室から盗んできたんだろうけど……

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

バカだ。こんな状況で未だごまかそうとしている。

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

何故だろうか。お互い様な気がする。

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛

「いいっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれー」

「す、ストップ！僕が悪かった」

オレが呆れる中、兄さんはギブアップを宣言した。やっぱり体格は重要だね。

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて……信じられん」

Dクラス代表の平賀君がヨタヨタとこちらにやってくる。ふむ、どうやら計画通りに姫路さんがとどめを刺したようだ。

まあ、この学年の普通の人間なら姫路さんはAクラスと勘違いしてしまうのは不思議では無い。きつと、この学校がクラス分けを紙とかで発表していたらどうなっていたかわからないだろうが……。言えることは情報って大事だね。

「あ、その……すいません……」

「いや、謝る事は無い。Fクラスだと侮っていた俺たちが悪いんだ」

姫路さんは謝ったが、オレは謝る必要はないと思う。だって、これは勝負の世界だ。ルールを逸脱した行いならともかく、あくまでルール内だし、対処する策と時間はあつたはず。それを怠つたのはDクラスであり、それがDクラスのミスだ。

「ルールに則って教室を明け渡そう。ただ、今日はもう遅いから明日で良いか？」

「その必要はない。俺たちはDクラスの設備を奪う気はない」

まあ、そうだとは思ったけどさ。

「雄二、どういう事？」

「忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスのはず。だろう？」

まあ、オレとしてはこのDクラスの設備でもいいけどさ。そこは我らがリーダーの判断に従おう。

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなんだからお前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだよ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよー！」

「おつと悪い。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……?」

「あーそういえば、言われたことあったね」

実際に目の前で見てしまったからには否定できない。仕方ない。真実は時に残酷なのだ。

「とにかく俺たちはDクラスの設備に手を出すつもりはない」

「それは俺たちにはありがたいが……それでいいのか?」

「もちろん条件がある」

もちろん条件付きである。このまま解放したらこの戦争の意味がほとんどないからな。

「聞かせてもらおう」

「なに。大した事じゃない。俺が指示を出したら窓の外にあるBクラスの室外機を動かなくしてもらいたい」

この室外機はDクラスの窓についているがDクラスの物ではない。Dクラスの設備は少し貧しい普通の高校レベルの設備だからエアコンなんてのはないのだ。アレはスペースの関係で間借りしているBクラスのものだ。

「当然教師にはある程度睨まれるかもしれないが悪くない話だろ?」

Dクラスからしたら最高の条件だ。Fクラスのオレたちみたいな問題児が壊したならともかく、普通の生徒が壊すのだ。上手く事故に見せかければ嚴重注意で済むだろう。

しかも、それだけであるFクラスに行かなくていいなら最高だろう。

「それはありがたい提案だ。しかしなぜそのようなことを?」

「次のBクラス戦の作戦で必要なんぞな」

「わかった。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前たちがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

「ははっ、無理するなよ。勝てっこないと思ってるだろ?」

「それはそうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社交

辞令ってやつだ」

平賀君はそう言つて、帰つて行つた。まあ、オレも勝てるとは思つてないけどさ。

「さて、皆ー今日はご苦勞だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日の所は帰つて休んでくれ！解散！」

「ありがとうございましたー」

さてと。オレは帰る前にあそこにでも寄つていくか……

ここは近所の家具店。オレは今……

「ふむ、どういう感じで作ろうか」

座布団を見ていた。何となくで感じは掴んでいるが現物を見ないと話にならない。

「厚さは……こんぐらいかやつぱり」

大きさにも種類があるらしいけど……まあ、そこは気分次第で。

一応昼休みの最中に糸とか諸々の指定はしておいた……あれ？でも、もし、支給できませんって言われたらどうしよう。Fクラスだし、有りうるかも知れない。

オレはその場でしゃがんで考え始める。別にこの座布団を買え無いくともない。振り込まれているオレの貯金を切り崩せばいいだけの話だ。

「何かお困りのようですね。光正」

ただ、オレとしては自分で使うものだし、自分で作りたい。本音を言えばあの卓袱台もオレ専用のを作つてみたい。ただ、座布団は教室のランクが上がってもオレの需要は残るが、卓袱台は……うん。微妙だ。さてはて、どうしようか……

「無視ですか!?!この距離で無視しますか普通!?!」

「というか、オレ的にあの教室はもうダメだと思う。一層のこと改装工事してえな……っと、思考が吹っ飛んでいた。というか、支給できない理由ってオレがFクラスの生徒だからだよな。もしかして、Aクラスの生徒が頼めばすんなり通るんじゃないやね?」
「というか、Fクラスから頼んだら薄く、破れやすい布がせいぜい。今のFクラスで使ってる物と同じ末路を辿ってしまう。というか、オレ多分Aクラスレベルはある筈だから頼めばきつと……あ、それは無駄ですね。そんなことが通るなら、途中退席で0点になるわけですね。というか、オレにそんなことを頼めるAクラスの知り合いなんて……」

「もういいです。私は帰ります。さような——」

「……………ここに居た」

「——はい?」

戸惑う彼女の手を取り、オレは……

「お前が欲しい」

交渉難航中？

「全くもう、本当に失礼な人ですね。去年から思っていたんですけど光正。貴方は長い時間思考した後に言葉を発しようとする時に言葉が圧倒的に足りてない時が多いのです」

あれから、場所を近くの喫茶店に移した。さすがに、家具店でこんなお説教？は迷惑だろうしね……あ、喫茶店でも変わらない？まあ、メニューから頼んだだけマシでしょ。あつ、これもう、今日の夕食作らなくて良くね？兄さんにメール送っておこう。

「聞・い・て・ま・す・か！」

「イエス・ママ」

「じゃあ、今さっきなんて言ってたか暗唱してください」

「もう、ここでいいんじゃない？」

「夕食の話は一切していません！」

というか、よく夕食って分かったな。一年の付き合いでここまで意思疎通が可能になるのか？あ、でも雄二たちと兄さんも一年ぐらいの付き合いだから変わらないか。

「本当に失礼な人ですね」

「ごめんごめん。怒らないでよ紫乃」

「怒りますよ！何で怒られているのに夕食のことが考えられるんですか!？」

「お腹がすいたから」

「ガキか！」

この先ほどから無意味に怒鳴り散らかす女こと、あまくさしの天草紫乃。

去年のオレのクラスメート。こう見えてあの霧島財閥と並ぶ天草グループの令嬢様である。しかし！オレはそんなお嬢様だの一切気にしたことがない！（キリッ）

容姿としては……うん。一言で言えば美人だよ。世辞抜きでな。

整っているのだが、普通の男子高校生からすれば胸がないのが残念というだろう。しかし！巨乳恐怖症（自称）のオレからすれば、屈する必要のなく、怯える必要のない。対等に話せる友達なのだ！

今までオレに雄二たちしか友達がいなかったと思ってたやつ残念だったな！オレにもしつかりと友達はあるんだぞ！（ただし、去年のクラスでの友達は紫乃しかいなかったりする）

「また、話を聞いてませんね！今度は何ですか！」

「貧乳に育つてくれてありがとう」

「オ マ エ ヲ コ ロ ス」

あつれえ？すつごい殺気を出されているんですけど……

『どう考えても光正。お前のせいだろ』

貴様はオレの中の悪魔！全ての罪をオレに擦り付けるつもりか！

『……擦り付けるも何もお前のせいだからな』

……フツ、否定しないでやろう。

『一つ解決策がある』

え？悪魔が解決策だすの？マジで？信用していいの？

『抱きしめて耳元で愛を囁け。そうすれば、すべて丸く収まる』

……はあ？何言ってるのこの悪魔。そんなことしたら殺されるに決まってるじゃないか。というか、『お前が欲しい』と言った時も顔を耳まで真っ赤にして怒ったんだぞ。オレがそんなこと言った日には処刑台で首が飛んでくわ！

『……お前。本当に鈍感だな……』

ちよつと待て。自分の中とはいえ悪魔に悲しい子を見る目で見られないといけないの！？天使を呼べ！天使ならもつと良い案を出すはずだ！

『……もう襲えば解決じゃない？』

お前！実は天使の皮を被った悪魔だろおー！！

「お、お待たせしました……注文のクレープです」

あ、これヤバイやつだ。向こうの店員さんも恐怖のあまり震えているよ。

「追加注文。コーヒーとサンドイッチのセット」

「か、かしこまりましたー！」

ダッシュで逃げる店員。そりやそうだ。対面に座る彼女は目から色が消え失せて殺気が素晴らしく駄々漏れなのだから。

「紫乃。あーん」

オレの解決策。甘いもので釣る。もうこれしか残ってない！

「……あーん」

よし、食いついた！これで殺意を忘れてくれるはず！

「全く光正は……それで？頼みというのは」

「ああ、うん。座布団作りたいんだけど材料をAクラスで頼んでおいて」

「……はい？」

「あれ？端折りすぎた？えーっと」

こうして、オレは朝からここに至るまでの経緯を……

「まず、今日の五時頃起きて……」

「重要な部分だけ話してください」

というわけで、座布団を作ろうと決意するまでの流れをFクラスに着いたときから話した。

「なるほどねえ。初日から試召戦争を挑んだのはそういうこと。しかも、Dクラスに勝っているしね。これはBクラスぐらいなら勝てるでしょ」

「え？オレたちが勝つと思ってるの？」

「当たり前じゃない。だって、光正がいるのよ。Bクラスぐらい勝つてもらわないと困るわ」

「うん。じゃあ、頑張るね」

よし、頑張るか。

「それと、さっきの話は受けてあげる。代わりに一つ頼みたいことがあるんだけど……」

どうやら、オレの命はこれまでのようだ。ごめん雄二。オレはもつと、試召戦争で活躍したかった。ごめん兄さん。普段バカ扱いして……でも、バカだから仕方ないよね。

「……なんであなたは上を向いて涙を流しているのですか？」

「一思いに殺ってくれ」

「……私がそんな要求するとても？」

「え？違うの？」

「ち・が・い・ま・す！光正、弁当箱を貸してください」

「いいけど紫乃。何に使うの？」

何に使うんだろう？というか、まだ洗ってないけどいいのかな？

「明日から私がお弁当を作ってあげます」

「お願いします。それだけは勘弁して下さい」

オレはその瞬間土下座をした。プライド？何それ命より大切なもの？

「わ、私だって！この春休み成長したんです！今度は上手く行くはずですよ！」

思い出されるのは去年の最初の調理実習。オレと紫乃はペアだった。最初、オレは紫乃が料理をできるものだと思い、一品任せた。まあ、オレもしつかり作っていたんだけどね。そして、完成。見た目はとても美味しそうで、オレは何の警戒もなしに食べ始めた。……それが地獄への招待状とは知らずに……

あの時の恐怖が脳裏をよぎる。

「……オレが死んだら、一年に一回くらいは墓参りに来てくれると嬉しい」

「遺言?!どれだけ私信頼ないんですか!?!」

「かなり」

「お願いします。私……頑張るから」

頑張つて済むなら救急車はいらない……って、普段のオレなら言うんだらうな。

「その指の絆創膏……」

「あ、これはちよつと……」

でも、彼女の……紫乃の手を見てしまった以上。そんなこと言え無くなった。

オレも甘くなったのだろうか？いや、それはねえな。この女に情けをかける必要はねえ。ただのオレの気まぐれだ。そう。ただの気まぐれ。

『光正も人の心を持つようになったんだね』

オレの中の悪魔。あんたはオレの親か。というか、元から人の心を持つているからな。

『光正。もし、命の危険を感じるものだったら、殺人未遂を盾に彼女を犯すといいよ』

そして、オレの中のエセ天使。貴様は二度と口を開くな。現れるのも許さん。

「分かった。じゃあ、明日からよろしくな」

「うんー」

オレはこの時の彼女の笑顔は忘れないだろう。

翌朝。オレは学校に少し早く向かって、適当に世界史の補充試験を受けておいた（世界史の理由は先生がそこにいたからである。深い意味はない）。まあ、補充期間は設けられているけど万全な状態にしておきたいからな。

そんなこんなで時間ギリギリに教室に入ると……

「ぶぶあつー」

兄さんが島田さんに殴られていた。まあ、どうせ兄さんが悪いのだろう。

「雄二。あの兄さん何かやらかしたの?」

「即明久に非があると考えるあたり、家族とかの情がねえのかと疑いたくなるが……」

「家族の情?なにそれ?新しい言葉?」

「まあいい、昨日明久は島田を見捨て、それだけに飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った犯人に仕立て上げたらしい」

「へえ……」

あのバカな兄さんはまた余計なことをやらかしたようだ。

「それが原因で彼女にしたくないランキングが上がったそうじゃな」

まあ、普段の島田さんを彼女にしたいと思えるのは生粋のドMぐらいだろう。

ちなみにオレは自分が認める自称Sである。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど監督の先生————船越先生だつて」

聞いた瞬間、兄さんは扉を開け廊下を疾駆した。

弁当殺人事件（未遂）

「うあー……づがれだー」

机に突っ伏す兄さんを横目に見る。うん。普段勉強しない人がテストをぶっ続けでやるところなるんだね。まあ、兄さんの場合は朝に船越教諭とひと悶着あったのも原因だろうけど。

「うむ。疲れたのう」

「……………（コクコク）」

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「あ、悪い雄二。オレちよっと約束があるわ」

「……お前に昼休みに約束するような奴居たのか？」

「居るわ！」

「まあ、昼休み中にお前らには説明しときたいことがある。約束がいつまでか知らねえがなるべく早く戻ってきてくれ」

「りよーかい。昼休みが半分くらい過ぎたら戻ってくるよ」

そうして、オレはAクラスへ向かった。

この時のオレは知らなかった。どちらの道を選ぼうと地獄への扉に繋がっていたことに……

「あ、光正……」

「しつかり来たんだ。紫乃。感謝してくれてもいいよ」

「うん。ありがとうね」

ところ変わってAクラス。やはりというべきかFクラスとは比べものにならないぐらい広い。そして、個人のスペースも……ここは教

室か？本当に授業を受けられるのか？疑問である。

「でも、約束を守らないのはクズのすることだと思っよ」

「……分かってるよ」

一言多い。その一言がなければ感謝された優越感に浸れたのに。

「それと、はい弁当」

「あ、ありがとう……中を開けていいかな？」

「どうやって、中を開けずに食べるの？」

「ですよー」

中を開けると、そこには……！

「意外に普通だね。……見た目は」

「奇抜なものが入ってたら変でしょ？」

エビフライに卵焼き、後はおにぎり野菜炒め。うん。見た目はす

ごくおいしそうである。

「では、卵焼きから……」

パクッ

「……あれ？何ともない」

「ねえ、反応おかしくない？普通は最初に味の感想を言うものでしょ

？何で身体の心配からなの？」

「うん。普通に美味しいよ。じゃあ、エビフライを貰っね」

パクッ

「ここは何処？」

次の瞬間。オレは川岸に立っていた。

「……………光正」

「うわあ!?!……ってムツツリー二か。脅かさないでよ。それでここは

「？」

「……………恐らく三途の河の近く」

あれ？おかしいな。オレさつきまでAクラスにいたと思ったんだけど……………後、三途の河って、死ぬときに渡るものだよな？

「というか、ムツツリーニはどうしてここに？」

確かこいつらは食堂に向かったはずだけど……………

「……………屋上で姫路の作ったエビフライを食べたらここに」

姫路さんの……………ああ！思い出した。今日作ってもらった予定だったね。

「というか、どうしたらエビフライで人を殺せるんだろうね？あれ？ムツツリーニ？おーい。ムツツリーニどこ行ったのー？」

「ハッ!?……………し、死ぬかと思った……………」

「大丈夫何故かさつきまで意識が飛んでた見ただけ……………」

「あの世でムツツリーニに出会った」

「あの世？」

「というか、あの時のアラームはこれか……………どうやら姫路さんの料理の腕前は殺人級らしいな。」

「はあーでも、失敗か。残りは処分しておくね」

「いや、処分しないでいい。オレが食う」

「え？でも……………」

「お腹がすいたから食べる。それだけだ……………お茶を用意しておいてくれると嬉しい」

「分かった。お茶を淹れておくね」

そして、オレの意識は再び旅立った……………

「……………また来たのか」

「……………もう、ムツツリーニがここの番人に見えてきたよ」

再び現世とあの世の狭間でムツツリーニとご対面。

「……………さつき雄二もやってきた」

「あの雄二が!？」

あの、後ろから刺しても平気そうなああの頑丈な雄二もここに送られてきただ?!もしかしくとも、姫路さんの料理ってプロ(の暗殺者)級!?

「……………でも、すぐに復活した」

「アハハ……………」

さすがの生命力。尊敬に値するよ。

「兄さんは……………」

「……………恐らく姫路の料理を食べていない」

「ですよー」

というか、あの食事の回数が少なくて胃袋が退化してそんな兄さんが食したら、この狭間なんて一瞬で飛び越えるだろう。

「……………秀吉がいる」

「え?どこに?」

「……………河の真ん中」

「ええ!?ひ、秀吉ー!その河は渡つちやダメだ!戻れなくなる!」

オレはダツシユで河へ向かった。

「ハッ！」

「起きた？」

「何とか秀吉を救うことが出来た……」

「??？」

ふうーまさか、秀吉があそこまでになるとは……うん。ヤバいな姫路さんの料理。

「はい」

「ん？弁当箱？」

「返すね。まだ、私には無理だったみたい……」

なるほど。まだ、料理の腕前は人を殺すレベルか。

「嫌だ」

「え？」

「明日も作ってきてよ。約束でしょ？」

「で、でも……本当に戻ってこれなくなるかもしれないんだよ？」

「大丈夫大丈夫。こう見えて生命力は強いと思ってるから」

「……どう見ても生命力はゴキブリ並みにありそうだよ」

おいっ！

「でも、分かった。じゃあ、明日も頑張って作るね！」

「ああ、任せた。じゃあ、俺は行くから」

「うん！」

この日からオレは昼休みに三途の河まで散歩することが日課となった。いつまでかは知らない。

Bクラス戦に向けて

「そういうえば坂本、次の戦争の相手なんだけどBクラスなの?」

激しい昼食（やはりこちらでも被害者がいたらしく、秀吉はお茶を大量に飲んでいる）を済ませて、復活した皆でのんびりお茶をしていると島田さんがそう口にする。

「ああ、次はBクラスを獲りに行く」

昨日DクラスにBクラスの室外機を壊せって命令をしてたからね。これで、Bクラスを狙わなければ度の過ぎた嫌がらせである。

「どうしてBクラスなの? 目標はAクラスなんでしょう?」

「正直に言おう」

おっと、急に神妙な面持ちになっている。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

でしようねーうん。知ってた。

まあ、理由として五十人からなるAクラス。四十人に関しては正直Bクラスと大差ない。

でも、残りの十人は別格だ。予想だが、この十人だけでFクラスは全滅する気がする。

「ふーん。まともに正々堂々とぶつかったらAクラスには現時点で勝てない。……どんな荒業を使う気?」

「ああ、クラス単位での勝負はしない。一騎討ちに持ち込むつもりだ」

これは、また面白そうな……

「一騎打ちに? どうやって?」

「Bクラスを使う。明久。もちろん、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるよな?」

「え? あ、当たり前じゃないか!」

この反応は絶対に知らないな。すると姫路さんが兄さんに耳打ちをする。

「設備のランクを落とされるんだよ」

よく、最初から知っていた風に堂々と言えるな……

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされる

わけだ。では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

確かにそうだと思うけど。何かが違うよね？

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややつ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがつ」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

また姫路さんのフォローが入る。さすがというか、常識というか

……

「つまり、オレらに負けたクラスは最低の設備になる。普通はな」

「そしてそのシステムを利用して交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスの設備だが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな」

代表が超無能でない限り交渉はオレらの想定どうり進むはず。まあ、何かを間違えて設備を入れ変えてくれるんだったら、万々歳だ。

「それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

Bクラスと戦った後に直ぐに戦争は辛い。しかも、Fクラスには『現状の不満』という原動力があるが、Aクラスには戦争に勝っても特に何かを得られる訳ではないからモチベーションの差は歴然として
いる。

「でも、問題がある。そもそも、Aクラスが一騎討ちを受けてくれる保証がない。仮に一騎討ちを受けてくれても、どうやって倒す？」

「そうじゃな。こちらに姫路と光正が居るのは向こうに知れ渡ってるはずじゃろう？」

「だろ。だが、そのへんに関しては色々考えてある。心配いらない」

自信満々にそう答える。まあ、相手は必ず一対一の一騎打ちを受け
てくれないのは目に見えている。絶対に五回勝負とかにするはず

……というか、そっちの方が勝算ありそうだけど。

「まあその話はBクラス戦が終わったからだ。Bクラスに負けたら意味ないからな」

「当たり前だ。Bクラスに負けたら三ヶ月宣戦布告できないんだからな。」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告をしてこい」「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

「うん。これで受けたら『DMの兄貴』という称号を送るところだった。」

「やれやれ、それならジャンケンで決めないか？負けたほうが宣戦布告に行く」

「ジャンケン？」

「うん。絶対に怪しい。」

「OK。乗った」

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

「心理戦？兄さんとなって、心理戦にすらならないだろう。」

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は——お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

「ほらね。心理戦じゃない。ただの一方的な虐殺である。」

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

「パー（雄二）　グー（兄さん）」

「兄さんの負けか。予想通りすぎる。」

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ！」

「はあ。まあ、最終的には行くんだらうけど。」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもあー！」

それしかないでしょ。後、面倒とか。

「それなら今度こそ大丈夫だ。俺が保証する」

保証の宛が無さすぎるぞ。

「なぜならBクラスは美少年好きが多いらしい」

……はあ？そんな根拠のない説得で納得して宣戦布告に行くのなんて兄さんでもあり得ないでしょ。

「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

何処があ!!?

「でもお前不細工だしな……」

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度しかないのか」

「三人なんて嫌いだっ！」

「とにかく、頼んだぞー」

こうして、昼休みは終わり、またテスト漬けになるのであった。

「というわけで、今ごろ兄さんはボロボロになっていると思われる」
「淡々と自分の兄の現状を説明されても……」

現在放課後。オレは何故か下駄箱にいた、紫乃と一緒に帰っている。

まあ、方向は途中まで一緒だし、去年も週4〜5日のペースで一緒に帰っていたから不思議ではない。

「心配はしないの？」

「自業自得」

「……相変わらず厳しいことで」

当たり前だ。ジャンケンにオレたちを巻き込めば勝機はあったのに、それをしなかった。

運というより頭で負けているんだ。自業自得としか言いようがない。

「それで？ Aクラスにはどうやって挑むの？ クラス単位での勝負だと負けるよ？」

「ああ、一騎打ちだ」

「へえー誰と誰が？」

「両クラスの代表どうし……だと思っ」

「そこまで、詳細に決めていない。というか、教えられていない。

「まあ、一騎打ち一回勝負では無くなるだろうな」

「あーなるほどね。多分交渉のテーブルにつくのは優子だし」

「こういう、形式を変えた勝負を挑む場合、どうしても相手との交渉は必要不可欠だ。だって、交渉なく挑んだ方がルールを決められるんだったら、相手の代表VS自分たち50人。とかやれば、ほぼ勝てる。公平性という意味でもクラス単位の試召戦争以外は交渉というものが付きものだ。」

「もつとも、雄二がそこまで考えていなくて、一騎打ちにすると考えているとは思えないけどね。」

「ねえ、光正。もし、一騎打ちを複数回やることになったら……私と勝負しない？」

「ほーう」

「どうせ、やるとしても奇数。一騎打ちを三回とか五回。Fクラスの面子的に代表の坂本君、姫路さん、そして光正。その三人が出る可能性は極めて高い。だったら私と勝負できる」

「なるほど。さすが、紫乃だ。こういう勝負はあの時から繰り返している。」

「まあ、どっかの誰かさんが振り分け試験で勝負していたのに途中退席したからね」

「別に。試験受けるのが面倒になっただけだ」

「ふふ、何があったか知ってるから。光正らしいよね。本当に」

「余計なお世話」

最近思うのだが、この女には勝てない気がする……料理とかは勝てるのに。

「分かった。勝負できるならしてやるよ」

「オツケー。じゃあ、負けたほうが何でも一つ言うことを聞くということだ」

「え？何でも？」

「そう、何でも」

何でもってことは……！ミシン貸して欲しいとか言ったら貸してくれるかも！手縫いじゃ、座布団作るのにも限界があるし……

「だから、光正が私と……その……し、したいなら……してもいいよ」

「あ、そっちは今は興味ねえわ」

「……………（プツン）」

「えーっと、紫乃さんや。禍々しいオーラが……ぎやあああ！頭が！頭が割れるうううう！ちよつと落ち着いて！あああああつっ！」

この後、十分ほどオレは紫乃のアイアンクローに苦しめられることになったのだった。

理不尽だ。理不尽すぎる。

Bクラス戦！①

翌日の昼休みの終わりがけ……

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机の上に手を置いてオレたちを見る。今日は午前中はテストだった。そして、ついさっき全科目のテストが終わったのだ。正直に言おう。辛かった。

ん？昼食はつて？今日もオレは一人旅立って行ってたよ（どこにとは言っていない）。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおっ！』

一向に下がらないモチベーション。これこそがオレたちの唯一にして最大の武器だが……本当に下がらないなあ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

今回は前回と逆。廊下に敢えて代表を追い出すのではなく教室に閉じ込め、確実に息の根を止める。

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

このうちのクラスのノリについていけないのか、姫路さんは若干引き気味だ。

『うおおっ！』

本当にこいつらなら自分を犠牲に出来そうだな……素直に尊敬するよ。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響く。Bクラス戦開始の合図だ。

「よし行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー!』

オレたちはとにかく勢いが勝負。

廊下での勝負に勝たないとお話にもならないので五十人中なんと、四十人という戦力を注ぎ込んでいる。うん。過剰戦力だ。もちろんそこには隊長の姫路さんやオレも含まれている。

「いたぞ、Bクラスだ!」

「高橋先生を連れているぞ!」

正面からBクラスの生徒がゆつくりとした足取りで歩いている。数は十人……様子見か? まあ、こちらの人数は四十人であるから数の上ではこちらが断然有利だ。……まあ、質は……ね。言わなくても分かるでしょ。

「生かして帰すな!」

そんな物騒な言葉が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男』

総合科目 1943点

V S

Fクラス 近藤吉宗

総合科目 764点』

『Bクラス 金田一祐子』

数学 159点

V S

Fクラス 武藤啓太

数学 69点』

『Bクラス 里井真由子』

物理 152点

V S

Fクラス 君島博

物理 77点』

……これぞまさに、桁違いの強さだ……本当に桁が違うのだ。この圧倒的とも言える点差によって第一陣がごとくやられていく。

「吉井光正と姫路瑞希には警戒しろ！後は問題なく倒せる！」

『了解！』

わー警戒されてるよ。召喚獣すら出していないのに。うーん。オレこの戦闘ではあまり、消費せずに教室に押し込んでからが勝負って言われてるんだけどなあ。……どうしたものか。

「お、遅れ、ま、した……。ごめ、んな、さい……」

息を切らして姫路さんがやってきた。あーオレたちの全力疾走に付いてこれなかったか。まあ、予想通りだけど。

「来たぞー！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫び全員が目つきを変え、いつそう警戒を強める。なるほど、Bクラスはオレより姫路さんを警戒しているのか。ふむふむ。なら、フェードアウトしても気付かれまい……

そんな考えをしている中、姫路さんが前に行くと二人の女子が現れ、数学担当の長谷川先生に数学の勝負の立会いをするように頼んでいる。なるほど。ここで二人がかりで姫路さんを倒してFクラスの士気を下げるつもりか。

『Fクラス 姫路瑞希』

数学 412点

V S

Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 189点&151点』

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

そう言われたので見てみると確かに姫路さんの召喚獣の左手首に綺麗な腕輪をしていた。

「ああ、兄さん。それはあれだよ。特殊能力が使えるって腕輪」

「そういえば、そんなのあったね。縁がなさすぎて忘れていたや。ん？光正は持つてるの？」

「少なくとも数学は腕輪持ちだよ」

「いいな〜ゲーマーってそういうのに憧れるよね〜」

「羨ましいだろう〜だったら、勉強しろ」

「さあ、姫路さん！その力をBクラスに見せつけてやるんだ！」

この兄さん話を逸らしやがった！まあ、腕輪というのは確かに一科目で400点を超えないと使用できないけどさ！

「じゃ、いきますね」

キュボツ！

姫路さんは腕輪を光らせ、熱線を放った。そして片一方の召喚獣を一瞬で灰にした。

そして、大きく避けて、バランスを崩した相手を大剣で一刀両断。うん。凄い強い。

「なっ！そんなバカな!？」

「姫路瑞希。噂以上に危険な相手だ！」

残っているBクラスの八人からは驚愕の色が見える。まあ、無理もないだろうな。

「み、皆さん、頑張ってください！」

姫路さんが指揮官らしくない指示を出す。そしてそのまま後ろに下がる。

腕輪の使用には点数をかなり消費するものもある。姫路さんのはその代表例ともいえるだろう。そのため、乱発は出来ない。なので戦死を避けるべく後ろに下がるのは当然の行動だ。もっとも、向こうの士気は下がってるし、この分なら姫路さん抜きでも渡り廊下での戦いは勝てるだろう。

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

そして、さっきの姫路さんの激励に味方の士気は大幅に上がり、信者は増える。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

Bクラスからそんな声が聞こえてくる。まあ、オレたちの狙いは敵を教室に押し込むこと。つまり、今の所は順調である。第一目標として、しっかりと向こうをBクラスの教室に押し込みたい所だ。

すると、秀吉と兄さんが下がっていくのが見えた……ん？何でだ？

「どうしたんだ？中堅部隊で何かあったのか？」

「Bクラスの代表じゃが……あの根本らしいのじゃ」

「根本君？あの卑怯で有名な？」

「うむ」

他人に興味のないオレですら何度か噂で耳にしたことがある。

本名を根本恭二。とにかく評判が悪く、カンニングの常連とか、球技大会では相手チームに一服盛ったとか、喧嘩の時は刃物を装備なんて酷い噂が多い。どの程度卑怯なのかは知らないが、まあ一言言えるのは……

「面倒な相手だな……」

「そうじゃな……」

厄介では無く面倒。それはそうである。だって、面倒だもん。

「……わかった。じゃあオレも戻るわ」

姫路さんに一言報告した後、オレたちはFクラスの教室へ向かった。

何も起きてないといいんだけど……

教室に戻ったオレ達を迎え入れるのは、穴だらけになった卓袱台と折られたシャープペンや消しゴムだった。

「……うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「……はあ。面倒なことしてくれる」

これでは補給がままならない。地味にだが点数に影響の出る嫌がらせでバカにすることが出来ない。

「で？小物感溢れる根本君達が教室をボロボロにしている間。我らの代表は何処に？」

「協定を結びたいという申し出があって調印の為に教室を空にしていた」

「なるほど。その時にやられたのか。それで協定の内容は？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する、ってな」

「承諾したのか？」

「そうだ」

「でも、体力勝負にした方が……」

「バカだなあ兄さん。Fクラスの四十九人が体力勝負に有利でも、唯一不利である姫路さんがオレたちの武器だ。主力が体力切れで潰れて負けたとか。普通にダメダメだろ？」

「ああ。それに姫路には出来るだけ万全の状態で残しておきたい」

でも、何かがおかしい。この協定は一見するとうちに有利なように働く。でも、そんなこちらにメリットがある協定をあの根本君が結ぶか？というか、よく考えろ。一日の猶予。破壊された教室。……ん？よく見るとカバンもいくつかがやられている。何か盗まれていなければいいけど……

「ちよつと待てよ……」

ボロボロにするならもつと、徹底的にすればいい。なのにしなかった。時間がなかったからか？いや、そうじゃない。でも、奴らの目的は達成されている。目的は補充試験を受ける環境を消すこと。でも、もしその目的以上に使えるものを見つけてしまったら？

最悪の可能性……姫路瑞希がカードとして機能しなくなる。それはそうだ。このクラスでBクラスが一番警戒してるのは誰だ？間違

いなく姫路瑞希だ。

「光正。大丈夫か？」

「おい、雄二……最悪姫路さんが死ぬぞ」

「……………はあ？」

「えーっと、光正は『この教室を見た感じ、最悪姫路さんというFクラスの主戦力が実質的な機能停止にさせられるぞ』って、言いたいみたい」

「……………よく伝わったな」

可能性の一つだ。荒された教室なら、何かが盗まれていても不思議じゃない。

ただ、もしその盗んだものの中に姫路さんの弱みを握るようなものがあつたら？

「とりあえず、光正、明久、秀吉。三人は前線に行ってくれ。最悪のケースを考えておく」

「了解」

「分かった」

「そうじゃな」

こうして、オレたちは戦場に舞い戻るのであった。

Bクラス戦！②

「島田さんー！」

「吉井ー！」

戦場に辿り着くと兄さんと島田さんがドラマの真似事をしている。何故こんな事をしているのか？答えは簡単、島田さんが人質に取られたのだ。

前線に戻ってきたオレ達に伝えられた情報。それは、『島田美波が人質に取られた』という情報。うん。クソどうでもいいね。

「試獣召喚」

オレは足元から自身の召喚獣を呼び出す。

『Fクラス 吉井光正

英語W 121点

VS

Bクラス 鈴木二郎&吉田卓夫

英語W 33点&18点』

なるほど、オレの点数でも葬ることが可能だな。まあ……策はしっかり施すけど。

「おい須川君に田中君。耳を貸せ」

「分かった」

「何だよ？」

「二人に頼みがある」

そう言っつて、オレはあることを耳打ちする。

「そこで生まれ！それ以上近付くなら、召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにするぞー！」

パチパチパチパチ

「人質をとって、オレたちの士気を挫く作戦。素晴らしい作戦だよ。君たちに拍手を贈ろう。ただね。一つ問題があったとすれば……君たちは人質に取る相手を間違えた。なぜなら……」

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか!？」

「うちのバカな隊長は、そんなのが通じない。だよな、兄さん！」

「もちろんさー！戦争に犠牲はつきものなんだ！決して日頃痛めつけられている仕返しなんかじゃないからね！」

さすが、うちのバカな兄さんだ。話が分かる。

「ま、待て。人質がどうなっても良いのか!？」

「うん。いいよ」

「即答!?!おい、吉井兄! コイツが何故捕まったと思っている?」

「バカだから」

「殺すわよ」

いや、でもバカ以外の何でもないような……

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

……はあ。

「島田さん……」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か!」

「違うわよ! ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての!?! これでも心配したんだからね!」

「へっ。やっと分かったようだな。それじゃあ、おとなしく」

「あの島田さんは偽物だ!」

「分かった! 総・員・突・撃!」

『ちよつと待て!』

何故かオレが突撃の指示を出すとB、F両クラスからツツコミが入る。

「え? まだ何かあるの?」

「いやいや、今の話を聞いてお前は何も思わないのか!？」

「うん!」

「お前には人の心がないのか!」

「ねえよ」

『なっ?!』

「これまた驚きの声が……つておい！兄さんも驚いてんじゃねえよ。ハツタリに決まってるんだろ。……多分。」

「そう言っつて一歩踏み出すオレ自身。」

「ま、待てよ！本当に！補習室送りにするぞ！」

「損得で考えようぜ。この状況でどうするべきかはバカでも分かるぞ」

「ど、どういうことだ……」

「島田さんを生贄にBクラス生徒二人を道連れにできる。……島田さんという戦力にお前ら二人分の価値はあるか？Fクラス生徒だぞ」

「なっ！」

「むしろ、島田さん一人を犠牲に、Bクラス生徒二人を葬れるなんて……最高じゃねえか」

『この男！ただの最低野郎だ！』

「まあ、最低野郎でいいんだけどさ……」

『この人でなし！』

『人間のゴミ！』

『この外道悪魔！』

『このクズ野郎！』

「ところでさ……なんでおまえら^{Fクラス生徒}が率先して暴言を吐くわけ!?

「さて、ここで交渉だ。お前ら、人質を解放しろ。そうすれば、オレはお前ら二人を見逃してやろう！」

「くっ、だが、俺らの役目は……」

「5！」

「ちよ、ちよつと時間を……」

「4！」

「ま、待ってくれ。代表に確認を……」

「3！」

「わ、分かった。解放する。解放するから！」

「そうか、なら解放しろ」

「ほら、行け……これで見逃してくれるんだろ？」

「ああもちろん。……オレはな」

「「えっ……………」」

次の瞬間……

『Fクラス 吉井光正&田中明&須川亮

英語W 121点&65点&59点

VS

Bクラス 鈴木二郎&吉田卓夫

英語W Dead&Dead 』

Bクラス生徒二人は、田中君と須川君によって戦死した。

「戦死者は補習ー」

「クソ野郎！騙しやがったな！」

「この卑怯者が！」

「バーカ。オレは確かに言ったはずだぜ？ 『オレはお前ら二人を見逃すつて』 決して、Fクラスとして見逃すつて言ったわけじゃない。頭をもつと使おうぜ？」

「畜しよおおおお！」

こうして、Bクラスの二人は鉄人に連行されて行った。

「ふうー終わった」

「まだ、終わりじゃない！」

……………はあ？

「この島田さんは偽物だ！変装している敵だぞ！」

「……………」

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

「よ、吉井、酷い……。ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるつもりか！この大根役者め！」

……………もう無視で行こう。

「おい、お前の兄を助けなくていいのか？」

「あの隊長死ぬぞ」

「あーうん。そんな事より二人共ご苦労」

「ああ、まさか、召喚獣からBクラス二人の意識を逸らすからそのうちに召喚して背後に回り込めって」

「あの言動も作戦のためだったとはなかなかの演技力だったな。俺も演技じゃなくて本気で言ってるものだと思うほどだった」

「……まあな」

すべて本心だけど。演技なんてこれっぽっちもないけど。

そうこうしている間に兄さんが島田さんのことが本物だと気付いたららしい。

「あー島田さん。実はね。僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ」

あ、ヤバい。兄さんが殺される。

「よし！動けるものは作戦遂行のためBクラスへ突撃するぞ！死にたくねえ奴からオレに付いて来い！」

『イエッサー！』

「あ、光正ま……ぎゃあああああああああああああ！」

ありがとう兄さん。そして、さようなら。

Bクラス戦! ③

「……………(こ)はどこ?」

バカの兄さんが目覚めたようだ。

「おい、試召戦争で本当に怪我してきたバカの兄さん。気がついたかよ」

「いつもの光正だ」

当たり前だ。人間そう変わるものでは無い。

「それで試召戦争は?」

「協定通り休戦中。続きは明日」

「戦況は?」

「計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少なくないがな」

すると、雄二がオレの代わりに答えつつ、被害状況をわかりやすく教えてくれる。

まあ、廊下戦で圧勝に見えるけどFクラスのほぼ全戦力を注ぎ込んだ結果だしな。

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことがあったか?」

気がつけばムツツリーニが傍まで来ていた。今日のムツツリーニの役目は情報収集担当。相手の動きをチェックしていた。

「Cクラスの動きが怪しいだと?」

「……………(コクコク)」

どうやらCクラスが試召戦争の準備を始めたらしい。狙いはAクラス。ではなく……………

「漁夫の利を狙うつもりか」

この戦争の勝者を狙うつもりだろう。疲弊している隙を狙うなんて、最低な奴らだ。

「雄二、どうする?」

「んーそうだなー」

時刻は四時半。まだ、遅い時間ではない。

「Cクラスを脅すか？」

「脅す……というより、協定を結んだ方がいいかもな。よし、今から行くか」

「そうだね」

「りよーかい」

帰る準備をしていたけど、こっちの方が重要だ。

「秀吉は念のためここに残っていてくれ」

「ワシは行かなくてよいのか？」

「万が一の場合にやろうとしている作戦。お前の顔を見せると支障をきたす可能性があるからな」

「そこまで言うのなら、分かったのじゃ」

「じゃ、行こうか。人数少なくて不安だけど」

秀吉を残して、メンバーはオレ、兄さん、雄二、ムッツリーニ、姫路さんの五人。後一人ぐらい欲しいけど仕方がない。

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗い流すの大変だったんだけど。どうしてくれるのよ」

……それって、兄さんが悪いのか？

「あ、島田さん。丁度良かった。Cクラスまで付き合っつてよ」

兄さんのことだからどうせ。Cクラスでボコボコにされそうになった時の盾が増えたと思っっているのだろう。恐らく、オレも盾扱いかな。

「んー、別にいいけど」

「おい、急いでいくぞ」

あー早くしないとCクラス代表が帰ってしまうか。確かにそれは大変だ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室を開くなり、雄二が残っているクラス全員に声をかける。

……あれ？おかしくねえか？なんでCクラスの中にBクラスの奴らが混ざっているんだ？

……Cクラス……漁夫の利……不可侵条約……協定……まさか！

「Fクラス代表としてCクラスと不可侵条約を結びた——」

「雄二！こいつは罠だ！」

「——い。どういうことだ光正？」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね。根本クン」

クソ、遅かったか。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

Cクラスの中にBクラスの生徒。しかも全員根本君の取り巻きだし……そして、何より……囲まれている。正確には後ろに逃げ道があるが……

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな？」

……はあ。言うと思ったよ。さあ、どうする？ここから先のプランは二つほどあるが……

「何を言って——」

「先に協定を破ったのはソツチだからな？これで、お互い様、だよな！」

そう言つて、奥に隠されていた長谷川教諭の姿が現れた。数学か……丁度いい。プランAで。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を——」

「Fクラス吉井光正。この教室にいるBクラス生徒全員に試召戦争を挑む。試験召喚」

「僕は協定違反なんてしていない！」

「いや、協定違反とかどうでも良くね？」

『はあ？』

何だろう。この敵味方からこいつは何を言い始めたんだって顔は。

「え？でも、光正。どうでもよくなんて……」

「長谷川教諭。先ほど、Bクラスの代表が、Fクラスが協定違反をしたことを訴え、試召戦争を続けようとなりました。これは。まだ、試召戦争は続いているとみなしてよろしいですね？」

「あ、はい。一応そうなりますね……」

「召喚戦争のルールその五！『相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなす』ほら？Bクラスの皆さん？戦闘放棄とみなされて、戦死扱いでいいんですか？早く召喚して下さいよ」

『試験召喚』

『Fクラス 吉井光正』

数学 468点

VS

Bクラス 根本恭二&モブ×6

数学 182点&平均160点』

「おい、光正。まさか……！」

「プランA。全員この場でぶちのめして終わらせる」

ちなみにプランBは雄二と姫路さんを逃がすであるが……逃げる必要がなくなった。

『舐めんじゃねえ！』

『ごつちは七人だ！』

いや、代表は除いて実質六人だろ。

「お前らには見えないのか！この左腕の腕輪を！」
『なっ……！』

オレの召喚獣の左腕には腕輪が付いている。

「姫路さんのとは違って真っ黒な腕輪だね。効果も違うの？」

「効果は確かに違ったな」

「ま、待て！話し合おうじゃないか！」

そして、何故か話し合おうとする根本君。君に話し合いの余地があ

ると思ってるのかね。

「そうだ！お前らが協定違反したことを不門にしてやる。だから、この勝負は協定で無効……」

「却下。こっちは一人しか召喚していない。数の上でもそちらが有利なはずだ」

「だ、だが……」

「そういうえば、根本君。君たちと協定を結んでいる間に何かFクラスから盗んだでしょ」

「……はあ？」

「シラを切るつもりか！」

やれやれ、静かにしてよ兄さん。まあ、いいけどさ。

「だから、俺はFクラスから手紙なんて盗んでないから知るかよ！」

……こっちはこっちで勝手に墓穴を掘りやがったし。

「手紙？オレは何かとしか言っていないのに。何で手紙だと思ったんだ？ 筆記用具やノート、教科書の類なら分かるが……再度問う。何故手紙だと思った」

「そ、それは……」

「まあいい。それは後で返してもらおう。次の質問だ。何故この人数がCクラスに潜んでいた？」

「お前らが協定違反をしようとしているって報告を——」

「受けた？誰から？」

「……そこら辺にいる奴らから」

「そーか」

咄嗟についた嘘だと丸わかりだな。

「雄二。協定の内容をもう一度言ってくれ」

「ああ、『四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する』……なるほどな。そういうことか。お前がやろうとしているのは」

「お気付きですかBクラス代表？この協定には違反した時のペナルティが明確になっていない。そして、Fクラス側が違反をしたという

建前で試召戦争を続けようとしている。それならば——」

オレは一息吸って、大声で宣言する。

「違反上等！お望み通りここでこの戦争に終止符を打ってやるよ！」

『こいつ遂に開き直りやがった！』

「腕輪発動『影操り』」

すると、オレの召喚獣の影から八本の手の形をしたものが伸びてきて、オレの八本の武器をそれぞれに持つ。

「さあ、ゲームを始めよう」

Bクラス戦!④

「おい、明久……光正のやつ笑ってねえか？」

「ああーうん。光正はちよつと、サディストの気があるからね。召喚獣とはいえ、相手を痛めつけられて満足しているんじゃないのかな？」

「……あれはサディストというより、ただのヤバい奴だぞ」

「……うん。そうだね」

僕の弟は……ちよつと頭のねじが吹っ飛んでいるらしい。

「何か……お前も大変だな」

「ありがとう。今はその気持ちだけでうれしいよ」

『Fクラス 吉井光正

数学 201点

VS

Bクラス 根本恭二&モブ×6

数学 31点&平均20点』

あれから、光正は攻撃を仕掛け、Bクラスのメンバーはもう虫の息だ。

数の差を感じさせないが、でもやっぱり、僕の方が操作は上手いな

!

「このまま、終わらせてもいいが……長谷川教諭」

「何でしょう」

「先ほど、オレたちが協定違反をしたとおっしゃっていましたが……具体的にはどのような点で我々Fクラスは協定を違反したのでしょうか？」

「休戦期間にも関わらず、Cクラスとクラス間で不可侵条約を結んだこと……でしょうか」

「厳密には結んでいませんよ？それに、不可侵条約が試召戦争のこととは一切言っておりません」

確かに、厳密には結ぼうとしただけで、結んでないし。そもそも何に関しての不可侵条約かは雄二は言っていない。でも、グレーゾーンでしょ?というか、ただのへ理屈だよな?」

「長谷川教諭。確認です。Bクラス側から休戦協定を破ったのはFクラス。だから、Cクラスのところと一緒に潜んでいた。そうですね?」

「はい、そうです」

「厳密には何時頃からCクラスの方に?」

「この質問に意味はあるのかな?でも、光正だしな……」

「そうですね……四時二十五分頃でしょうか」

「あれ?これはおかしいですね。我々がFクラス代表がCクラスが漁夫の利を狙っている」と報告を受けたのが四時三十分。そこから、不可侵条約の話が出てきたのですから……この五分の差。どうやって説明するつもりですか?」

え?僕らが情報を得る約五分前から潜んでいたの?

「そう考えると変ですね……」

「そ、そんなのFクラスの嘘に決まっている!」

「何で嘘と断言できるのですか?証拠は?」

「証拠なんてあるわけないだろ!」

「だよなー。こつちもこの話が真実という証拠ありませんし」

え?それだったら、この時間のズレが証明できないんじゃない?……う?

「ほら見ろ。これだったら今の話が真実か嘘か分からない。曖昧じゃないか」

うーん。光正はどうやって切り返すのだろうか?無策に自分たちの付け入る隙を晒したとは思えないし……

「ですが、こちらにはこの一連の事がお前らの仕組んだ罠だという証拠がある」

そう言って、ボイスレコーダーを取り出して再生する。え?どこからそんなの出したの?というか何で持ってるの?」

ピッ

『なるほどね。ということはCクラスは試召戦争の準備をするだけでいいってことね』

『ああ、この情報をFクラスに流して、不可侵条約を結びに来させる。そして、来たところを討ち取る』

『まさか、協定違反と訴えた側が先に協定違反をしているなんて、バカのFクラスでは思わないでしょうね』

『ククツ、協定違反をしてもばれなければいいんだよ。バレなければ』

『私はCクラスの方の準備をするわ……Fクラスを釣るためのね』

『ああ、俺もすぐに長谷川先生に頼んでCクラスに潜むさ。Fクラスを倒すためにな』

ピッ

! ……いつ録音したの!? というかあるんだつたらさっさと出そうよ!

「録音されたのは本日の四時過ぎ……Cクラス代表の小山さん? この話は本当ですか?」

「嘘よ。加工されているわ」

うんうん。僕が同じ立場でもこうやって、ごまかそうとする気がする。

「そうですか。あーあ、あなたはプライドが高いだけの無能ですね」

「はあ?」

ちよつと待って光正! 小山さんが今にもキレそうって感じがしているんだけど!

「だってそうでしょう? 今優勢なのはどう考えてもFクラス。それでもBクラスが勝つと信じて真実を改変しようだなんて……このままじゃ、Bクラスの作戦の片棒を担いで敗北した。CクラスもFクラス以下になりますよ?」

「CクラスがFクラス以下ですって!」

あーうん。それは怒るよね……あのFクラス以下って言われたら。「だって、そうでしょ? BクラスはCクラスを利用してFクラスに勝とうとした。しかし、Fクラスはそれでもなお勝利した。つまり、C

クラスがFクラスに負けたと解釈できるんだよ」

うん。すつごい、無茶苦茶な解釈だな……

「ここで、あなたが真実を話してくれれば、あなたはBクラスの代表を掌で踊らせ、底辺であるFクラスを勝利させた立役者になれる。これほど、有能な人間もいないでしょう！」

光正が熱いなあ……凄い演技臭いし。

「さあ、選べ！Bクラスを庇い無残に敗北していくか！Fクラス側に立ち、Bクラスの敗北をほくそ笑むか！」

……それに真実を話さなくてもFクラスを小山さんが勝利させたことにはならないと思うけど……

「ああ！もう分かったわよ！その話は真実よ！時間も四時過ぎだった！」

「なっ！」

「分かりましたか？長谷川教諭。先に協定違反をしたのもBクラス。自分たちを棚に上げ、Fクラスが先に協定違反をしたとでっち上げたのもBクラス。そして……」

そして、光正の召喚獣の八つの武器のうち七つの武器がそれぞれの召喚獣に突き刺さる。

「——それでもなお、Fクラスに勝利できなかったのがBクラスです」

Bクラス根本恭二 討死

Fクラスは決して、綺麗な形とは言え無いが、無事？勝利を収めることが出来た。

楽しい戦後対談

「さて、それじゃあ楽しい楽しい戦後対談を行おうか。な？負け組代表？」

「……………」

勝者である雄二は楽しそうに、敗者である根本君に話しかけている。

Bクラスの策略を打ち破り、戦争で勝利したオレたちはCクラスからBクラスに移動して戦後対談をする事になった。

ほとんどのBクラス生徒が下を向いたり、恨む感じで根本君を睨んでいる。まあ、自分たちの教室がある程度豪華な教室から廃墟になるかもしれないと考えたら気持ちからは分からなくない。

まあ、同情はしないし、どうせそんな心配杞憂に終わるしね。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

するとBクラスFクラス双方から騒めきが生じる。

「というか、もうBクラスの教室の設備で充分だと思うのですが……え？ダメですか？」

「落ち着け皆。前にも言ったが俺たちの目標はAクラスだ」

「ようするに、ここはあくまで通過点だ……と？」

「ああ、そうだ」

するとうちのクラスの方は納得したような表情になる。Dクラスの試召戦争もあつてそろそろ雄二の性格を理解したのだろう。

「……条件はなんだ？」

根本君が弱々しく尋ねる。まあ、条件がないわけじゃないよね。

「それはお前だよ負け組代表さん」

「ええっ!?雄二にそっちの趣味が!？」

「黙ってる光正!」

いやあく軽いジョークだよジョーク。

「Aクラスに行つて試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。ただし宣戦布告はするなよ。あくまで戦争の意思と準備があるとだけ

伝えろ。それができたら今回は特別に設備についても構わない」

まあ、宣戦布告されたら、俺らの作戦が台無しだしね。

「……それだけでいいのか？」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

どこからかこの文月学園の女子の制服を取り出してきて根本君に突き出す。

え？どこから取りだした？というかそもそも何で持っているの？

「バカな事を言うな！誰がそんなふざけたことを……！」

そりゃあ、女装癖がない限り嫌だろう。根本君の女装か………見たくねえな。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手はないな』

教室に残っているBクラスの生徒の反応をただけで、根本君の頃の行いとクラスでの信用度がうかがえる。これは……うん。まあ、あれだね。

「んじや、決定」

「く、来るな変態ども！俺はがふっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一人の男子生徒が腹部に拳を打ち込んで根本君を黙らせる。

うわあ……この代表本当に信用ねえな。いや、信用よりもないのは人望か。

「着付けは明久に任せる」

「了解っ」

あ、そうだ。

「誰か、アイロンとかかってない？ないなら、被服室とかその辺から取ってきてほしいんだけど」

「ここにあるよ。使いたいのか？」

「ちよつとね」

「分かった。準備しておくよ」

「ありがとう」

Bクラスにも優しい人はいる。しかし、オレはその優しい女子生徒には近づきたくないと思った。理由？そんなの単純だ。

「……この震えからしてCカップぐらいか……？」

近づくと震えが止まらなくなりそうだからだ。

「あ、兄さん。根本君の制服から手紙は見つかった？」

「うん。光正の言うとおりあったよ」

「なら、良かった」

なければカバンの中も搜索するところだった。

「じゃあ、根本君の制服くれない？」

「いいよ。どうせゴミ箱に捨てるつもりだったし」

そう言われて受け取る。

「でも何するの？落書きとかは意味ないよ。彼には新しい制服があるからね」

新たな制服が何を指すかは触れないでおこう。

「そんな低次元のいたずらなんてしねえよ。アイロンをかけて、綺麗に見せればうちの学校の誰かが予備として買ってくれねえかなあ
ゝって」

「それって、結構やったらまずいことじゃ……」

「ん？バれなければ問題なし」

「鬼だ！鬼がいるよここに！」

「んなことより、早くその手紙を渡して来たら？持ち主に」

「あ、うん」

兄さんは走る。というか、あれってラブレターじゃないのか？姫路さんのと考えるとどう考えても兄さん宛だよな……まあ、あの姫路さんがこのまま告白するとは思えねえな。

「おつかれ、光正……何やってんだ？」

「ちよつと、アイロンがけと後ついでに染み抜き。本当は洗濯もした
いが諦めている」

「……相変わらず器用な奴だな」

「そりゃ、どうも」

「一つ質問だ」

急に真面目な雰囲気を出す雄二。

「お前……あの音声レコーダーの会話。あれは本物か？」

「なわけないじゃん」

「そうか」

今回の場合。彼女はあの会話が嘘で加工されていると言った。当たり前前だ。これはオレの考えた、あつたかもしれない会話だ。当然、真実とは異なるし、加工云々以前に虚構で出来ている。まあ、彼女がその話は本当……つまり、Bクラス代表にそそのかされたのは本当と証言してくれた。ぶつちやけ、これさえ分かれば後はどうでもいい。

「……いつだ？」

「ん？」

「あの会話を撮ったのはいつだ？」

「いや、あの作戦を考えついたのはいつだ？」

「そうだねー見えたんだよ」

「はあ？」

「Bクラス生徒をBクラスに押し込んで四時を迎えた時、ちよつとトイレに行つてたんだ。そして、そこでBクラスからCクラスへ向かう根本君がいた。まあ、後は最悪の可能性を想定して音声をとっておい

た」

「なるほどな。で、作戦は？」

「そんなの即興で考えたに決まっているじゃないか！」

だって、そうでなければあそこまで回りくどく言っていない。事前に考えていれば、もっと、ダメージを与えられた自信がある。これは悔やまれるところだ。

「そうだ。この後どうするの？」

「ああ、Aクラスへは明日行かせるとして、とりあえず、女装撮影会だな」

「アハハ……じゃあ、オレは帰るよ」

「お疲れさん」

「ああ、本当に疲れた」

「……まったく。待っていないくていいのに」

「いいの。私が好きでやってることだから」

帰り道。下駄箱で待っていた紫乃と一緒に帰っている。

「Bクラス戦はやっぱFクラス勝ったでしょ？私の予想通りだね」

「ああ。でも、Fクラスが勝つ予想をしたのってお前ぐらいしかいねえんじゃないの？」

「ううん。翔子も同じ予想だったみたい」

Aクラス代表も……ねえ。こりや厄介だ。

Bクラス戦で勝てたのははつきり言って代表である根本君の慢心もあつたからだと思う。もし、最初の渡り廊下でもっと戦力を割かれていたら？Cクラスに潜むときに、もっと上手く溶け込んでいたら？オレたちが負けていた要素はあるし、そもそも、実力ではオレたちはDクラスにすら勝っていない。

「知ってるよ。Bクラスの代表を打ち取ったの光正でしょ」

「まあ、運が良かったからね」

はつきり言ってあそこで一緒に潜んでいたのが英語や国語系の先生だったら負けていた。いや、そもそも戦いもせず逃げていただろう。

こういう面でもBクラス側の情報不足が見える。

「それでも打ち取ったのは光正で試召戦争に勝ったのはFクラス。違う？」

「事実は変わらないな」

「そんな、頑張った光正にはご褒美でお姉さんが頭を撫でてあげますよ」

「お姉さん……………ププツ」

「笑われた!? 弟属性の光正に笑われた!？」

紫乃がお姉さん……………想像しただけで笑えてくる。

「いいよ。別に」

「そんな事言わずにさ」

その後、別れるところまで頭を撫でられ続け、近所の人の目が温かかったのを覚えている。

倒すために

Bクラス戦が終わって三日が経った朝。

この三日は補充試験をしたり、Cクラスが宣戦布告できないように裏で工作したり、まあいろいろあった。

「まず、皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのとだ。感謝している」

壇上の雄二は素直に礼を言う。……え？嘘だろ？あの、雄二が素直に礼を言った……だと。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う」

「だ、大丈夫か？精神科行かなくていいか？それとも脳外科か？」

「そこまで俺が感謝することが意外か？」

「うん！」

当たり前じゃないか。

「だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

まあ、勉強がすべてではないことには同意するけどイコール勉強をしなくていいというわけでは無いと思う。思ってるだけで言わないけどさ。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

瞬間、クラスから騒めきが生じる。オレはこの前の昼食時に聞いていたから驚かなかったけど、他の人には無理なようだった。

「落ち着いてくれ。今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を落ち着かせる。どうでもいいけ

ど、叩いた机が壊れそうになつてるよ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。クラス間の戦争を代理で行うのだから代表同士の一騎打ちは当然だろう。

ただ、どうやって雄二は勝つつもりなのだろう？勝ち目はないようにも思えてしまう。

さすがにオレでも数学とか化学ならともかく、他は勝てる気があまりしないしな……。

「あの馬鹿の雄二が勝てるわけがなああつ!？」

雄二がカッターを兄さんに向けて投げつけ、頬を掠めさせる。

「次は耳だ」

……この二人って本当に友達なのだろうか。週に五回はこの疑問を抱いている気がする。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

当たり前だ。まともにやり合つて勝てるなら苦労していない。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

……オレたちつて、本当にまともに戦つてないよね？でも、勝つたのがオレたちFクラスという事実は変わらないけどさ。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Aクラスを手に入れる。俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

全員の意味を確認するまでもない。全員雄二を信じているようだった。

……というか、どうでもいい疑問だけど。何で霧島さんのことは名前呼びなのかな？雄二は女子のこと基本的に名字呼び捨てだよな？まあ、どうせ、前からの知り合いつてパターンだろうが。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史？別に霧島さんの苦手科目でもなければ、雄二の得意科目でもないだろう。……じゃあ何故？

「ただし、内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

……うーん。満点が前提の注意力勝負に持ち込むつもりか？でも、小学生レベルのテストにそんな警戒必要かな？

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうしたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

「分の悪い賭けにしか見えないよ？運ゲーをやる気？」

この程度の作戦が雄二の切り札なのだろうか？

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「??それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるのか？」

「いいや。アイツなら集中してなくても、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろう」

それもそうだ。学年主席の座についている以上、小学生レベルなんて、集中をしなくとも満点は容易いだろう。

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろう？」

「前置きが長い」

「そうだな……俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは必ず間違えると知っているからだ」

必ず間違える問題？そんなのが小学生レベルの暗記科目である日本史に？

「その問題は『大化の改新』」

大化の改新？久しぶりに聞く気もする言葉だなあ。

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「単純？たいかのかいしんを漢字で書けとか？」

「それは舐めすぎだ」

分からないじゃん。兄さんなら退化の改心って書くかもしれないじゃないか。

「後は何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

確か、無事故の改新で645年……だった気がする。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

……何かごめんな雄二。

「……………」

兄さんは絶対に間違える。今もこんな問題余裕と思って思い切り外したって顔をしているし。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ」

「とうかさ、さつきから気になっていたんだけど……」

「どうした光正。疑問があるなら言ってみろ」

「じゃあ聞けどさ。霧島さんとは仲がいいの？少なくとも顔見知りだとは思っただけ……」

去年雄二が霧島さんと関わっているとところを見たことないし（オレが見た限りでは）このFクラス全体の反応からしても、去年は接点がないように見えたんだろう。だったら、もつと前からの知り合いってことになるけど……

「ああ。実はアイツとは幼馴染だ」

ああ、なるほどねえ。理解した。

「総員、狙ええ！」

「なっ!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!？」

そして、雄二が話しているところで兄さんが急に叫び、オレ、姫路さん、島田さん、秀吉以外の我がクラスメートは一人残らず上履きを

持って雄二に殺気を向ける。……何やってんの？

「黙れ男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと!？」

「遺言はそれだけか?……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」

「了解です隊長」

うーん。男子生徒四十五人分の靴下を押し込まれるのか……シニールだな。

というか、女子と関わっただけでこの反応かよ。まあ、去年も兄さんはこんな感じだったから予想はしてたけどさ。

「あの、吉井君」

「ん?なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃ、まあ、美人だし」

うん。美人ではあると思うけど……オレは苦手である。まあ、人格云々以前の問題だけどね。

「……………」

「え?なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの!?!それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの!?!」

姫路さんと島田さんからも殺気を感じる。どうやら、兄さんの葬式を考える必要があるみたいだ。

「まあまあ、落ち着くのじゃ」

パンパンと手を叩き場を取り持つ秀吉。オレではこんな風にはならなかっただろう。

「む。秀吉は雄二が憎くないの?後、光正も」

「ああ、興味ねえ」

「……………さすが光正」

「冷静になって考えてみるがよい。相手はあの霧島じゃぞ?男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

……………そうなの?

「な、なんですか？もしかして私、何かしました？」

何故か皆の視線は姫路さんの方へ。え？どういうこと？

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えてたんだ」

p r r r r p r r r r

「もしもし警察ですか？ここに少女を誑かす赤ゴリラがああつ!!」

投げられたカッターナイフをギリギリのところで避ける。

「テメエ殺す気か！」

「誰が少女を誑かす赤ゴリラだこの野郎！」

「まあまあ、光正も赤ゴリラも落ち着いてよ。ほら、僕みたいにクールに……」

「黙ってるこのバカ！」

「……………」

はあ、兄さんのせいで興ざめだ。まあ、向こうも同じようだけど……え？警察はって？別に警察に電話をかけていないけど何か？

「アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

なるほど。だが今回はそれが仇になるわけか。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は——」

『システムデスクだ!』

……ただそう上手くいくかねえ。

Aクラス戦交渉

「一騎討ち?」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

もはや恒例の宣戦布告。

Aクラスに着いたオレは雄二の隣に座って木下さんと向き合っている。今回の宣戦布告は兄さんだけではなく、オレ、雄二、姫路さん、秀吉にムツツリー二も来ている。

というか、毎回こうやってFクラスの首脳陣勢揃いで乗り込んでいけば兄さんはボロボロにならなかつたのでは?もうすでに遅いけどさ。

「うーん、何が狙いなの?」

現在交渉のテーブルについているのはFクラス側からオレと雄二。Aクラス側からは木下さんだ。まあ、基本は雄二が話を進めてくれているので問題はない。

そう思いながらAクラスの特権であるドリンクバーのコーヒーを飲む。……………ふむ。

「マスター、おかわり」

「誰がマスターよ。自分でやってきなさい」

「やり方わかんない」

「はあ、しようがないわね…………」

ちよロイ。

「狙い?もちろん俺たちFクラスの勝利だ」

まあ、木下さんが訝しむのも当然だ。学年トップである霧島さんに単騎で挑むなんて実力差の分らないただの大バカか勝ち目がある人間だけだ。ましてやFクラスでありながら、B、Dクラスを打ち取った指揮官様が言い出すんだ。裏があると考えるのが自然だ。

「面倒な戦争を手軽に終わらせられるのはありがたいけど、だからといってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

オレも同意見だ。少なくとも相手がこの雄二なら、なおさら受けな

いだろう。まあ――

「賢明だな」

――交渉はここからが本番だったりするけど。

「ところでBクラスとやり合うつもりはあるか？」

瞬間、木下さんの顔が悪くなっていく。おそらく根本君の女装姿を思いだしたのだろう。

「Bクラスって……、昨日来たあの……」

「ああ。アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はされてないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

これは試召戦争のルールの一つの準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の間、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「それなら問題ないはずだよ木下さん。知ってるでしょ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』という形になるんだ。もちろん、BクラスだけでなくDクラスもだが」

これは設備を入れ替えなかったからこそ取れる手段だ。

「……それって脅迫？」

「人間が悪い。ただのお願いだよ」

お願いと書いて脅迫と読む。

「コーヒーでございます」

「うむ」

「……何か言うことは？」

「うむ。よろしい」

「フンっ！」

ゴンッ

「ああ！ 頭が！ 頭が割れる！」

痛いよ！ 暴力反対だ！ 暴力！ 反対！

「おっと、すみませんね光正。手が滑りました。これ以上余計なこと

を言うと足が滑る予定です」

「アハハ、気をつけてよ。全く紫乃はドジだなあ〜」

「あははははははは」

やべえ。次、何かおかしいなと言ったら殺される。

「明久よ。光正がAクラスの女子と仲良くしておるようじゃが……」

「あーうん。あの人は光正の去年の同じクラスの唯一の友達、天草紫乃さん」

「ふむ。まあ、姉上から名前は聞いたことあるが……それで、何でお主らはそんな殺気だっているのじゃ？」

「実の弟なんて関係ない。FFF団に突き出し、異端審問会にかけてやる」

「本音は？」

「……凄く怨めしい」

「……………憎らしい」

訂正。何もしなくても後ろのバカ二人に殺されそうだ。

「うーん……わかったよ。何を企んでるか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「それは本当か？」

二人の殺気とその他をごまかす為、交渉に戻るオレである。

「だってあんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

うんうん分かるよその気持ち。アレは目に毒だし、相対もしたくない存在だ。しかし、そのおかげでこちらの提案があっさり通るとは。これは思わぬ収穫かはたまた雄二が狙ったことなのか。

「でも、こちらから提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎討ち五回で先に三回勝利した方の勝ち、この提案なら受けていいわ」

やはりというべきか警戒心は緩んでいないか。まあ予想の範囲内だ。雄二も表情を変えてないから予想はしていたのだろう。当然だ。こんな口約束、護か怪しいからな。

「なるほど。姫路や光正が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら問題次第では万が一があるかもしれないし、そこにいる紫乃のお気に入りさんも頭は回るようだから、警戒に越したことはない」

「紫乃のお気に入りさんって、長つたらしいから名前で呼んでくださいよ」

「じゃあ、賢い方の吉井君で、吉井君（賢）？」

「はあ、それでいいよ」

まあ、さっきのお気に入りよりはマシか。……というかAクラスの人からオレってどう思われているんだろう？

「ちよつと待つんだ二人共。まるでそれでは賢くない方の吉井君がいるみたいじゃないか」

「え？お前（あなた）バカの方の吉井（君）でしょ？何か問題ある？」

「その認識はあんまりだ！」

「はあ？じゃあ、問題児の方の吉井は？」

「……………光正も人のこと言えないぐらいの問題児でしょ」

「紫乃？さっきのコーヒーのお礼がしたいから、跪いて頭を下げてくださいと嬉しい」

「お礼がしたいなら、光正が跪いて頭を下げればいいのです」

「……………（バチバチバチ）」

オレらの視線がぶつかる。これは決して、見つめ合うとか言う生易しいものじゃないだろう。

「コホン。まあ、安心しろ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉は鵜呑みには出来ないよ」

これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。全くその通りだ。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

と、雄二の耳を疑うような返事……ってわけでもないか。あまりにも予想通りすぎる返事だ。

「ただし、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズレはあってもいいはずだ」

ああ、なるほど。そういう方針で交渉するのか。科目の選択権はオレたちにとつて必須だが、一騎討ちの上に科目も選ばせろなんて話は流石に虫が良すぎる。だからこそ五人での勝負を受けたのだろう。

「え？うーん……」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「……受けてもいい」

「うわっ！」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

「……受けてもいい」

いきなり現れ、静かな声をだした人物。彼女こそAクラス代表の霧島翔子である。こうして会うのは初めてだが物静かな人だ。ただ、ある程度胸が発達してしまっているためオレの中では苦手な部類に入ってしまったているが。

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

霧島さんは頷いて雄二を見た後に姫路さんをじつくりと観察した。まるで値踏みするかのようだ。そして再度雄二に顔を向けて言い放つ。

「……負けたほうは何でも一つ言う事を聞く」

……あの眼に映っていた色。あの色は……好意じゃない。何だろう……彼女の眼には姫路さんに何を見たのだろうか。

「……………(カチャカチャ)」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ!というか、負ける気満々じゃないか!」

……そして、こいつ等は何をやっているんだ。バカなのか?

「じゃあこうしよう?勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて?」

木下さんの妥協案が得られた。ふむ。

「交渉成立だな」

「同感だ」

「ゆ、雄二!何を勝手に!まだ姫路さんが了承してないじゃないか!」
「心配すんな。姫路に迷惑はかけない。絶対にな」

まあ、いいか。というか、兄さん。何で姫路さんが関係しているの?
?

「…………勝負はいつ?」

「そうだな。十時からでいいか?」

「…………わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

雄二がそう言って立ち上がる。

「光正。勝負だね。……約束覚えてる?」

「負けた方が勝った方の何でも一つ言うことを聞く。大丈夫だ。覚えてる」

「それなら良かった。……絶対負けないから」

「ああ。……お前には負けねえから」

交渉を終了し、オレらはAクラスを後にする。

決着の時は刻一刻と迫ってきていた……

Aクラス戦!①

「では、両名準備は良いですか?」

午前十時、Aクラス会場。

この場所でここ数日の戦争でお世話になっている、Aクラスの担任かつ学年主任の高橋先生がそう口にする。

「ああ」

「……問題ない」

今回の戦争の立会人である高橋先生がそう告げると両クラスの代表のが了承する。

会場がAクラスの原因は至ってシンプル。誰もFクラスで一騎打ちをしたくないからだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ。科目はランダムでいいわ」

向こうの一番手は木下さんだ。

「よし、明久行ってこい」

「え?僕なの?」

対してこちらは兄さんだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

何故か自信満々にそう言う雄二。

そして字面どなりに受け取って堂々と出ていく兄さん。

「おい、雄二。この試合って……」

「ああ、察しの通り捨て試合だ」

これで一敗と。

「ふう……やれやれ、僕に本気を出させてことか。仕方がない……僕もランダムで受けてあげよう」

早く行け。そして負けろ。

『おい、吉井兄って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『でも、アイツの弟は凄いからワンチャンスあるかも……』

『いつものジョークだろ?』

まあ、いつものジョークというか……何というか……

「吉井君？あなた、まさか……」

対戦相手の木下さんが兄さんを見て何かに気付いたかのように戦く。木下さん。大丈夫だよ。どの教科でかかってもあなたが勝つんだから。

「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕はぜんぜん本気を出しちやあいない」

戦闘の為に袖をまくり、手首を振る。何故、軽い準備体操が必要だし？

「それじゃ、あなたは……」

「そうさ。君の想像通りだよ今まで隠してたけど、実は僕——」

大きく息を吸って、この場に居る皆に告げる。

「——左利きなんだ」

一回黙れ。

『Aクラス 木下優子

数学 376点

VS

Fクラス 吉井明久

数学 62点』

予想通りの秒殺だった。

「アキのバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

余談だが、兄さんと島田さんはそれぞれ、『美波』と『アキ』って呼ぶことになった。

理由としては、Bクラスとの試召戦争で兄さんが島田さんを偽物扱いした事を許す措置だとか何とか。まあ、当人たちの問題だしオレには関係ないからいいよね。

「よし。勝負はここからだ」

「ちよつと待った雄二！アンタ僕をぜんぜん信頼してなかったでしよう！」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

安心しろ。オレも兄さんが勝つとは微塵も信じていない。むしろ、負ける方に信じていたよ。

「では、二人目の方どうぞ」

「……………(スック)」

ここでムツツリーニが立ち上がる。雄二は貴重な科目選択権の一つをムツツリーニに渡した。

彼は総合科目の点数のうち実に80%を保健体育で占めているのだ。保健体育での勝負ならAクラスにさえ負けていないだろう。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした女子が現れた。このボーイツシユな少女……………誰だろう？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリーニの唯一にして、オレや姫路さんを凌駕する最大の武器が選ばれる。

Bクラス戦後に聞いた話だが、実はあそこでオレが何もせずBクラス戦が続行していた場合。ムツツリーニに根本の首を獲らせるつもりだったようだ。もつとも、オレがその前に首を獲ったからムツツリーニの実力は見せられなかったけど。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

そんな中工藤さんがムツツリーニに絡んでいる。凄く余裕の態度で。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ……………君とは違って、実技で、ね♪」

……………何故だろう。どっちの意味かすぐに分かってしまった自分がいる。

「そっちのキミ、吉井明久君だっけ？勉強苦手そうだし保健体育で良

「かつたらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「いや、実技云々はともかく、生きていくうえでの知識として重要な部分もあると思うぞ？」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

雄二は思わず呟く。

「何故だろう？今日の兄さんは雄二に捨て駒に使われボロボロにされた挙句、こうして、精神的にもボロボロにされて行く。久しぶりに悲しい子を見た気がする。」

……………と。オレが兄さんに同情していると……

「じゃあ、そっちの紫乃のお気に入りの…………吉井光正君だよね？」

今度は工藤さんがオレに話を振ってきた。

「あ、愛子!？」

珍しく、紫乃も動揺中だ。うん、久しぶりに動揺しているところを見た気がする。動揺している姿も可愛い……………って、いきなり何を考えられているんだオレは！バカじゃねえのか！

「君も君のお兄さんと同じで勉強できなさそうだね。ボクと保健体育の勉強でもしない？もちろん実技でね♪」

「だが断る」

一瞬魅力的な提案にも思えたが拒否させてもらった。なぜなら

……………

「し、紫乃。何かドス黒いものが出ているから！ちよつと落ち着いて！後、その笑顔怖いから！」

「え？私何かした？（ニツコリ）」

「いやいや、怖いから！今の紫乃凄く怖いから！」

「ドス黒いもの…………殺気と言われるものをだし、笑顔で立つ鬼…………いや、魔王がそこにいたからだ。あの木下さんでもここまで取り乱すほ

どの存在がいたのだ。もしも、考えるそぶりを見せれば一瞬で地獄へ連れていくだろう。くわばらくわばら。というか動揺から一瞬で魔王になれるって稀有な才能だねえ。

「そろそろ召喚を開始してください」

高橋女史がそう言うのと紫乃からドス黒いオーラが消える。

あ、あぶねえ……これ以上はオレが耐えきれなかっただろう。

「はーい。試獣^{サモン}召喚つと」

「……………試獣^{サモン}召喚」

二人がそう言うのと、足元から二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。

ムツツリーニの召喚獣は忍者の様な格好をしていて、両手に小太刀を持ち二刀流だ。

腕には腕輪があるので点数は少なくとも400点はある事がわかる。

そして、対する工藤さんの召喚獣は……

「なんだあの巨大な斧は!？」

セーラ服の格好をした召喚獣で見るからに破壊力のありそうな巨大な斧。これはマズイ。オマケに例の腕輪も装備している。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんが艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪が光り召喚獣が動く。大斧に雷光をまとわせて襲い掛かる。なるほど。速攻でケリをつけるつもりか。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして豪腕で斧を振るう。喰らったら間違いなく一撃で死ぬだろう。

しかし……

「ムツツリーニっ!」

「……………加速」

喰らったらの話だが。

「……………え?」

戸惑う工藤さん。そして既にムツツリーニの召喚獣は敵の射程外

にいた。

「……………加速、終了」

ムツツリーニが呟く。次の瞬間、工藤さんの召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

あの一瞬で複数回斬りつけるとか……………並の所業じゃねえな。

『Fクラス 土屋康太

保健体育 572点

VS

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点』

572点!?!オレの得意科目ですら、500行くか行かないかの瀬戸際なのに!?

「す、凄い!下手をすると僕の総合科目並の点数だ!」

そして兄さんの点数の低さに驚いた!今まで何をしていたんだ?

「そ、そんな……………この、ボクが……………」

工藤さんがショックで床に膝をつく。

でも今ので理論派の方が実践派より強いのが証明されたか。

これで一勝一敗。勝負はまだまだ分からない。

Aクラス戦! ②

「それでは三人目の方お願いします」

高橋女史は淡々と作業を進める。自分たちのクラスが負けたのに驚いていないな。

「姫路。頼んだ」

「は、はいっ!」

こちらからは姫路さんだ。Fクラス最強のカードの登場だ。対するAクラスからは……

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

学年次席の久保利光。彼は姫路さんに次ぐ学年三位の実力者。現在は姫路さんが振り分け試験を途中退席したため、学年次席の地位になっている。ちなみに紫乃は現在学年三席の地位についている。まあ、そろそろ、紫乃が彼に勝ってもおかしくはないけどね。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二の心配には理由がある。久保君と姫路さんの実力はほぼ互角。総合点数ではせいぜい20点程の違いでしかなく。科目次第では負ける可能性が否定できない。しかも今回の科目選択権は向こうにある。

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

高橋女史が問うと久保君はすぐに答えた。

「それでは……」

高橋先生が前と同じように操作をするとモニターに総合科目と表示される。

同時に二人は召喚獣を呼び出して——一瞬で決着がついた。

『Fクラス 姫路瑞希』

総合科目 4409点

VS

Aクラス 久保利光

総合科目 3997点』

勝ったのは姫路さんだった。点数差は400点以上。至る所から驚きの声があがる。これにはさすがにオレも驚かざるを得なかった。

「ぐっ……！姫路さん、どうしてそんなに強くなったんだ……？」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。当然だ。去年まで拮抗していた実力がいつの間にかこれだけの差をつけられたんだ。よほど、シヨックだろう。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

……嘘だろ？このクラスって、自己中で構成されているんじゃないの？

「これでFクラスが二勝一敗です」

高橋女史の表情が若干変化していた。そしてAクラスからは騒めきが生まれる。

だって、そうだろう。もうAクラスは一敗も許されないのだから。

「では、四回戦を始めます」

「光正、行ってこい」

「オーケー」

「では、Aクラスから私が」

さあ、オレたちの戦いを始めようか。

光正が喜々として前に出ていく。でも何だろう？少し違和感のよ
うなものを感じる。

「……ねえ、雄二。光正は勝てるの？」

「……分かんねえ。あいつの対戦相手である天草は光正より学力的に
は上だ」

そう。相手の天草さんは上位五位以内に入る強者。光正は上位を
争う中では足枷になる教科がいくつかあり、そこまでよくない……。
加えて言うなら総合得点は3500点ぐらいらしい。

「なあ、明久。あの二人は何時からの知り合いだ？」

「え？それがどうしたの？」

「俺の予想だとこの勝負は相手の考えをどれだけ読めるかにかかって
いる」

「おそらく、去年からだと思う」

「そうか……」

読み合いか……うん。光正なら何とかすると思うんだけど……

「科目は何にしますか？」

「数学でお願いします」

「分かりました。それでは開始して下さい」

『試^サ獣^モ召喚』

『Fクラス 吉井光正

数学 491点

V S

Aクラス 天草紫乃

数学 490点』

「一点差……」

「今回もオレの方が上だね」

「いやいや、なんなのこの二人。なんで二人してこんな高得点なの!？」

「さあ、始めようか」

「ええ、そうね」

光正の武器は相変わらず八本の武器と多いし、天草さんの方は……
「聖騎士？」

一本の剣と盾。鎧も纏っていて、聖騎士という言葉がぴったりだと思おう。

「最初から全力で行く！」

そう言っつて、光正は武器を全て捨てて特攻する……ええ？

「オレはな武器を使うよりも素手の方が戦いやすいんだよ！」

ええ……

「腕輪発動『氷の兵士』」
アイスソルジャー

一方天草さんは5体の氷で出来た兵士を生み出す。つまり、天草さんの腕輪の能力は氷を操ること！

「ならこつちも！『影操り』」
シャドロー

光正の腕輪により、光正の影から伸びた手のようなものが八本の武器をそれぞれ持ち、兵士に向かってゆく。……この二人の腕輪に相性とか存在するのかな？でもまあ、光正の場合、不利な腕輪とか基本的いでしょ。

「なら、これはどう？『氷の槌』」
アイスハンマー

そう言っつて現れたのは大きなハンマー。あれ？でも……あの氷赤くない？何で赤いんだろう。

「無駄だ。氷なら、ぶつ壊せばいいんだからな！」

そう言っつて大剣でハンマーを斬る。すると、切れ目から炎が出てきた！

「なっ!？」

『Fクラス 吉井光正

数学 452↓301点

VS

Aクラス 天草紫乃

数学 400点 』

双方の点数を確認する。試合が始まってから今のがはつきりと喰

らった攻撃だ。つまり、最初の点数から減っている分は全て腕輪の分となるが……

「氷の中から炎？何で？氷しか使えないはずじゃ……」

「ちげえよ兄さん。紫乃は一言も氷しか使えないなんて言っていない」

「そう。私は氷と炎双方を操ることが出来る。だからね……」

『アイスブリズン
の氷の檻』

光正の召喚獣が檻のような形の氷の中に閉じ込められる。

「そして『炎の弾丸』」

炎が弾丸の形を取り、四方八方から発射される。数は数十だろう
か。あの狭い氷の牢屋の中では逃げ道はない。つまり、全弾命中する
ということ。

炎のおかげか氷が解け、水蒸気が変わる。水蒸気の煙が晴れるとそ
こには……

「えっ!？」

何もなかった。本当に何も残っていなかったのだ。光正の召喚獣
の影も形もない。これは戦死……？

『Fクラス 吉井光正』

数学 291点

VS

Aクラス 天草紫乃

数学 340点』

え!?!光正の召喚獣が戦死していない!?!でもどこにも姿が見えない
けど……

「雄二。これは一体……」

「試験召喚システムのバグか?いや、そんな都合よく起きるはずがな
い……」

一体どうなってるんだ?天草さんも光正の召喚獣が何処に消えた
かが分かってないのかくまなく探している。光正は……

「……………(ニヤツ)」

……うん。完全に分かった……というか仕組んでいたみたいだ。でも、隠れる場所なんてないはずなのに何処に……

「まさか！光正の召喚獣は私の影の中に!？」

「半分正解だ!」

すると、天草さんの召喚獣の影の中から、光正の召喚獣が出てきて……一発ぶん殴った。

『Aクラス 天草紫乃

数学 340↓315↓270』

と思ったら、もう一発。……うん。よく召喚獣とはいえ平然と殴れるよね……

「光正。そんな無茶苦茶なことを……」

「無茶苦茶も何も。勝負の世界では何があるか分からないよ、紫乃」

どうやら光正は腕輪の力で天草さんの召喚獣の影の中に入ってあの檻を脱出したらしい。無茶苦茶だけど、さすが僕の弟って感じがする。

「……これ以上は続けても無意味ね」

「へえ。大人しくやられてくれるの?」

空気が変わった。天草さんの纏っている空気が一瞬にして冷たくなるのを感じた。

「いいえ。これで終わらせるわ…… 『氷の世界』^{アイスワールド}」

一瞬だった。召喚フィールドが氷に覆われるのは……

「なっ!?!マズイ!」

光正は召喚獣を天草さんの召喚獣の元へ走らせる。

「遅いわ光正。…… 『地獄の業火』^{ヘルフレイム}」

そして、召喚フィールドは炎に包まれた。

Aクラス戦！③

炎が消えていくとそこには……

『Fクラス 吉井光正

数学 Dead

VS

Aクラス 天草紫乃

数学 10点』

戦死した光正の召喚獣と、点数もギリギリで立っている天草さんの召喚獣だった。

「私の勝ちね。光正」

「あー負けたなー」

でも何でだろう？あんなファイールド全てを焼き焦がすような攻撃をしたにもかかわらず天草さんの召喚獣の点数は残ったのだろうか？ヘルフレイムを使った時には光正の方が確実に点数は残っていた。でも、点数が減って戦死したのは光正だけ。不思議だ。

「それでもねえよ。天草がやったことは単純だ。ヘルフレイムを使うと同時に辺りの氷を操り盾にしたんだ」

「でも、それだったらアイスワールドの意味は？あんな事しなくてもよかつたんじゃないの？」

「それも意味はしつかりある。あの氷は何もない空間から生み出される生成物。そして、それを操ることが出来る。でもそれではワントンポ遅くなってしまふ。氷を生成して、操るからな。でも最初から氷が生成されていれば？後はそれを操るだけでいい。そして、この一瞬というのは、あの炎から天草の召喚獣を守る盾を作るのに大きな隙だ。おそらく、それを見越していたのだろう」

「な、なるほど……」

結論として天草さんの読みは光正の読みより上だったということかな？

「……だが腑に落ちねえな」

「ん？何か言った？」

「いや、何でもねえ」

本当かな？

「悪いな雄二。負けてしまった」

「いや、気にするな」

「これで二対二です」

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

いよいよ最後の試合である。Aクラスから出るのは最強の敵、霧島翔子さん。

そして我らがFクラスからは当然、

「俺の出番だな」

坂本雄二。こいつの出番だ。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言で事情を知らないAクラスにざわめきが生まれる。まあ、どんな手段を使うか予想を立てていたかもしれないけど、さすがに小学生レベルの問題を使ってくるとは思わなかったのだろう。

「わかりました。そうなると問題を用意する必要がありますね。少しこのままで待っていてください」

高橋女史が教室を出て行く。すると兄さんが雄二に近づき手を握る。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

雄二も兄さんの手を握り返す。

「……………(ピツ)」

次にムツツリーニが歩み寄って雄二にピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた、感謝する」

「……………(フツ)」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「Aクラスの度肝を抜いてやれ。代表」

オレは雄二に拳を向ける。

「ああ、やってやるよ」

雄二も拳を突き出し軽く当たる。もう、オレは何も言わない。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

兄さんの事？よくわからんけど十中八九恋愛関係だろうな。

そう考えていると高橋女史が戻ってくる。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は

視聴覚室に向かって下さい」

「……………はい」

霧島さんが短い返事をして教室を出て行く。

「じゃ、行ってくるか」

それに雄二も続く。

「皆さんはここでモニターを見て下さい」

高橋女史が機械を操作すると壁にディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。ディスプレイには霧島さんと雄二が席に着くのが目に入る。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。100点満点です。では始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされる。勝敗はあの問題が出るかにかかっている。

「始まったね……………はい、チェック」

「そうだな……ほい」

「……はい。でもいいの？応援しなくて」

「チエック。別にここで応援しても結果は変わんねえだろ」

「あはは……相変わらず冷めてるわね……ここしか置けないか」

「チエックメイト」

「あー負けた。もう一回」

「うん。いいよ」

オレたちがチエスをやっている中問題が表記される。

〈次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。〉

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

どうやら、小学生レベルとだけあって本当に簡単な問題が出題されてるみたいだな。

（ ）年 鎌倉幕府

（ ）年 大化の改新

ああ、この問題だっけ？霧島さんが絶対に間違えるって言ってたやつ。

「あ……！」

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たち……」

「うん！僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラスの声が一人を除いて揃った。そして、教室を揺るがすような歓喜の音が鳴り響く。

「あれ？他のクラスメイトみたいに喜ばないんだね」

「当たり前だ。この作戦には致命的な欠陥がある」

「ふーん。はい、チェック」

ああ、この作戦には致命的な欠陥がある。

〈日本史勝負 限定テスト 100点満点〉

〈Aクラス 霧島翔子 97点〉

VS

〈Fクラス 坂本雄二 53点〉

それは、雄二が満点取らないとこの作戦は成立しないという欠陥だ。

こうしてオレたちFクラスの卓袱台はみかん箱になった。……え？あれより下が存在したの？

Aクラス戦を終えて……

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだオレ達に対する高橋女史の言葉。

うん、オレたちの負けです。はい。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんがそう告げ、歩み寄る。

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが兄さんを後ろから抱きしめて必死に止める。へえく大胆になったものだ。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

オレも否定はしない！

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

はあ。いい加減現実を見ようよ……

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

やはりか。ブランクがあるくせに良く油断出来たものだ。

「……ところで、約束」

あ。そんなのあったね。

「……………! (カチャカチャカチャ!)」

何故兄さんとムツツリーニは撮影の準備をしているのだろうか? というか、何を撮影するつもり?

「わかっている。何でも言え」

「潔いな……そんな雄二に敬礼。(ビシッ)」

「……………それじゃ——」

霧島さんは一度姫路さんをチラッと見てから、再び雄二に視線を戻す。

そして、小さく息を吸って、

「……………雄二、私と付き合って」

言い放った。

わーお、大胆。これはさすがのオレでも予想の斜め上を行ってるよ。

そして、兄さんやムツツリーニ、姫路さんなどはポカーンとしている。どうやら、脳の処理が追いつかなかったようだ。ちなみに、告白された本人である雄二はわかっていたようで特に表情を変えない。

「その話は何度も断つただろ? 他の男と付き合う気はないのか?」

「……………私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

いい話だ。一途に思い続けることができるなんて、いい人だ。胸があつて苦手だと思っただけで彼女への認識を改めよう。というか、よく姫路さんのことを見ていたのは、単に雄二の近くにいる異性を警戒していたからというわけだ。

「拒否権は?」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ! 放せ! やっぱこの約束はなかったことに——」

ぐいっ つかつかつか

霧島さんはそのまま雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

教室にしばしの沈黙が訪れる。

あまりの事に言葉が出ない。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としているオレたちの耳に野太い声が聞こえてきた。声のする方へ振り向くと、そこには生活指導の鉄人がいた。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思ってな」

「……え？我がFクラス？おい。ちよつと待て……」

「おめでとう。今回の戦争に負けたことよつて福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ!?!』

オレたちFクラスの男子全員から悲鳴が上がる。

ちよつと待て！あの『鬼』の補習をする鉄人が担任だと!?!ふざけるのも大概にしろ！

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても人生を渡っていく上では強力な武器の一つだ。ないがしろにしていいものじゃない」

そこは同意見だ！同意見だが……！

「吉井ツインス。お前らと坂本は念入りに監視してやる」

「はあ!?!何でオレも!?!」

「開校以来初の観察処分者とA級戦犯に最強最悪の問題児だからな」

誰が最強最悪の問題児だ！誰が！

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐり、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せますー!」

「上等だ！今より自由気ままに生活してやるよ!」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか」

鉄人が呆れたようにため息を吐く。

でも、実はこの時、少しだけ苦手科目を克服しようと思っていた。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

なぜなら、紫乃に総合科目の純粋な点数で勝つためにだ。

「あれ？明日からってことは今日はやらないんですか？」

「ああ、お前らのクラス代表もいないし、戦争直後には厳しいだろ？」

「まあ、確かにそうですね」

「なら、光正。一緒に帰ろ」

「はいはい」

『に、西村先生！明日からと言わず補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！』

兄さんのそんな声が聞こえてくる。何で兄さんは自分から補習を受けようとするんだろう？後、仏滅じゃなくて吉日だからな。

帰り道……

「はい。これ」

「ああ、少し前に頼んでいたやつか」

「うん。今日渡されたからね」

「ありがとう」

よし！これで明日から裁縫という暇つぶしができる！

「ねえ、光正。一つ聞かせて」

そして、急に真面目なトーンになる。

「何でワザと私に負けたの？」

「そう思う根拠は？」

何となくとか勘では意味がない。根拠が必要だ。

「戦い方があなたらしくない」

「ふーん」

「あれは確実にあなた本来の戦い方では無い」

「オレの戦い方……ねえ。召喚獣での勝負は初めてだと思うけど？」

「そんなの貴方の性格と格ゲーの戦略から分かる」

なるほどなるほど。

「まず光正。あなたという人間は自分が全力であることを隠そうとする。なのに今回は最初から自分が全力と言っていた。この発言は明らかにおかしい」

「続けて」

「次にハンマーを大剣で斬った時。あなたは私の腕輪の能力が完全にも分かっていないのにあんな無用心なことをした。普段のあなたなら絶対に避けていた一撃だった」

「ふーん」

「そして、影になって私の攻撃を避けた時。私は完全にあなたを見失っていた。それはあなたも分かっていたはず。なのに、私にあなたを探す時間を与えその間影を操って剣で攻撃してこなかった。登場した時も二発殴るだけで距離を置いたこともおかしい」

「それだけ？」

「最後。あなたは私の一撃を喰らう前に私を倒せたのに倒さなかった点。あそこで私の召喚獣の元に光正の召喚獣を走らせるのではなく、影を操って剣でとどめを刺せばよかった。なのにしなかった」

「……………」

「以上四点。この勝負は私が勝たされた勝負だった。違う？」

ふう。やれやれだ。

「全部正解だ。まあ、露骨にやり過ぎたのは反省している」

周りの観客からすればオレは紫乃に挑んだが力及ばず返り討ちに遭った構図になっているだろう。だが、紫乃は騙せなかった。正確には雄二とかもだと思っただけ……

「いつから、こうやって私を勝たせようと思ったの？」

「三回戦が終わってFクラスが二勝していた時だよ」

これは本当だ。こんな下手くそな演技をした理由。それは全部事前に仕込んでいなかったからだ。

「何で？あなたがおかしな事しなければ私との勝負にもFクラスとし

でも負けはしなかったでしょ?」

「一つ。このAクラス対Fクラスはオレが締めてはいけない。二つ。この戦争にははっきりと白黒つける必要があった」

「二つ目はまだ分かるよ。でも二つ目はどういうこと?」

「ああ。雄二や兄さんはAクラスの設備とか言ってるけど、今の彼らにAクラスの設備を使う資格がない。それを認識させて、今後の成長のきっかけを作る。これがオレの狙いだ」

「……そういうこと。でもさ、光正」

「何?」

「さっきまでの言い方だと、本気を出せば勝っていたともとれるけど——私を舐めないでよ」

なめてはいない。お前には勝てる保証なんて存在しねえ。まあ、だから楽しいんだけど。

「やっぱり、お前は最高だよ紫乃」

普通の人間なら、勝った時にここまで考えないだろう。過程はどうであれ勝ちが勝ち。そう思って余韻に浸ってもいいのに、勝つても自分の状況を浮かれずに見えている。

勝たせたなんてカツコよく言っているけど実際、オレが本気でやっていても八割方負けていただろう。ククツ、面白れえ。

「あ、ありがと……」

ああ、だからこそ、次にこういう機会があつたら絶対に勝つてやるよ。覚悟しておけ。

「それで、光正。何でも命令できる権利だけど……」

「え?過程に満足できなかったから免除してくれるって?ありがとね」

「過程は過程。結果は結果。結果は私の勝ち。だから命令するね」

畜生、胡麻化し切れなかった。

「光正。私と——」

ラブレター事件

晴れ渡る空。澄んだ空気。暖かな日差し。そして……

「今日もいい天気ですね」

隣にいる悪魔。うんうん。最高の朝であろう……

「……って、ちよつと待て。なんで紫乃が隣にいるんだよ！」

「いいじゃないですか。私が一緒に登校したかっただけです」

あ、納得。

「まあ、いいけどさ」

「光正もいいことがあったじゃないですか。ほらほら、朝からこんな美少女と一緒に登校できるのですよ」

ない胸を張り、手をその胸に当てている紫乃。いかにも自分が美少女だと言いたげな様子だ。

「……………美少女じゃなくて微少女の間違い……………」

「おっと、光正。私のどこが微妙か言ってもらおうか」

今のを微少女と正確にとらえたのは褒めよう。

「微妙な少女じゃなくて、微かな少女のほうだけだな」

「分かりました光正。そこを動かないで下さい。一発殴って差し上げますから」

「それはごめんだね！」

「あ、待て！逃げるなあー！」

こうして、朝のランニングが始まった。

学校に入る時、兄さんが観察処分者の仕事をしていた。

珍しく朝早くに学校に来たと思ったらこれか……哀れなり。

チクチクチク。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

チャイムと同時に兄さんが教室に駆け込んできた。きつと、HRギリギリまで鉄人に雑用をさせられてたのだろう。哀れなり。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

淡々と進む毎朝の恒例の気だるい出席確認。静かな教室にのどかなひとときが流れている。そして今日もいつもと変わらない一日が

「坂本」

「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ!!』

雄二の一言で日常は壊れた。

「ゆ、雄二！いきなりなんてこと言い出すのさ！」

慌てて雄二に駆け寄る兄さん。明らかに小声だったのにクラスのほとんどの人が聞き逃さなかったようだ。格言うオレもぼっちり聞いていたけど。

『どういうことだ!?!吉井弟はまだ分かるが、吉井兄がそんな物貰うなんて!』

『それなら俺達だって貰ってもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみろ!』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

よく出てきたな!?

『もつとよく探せ!』

『……………出てきたっ！未開封のパンだ!』

『お前は何を探しているんだ!?!』

全くだ。

怒号が飛び交う教室内。予想通りクラスの全員の妬みに狂う光景が展開されていた。

「お前らっ！静かにしろ!」

鉄人の一喝でクラスに静寂が舞い戻る。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

え？続けるの？

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」
返事が『吉井コロス』になっていた。

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよ
！」

「だから『吉井兄コロス』に変えろ！」

「そこじゃないでしょ!？」

「吉井兄、静かにしろ！」

「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう!?!このままだと
クラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井兄コロス」「布田」「吉井兄マジ殺す」「根岸」「吉井兄ブ
チ殺す」

なるほどね。まあ、文言が少し変わったからよしとしよう。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

保身の為だろうか。兄さんは必死になって鉄人を呼び止める。

「吉井兄。間違えるなよ」

鉄人が扉に手をかけたまま告げる。間違いとは何の事だろうか？

「お前は不細工だ」

そう言う事か。納得だ。

「不細工とは言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！せんせーい！」

兄さんの叫びも空しく、鉄人は教室を出て行く。この教室で暴動が
発生するのはもう誰にも止められない。

「アキ、ちよ〜つと話を聞かせてもらええる」

真っ先に兄さんの肩を掴んだのは島田さんだ。

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

兄さんを質問攻めにする島田さん。心なしかポニーテールが角に
見えてくる。

「あー、えっと、そのー」

「いいからおとなく指の骨を——じゃなくて、手紙を見せなさい」
断れば兄さんの指は次世代の人の持つ指になるだろうな。

「あの、吉井君」

そこに現れたのは姫路さん。

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

あの姫路さんまでもが兄さんの貰った手紙を見たがっている。

「その……ごめん」

珍しく姫路さんの頼みを断る兄さん。

「でも、でも……」

しかし、姫路さんはそれでもしつこく食い下がる。

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです!」

「ちよつと待って! 姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの!?!」

姫路さんもすつかりFクラスの一員に相応しくなっていたようだ。

「皆、ちよつと落ち着け」

そんな中、雄二が教卓を叩く。一応言うけどお前が元凶だからな?

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

雄二がクラスの連中に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。あの暴徒とかしてそうなFクラスに言い聞かせられるあたり雄二の手腕が良いのがうかがえる。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違ってるんだよ!」

全くである。

「そうだ! 光正なら味方してくれるよね!」

「今、自分の座布団作るのに忙しい」

裁縫〈兄さんの命

「あんまりだよ! この人でなしが!」

荷物を持って兄さんが教室から逃走した。

『逃がすなあつ！追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！吉井兄を殺せ！』

『サーチ&デス！』

「そこはせめてデストロイで！」

廊下まで響きそうな声を上げるFクラスの面々。気がつけば教室に残されたのはオレと秀吉だけになった。

「これは一時間目の先生に何と説明すればよいのか……」

「さあ？別にいいんじゃない？」

「それにしてもお主はマイペースじゃのう。明久の件があつても手先が乱れておらぬ」

「いつものことじゃないか。Fクラスが暴動を起こすのは」

「……いつものことで済ませてよいのかのう……」

その後一時間目が始まった。すぐに、ムツツリーニが戻ってきたが残りの四十七人は戻ってくる気配無し。鉄人の意向により、秀吉とムツツリーニはEクラス、オレはAクラスで今日一日過ごすことになった。

「えーFクラスが暴動を起こし、クラスの実に94%の人が授業をボイコットしたため、今日一日Aクラスで過ごすことになりました」

「……歓迎する。吉井弟」

「そのこのソファアに座るといいよ。なんなら、私の席でも……」

「わぁーい。ソファアだ〜」

「人の話を聞いて！」

……というか、やっぱり、Aクラスって凄いな。この来客用のソファアとオレたちのミカン箱を入れ替えて欲しいよ……そう思いながら、今日も一日が過ぎてゆく……

ちなみに、兄さんの話によれば、あの後、ラブレターは姫路さんが細切れにし、雄二が燃やして灰にしたそうだ。

Date or Dead?

週末の朝、この日は何故か兄さんも早く起きていた。

「どうしたの兄さん。いつもなら寝ているかゲームしている時間でしょう?」

そう言いながら朝食であるパンを渡す。もちろんただの食パンである。

「あーうん。実は今日ね……」

「姫路さんたちとお出かけか?」

「よ、よく分かったね……」

「見ていればわかる」

それに消去法をしたってそうだ。雄二は何か用事があると霧島さんが言っていたし、秀吉もムツツリーニも何かと忙しいらしい。となると残りは姫路さんたちとなるわけだ。

「僕の食費が……」

「いつもゲームに消えているだろ」

「あれ?そういえば光正は何か予定あるの?」

「紫乃とデートしてくる」

「……光正。兄さんは哀しいよ。こんなところで大切な弟を失ってしまふなんて……」

そう言いながら兄さんはキッチンに向かう。あの眼は二日に一度行われる捕まったら処刑のリアル鬼ごっこFFF団をしている時に追いかけてくる鬼と同じ眼だ。

「あーでも、オレは女子一人とデートだけど、兄さんは女子二人とお出かけかーまさに両手に花だね。まあ、こんな事FFF団に言おうものなら、誰が処刑されるかなー」

「……光正。一時休戦にしないかい?」

「休戦も何もオレに戦う意思はないよ」

バカだ。ここでオレを仕留めればその情報がFFF団に流れることもないのに。

「じゃあ、そろそろ準備して行くわ。兄さんも約束には遅れない方が

「いよいよ」

「あぁっ!?!もうこんな時間!?!」

さてと、準備しますか。

待ち合わせ時間まで後十分か……少し早く来てしまったようだ。

そう思いベンチに腰を掛ける。そして次の瞬間オレの視界は真っ黒に染まった。

「だくれだ♪」

どうやら、視界を手で塞がれたらしい。ふむ、こんな事する人物は一人しかいない。

「貧乳」

「フンっ」

そして、答えると同時に突き抜けるような激痛。

「あぁあぁっ!?!背中があぁあぁあぁっ!?!もの凄い勢いで蹴られたんですけど!?!」

「余分なことを言うからでしょ」

「え? 事実じゃん」

「もう一発!」

「あぁあぁあぁあぁ! 全く同じ場所に痛みがあぁあぁあぁっ!?!」

全く同じ場所! しかも手加減なし! 二回目だから場所を変えるなり、手加減してくれてもいいのに!

「さて、じゃれあいはこの辺にしといて……」

「……オレの命がかかるじゃれあいだな」

「行こっか」

「はいはい」

「返事は一回」

「はい」

やれやれ、まさか命令権で『私とデートして。後、料理を教えてほしい』って言われたもんな……というか、命令二回していない？まあ、昨日までも昼休みは三途の河まで行っていたしな。管理するおっちゃんからも顔を覚えられたしな。というか、渡るのに6万は高いでしょ。せめて6文が相場だとオレは主張する。

そんな事思いながら歩くこと数分。オレたちは驚愕の光景を目にした。

「あれ？光正に天草だったか。こんなところで会うなんて奇遇だな」

「こつちこそ、雄二と霧島さんに出会うとは思わなかったよ」

雄二と霧島さんだ。デートかなと思ったが、雄二の様子がおかしい。いやねえ……

「何でお前手錠……というか手かせ？をつけられて霧島さんに連れられてるんだ？お前の趣味か？」

こいつの趣味だったら取りあえず連絡先からこいつの分を消しておこう。

「ちげえよーこれは翔子に……」

「ハハハ、何を言っているのさ雄二。あの、学年主席の霧島さんが頭のおかしいこと——」

「……私がやった。雄二が逃げないための処置」

「さすが、翔子。考えているね」

「——するわけないじゃないか」

「光正。現実をみろ。お前も直にこうなるぞ」

やべえ。こいつら頭おかしい。というかこの状況を受け入れ始めたオレもやべえんじやねえのか？

「ハハハ、じゃあ、二人仲良くデートを楽しんできてよ」

「テメエ光正！そこは俺を助けるとかないのか！」

「ないな」

「……ありがとう。吉井弟はいい人」

「どういたしまして、霧島さん」

「じゃあ、行こうか。二人の邪魔しちや悪いしね」
「そうだな」

オレと紫乃は歩き始める。
「こうせえええええええ！」

どこかのゴリラの雄叫びを無視して。

ちなみに、この後映画にあの二人は行ったらしい。

「……………私も翔子みたいにした方がいいかな」

ヤバい。こいつならそれを実行するだけの財力はある。ここですんなることやられたら困る！

「こ、光正／＼」

「ほら、手を繫げばいいだろ。オレも逃げるつもりねえしな」

「そうだよね！光正が逃げないためだもんね！」

心なしか紫乃の顔が紅い気がする。気のせいかな？

午後になった。今いる場所は……

「じゃあ、料理を始めるか」

「お願いします」

紫乃の家の厨房である。え？午前中のあのデートはって？ああ、使う食材を買っていただけだよ。ついでに吉井家の分も。というか、厨房広いなあ。どうやら、普段からシェフを雇っているそうさ。羨ましい。

「まずは、自分一人で何か作ってみて」

「分かりました！」

三十分後……

「出来ました！」

「うむ」

いつも通り見た目はおいしそうな料理が出てくる。これは炒飯かな？

「では、いただく」

パクツ

うむ。何とも形容しがたい味だ。口の中で悪魔がダンスを踊り、意識が天の彼方へ持ってかれる不思議な味……そして目の前にはいつもの河。ん？河？

「ハッ！死ぬかと思った……」

あぶねえ、またあの場所に行くところだった。

「どうだった？」

一応今回は料理の過程から全てを見ていたが……欠点はあるんだよ。確かに直した方がいいところもある。でも、それだけでこの天に召すような料理は出来ねえんだよ……ん？でも確か卵焼きはこいつ何故か綺麗にできるんだよ……何でだ？でもエビフライで昇天した記憶がある……ん？そういえば、こいつの卵焼きってオレの味覚が正しければ……

「なあ、紫乃。お前の作る卵焼きって、何も調味料入ってないよな？」

「えーつと。そうだね。でも、素材の味を楽しんでもらおうと……」

「ゆで卵と、目玉焼き。後は、調味料を入れた卵焼きを頼む」

「分かった」

オレの推測が正しければ……

「ここは……ああ、いつものおっちゃんか」

「いつものおっちゃんって、普通の人間はここに毎日のように来ぬぞ」

この足が透けていて頭に三角の頭巾を被っているおっちゃん。この河を管理する人で、向こう岸に渡ろうとすると金を要求してくる。この人(?)には給料が出ないのだろうか?不思議である。

「それで、本日は二回目だがどうしたんじゃ?」

「ああ、自分から来た」

「……もう、何も言わぬが。命を粗末にするもんでは無いぞ?」

「大丈夫だ。本当に死ぬときだったら、こんなところすぐに渡らされている。要するに、ここは生と死の狭間と言ったところだろ?」

「慣れって怖いのか……」

「さて、そろそろ復活するかねえ」

「……ゲームの世界じゃないんだがのう」

「……予想通りか」

「バカなの!?!ねえあなたはバカなんですよ!?!何で復活して一言目がそれなのよ!」

予想通り河まで行けた。なるほどなるほど。

「紫乃。お前の料理の欠点は、調味料だ」

「……ちようみ……りよう?」

「ああ。調味料が絶望的なまでに使いこなせていない。というか、分かってない」

「……えーつと?調味料が使いこなせない?」

おそらく、分量とかそもそもの調味料とか色々ミスって気付けば死を招く料理が完成したのだろう。

「うん。だから、そこを重点に徹底的にやる。というか、包丁の使い方もそこまで良くねえしな。一から叩き込んでやる」

「お、お願いします……?」
その後、料理指導は夜まで続いた。成果があつたかは今は不明である。

清涼祭編

清涼祭準備

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょいか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

吉井光正の答え

『睡眠時間』

教師のコメント

授業中ではなく、夜しっかりと寝てください。

桜色の花びらが坂道から姿を消し、代わりに新緑が目を吹き始めたこの季節。

オレたちの通う文月学園では、『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

そのため、普段のLHRの時間は清涼祭の準備に当てられているが、我らがFクラスは……

『吉井！こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

校庭で野球をしていた。え？準備が終わったから？ないない。出し物すら決まってるじゃないの。

『言ったな！？こうなれば意地でも打たせるもんか！』

ならば、オレはこの野球に参加しているのか？答えは否だ。

オレも確かにあいつらと野球がしたい。でも、オレは参加できない理由がある。

『それ反則じゃないの！？』

おそらく、キャッチャーである雄二にバッターの頭を狙えとか指示されたのだろう。さすがに、バカの兄さんでもやってはいけないと思っただらしい。

『貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！』

鉄人の怒声が聞こえてきた。

『吉井！貴様がサボりの首謀者か！』

『ち、違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？』

日頃の行いのせいだろう。

『雄二です！クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！』

まあ、嘘ではないな。

『違う！今は球種やコースを求めているんじゃない！しかも、それをやったら単に僕が怒られるだけだよね!』

『全員教室へ戻れ！この時期になっても出し物が決まっていけないなんて、うちのクラスだけだぞ!』

……と。オレはこの茶番を見終えた後、Aクラスの教室に来ていた。え？何でAクラスかって？別に企画が合同になったわけでも、オレがAクラスに編入したわけでもない。

「では、採点を行っていく」

『お願いします!』

「見た目70、味55。砂糖が多すぎる。量の調整をしつかり」

「分かりました」

「見た目50、味75。見た目が少し悪い。見た目にも気を使つて」

「ありがとうございます」

Aクラスの出し物は簡単に言えばメイド喫茶。オレはそこでLHRの時間と放課後の時間を使い厨房担当の奴らに料理を教え込んでいた。何故か、鉄人の補習をそれを理由に休んでも追加がないあたり不思議だが、オレの頭がいいからということにしておこう。

「見た目100、味0。……これ、味がただの水じゃねえか」

「はい。ただの水です」

……え？ドリンクも採点対象なの？

「見た目100、味……グハア……ー100……（カクツ）」

「ええ!?今日も失敗!」

紫乃……お前は厨房担当じゃねえって、霧島さんが言ってただろうが……。

いつものおっちゃんとかと談話をし、復活してから総評を述べる。

「まだまだな部分は多いが。最初に比べたら遥かに上達し、効率的に動けるようになった。そこは素直に褒めておこう」

「やったあー！」

お前以外だよ！……まあ、あの殺人的な料理も98%境界行きから、66%境界行きになっただけ進歩……なのか？

「よし、次の指示を出す……」

『分かりました』

本当に、うちのクラスと大違いだな……。しみじみと思うよ。

「……光正に頼んで良かった」

「霧島さんか。指導役を……か？」

「(こくり)……紫乃が凄く教えるのが上手いって言ってたから」

「まあ、教えるのが上手い下手どっちでもいいが、それを吸収するのがあいつらだ。それに当日はオレはそっちの厨房に入れねえしな」

当たり前だ。FクラスとAクラス。クラスの違いは分かるやつには分かるし。でもまあ、厨房ぐらいなら大丈夫な気がするが……それが問題になっても嫌だなあ。

「……残念。でも、Aクラスの店には客として来てほしい」

「ああ、時間を見つけてくるよ」

「……その時は紫乃に接待させる」

「期待しているって言っといてくれ」

「……本人に直接言えば？」

「……恥ずかしいからな。直接言うの」

「……分かった。伝えておく」

……それにしても、Fクラスの誰一人としてオレを呼びに来ない。ましてや、あの鉄人もだ。何でだろう？

「なあ、紫乃。何でFクラスから誰も呼びに来ないんだろうな？」

「ああ、それはね」

「(そぐ)そと取り出した紙には……えーつと？」

【借用書】

2年Fクラスの吉井光正を清涼祭の準備期間中のLHR中2年Aクラスが借りるものとする。

ただし、本人が拒絶した場合、借用書は無効とする。

2年Aクラス代表 霧島翔子 印

2年Fクラス代表 坂本雄二 印

2年Fクラス 吉井光正 印

わあーこんなものがあつたんだー

「つておい！オレはこんなのに印鑑を押した覚えはねえ！というか、家の実印じゃねえか！」

「え？問題あるの？」

「大有りだ！誰だ！オレの名前を偽って印鑑押した奴は！」

「一人しかいないじゃん」

まさか、兄さんか！確かにあの野郎ならやりかね——

「私だよ」

「お前かああああああつ！」

そう言つて、オレは紫乃の両頬を抓る。あ、柔らかい………つてそうじゃない！

「いひやいせすひようせい。ひやなしてひゆだしやい」

「反省しろ」

「わ、分かった。これ返すから許して」

そういつて、差しだされたのは吉井家の実印だった。……ん？

「………つて実印?!しかも実物?!いつどこでどうやって盗み出した!?!」

「どこでつて、光正の家に決まってるじゃん」

「当たり前だ！でも、いつだ！いつ盗まれたんだ！」

「え？盗んでいないよ」

はあ？

「光正のお兄さん………明久さんに言ったら普通に貸してくれたよ」

「よし、ちよつとあのクソ兄さんをしばいてくる」

「うん。いつてらっしやい」

こうして、オレはFクラスに殴り込みに行くことにした。
いや、自分のクラスに戻るだけなんだけどね……

出し物決定！（遅くね？）

バンッ！

「あ、光正。どこ行ってた——」

「一回死んで来いやあああ！」

「——グフッ!？」

Fクラスの教室を思い切り開け、入ると同時にちょうど目の前にいた兄さんターゲットを殴り飛ばす。

「酷いよ光正！まだ親父にも殴られたことないのに！」

そう頬を抑え、倒れ込みながら言ってくる兄さん。正直キモイ。

「親父が関係あるか！」

「はいはい。アキも光正も、兄弟でバカやっていないの」

「えーっと、光正君。何で吉井君を殴ったんですか？」

さすが姫路さん。オレが何となくで暴力を振らないことが分かっているみたいだ。

「このバカが、家の実印を勝手に貸しやがった」

「えーっと、問題あるの？」

「おおありだよこのバカ！おかげでオレが……オレが！」

「光正。暴力に頼っては解決しないものもある。心の広い兄さんに何でも話してごらん？」

「死んで詫びろ」

「何でさ!？」

……はあ。なんだか疲れたな。そういや、今清涼祭の出し物決めているんだっけ。お、黒板に何か書いてある。

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

名前がアウトだろ！写真館ならまだ分かる。でも、店名がアウトだから！

【候補② ウエディング喫茶『人生の墓場』】

だから、名前がアウトだって！ウエディング喫茶ってのも微妙だが、店名がとにかくアウトだろ！

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

……え？中華なの？洋食なの？え？何の店？というか、中華なのにヨーロッパアン？意味分かんない。

「……何だこれ？」

「今上がっている出し物の候補よ」

……おい……冗談だろ？誰か冗談だと言ってくれ……

ガラツ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

鉄人がやってきた。そして、黒板に書かれている文字を読むと……

「……補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

やっぱりオレたちがバカだと思われてる。

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井兄が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

クラスの連中が兄さんをバカ扱いして弁明しようとする。いやオレはそもそも話し合いにいなかったただけだね。

「馬鹿者！みっともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、思わず背筋が伸びる一同。オレも地味に伸びた気がする。

なるほど。腐っても教師だ。クラスメートを売ってその場を逃れようとする根性が気に入らないのか？

「先生は、バカな方の吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

まあ、そうだけど……というか。何で兄さんが書記をやっているの？それに島田さんが議事をやっていたのも不思議だ。あ、雄二がやる気を出さずに寝ている。そっか、あれが原因か。

「まったくお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの鉄人の台詞。え？そんなことが出来るの？

『そうか、その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に活気づく教室内。そりやそうだろう。設備に不満を感じて試召戦争を始めたんだ。当時より更に低い設備では我慢ならないのも当然だ。無論オレも不満しかない。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

これは姫路さんの声だった。彼女は立ち上がって胸の前で手を握りやる気を見せている。

どうしたんだ？姫路さん自身も設備に不満が無かった訳ではないだろう。だがこんな風に率先するとは不思議だ。もしかしたら、何か厄介事を抱えているかもな。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

……おいおい。どんな写真を展示するつもりだったんだよ。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が高すぎる。たった二日の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

クラスの皆はやる気になった。しかし、その分意見はまとまりそうに無かった。

「はいはい！ちよつと静かにして！」

島田さんがパンパンと手を叩いて注意するが、効果はあまりないようだ。皆が次から次へと自分の意見を口にする。

『お化け屋敷なんかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを作ろう』

おーさらに意見がバラバラになっていく。試召戦争のときとは比べ物にならないほどのまとまりの無さである。雄二はこんな連中をまとめていたのか。なるほど。雄二のクラス代表としての手腕はやはり相当なものだと思いき知らされる。

黒板の前では島田さんと兄さんがなにか話してるようだが、クラスメートの声の方が大きいせいでよく聞こえない。というか、さらに意見は増えているし。

「もうっ。とにかく静かにして！決まりそうにないから、店はさっきの挙がった候補から選ぶからね！」

業を煮やした島田さんが無理矢理話をまとめた。だが、これは正しい判断だろう。このままでは企画が中途半端になってしまう可能性があったからな。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

反論を眼力で押さえ、決を採りにかかる島田さん。

おそらく雄二は島田さんのこういうところを期待して議事に推薦したんだろう……と思う。実際、推薦なのか立候補なのかすら知らないけどさ。

「それじゃ、写真館に賛成の人！はい、次はウェディング喫茶！最後、中華喫茶！」

島田さんの声が教室に響く。しかし、喧騒はまだまだ収まる気配がない。騒がしい中、島田さんが挙げられた手の本数をカウントし始めた。結果……

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

接戦だったけど僅差で中華喫茶が勝利となった。ここで、決戦投票をしないあたり分かっているのだろう。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

すると須川君が立ち上がる。兄さんの話によれば彼がこの中華喫茶を提案したらしい。

「……………（スクツ）」

そしてムツツリーニも立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士の嗜み？そんな話聞いたことないけど、ムツツリーニのことだからどうせ下心が絡んだ理由だろう。まあ、手先が器用で物覚えも早いものだから安心して任せられるだろう。

「んじゃ、オレも」

「そっか、光正も料理できるもんね」

「ああ、それに厨房にいた方が女子に近づかれなくて済むからな」

「あはは…………理由が相変わらずだね…………」

当たり前だ。もし、女（特に巨乳）に接客なんてした日にはオレは死んでしまう。

「まずは厨房班とホール班に分かれてねもらうからね。厨房班は須川、土屋、光正のところ。ホール班はアキのところを集まって！」

そして何故か兄さんはホール班のトップにされていた。兄さんも料理上手いんだけどな…………

「それじゃ、私は厨房班に…………」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

平然と厨房班に入ろうとした姫路さんを兄さんが止める。

『明久、グツジョブじゃ』

『ナイス判断』

『……………！（コクコク）』

その破壊能力を知っている秀吉、オレ、ムツツリーニからのアイコンタクト。ちなみにアイコンタクトが兄さん以外とも使えるようになった。まあ、最大の犠牲者であったらしい雄二は寝ている為か気づかない…………はずだけど、よく見ると小刻みに震えていた。夢の中で、姫路さんの料理を食べてるのか？

「え？吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

自覚のない殺戮兵器が首を傾げる。

オレは本当のことを話して、紫乃のように少しずつ更生させていく（それでもまだ三日に二日は死んでいるが）ほうがいいと思うし、何より本人のためになると思う。

兄さんにそうやって伝えたが、本人が傷つくからという理由で、いまだはぐらかし続けている。

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様に接したほうがお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中ではサンドバツクじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

そうだ。そして頼むから、ホールだけで頑張ってくれ。

「アキ。ウチは厨房にしようかな〜？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何を馬鹿なことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやああつ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

「…………ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね…………それが、いいと、思います…………」

…………大丈夫なのか。

こうして、オレたちの清涼祭は幕を開ける。果たして、無事に生き残れるのか…………

転校する？・それとも転向する？

「だってアンタと坂本って、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕お婿にいけないっ！」

帰りのHRも終わり帰ろうとした矢先。こんな意味不明の会話が聞こえてきた。

というか、なんで兄さんと雄二が愛し合っているとされているの？

まあ、去年から言われていたけどさ。

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

いいのかよ。相手は男だぞ？

「……あ、明久？」

そして、偶然二人の会話を聞いていた秀吉の動きが止まる。あれ？おかしいことになっていない？

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。年の差とか……」

「いやいや、お前らは同い年だから。……あと兄さん。今、秀吉なら良いとか思っていないか？」

「そ、そんなことないよー」

怪しすぎるだろ……。というか丸わかりだ。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

でも、雄二がどうしたんだろう？確かに奴がいればもつと利益は増えるだろうけど。

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

妙な事を言う島田さん。

「というかこれ何の話？兄さんと雄二がラブラブだとか、喫茶店が失敗するとか話が見えてこないんだけど」

秀吉は何故か先程から顔を赤くしているため、オレが疑問を二人に聞く。

「深刻って程じゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の話で――」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻なのよ……」

「え？どういうこと？」

「んん？何が深刻なんだ？」

「とりあえず、オレたちにも詳しく教えてくれ。そうしないと、何も動くことが出来ない」

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われたんだけど、事情が事情だし……けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

島田さんの真剣な顔に兄さんが少し気圧されてるようだった。

「実は瑞希なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

島田さんの言葉に兄さんが変な声を出す。

「島田さん。それは一体……って、おい兄さん？」

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけておるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

秀吉が兄さんの肩を揺すって起こそうとする。

「秀吉……モヒカンになった僕でも、好きになってくれるかい……？」

「……どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんおう」

なるほど。オレもこの才能を受け継いでしまっているのか。

「起きろー！」

バコツ！

「光正。いきなり蹴るなんて何を……」

「……はっ！少しトんでた！美波！姫路さんが転校ってどういうこと？」

とりあえず、蹴れば大抵何とかなる。

「どうもごうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

妙な言い回しだ。この言い方だと転校はまだ確定したわけではないみたいだ。

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんのじゃが」

「いや、秀吉、もしかしたらこのFクラスが原因かもしれない」

「そうなのよ。転校の理由が『Fクラスの環境』なんだけど」

「ってコトは、転校の理由は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「そうね。純粹に設備の問題ってことになるわ」

違う。Fクラスの環境って言うのは設備だけを指すものじゃない。

Fクラスというそのものを指すだろう。例えば競い合えるような人が同じクラスにいないという学習環境のことも指しているだろう。

「それに瑞希は身体も弱いから……」

「そうだよね。それが一番マズイよね……」

島田さんの言うとおり、この劣悪な教室の環境は姫路さんの健康を害する可能性も十分ある。おそらく冬になっても今の調子で隙間風が入ってきたとしたら、姫路さん以外の生徒でも体調を崩すだろう。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

やはり、Fクラスはバカの集まりだからというのが転校を勧められる一因になっているだろう。

姫路さんの行動も間違っていない。が、それ以上に健康の方が問題になるのは自明だ。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか嫌だよね……？」

島田さんが探るような目で兄さんを見ている。

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉で

あっても！」

「ん？オレは？」

「えーつと……………嫌かも？」

「おい！」

「そつか……………うん、アンタはそうだよね！」

まあ、オレの場合は兄弟というか双子だから認識があれかもしれないけど、雄二やムツツリーニであつても秀吉や島田さんと同じ回答を得られただろう。……………おそらくね。

「さて、この問題を解決するなら、雄二も必要だ。何としても焚きつけるか」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

兄さんは気を取り直し、雄二に電話をかける。呼び出し音が受信器から聞こえる。

「もしもし、あ、雄二。ちよつと話が」

兄さんが雄二に話をしようとする。

「え？雄二。今何をしてるの？」

しかし、どこか様子がおかしい。

「雄二!?もしもし!もしも!」

そして、こつちの話を伝える前に切られたようだ。

「坂本はなんて言ってた？」

「えつと『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……………なにそれ？」

島田さんが使えない奴を見るような目で兄さんを睨む……………が、今は兄さんのせいではないと思う。だって、向こうが用件を伝える前に電話を切ったんだし。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからのう」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。そう言えばあの時も手錠?をさせられていたつけ。

「そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

島田さんが大きく息を吐く。

「いや、これはチャンスだ」

兄さんがいきなり明るい声を出す。

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよつと三人とも聞いてくれるかな？」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかつているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

「じゃあ、任せたよ」

オレたちは兄さんに連れられて教室をあとにした。

雄二の発見と見解

兄さんはオレ、秀吉、島田さんに雄二発見後、企画に引きずり出す作戦を与えた後、そのまま体育館にある女子更衣室へ向かった。

決して覗きではない。雄二発見のために向かったのだ。他意はない……………はず。

オレの役目といえば、簡単に言うなら逃げ道の確保だ。

『見つけたぞ！二人とも逃がすか！』

遠くで聞こえる鉄人の声。窓の外を見ると全力でダッシュする二人の人影と追いかける人影が。

言うまでもなくダッシュしている人影は兄さんと雄二。追いかけているのは鉄人だ。……………というか本当にいたんだな……………

「こつちだ！」

オレは二階の目の前の窓を全開にして、兄さんと雄二に呼びかける。

「はっ！そう言うことかよ……………明久！」

雄二が先行して、手を組んで立ち止まる。

「オーケーー！」

雄二が作ってくれた踏み台に足をかけ、一気に飛びあがる。タイミングと雄二の腕力、兄さんの跳躍力で難なく二階の窓から入れる兄さん。

「くっ！このバカ共！こういう時だけ無駄に運動神経と悪知恵を發揮するとは！」

「雄二！捕まれ！」

兄さんが無事に入れたのを確認し、すかさず手に持っていたロープを垂らす。鉄人が何か言ったって？そんなの無視だ無視。

「あらよっ！」

雄二が壁を蹴って跳び、空中でロープを掴む。

『よいしょおっ！』

その瞬間に一本釣りの要領でオレと兄さんで引き上げる。本当にこういう時の連係プレーだけは凄いんだよなあ……………オレたち。

『吉井兄！坂本！明日は逃がさんぞ！』

どうやら鉄人一人の力では二階の窓へ来ることは出来ないらしい。……いや、出来たら超怖いんですけど。後、オレは逃走を手伝っただけなので無罪のよう——

『後、吉井弟！貴様も逃走を補助したことに罰を受けてもらおう！覚悟しろ！』

——ではなかった。

いやねえ。この二人が何したかは想像がついているよ。うん。そのうえで逃走を手伝ったんだから……って、あれ？もしかしなくともオレって共犯者？

「はあ……またいらぬ悪評が増えていく……」

「全くだ。オレなんて、お前らの逃走を手伝っただけなのに」

「俺の方こそいい迷惑だ。お前が来なければこんなことにはならなかったのに」

雄二が自分に非はないと言っている。

「そもそも雄二が女子更衣室に隠れていたのが悪いんじゃないか」

「そーだそーだ。お前が普通の教室とかに隠れていればこんな逃走劇なかったんだぞ」

「し、仕方ないだろ！相手はあの翔子だぞ！普通の教室なんかで逃げ切れるか！」

何故だろう。彼女なら男子更衣室程度なら簡単に入っていきそうな気がする。

「ところで、どうしてそんなに必死に逃げているの？」

「そういえば。別に逃げる必要なくない？」

「……ちよつと、家に呼ばれてな……」

そののどこが問題だろう？オレはつい先日、紫乃にお呼ばれしたけど問題なかったし。そういえば、紫乃の部屋には結局行ってない……って、何であいつの部屋に興味が出てきたんだらうオレは。

「なんで呼ばれたのさ」

「……家族に紹介したいそうさ」

「……まだ付き合ってるわけじゃないんだよね？」

「……………さすが、霧島財閥の御令嬢は違うね」

何故だろう。これ以上は雄二を見ていられない。

「おい光正。お前現実をしろよ。お前と付き合ってるヤツは天草グループの御令嬢だろうが」

「え？オレと紫乃は付き合ってるじゃないけど？」

「……………そうなのか？」

「当たり前じゃないか。というか、そもそもオレ、紫乃のこと好きじゃないしな。可愛くて、頭もよくて、運動神経もそこそこ。変な気を使わず話せて、怒らせると怖いけど普段は優しく、頼りになる。何だかんだで信頼していて、何より一緒にいると楽しい紫乃のことなんてオレが好きだと思ってるわけ……………あれえ？ど、どうしよう雄二！オレ、実は紫乃のことがかなり好きかもしれない！」

「もう告白しに行けよ！そして付きあえよ！」

「いやいや、告白しても振られるのがオチでしょ」

「……………不憫だなあ……………」

全く……………まあ、オレはこの距離感が今はいいと思ってる。よし。これで解決。(何がだよ！)

「ゴホン。さて雄二。キミに朗報です」

「いきなり何だ？嫌な知らせだったら殺すぞ」

やべえ。こいつ本気だ。

「……………こ、こちらの携帯をどうぞ」

携帯電話を取り出して島田さんの番号を呼びだして電話をかける。

「まったく、何の真似だ？」

雄二は携帯電話を受け取り、耳に当てた。

『もしもし？坂本？』

「島田か。何の真似だ？」

『ちよつと待って。今替わるから』

「替わる？誰と——おい。もしもしっ？」

向こうの携帯電話が誰かに渡された雰囲気伝わってくる。

『……………雄二。今どっ！』

「人違いです」

プツッ

凄い……！咄嗟に『人違いです』なんて言える人間はそうはいないだろう。

「コロス」

そして片言の日本語が怖い。言ってることも怖い。

「とりあえず。落ち着けて」

「そうだよ。お願いを聞いてくれたら悪いようにしないからさ」

「お願い？ふん。学園祭の喫茶店のことか」

こういう時に雄二が実は賢いことを思い知らされる。

「やれやれ、そんな回りくどい事しなくても、明久が『大好きな姫路さんの為に頑張りたいんだ！協力して下さい！』と言えば、面倒だが引き受けてやるというのに」

「な!?べ、別にそんなことは一言も……!」

「あーはいはい。話は分かった。協力してやるよ」

「とりあえず、礼は言っておく。ありがとうな」

「気にするな。そんなことより、島田と翔子は親しかったのか？」

あーそこ気になるよね。あのAクラス戦でしかあまり関わりというかそう言うの無いもんね。

「聞いても怒らない？」

「バーカ。どうせ引き受けたんだ。今更怒ってどうすんだ」

うん。これは兄さんを騙して本当のことを探ろうとしているな。よし、Fクラスに戻ろう！

『それじゃ、教えて上げよう。実は電話の向こうにいたのは、霧島さんの声真似をした秀吉で』

『目をつぶって歯を喰いしばれ』

さらば兄さん。安らかに眠れ。

「そうか。姫路の転校か……」

その後、無事？Fクラスの教室に戻ったオレたち三人と島田さんと秀吉。

「そうなるよ、喫茶店の成功だけでは不十分だ」

雄二は教室内を見渡し、そう告げた。うん。オレもある程度予想は出来ていたよ。

「不十分？どうして？」

「姫路の親が転校を勧めた要因は恐らく三つ」

そういい、雄二は指を二本立てて見せた。

「まず一つ目。ごごとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功した利益でなんとかなるだろう」

そういいながら指を一本引つ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「なるほど。こっちは学園祭の喫茶店とかその程度の利益で何とかなるものでもないし、そもそも学校側の協力が必要不可欠。オレたちだけじゃどうしようもないな」

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない学習環境だ」

確かに雄二の言うとおり、部活動とかでも、能力を伸ばすために実力の近いもの同士を競わせる事はよくやること。しかしこのFクラスではそんな相手は望めないし、一番可能性が高いのはオレだが、一部の教科では大差をつけて負けている。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいの

う」

「というか、問題じゃないものを探す方が難しい」

「確かに、探すのも解決するのも難しいが、少なくとも俺が挙げた三つの問題はまだ何とかなる。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろう?」

そうなの?

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね?」

召喚大会? ああ、あの清涼祭で行われる大会のことか。確かタッグマッチのトーナメント形式だったけ?

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

「まあ、姫路さんはこの学年の二位。島田さんも数学はある程度あるし、優勝も狙えるでしょ」

オレも雄二の意見に賛成する。確かに霧島さんが参加するとなるとパートナーもAクラスの生徒だろう。そうなると教科によつては姫路さんたちでも勝てる見込みはゼロに近くなる。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「さすがに、そんな贅沢は言えないだろ」

「それに姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし一石二鳥じゃな」

確かに、我らがFクラスは古臭くて汚れた旧校舎にあるから、これによる宣伝の効果はある程度は見込めるはずだ。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題は どうするの?」

二つ目の問題の教室の改修。これはオレたちだけでどうにかなる問題じゃない。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ?」

雄二は当然のように言つてのける。ああ、そうすればいいのか。脅す必要はないのね。

「それだけ？僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「確かに。いくらFクラスといえども、この教室は改善する必要はあるだろう」

健康に害をきたすレベルなら尚更だ。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「思い立ったら吉日。さて、学園長室に乗り込みますか」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人が来たら俺達は帰ったと伝えてくれ。」

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子にも見かけたらそう伝えておこう」

と、微笑む秀吉。霧島さんの名前を出されて、雄二は言葉に詰まっていた。

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

島田さんの声援も受け、オレたちは教室をあとにする。

学園長と3人のバカ

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室前に着くと、扉の向こうから言い争っている声が聞こえた。

でも、賞品？如月ハイランド？何の話だ。

「どうした、二人とも」

「いや、中で何か話しているみたいなんだけど」

「取り込み中かな？どうだろう」

「そうか。つまり中には学園長がいると言う訳だな。無駄足にならないくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

確かに本当に取り込み中かはまだ判断できないしね。

「失礼しまーす！」

学園長室のドアをノックし、オレたちはずんずんと中に入っていく。

「本当に失礼なガキ共だねえ。普通は返事を待つもんだよ」

部屋に入ると、目の前に長い白髪が特徴の藤堂カオル学園長が椅子に座っていた。この人は同時に試験召喚システム開発の中心人物。研究者だからか、多少口が悪いみたいだ。第一声でオレ達のことガキ呼ばわりだし。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません。……まさか、貴方の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨み付けるのは教頭の竹原教諭である。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い。オレはどちらかというと苦手なタイプの人だ。性格的な意味で。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

この二人はオレたちのことお構いなしにまた言い争い始めている。……まるで互いに相手の腹を探り合うかのように……

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそう言う事にしておきましょう」

そう告げて、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り……

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

踵を返して学園長室を出て行った。何かを確認していたのか？

「んで、ガキども。アンタ等は何の用だい？」

竹原教諭との会話を中断された事に大して気にしなく、オレたちに話を振ってくる学園長。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

雄二が学園長の前に立って話しを切り出す。え？こいつ敬語を知っていたのか。意外だ。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

学園長はオレたちの願いを即座に却下し、ついでに礼儀を説いてきた。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二」

「同じく二年F組所属、吉井光正」

「それでこっちが————二年生を代表するバカです」

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井兄弟かい」

「ちよつと待って学園長！僕はまだ名前を名乗っていませんよね!？」

どうやら学園長は雄二の紹介で兄さんだと分かったみたいだ。あ、兄さんが涙が出そうな顔をしてる。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

気が変わった……ねえ。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があつたらさつきと話しな、ウスノロ」

「分かりました」

……この人は本当に学園長なのだろうか？よくもまあ、ここまで生徒を口汚く罵倒をするんだ。教育者として大丈夫なのか？というか珍しく雄二も特に言い返さず淡々と言ってるし。

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われまます」

やっぱり、雄二も学園長の罵倒に相当頭に来てたみたいだな。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

うん。これこそいつもの雄二だ。

けど不思議だ。学園長はそんな雄二の慇懃無礼な説明を受けても気にしていないか、思案顔となつて黙り込んでいた。

「あの、学園長……？」

兄さんが黙り込んでる学園長を見て声を掛けるが、当の本人は未だに何も言わない。何だ？何を考えている？

「……ふむ。丁度良いタイミングさね……」

どういうことだ？オレたちに聞こえないように小声で呟いていたようだが少なくともオレには聞きとれたぞ。生憎難聴系主人公じゃないんでね。オレは。

「よしよし、お前たちの言いたい事は良く分かった」

「え？それじゃ、直してもらえますね！」

阿保か。

「却下だね」

今の流れで承諾されるわけねえだろ。

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度に気を遣え」

「そうだよ兄さん。そんな事したらコンクリートが可哀そうだよ」
学園長を詰めるコンクリートの気持ちも考えようよ。

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えてください、ババア」

「大したことない理由だったら怒りますよ、ババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「当たり前じゃないか。何をそんな呆れ顔になっているのだろうか？」

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキ共」

「……ふーん。」

「それは困ります！そうなると、僕らはともかく体の弱い子が倒れて」
僕らはともかくって……おい。

「——と、いつもなら言っているんだけどね」

兄さんの台詞を遮り、学園長が顎に手を当てて続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くな、相談に乗ってやろうじゃないか」

「……交換条件を出してきたか。だがどういふつもりなんだ？このタイミングでの掌返しは裏があるに違いない。」

「……………」

雄二もオレと同じ考えだろう。口元に手を当てて何か考えているみたいだ。

「その条件って何ですか？」

「さすが兄さん。裏があるとは考えてないようだ。」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？ 優勝賞品？」

「優勝賞品？なにそれ？」

「学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副

賞には『如月ハイランド プレオーブンプレミアムチケット』が用意してあるのさ」

ペアチケットという単語に雄二が反応を示した。どうしたのだろう？

「はあ……。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

知らない。

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちよつと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなければ良いじゃないですか」

「そう出来るならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳には行かないんだよ」

そういえば前に『学園長は召喚システムの開発に手一杯で、経営に關しては教頭に一任している』と聞いたことがあったな。どうやら本当のことらしい。

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「五月蠅いガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

つい最近……。ねえ。

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

つまらない内容なんだがね、と前置きを言っただけで学園長は噂の内容を言い始める。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『此処を訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

確かに最悪だろう……で？それがどうした？オレには関係ねえ。

「な、なんだと!？」

まあ、今慌てる雄二には関係あるようだが。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てる」

「もつと落ちつけよ」

「慌てるに決まってるだろう！今ババアが言った事は『プレオープンプレミアムペアチケットでやって来たカップルを如月グループで強引に結婚させる』ってことだぞ!？」

「雄二。同じ事を二度も言う必要は無いぞ」

「うん。言い直さなくても分かってるけど」

こんな風に狼狽えている雄二も新鮮だなあ。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園って訳さ」

「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムと言う話題性もたっぷりだからな。学生から結婚まで行けばジंकスマで申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然って事か」

悔しげに唇を噛む雄二。なるほど、スポンサーに如月グループがいたか。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていたただけはあるさね。頭の回転はまずまずじゃないか」

意外にこの学園長……オレたち生徒の情報を持っているな。それが目立つ一部の人間だけかどうかは知らないけど。

「雄二、取り敢えず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまですぐで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の……。将来は……!」

目が虚ろになって言葉が途切れ途切れになっていた。

「どうせ、チケットを手に入れたら一緒に行ってやるとでも安請け合いましたんだろ」

「だね。雄二も相変わらずバカなことしてるなあ」

「というか、霧島さんって、最悪親の力を使えば手に入れられなくな
いと思うんだけど。」

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来
を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「何が可愛い生徒だ嘘くせえ。さつきまでガキ呼ばわりだったのに。」

「つまり交換条件ってのは——」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来るなら、教室の改
修くらいしてやろうじゃないか」

「ふーん。優勝できたら……ねえ。」

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもら
うのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだ
からね」

「ん？何で強奪してはいけないんだ？事情を説明して協力してもら
えばいいのに。」

「……僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれ
るんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備につい
てはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

「だろうな。こんな取引で設備を導入なんてしたら、他のクラスに示
しがつかない。」

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようって言うなら話は別だ
よ。特別に今回だけは勝手に設備を変更する事に目を瞑ってやって
もいい」

「そりゃありがたいことで。」

「そこを何とかオマケして設備の向上をお願い出来ませんか？僕らに
とっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで？」

「もしも喫茶店が上手く行かずに設備の向上が危うかったら、そっち
が気になって集中出来ずに僕らも学園長も困った事に……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！設備の向上を約束してくれたら大会だけに——」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

いつの間にか正気に戻った雄二が兄さんの肩を叩いている。

「この話引き受けましょう。……ただし、こちらから提案がある」

「なんだい？言ってみな」

「雄二任せた」

「……たく。お前はな……まあいい。召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦は数学だと二回戦は化学、と言った具合に進めて行くと聞いている」

勝ち上がる度に教科が変わるのは、一回戦で消耗した点数でそのままやり合おうと、試合の派手さに欠けるからだろう。一応宣伝も兼ねているみたいだし。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していただ、それくらいなら協力してやろうじゃないか」

「……ありがとうございます」

怪しいな。何か絶対裏がある。

「雄二、ペアの方はどうするつもりだ？召喚大会は二人一組で出る事になっっているんだろ？」

「ああ。それについてはお前ら二人が組んでくれ」

「え？光正と雄二が組んだ方が確実じゃ……」

「さすがに纏められるやつが二人も抜けるのは店の経営に支障をきたす可能性がある。だったら、点数的にもタッグマッチって観点からお前ら双子が適任だ」

なるほどねえ。確かに何だかんだ十数年の付き合いだ。コンビネーションには自信がある。

「さて、ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝出来るんだろうね？」

学園長が念を押してくる。ペアチケットなんてどうでもいい感じもしているが……まあいい。

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

不敵な笑みを浮かべて言う雄二。あれは試召戦争の時に見た、やる気全開の表情だ。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

兄さんの方もやる気全開で、絶対に優勝しようと思気込んでいる。

「任せろ。オレたち三人は負けねえよ」

表には出さないがオレももちろんやる気全開だ。目にももの見せてやるよ。

「それじゃ、ボウズ共。任せたよ」

「「おうよっ！」」

こうして、文月学園最低コンビ+αが誕生したのだった。

清涼祭スタート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

吉井光正の答え

『興味ない』

教師のコメント

質問に答える努力をしましょう。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のもを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

昨日までいろんなことがあった。Fクラスの方の準備をしたり、Aクラスの方の料理を仕上げたり、三途の河へ行ったり本当にいろいろとあった。

そして清涼祭初日の朝。

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

オレたちの教室はいつもの小汚い感じから、中華風の喫茶店に姿を変えていた。ただし、店名が『ヨーロッパピアン』ということにはあまり触れてほしくない。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内に到る所に設置されている綺麗そうなテーブル。実はこのテーブル、オレたちの教室にあったみかん箱だったりする。巧く積み重ねて綺麗なクロスをかけることによって、汚い箱から立派なテーブルに変身したと言う訳である。

「あ、それは木下君と光正君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持って来て、こう手際よくテキパキと」

尊敬の眼差しで秀吉とオレを見てくる姫路さん。でも姫路さんも裁縫は普通にできていたと思うけど。

「でも、秀吉が演劇部で使ってる小道具を用意してくれたから出来たんだよ。オレがやったのは修繕だけだよ」

「謙遜するでない。お主のおかげで、見かけはそれなりの物になったがの。じゃが、その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、その先には積み重ねたみかん箱が見えた。わーお。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

確かにそうだ。こんなみすぼらしいみか箱が机に使っているのを見られてしまったら、この店のイメージダウンは確実だ。

「きつと大丈夫だよ。こんな所まで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にはまっておいて貰えるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人はいませんよ、きつと」

「まあ、もしそんな事をする奴がいたら、営業妨害が目的でやってるとしか思えないからな」

「いたらつまみですか……でも、それだけじゃ足りないしなあ……どうしようか。」

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

「多分、上手く行くはず……後は料理と接待か。」

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

突然、後ろからムツツリーニの声が聞こえると明久が驚いた。相変わらず存在感を消すのが巧い。オレも見習いたいよ。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

ムツツリーニはそう答えながら、木のお盆を差し出す。その上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わあ…………。美味しそう…………」

「土屋、これウチ等が食べちゃって良いの？」

「……………(コクリ)」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、島田さん、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたての温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎない所も良いのう」

「どうやら、大絶賛のようだ。よかったよかった。」

「お茶も美味しいです。幸せ…………」

「本当ね〜……」

すると、姫路さんと島田さんの目がトロンと垂れていた。トリップ状態って奴かな？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「んじゃ、ついでにオレも」

「……………（コクコク）」

オレと兄さんが胡麻団子を味見しようとする、ムツツリーニが残った一つずつを差し出す。

楊枝がなかったので手でつまんで軽く一口を頬張った。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。辛すぎる味わいがとつても——んゴバっ」

この時、オレはまた意識が飛んでいった。

『あ、それは姫路が作った物じゃな』

『……………！（グイグイ！）』

『む、ムツツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの!?無理だよ！食べられないよ！』

ムツツリーニが怯えた様子で兄さんの口に胡麻団子（兄さんの食べかけ）を押し込もうとしているのをオレは教室の天井から見ている。

あれー不思議だな。いつもなら三途の河が見えるのに今日は意識だけが空に飛んでいる見たいだ。幽体離脱って奴かな？あれ？向こうの方に河が見える。なるほど。この教室から外へ出ると河へ行けるのか。あれ？じゃあ、自分の体のところに行けば復活できるんじゃない？なんて器用なのだろうか。

『うーっす。戻って来たぞー』

そんな時に雄二が戻って来たのが見えた。

『あ、雄二。おかえり』

『ん？何だ、美味そうじゃないか。どれどれ』

雄二は躊躇い無く兄さんの食べかけの胡麻^{殺戮兵器}団子を口に運んだ。あれ？これって、もしかしなくても雄二と兄さん、間接キスしてね？まあ、どうでもいいけど。

『……………たいした男じゃ』

『雄二。キミは今、最高に輝いているよ』

『?お前等が何を言っているのかは分からんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても……。んゴバっ』

兄さんやオレと同じ感想を言いながら倒れる雄二であった。

『あー、雄二。とつても美味しかったよね?』

床に倒れ伏した雄二に兄さんが何か目で訴えていた……。が、目が合っていないから伝わったか怪しい。

『ふっ。何の問題も無い』

え? 伝わったの?

『あの川を渡れば良いんだろう?』

問題しかねえよバカ野郎!

そう言つて窓の外の河を見ると川岸にはいつものおつちゃんとお赤髪の子ゴリラ……。雄二がいた。

『ゆ、雄二! その川はダメだ! 渡ったら戻れなくなっちゃう!』

ツチ、行くしかねえのかよ! ダツシユ(空に浮いているのでダツシユのつもり)で雄二のもとに向かう。窓の外に出たらいつも通り足が地面に着いたが関係ねえ。

「六万だど? バカを言え。普通渡し賃は六文と相場は決まって……」

「ドロップキック!」

「光正? 急にどうし……。ゴフツ」

雄二を蹴り飛ばし現世に送り返す。今頃向こうで雄二の意識は戻っただろう。

「やれやれお主も無茶苦茶じゃな。蹴り飛ばして現世に送り返すとか今まで聞いたこともない」

「悪いな。あいつはここを通るにはまだ早いんだよ」

「お主もじゃがな。いつも通りの道を辿れば帰れるぞ」

「そうか。ありがとうな。雄二を引き留めてくれて。感謝するよおつちゃん」

「礼には及ばん。さっさと帰るがよい」

「へいへい」

こうしてオレはいつもの道を歩き始めた。

「はっ！」

「ほら、雄二って余計な脂肪が付いていないでしょう？そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波もよく攣るから分かるどぐべあっ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

オレが復活してそうそうに兄さんが島田さんの拳を受けていた。うん。これぞいつも通りの光景だ。

「あ、光正おかえり」

「おう。ただいま兄さん」

「こいつから死の淵から帰ってきた感じがしねえんだが……」
「……………家に帰ってきたみたい」

「慣れって怖いんだなあ」

失敬な。オレはただ一週間に八回ぐらい臨死体験しているせいで復活しても驚かないだけだ。

「ところで、雄二は何処に行っておったのじゃ？」

「三途の河」

「そうじゃなくて、ここに来る前じゃ」

ああ、てつきりあの団子食って何処に行ったかを聞いているかと勘違いしてしまったよ。

「ああ、ちよっと話し合いにな」

雄二にしては珍しく歯切れの悪い返事。

恐らく学園長室に行つて、例の試験科目の指定をしてきたのだらう。まあ、フエアな事じゃないから正直には話せず、適当に誤魔化し

たに違いない。

「そうですね。それはお疲れ様でした」

人を全然疑わない姫路さんが雄二の言葉を信じて笑みを贈る。まあ、今やっつてゐることは最終的に姫路さんの為になることだと思っただけだな。

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでも行けるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶は完璧」

「よし。とりあえず、喫茶店は俺と秀吉、ムッツリーニに任せろ。光正と明久は召喚大会の一回戦を済ませてきてくれ」

そう言つて秀吉とムッツリーニの肩を叩く。

「オッケー。なるべくさっさと片付けてきてクラスの方を手伝うよ」

「サクッと片付けられるなよ」

「まあ、何とかなるでしょ」

これでサクッと片付けられた日には目も当てられないだろう。

（ムッツリーニ。ちよつといい？頼みがある）

（……………なんだ？光正）

（昼頃までに用意してほしいものがある報酬は兄さんの所有する成人向けの本）

（……………引き受けよう）

（ありがとう。昼頃までに——を用意してほしいんだ）

（……………分かった。やってみる）

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

確認するように兄さんを見る島田さん。

「え？あ、うん。色々あつてね」

兄さんは適当に言葉を濁している。学園長が『チケットの裏事情については誰にも話すな』と口止めされているので言えないのだ。さすがに約束は守るらしい。だがオレと雄二にしてみれば別の事情があるだろうと考えている。

「もしかして、賞品が目的とか…………？」

島田さんが探るような視線を兄さんに刺している。

確かに賞品が目的だ。そういえばチケットじゃない方の白金の腕輪。あれって、優勝者が表彰式の時にデモンストレーションするんだっけ？確か、召喚獣を二体同時に出せるタイプと先生の代わりに立会人になれるタイプ。

ん？確か学園長は、優勝者からの譲渡は禁止だっけ？でも、チケットを最終的に学園長の手に移るようになるには、別にそれでも問題はないはず。

……認めた科目変更……優勝者……腕輪……デモンストレーション……まさか……学園長の狙いって……

「うくん、一応そう言う事になるかな」

簡単にそう答えてまたはぐらかしている。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

「だ、誰と行くって言われても……」

……オレが思考に耽っていた最中に島田さんと姫路さんが目を細めて戦闘モードに突入していた。

いや、何となく分かるよ。うん。ペアチケットで誰と行くつもりかを聞いていたんだよね？

「明久は俺と行くつもりなんだ」

いきなり雄二が変な事を言った。え？コイツは一体何を言ってるの？雄二の言葉に三人が目を丸くしているし。いや、オレもだけだよ。

「え？坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……？」

え？マジで？

「俺は何度も断っているんだがな」

雄二の方はまた可笑しな事を言っていた。あーそういうことかなるほどね。理解したよ。

「そうそう。雄二は何度も断っているのに兄さんが強引に……」

「誤解を深めないで！」

「さつきも（間接）キスしているのを目撃してしまったし……」

「ええ!？」

「こ、光正!何を言い出すんさ急に!」

事実。嘘はついていない。

「アキ、アンタやっぱり、木下より坂本の方が……」

「ちよつと待って! その『やっぱり』つて言葉は凄く引つ掛かる!」

「吉井君。男の子なんですから、出来れば女の子に興味を持った方が……」

「それが出来れば明久だって苦勞はしてないさ」

「弟としても本当にそう思うよ。兄さんはもつと、女子に興味を持つべきだと思う!」

「雄二に光正!もつともらしくそんな事を言わないで!全然フオローになつていないから!」

だって、フオローしているつもりないもん。

「つと、そろそろ時間だよ。行くよ兄さん」

「……くつ!と、とにかく、誤解だからね!雄二も余計な誤解を広めないように」

「善処する」

「そこは約束しろよ!」

オレは雄二につつかかりそうになつてゐる兄さんを引きずつて教室を後にする。

銘刀誕生……？

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

今回の立会人は数学の木内先生。よって、勝負科目は数学となる。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出して下さい」

全力ねえ……。

「頑張ろうね、律子」

「うん」

対戦相手の二人の女子が頷きあうが……どっかで見ることがある気がし無いでもない。それもつい最近だが……まあいいか。

「では、召喚して下さい」

「試験召喚」

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 179点&163点』

うーん。Bクラスだったか。試験戦争で見たことがあるような……ないような……まあ、いいか。それにしても装備は西洋風の鎧に剣って、二人ともよく似ているな。点数が近いと装備も近いのか？

「さて、僕らも召喚しようか」

「そうだね」

「試験召喚」

『Fクラス 吉井明久&吉井光正

数学 63点&506点』

「……………え？」

対戦相手の二人が素つ頓狂な声を上げる。……ああ、なるほど。

「ほら兄さん。兄さんの点数が低すぎて相手の二人も困ってるじゃな

いか」

「いやいや、Fクラスでは平均的なはずだから！おかしいのは光正の点数だから！」

「そうか？」

「「そうだよ！」」

おっと、今三人から言われたな。え？そんなにおかしいか？

「やれやれ。こんなので驚くとは君たちもまだまだだね」

「何故かわからないけどムカつく……」

「では、一回戦を始めて下さい」

木内先生はそう告げるとオレたちから距離を取った。

そして、対戦相手と正面から向き合う。

「律子！」

「真由美！」

「行くわよ！」

向こうの二人は名前を呼びあつて頷き、オレたちを挟み込むように動く。

「へえ。結構息が合っているね」

「まあ、仲良しごっこにしてはいい感じだね」

「こちらにも兄さんと頷きあう。」

「し、失礼ね！」

「私たちのチームワークは最強よ！」

私たちのチームワークが最強？ププツ。笑わせてくれる。真の最強がどういうのかを教えてやろうか。

「兄さんっ！」

血の繋がった兄弟だ。伝えたいことなんて言葉を交わさなくとも伝わる。

「光正っ！」

向こうも同じようだ。そして大きく息を吸ってそれぞれ意見を口に出す。

「「ここは任せたっ！」」

意見の一致。オレたちの召喚獣は二体揃って大きく跳び退く。

「つて光正！何で僕に任せようとするのさ！明らかに光正一人で充分だよね！」

「いやいや、何を言うんだ兄さん！オレは兄さんに華を持たせようと任せたのに……」

「本音は？」

「いや、倒すの面倒くね？」

「おい！負けたら本も子もないんだよ！」

「それが分かっているのならもつと点数取れよ」

「なんだと！いい度胸だ。兄の凄さと威厳を見せてやる！」

「ハンツ！舐めんじゃねえよ。弟の力を見せてやる！」

お互いに胸倉を掴みあう。この兄貴がここまで愚かな奴だとは思わなかった。

「男の子の兄弟って変わってるのね」

「さすが、この学園随一の変わり者ツインズ」

変わり者ツインズ!? 誰だ！そうやって呼び始めたのは！オレが兄さんと同等の変わり者だと!? ふざけんじゃねえ！

「……………あー、コホン」

……………ここで、兄さんが一つ咳払いをする。え？何を言うつもりだ？

「コンビネーションは五分五分というところか」

「「ええっ!?!」」

「何で光正も驚いたし!?!」

思わず驚いてしまった。確実にコンビネーションなら向こうの方が上だろう。今を見る限りは。

「でも、僕らには学力とは別に知恵がある！」

「ええ!? それこそ兄さんゼロじゃないか！」

「よし光正表に出ろ。兄貴がどれだけ偉いか叩き込んでやる」

「わー偉い偉いーついでに言うところ表だよー」

「……コホン。光正例の作戦を発表してくれ！」

……………え？例の作戦？そんなのあるわけないんだけど……………あ、今思いついた。

「兄さん。武器チェンジ。大剣を持って真っ直ぐに立ってくれ」

「えっ?こっ?」

「そう。そして『影操り』」

腕輪の能力で影を操り、大きな手を形成する。その手で兄さんの召喚獣の足を持って……

「完成した。これこそ、最強の武器『迷刀 明久』だ」

「銘刀の漢字違うよね!?後、今明久と書いてバカと読まなかった!」

「この武器は刀のキレ味を残しつつ打撃ができるという最強の武器だ」

「待って!打撃って僕の召喚獣の体当たりだよね!?しかも背中とか後頭部に当たるんだけど!」

「代償としてこの武器で攻撃すると兄さんがフィードバックで苦しむ可能性があるが……」

「そうだよ。とてつもなく大きな代償だよね?」

「そんなのオレには関係ない!」

「少しは考えろよ!」

え?オレは痛くも痒くもないんだから別によくない?

「全く……こんなの僕が大剣を放せば……え?動かないんですけど。後、姿勢も変わらないどころかちよつと綺麗な感じに直されているんですけど!」

「よく兄さんの召喚獣の手の部分とかをみてくださいよ」

「あれ?ちよつと黒くなっているような……つてまさか!」

『影縛り』縛るといってもそこまで強い力じゃないし、縛られている召喚獣も点数が減らないほどで高得点者ともなれば簡単に抜け出せるぐらいの縛りだが……兄さんを縛るには充分だ!」

なんせ点数が最初の段階で六倍ぐらい違うのだ。縛るのも容易いことだ。

「じゃあ、それでBクラスの二人の召喚獣を縛って攻撃すればいいじゃん」

「……………」

あ、その手があったか。

「さあ、来いBクラスの二人よ!オレが相手してやる!」

「絶対思いついてなかったでしょ！だったら今からそのプランに変更して……」

「こんな漫才コンビに負けてられない！」

「私たちを舐めていること後悔させてやる！」

「ハハハ！倒せるものなら倒してみよ！」

「聞けよ！後、言ってることが中ボスみたいだ！これ絶対負けるヤツだ！」

一閃。オレは迷刀を振り、的確に二体の急所に当てた。

手が影できているおかげで微妙な位置調整や長さも調節できて当てることが出来た。ふむ。意外に使えるかもしれないこの迷刀。

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 Dead&Dead』

「……勝者吉井兄・弟ペア」

何故か不服そうにオレたちの勝利宣言をする木内先生。一撃で決めたのがまずかったかな？

「あああああつ！風圧が顔に！というか全身があああ」

「……嘘でしょ？」

「こんなふざけたやつらに負けたと言うの？」

「アイ アム ウィナー」

そしてオレは痛みでのたうち回る兄さんと落ち込むBクラスを尻目にステージを去ったのだった。

営業妨害

「明久に光正よ。教室に早く戻ってきてくれんかの？」

一回戦が終わった後、校庭の特設ステージに秀吉が走ってきた。ん？何かあったのか？

「あれ？喫茶店で何かあったの？」

「うむ。少々面倒な客がおつての。すまぬが話は歩きながらで頼む」

ん？面倒な客だと？

「雄二は？こういう面倒な客には雄二が対応するのが一番だろ」

「確かにそうなんじゃが、先ほどから姿が見えなくてのう……」

まさか、こんな時に鬼ごっこをしているんじゃ……

「……つてあれ雄二じゃない？おーい！」

「ん？明久に光正、秀吉か。どうした？」

「どうしたもこうしたも。今、面倒な客が来ているらしいんだよ」

「面倒な客だと？営業妨害か？」

「あはは。まさかそんな……」

「雄二の言ったとおりじゃ」

営業妨害か……仕掛けるのが早いな。

「相手は？どこのどいつか分かるか？」

「うちの学校の三年じゃな」

まさか、三年生とは……

「まあ、雄二が始末して来てくれ。オレは暴力で解決するのは苦手なんだ」

「はあ。明久はともかく光正は腕っ節は強そうに見えるんだがな……まあいい」

Fクラス教室前。ここまで声が響いている。どうやら、本当に妨害をしているらしいな。それも相当鬱陶しいぐらいにだ。

「ちよつくら始末してくるか」

首をコキコキと鳴らしながら教室の扉に手をかける雄二。

「マジでできたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかわよ！」

雄二が扉を開けるなり例の先輩の罵声が聞こえてくる。

どうやら、クロスを剥がし文句を言っているようだ。

そして、周りのお客さんもそれにつられ、食べる手が止まり、全体的に空気が重い。

「こりや、ちよつと面倒なことになってるな……」

「雄二、早くなんとかしないと経営に響くよ」

「そうだな……。秀吉、ちよつと来てくれ」

「?なんじゃ?」

雄二が秀吉に耳打ちをする。秀吉に頼むという事は演劇用の小道具関係なのだろうか?

「了解じゃ。すぐに戻る」

そう言い残して、教室内のクラスメイト数名に声をかけて秀吉は去っていった。

「明久。お前はあの小悪党どもの特徴をよく覚えとけ」

雄二は兄さんに指示を出し、クレーマーに近付いていく。

「?よくわかんないけど、了解」

この二人、特徴は坊主とモヒカンか……。兄さんでも覚えやすい特徴だ。

さて、この妨害をどう見るべきか。こいつらのただのやんちゃな悪戯か。それとも……

「まったく、責任者はいないのか!このクラスの代表ゴベツ!」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか?」

模範的な責任者を思わせるような物腰の雄二。ただ残念な点を挙げるとするなら、話かける前に客を殴り飛ばしたことぐらいだ。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

殴られていない方のソフトモヒカンが驚いている。無理もないだろう。いきなり連れが殴られたら驚くのは普通の反応だ。

「これは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀆ですか?」

それは交渉術じゃない。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……。なにが交渉術ふぎやあつ!」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締め

る交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちよ、ちよつと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか!？」

なんだろう。仲間に売られそうになって慌てる夏川と呼ばれた坊主と仲間を売る常村と呼ばれたモヒカン。この二人の友情は兄さんと雄二を思わせるよ。

「それで常夏コンビとらや。まだ交渉を続けるのか？」

あ、雄二の仮面が外れた。やっぱり慇懃な態度はあんまり継続しないみたいだ。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

常村（モヒカン）先輩が雄二から剣呑な雰囲気を感じ取って撤退を選ぶ。賢明な判断だ。

「そうか。それなら——」

大きく頷いた後、夏川（ボウズ）先輩の腰を抱え込む雄二。

「おいつ！俺はもう何にもしてないよな!?!どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「——これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる。うん、交渉の余地なし……と。

「お、覚えてほべがあつ！」

「おつと、先輩。まさか、大々的な営業妨害をし、加えて無銭飲食で逃げるおつもりですか？」

廊下に飛び出たタイミングでモヒカンを蹴り飛ばす。

「無銭飲食だ?!俺たちは何も頼んでないぞ！」

マジかこいつら。本当に妨害じゃねえか。

「それにこんな店で食う気は起きねえだろ！」

あ、言っちゃいけないこと言った。

『確かに。これじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

クロスの中を目の当たりにし、音を立てて一人目が立つ。あれは……竹原教頭？

一人目が立つと、次々と客が席を立ってしまふ。集団心理だ。このままでは悪評は間違いなく学校中に広まるだろう。

「ほらー！周りのお客さんも同じことを思っているようだぜ！」

勝ち誇ったような顔をする常夏コンビの常のほう。あー面倒だなこいつら。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れたので、暫定的にこのような物を使つてしまいました。ですが、たった今本物のテーブルが到着しましたのでご安心下さい」

お、ナイスタイミング。雄二が頭を下げ、その後ろには秀吉や男子数名がまともなテーブルを運んでいる。

なるほど。あれは演劇部で使つてる大道具のテーブルだな、こうすれば客の前で衛生面を改善した姿を見せられるってことか。

「だそうだが？これでいいだろ？さあ、金を払って貰おうか」

「だから！俺たちは何も頼んでないって！」

「この注文書を見る」

パンチ	1回	500
キック	1回	500
バックドロップ	1回	1000
交渉セット割引		—500

合計 1500円

「——つておいこらー！これは料理じゃねえだろ！」

「おいオレは金を払えつて言ったんだ。さっさと払えよ。まさかあの一連の交渉がタダだと思つてるのか？もう一回やるぞ」

ただし、次は雄二でなくオレがやるが。

「不当だ！弁護士を呼べ！」

「お前ら雄二のフルコースを喰らつただろ？ほらほら、代金を払つて

「くださいよ〜」

「食うと喰うは漢字がちげえよ!」

「知るか。早くしないと鉄人を呼ぶぞ」

「ググツ……これでいいか?」

お、きつかりお金を出してくれる。お釣りのやり取りがなくてよかった。というか鉄人の名前つて脅しに使えるんだなあ……。

「お会計ありがとうございます。またのご来店を心からお待ちしております」

「もう来るかよ!こんな店!」

さて、教室に入るか。

「姫路に島田か。その様子だと勝ったみたいだな」

あれ?いつの間にか島田さんと姫路さんのペアが戻ってきている。

「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの?」

あつ……:そういうえばさっきの騒動で客は減ったな。ついでに悪評も流れるだろうし。

「このまま何も妨害がなければ問題ないな」

どうやら、雄二はこの先の妨害を危篤しているようだな。

「あの、持ってくるテーブルは足りるんですか?」

どうやら、テーブルを入れ替える方針にしたらしいな。まあ、妥当なところだろう。

「ああ、それか。そうだな……:明久、光正。二回戦まであとのくらい時間がある?」

オレと兄さんは時計を見て確認する。

「僕は小一時間つてとこかな」

「そうだな」

「そうか、あまり時間ないし……:ちやつちやと行くか。二人共、ついて来い」

うーん。どこに行くつもりだろうか?

「ウチらは手伝わなくていいの?」

指名を受けなかった島田さんが雄二に尋ねる。

「島田と姫路は喫茶店でウェイトレスをやってくれ。落ちた評判を取

り戻す為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！頑張ります」

どうやら姫路さんはやる気充分のようだった。

「それよりも雄二。どこに行くんだよ」

呼び止めると、雄二は口の端を吊り上げて、

「テーブルの調達だ」

悪そうな笑みで答えた。うわー嫌な予感がするなあ。

机調達

どうも明久です。

突然だけど僕から皆に考えてほしいことがあるんだ。

このことは自分の近しい人。なるべく兄弟や姉妹がいいと思うんだけど、幼馴染や親友、クラスの友人に同級生。後は妬ましいけど恋人で置き変えてくれればいいかな？まあ、やっぱり一番共感してくれやすいのは兄弟や姉妹（特に双子だとなおよし）で考えてくれた時なんだけど……まあ、そこは個人の自由で。

さて、本題の考えてほしいことなんだけど……

「こーおーせーい？何か言うことはあるかなあ？」

「この床が冷たくて気持ちいいです」

クエツション

あなたの近しい人が目の前で異性に土下寝をさせられて頭を踏み抜かれています。

あなたはどうか行動しますか？

ん？僕の解答はつて？そんなの決まってるじゃないか。

「……………どうしようこの状況」

……………というか、どうしてこうなったんだっけ……

時は遡ること数十分前。僕らが意気揚々とFクラスの教室を出たところの辺りまで遡る。

「そういや雄二。どこから机を調達するんだ？」

光正が至極真つ当な質問を雄二にぶつける。確かにそうだ。こいつはどこから机を拝借するつもりなのだろうか？

「そんなの応接室でいいだろ？後は職員室そばの休憩室とかな。まあ、いろいろだ」

対する雄二は平然と言つてのけた。なるほど。応接室とかから……

「いやいや。え？先生に許可とか取つてあるの？」

「は？取つてあるわけねえだろ」

「おいこら。そんなことしてバレようものならオレたち問題児扱いだぞ」

確かにそうだ。光正と雄二は既に教師陣（光正は主に鉄人）からマークされるほどの問題児だが、僕は違う。僕は優等生でほんの少し巻き込まれているだけなのだ。

「別に清涼祭終わつたら綺麗にして返すし、よくねえか？」

「よくねえよバカ。オレは机が綺麗に返されるかを焦点に話してるんじゃない。盗むことが問題だと言つてるんだ」

「盗むんじゃない。無断で借りるだけだ」

「どっちも変わんねえだろ！」

いや、盗むはその後返さないけど、借りるは返す見込みがある……つて言えばいいのかな？

「それに、一度喫茶店で使つてしまえば、教師陣は手を出せねえ。一般人が使用中のテーブルを回収するなんて真似。教師陣にはできねえ」「没収されることも心配してねえからな!？」

「一体お前は何が問題だと言つてるんだ？俺には分かんないな」

「前提として、よそのところから盗むのが問題なんだよ！」

「あーなんだそんなことか。別によくねえか？何かが減るわけでもあるまいし」

「……少なくとも教師陣からのオレたちに対する評価は減るな」

「元から底辺じゃねえか……俺と明久は」

「ええ!? 僕も!?」

「ああ、兄さんと雄二はいいかもしれない」

「良くないよ!? 何で気付いたら僕の評価まで底辺になってるのさ!

「だが、オレはまだ評価が地に堕ちたくない!」

「はあ……光正。どっちが大切だ? お前の評価か? それとも喫茶店の成功か?」

「普通の人間ならこの雄二の優しい言い方や甘い言動につられ、折れるかもしれない。でもまあ……」

「え? オレの評価に決まってんじゃない。何言ってるの?」

「この男はそんな男じゃない。それは身内だから分かるわけでなく、ただ、こいつを理解している人間なら分かっていただろう。故に雄二もこの返事は予測できていたわけで、表情に一切の動揺も見られない。」

「じゃあ、代案だ。代案を出してくれ」

そして雄二はさりげなく、しかし堂々と光正に代わりの案を出させることによつて、光正を何か問題が起きた時のスケープゴートにするつもりだ。確かに今のFクラスの現状から解決しないや代案がないという答えは、存在してはいけない。え? 雄二は僕に聞かないのか? て? 僕が代案をすぐに思いつくわけじゃないか。

「簡単だ。余りの机を貸してもらえばいい」

「どこからだ?」

「ここだよ」

光正が指ですぐ隣の教室を指す。ここはつい最近来たばかりで少なくとも僕ら三人にとつて、敗北した記憶のある苦々しい場所で、勉強を始めようとしたきつかけになった場所で、そして……

「俺は教室に戻っている。無事机を調達して来てくれ」

……雄二を心の底から愛している人。霧島さんがいる教室だ。畜生憎たらしいやつめ!

あーというか、雄二が逃げていったなあ。さすがと言うべきか何と
言うべきか。

「というか、最初から僕らをAクラスまで誘導していたんだね」

「まあな。さてと……お邪魔しまーす」

そう言っただけの中に入るとそこには……

「おかえりなさいませ、ご主人様」

メイド服を着た天草さんが立っていた。………憎い。こんな綺麗な人に愛されている光正が心の底から憎い。本人は気付いてないようだけど心の底から憎い。

「紫乃。一つ頼みがある。余ってる机があったら貸して欲しい」

「分かった。奥の倉庫にあるから、今、案内するね」

……話がスムーズに進み過ぎて逆に怖い。え？何でこんなにスムーズに話が進んでいるの？

「というか、奥の倉庫って？」

「ああ、Aクラスにあるものでこの店で使わないものは一角に纏めてあるんだ。そのスペースを倉庫って言ってるだけだ」

「へえ〜詳しいね」

「まあな。Aクラスに料理仕込むときについてに教えてもらった」

まあ、光正も料理上手いなあ。納得かな。

「ここね。いくつぐらい必要？」

「このサイズだと……うん。ここにあるやつ全部貸して欲しいかな」

「分かったわ」

「……あれ？代表の霧島さんは？彼女の同意がなくていいのかな？」

「翔子なら優子と召喚大会に出場中で今は私が実質的な最高責任者。それにFクラスに対してだから同意してくれるわ」

「た、確かに……」

あの雄二がいるもんな………というか、雄二が逃げた意味って？ああ………哀れなり。

「ありがとね。紫乃」

「お礼はいいよ。困った時はお互い様でしょ？」

「さて、これ運ぶか……」

光正が机を持つとうとするがよろけてしまった。

「おっと……大丈夫？光正」

その光正の背中を支える天草さん。おおー何だろう。天草さんがカッコよく見えたよ。

「悪いな。ここ最近睡眠時間が短くて……」

「……全く、無理しないでよね」

「ああ、分かっている。それにしてもメイド服が凄いい似合っているぞ。とても綺麗だ」

「あ、ありがと……」

顔を紅くし、うつむいている天草さん。……というか何で光正は気付かないのだろうか？やれやれ、我が弟ながらこの鈍感には困ったものだよ。

「胸がないのが残念だけだな」

光正の一言で空気は一変した。先ほどまでのぬくもりは感じられず、極寒で空気が張り詰めている。

まあ、光正もあれなんだよな。素直に人を褒められないからって余分なこと言っちゃうんだよな……本当はそんなこと微塵も思っていないはずなのに。

それを天草さんも分かっただけか知らないが……

サツ（脚払いを掛ける音）

ドサツ（光正が床に倒れ込む音）

ガンツ（光正の頭が踏み抜かれる音）

……一瞬だった。一瞬で光正は地に伏し踏みつけられた。

「光正？ 弁解のチャンスをあげる」

チャンスも何もないだろう。

「弁解？ するわけないガハッ」

さらにこのバカは弁解しない。ねえ、こんな状況だしせめて弁解ぐらいしよう？

「明久さんですよね？ どうぞ。机を運んでください」

ニッコリ微笑む天草さん。うん。超怖い。

「イエスマム」

そして僕は机を運ぶという名目でその場を逃げるのだった。

そして時は戻り、冒頭の状況になった。

なお、机は既に全て運び終え、試験召喚大会の二回戦。僕らの出番まで後数分になっていた。

「あ、あのく天草さん。そろそろ大会の時間だから光正を解放してやってくれませんか？」

「……はあ。分かったわ。光正。二回戦が終わったらAクラス店に客としていらっしやい。そうすれば、許すわ」

「来なかったら？」

「地獄の果てまで追いかけて殺すわ」

ん？生きているうちに地獄に行けるのか？

「必ず訪れると誓おう」

「そう。絶対勝つてよ………頑張つて」

この一連の会話。普通に聞けば、光正に嫉妬していたかもしれない。本当に……光正が頭を踏み抜かれていなければよかったのに……。

試験召喚大会二回戦まで後数分。

V S 代表コンビ？

「そういえば、光正。二回戦の相手は？」

現在オレたちはダッシュでステージまで向かっている。時間まで後少しあるが遅れて棄権扱いにでもなったら洒落にならない。なので急いでいる。

「対戦表を見る限りは多分あいつらだろうな」

「あいつら？ 僕たちの知り合い？」

「まあ、知り合いと言われれば知り合いだし、違うといえば違う」

何とも複雑な関係である。

……と、そんなこと言っていたらどうやらステージに到着したようだ。時間ギリギリだけど滑り込みセーフということだ。

「ほら、目の前で立っているのが今回の対戦相手だよ」

「あれって……BクラスとCクラスの代表カップルじゃないか」

「よ、吉井双子だど!?!お前らが相手か！」

オレたちを見て顔が引きつっているのは、前回の試召戦争でお世話になり、オレがトドメを刺してあげた根本君と、

「吉井光正。あなたが相手だと厄介ね……」

同様に前回の試召戦争でお世話になり、見事オレの脚本通りに踊ってくれた小山さん。この二人が今回の対戦相手だ。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

今回の立会人は、些細なことであれば目を瞑ってくれる英語科の遠藤教諭である。

「二「試験召喚」」

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香

英語W 199点 & 165点

V S

Fクラス 吉井明久&吉井光正

英語W 59点&118点

』

生憎と言うべきかオレは英語がそこまでよろしくない。いや、正確に言えば英語は単語も文法も分かるが、文章から読み取るのが苦手なのだ。いわゆる長文読解と呼ばれる問題で点数をとりそこなっている。

兄さんも英語の点数はあいも変わらずFクラスレベル。

しかし、雄二はそんなことを知ったうえでなお、この二回戦に英語を持って来た。この二人と当たるといふ推測のもとでだ。つまり、この二回戦。オレたちは正面から戦わずに勝つ。それだけだ。

「じゃあ、光正。そろそろ雄二から預かっている例のモノを」

兄さんに言われ雄二から預かったものを取りだす。

「そ、それは……！」

根本君の表情が凍る。

それもそうだ。今オレが取り出したのは、門外不出の根本恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て！』だ。はつきり言おう。見てと言われても見たくない！

まあ、何故こんなのが作られたかと言われると前回の試召戦争で根本君がいろいろとやったからであって、自業自得だ。

「さて根本君。この写真集をばら撒かれなくなかったら——」

兄さんが言いかけていたところで肩を叩く。全く……分かってないなあ。

「兄さん。交渉相手が違う」

「え？ そうなの？」

「ねえ、Cクラス代表の人」

「なにかしら？」

小山さんだっけ？ さつきから俺が手に持つ写真集を訝しげに見ているんだよなあ。まあ、中身を知らないようだから……

「これを見てみるんだ！」

そう言つて一ページ目をめくる。すると、そこには恥ずかしげにポーズを取っているスカート姿の根本君が、遠目のアングルで写っていた。

うん。気色悪い。

「よ、吉井弟！分かった！降参する！だからその写真集だけは……！」
「兄さん、根本君を押さえて」

「ん、了解」

兄さんに羽交い絞めにされ、動けなくなる根本君。

「さてと、Cクラス代表さん。この写真集が見たければ降伏して、オレたちに負けていただけますか？」

「吉井弟っ！お前は鬼か!？」

鬼だと？そんなのどうでもいい。鬼だろうが悪魔だろうが関係ねえ。オレたちの勝利のためだ。慈悲はない。

「……いいわ。私たちの負けよ」

「交渉成立だね。はいこれ例の物です。お納めください」

そういつて、根本君の写真集は小山さんの手に渡る。

根本君が何か言っているがそんなのお構いなしに小山さんは写真集を開いて見ている。

「兄さん。勝負は付いたし、さっさと戻ろうか」

「そうだね。それじゃ遠藤先生。僕たちの勝ちということだ」

何故か脇から写真集を覗き込んでいる遠藤先生に声をかけておく。

「あ、はい！吉井君双子ペアの勝利です！」

よし、次は三回戦だ！

『……別れましょう』

『ちよ、ちよっと待ってくれ！これには事情が……！』

去り際に聞こえてきた会話は……うん。無視でいいよね。

Aクラスへ

「じゃあ、兄さん。オレはAクラスに行ってるわ」

「そう？天草さんに会いに？」

「まあ、シフト入ってねえしな」

「否定しないんだ……」

「じゃあ、三回戦でな」

「あ、うん」

こうして兄さんと別れ、Aクラスを目指すオレでだった。しかし

……

「すいませんです」

「ん？」

振り返ると小学生くらいの女の子がオレに声をかけてくる。ん？

この子どっかで見たことがあるような……？

「バカなお兄ちゃんを知りませんか？」

バカなお兄ちゃんか……うーん。この言い方からして身内では無

いな。というか、バカな男ってうちのクラスにたくさんいるんだが

……一体誰のことだろうか？

「うーん。該当者が多くて絞れない……他に何か特徴はあるかな？」

「すつごくバカなお兄ちゃんだったです！」

………これももしかしなくとも兄さんじゃないのか？

「そうだね……あ、雄二」

そんなこと考えている時にトイレから雄二が出てきた。

「ん？どうしたんだ光正。女子小学生を誘拐するつもりか？」

誤解だ。ムツツリーニじゃあるまいし。

「違うよ！」

「あー悪い。ナンパ中だったか。でも、やめといた方がいいぞ」

「当たり前前だろ！女子小学生をナンパするなんてどこのロリコンだよ

！」

「いや、そういう意味で言ったんじゃない」

「はっ？」

こいつは何言ってるんだ？女子小学生をナンパするなんて最低のロリコンぐらいしかいな――

「天草に殺されるぞ」

――マズイマズイマズイマズイ……殺されるぞオレ。いや、きつと事情を話せば理解してくれる！いや、そもそもここであったことが紫乃に漏れなければ大丈夫。そうだ、きつと大丈夫。

「雄二。君は何も見なかった。違うか？」

「は？」

「じゃあ、そういうことで！あ、その子はオレたちの店まで連れてけば問題が解決するはずだ」

そしてオレはダツシユで逃げた。

「つておい……全く押し付けやがったあの野郎」

「すみませんです」

「気にするな。じゃあ、行くか」

「おかえりなさいませ。ご主人様」

Aクラスの店に入った時、出迎えてくれたのは紫乃だった。あれ？さつき来た時も紫乃だったような……

「光正を出迎えるのは私の役目。これは譲れない」

あ、なるほど。この役目を譲りたくないから……つて、納得できるか！

「今回は客としてきているよ」

「分かりました。お席までご案内します」

さすがAクラス。今もお客さんが一杯いるね。オレたちFクラスとは大違いだ。

それにしてもメイド喫茶だから、てつきり男性が多いと思っただけ、女性も多いみたい。まあ、あれだ。もし、紫乃を変な目で見ると奴がいたら……オレが断罪してやる。

って、何でこんなことを思うのだろうか？

「では、メニューをどうぞ」

立派な装丁のメニュー表だ。さすがAクラス。金の力がここにも働いていたか。

まあ、中身……というか、メニューも何があるか知っているし、メニュー表は前に見せてもらったから覚えている。さて、俺は何を頼もうかなあーと。

くメニューく 吉井光正専用

んん？ちよつと待て。何故、このメニューオレ専用になっているんだ!?おかしいだろ！

・メイドとの触れ合い

なんだこの漠然としたメニューは!?後それはメイド喫茶でやることじゃない！

・シフォンケーキ（メイドお手製）

ちよつと待て！死に送るようなものをメニュー表に乗せるんじゃない！

・メイドとの婚姻届

お・か・し・い・だ・ろ！バカじゃないの!?ねえバカじゃないの!?

「メニューはお決まりになりましたか？」

紫乃が聞いてくる。うん。メニューはまだまだあるが……一つ言わせろ。

「まともなメニューはないのか!？」

「え?全部までもでしょ?」

……もう末期だ。こいつはもうダメだ。

「仕方ない。じゃあ、オレは——」

「ご注文を繰り返します」

「——つてちよつと待て!オレはまだ注文していないだろ!」

『『メイド特製シフォンケーキ』が一つでよろしいですね』

「……はあ。もうそれでいいよ」

「かしこまりました」

……というか、『シフォンケーキ(メイドお手製)』と『メイド特製シフォンケーキ』の違いって一体……?

「あれ?光正君ですか?」

「ほんとだ光正じゃない」

「ああ!さつきのお兄さんです!」

振り返ってみるとそこには姫路さん、島田さんとさつきの子供。後は雄二と兄さんがいた。

「あれ?みんなしてどうした?その子の親でも探しているのか?」

「いや。その必要はなくなった」

こつそり教えてもらったがどうやらこの子は島田さんの妹で名を葉月というらしい。

「あ、そう。で、何でここに?」

「ちよつとここで良からぬ噂を流している連中がいるらしくてなるほど。風評被害というやつか。」

「……では、メニューをどうぞ」

あー彼らの担当は霧島さんか。まあ、雄二がいるから当然だな。

「こちら『メイド特製シフォンケーキ』で御座います」

そしてこちらの担当のメイドが料理を運んでくる。しかし、あることに気付く。

「あれ?フォークとか食器は?」

「ないよ」

「はい？」

料理だけで食べるためのものが一切用意していなかった。しかもそんなのが存在し無いと言い切った。

「全然よろしくねえぞっ!？」

「うるさいなあ雄二。自分で『メイドとの婚姻届』を頼んでいてよろしくないとか店に迷惑だよ」

「いやいやそんなメニュー普通のメイド喫茶で存在しないからな!？」

でもなあ……オレのメニュー表にはあつたんだよなあ……メイドとの婚姻届。

「……では食器をご用意致します」

隣では霧島さんが女子三人にはフォークが、兄さんには塩が、雄二には実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子ーこれ本当にうちの实印だぞーどうやって手に入れたんだ!？」

知るか。

「というか、紫乃。とりあえず、食器だしてよ。このままだとオレが素手で食う羽目になるぞ?」

「はい、光正」

すると、どこからかフォークが出てきて、ケーキを一かけら刺してオレに差し出す。

「あーん」

そして『あーん』と言い、オレに口を開けるよう促す。

「あーん……うん。今回は成功かな?」

「やった!」

喜ぶ紫乃。うんうん。和むねえ。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう二人だ。中央付近空いてるか?』

と、和んでいると新規のお客さんが来たようだ。ん?でも、この声どこかで……

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな!』

『そうだな。さつきいった二ーFの中華喫茶は酷かったからな!』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな!』

あー営業妨害をしてきた常夏コンビか。

「紫乃。一つ質問だ」

「なに?」

「あの常夏コンビはこの店に来店したのは初めてか?」

「違う。さつき出て行ってまた入ってきた。話している内容も同じ」

「注文とかはしているか?」

「ううん。休憩所代わりに使ってるみたい」

「そうか……」

紫乃の顔が歪む。予想通りと言うべきか、この店にとっていい客では無いことは確かのようなのだ。

近くのテーブルでは雄二たちも霧島さんと同じような話をしていくが……

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った!? 予備のヤツがあつたら貸してくれって意味だ!」

……何故か雄二が霧島さんのメイド服が欲しいって話になつていった。うん。意味わからん。

「ねえ光正。真ん中で騒いでいる人たちと同等ぐらいに坂本君たち目立ってるわよ」

「注目的になつてるな。これじゃ、常夏コンビに制裁を加えられないな」

「というか、メイド服で何をするつもりだ? オレとしては颯爽とぶっ飛ばした方がいいと思うが……」

「でも、どうするつもり何だろう? こっちとしては排除してくれるのはありがたいけど……」

「まあ、仮にもAクラスの喫茶店テリトリーだ。こんなところでオレたちが暴力を振るって奴らを排除したら後にAクラスにも被害が出る。ここはそれ以外の方法を考えるしか——」

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか?』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな!』

『二ーFには気をつけろってことだな!』

ピキッ

「よし……あいつらシバク」

「待って光正!そんなことしたらAクラスに被害が……」

「知るか」

「え!?ほ、本当に待——」

「光正。ここは俺に任せろ。お前は取りあえず落ち着け」

「……ツチ。分かったよ。蹴り飛ばしてえがここは我慢してやる。紫乃にも迷惑がかかるしな」

本当は今すぐに蹴り飛ばしたいがここは我慢しておこう。

「……雄二、これ」

霧島さんがメイド服を抱えて戻って来た。

「おう。すまないな」

「……貸し一つ」

「だ、そうだ。明久」

「わかったよ。お礼に今度雄二を一日自由にしていよいよ」

「……ありがとう。吉井兄も弟と同じく良い人」

「ちよつと待て!どうして俺が!」

差し出された雄二の必死の抗議も虚しく、霧島さんは嬉しそうにその場を離れて行った。

「で、これをどうするの?」

兄さんの手元には先ほど姫路さんから借りていたらしいPOCHとメイド服。コレ等を考えると……もしかして……

「……着るんだ」

恨みがましく兄さんを見て言う雄二。うん。兄さんに女装させるつもりかな?」

「だつてさ、姫路さん」

しかし当の本人はこちらの意図に気付かない。

「え?わ、私が着るんですか?」

兄さんは勘違いをしており、いきなりの事に目を丸くしている姫路さん。

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんて出来ないだろうが」

「それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぶべらあつ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

「凄い殺気だ。オレでもそこまでの殺気は出していない……はず。」

「島田でもない。それなら面が割れてしまうだろうが」

「……まさか」

「兄さんは漸く気付いたみたいで……。」

「着るのはお前だ、明久」

「いやあああつ！」

「叫び声をあげるのだった。」

「光正が着ればいいじゃないか！僕よりも絶対に似合うよ」

「いや、あいつはダメだ」

「何でさ！」

「光正。あくん」

「あくん。うん。おいしいよ」

「えへへ」

「今は天草が光正の怒りを抑えている状態だ。女装なんてしたらブチ切れるぞ」

「オレは女装したぐらいじゃキレねえぞ。ただ、腹の虫の居所が悪いからキレルだけだ。」

「で、でも……」

「やれやれ。我俣を言う奴だな。それなら、あっち向いてホイで決めないか？」

「あ、雄二がこうやって言うって事は、また兄さんを騙すつもりだろう。流石に兄さんもそれは分かっているみたいで、裏を搔いてやろうと言うような顔をしている。ただね、兄さん。勝負を受けた時点で負けだと思っよ。」

「よし、その提案受けるよ」

「あ、兄さん負けたわ。」

「それなら行くぞ、ジャンケン」

「ポンッ」

兄さんはパー。雄二はチョコキで、兄さんの負け。しかしあっち向いてホイはここからが本番だ。

「あっち——」

雄二が勢いよく人差し指を出してきた。まるで兄さんの目を刺すかのような勢いでだ。

「その手に乗るかっ！」

と言つて兄さんは目を逸らさずに雄二の指をじっと見ていた……が。

「向いて——」

ブスッ

「ぎいやああっ！目が、目があっ！」

雄二は兄さんの目を刺し、兄さんは目を抑えてのた打ち回っていた。

「ホイ！……ふっ。俺の勝ちだな」

そして、雄二は兄さんののけぞった方向に指していた。うん。雄二の作戦勝ちだ。

「ねえ光正。私には坂本君が目潰しをした気がするのですが……本当に明久さんと坂本君は友達なのですか？」

「いつものことだ。気にするな」

本当にいつものことなのだ。この二人が友人か怪しくなるのは。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

姫路さんがハンカチを差し出す。なんて優しいのだろうか。

「ありがとう。まったく、雄二の卑劣さには驚かされるよ」

でもさ兄さん。ハンカチに目を当てているのは分かるけど、匂いを嗅いでいるようにみえるのはオレの錯覚か？

「あ、あはは……でも、きつと大丈夫ですよ」

「そうだよね。あんな卑怯な勝負は無効——」

「吉井君ならきつと可愛いと思いますっ」

うん。そういう問題じゃないよね？

女装した男性に対して痴漢は成立する？

「こ、この上ない屈辱だ……!」

「明久、存外似合っておるぞ」

「これなら、兄さんも女として通用するよ（グツ）」

「通用したくないからね!」

「今度モンゴルかタイ辺りに旅行して切ってもらったら？どうせ使わないでしょ」

「待って！あえて何をかは言わないが僕だって男でいたいよ!」

雄二から連絡を受けてわざわざやって来た秀吉が、男子トイレで兄さんの着付けとメイクをたった数分でやってくれた。オレも手伝ったがさすが秀吉だ。付け焼き刃のオレとはレベルが違った。もつとも、兄さんは全然ありがたくはないだろうけど。

「それにしても光正よ。お主は器用な男じゃのう」

「そうか？」

「うむ。メイクも着付けもまるでやったことのあるような感じじやったわい」

やったことのあるという言葉に否定はしない。別にメイクも手伝ったこともあるし、着付けもやったことは一応ある。

「まあ、ちよつとな」

というか、オレの場合はやったというよりやらされたの方が近いか……まあ、どちらでもいいけど。

「そうかの。ではワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党を伸してくるが良い」

「ん。りよーかい」

「オツケー。じゃあ、兄さん。男だとバれないようにね〜」

男だとばれたら、うちの兄さんはバカで問題児というほかに女装壁というレッテルまで張られるだろう。うん。いやだね。

「光正。おかえり」

「おう、ただいま」

Aクラスに戻り先ほどまで座っていた椅子に腰を掛ける。

「それで？明久さんはどちらに……」

「兄さんならあれだ」

そう言うって、うるさい常夏コンビに近づくメイド（兄さん）を指さす。

「……え？あれが明久さん？」

「そう。あれが兄さんメイドver」

「……女として負けた気が……」

「大丈夫大丈夫。あんな面白い物より紫乃の方が断然かわいいから」

まあ、あんな面白い物を作ったのはオレと秀吉だが。

「か、かわいい……」

心無しか顔が赤くなってるかい？

『お客様』

お、兄さんの演技スタートかな？いろんな意味で頼むからバれないように上手くやってくれよ。

『なんだ？——へえ。こんなコもいたんだな』

『結構可愛いな』

お前らの見ているものは男の女装メイド姿だな。繰り返す。お前らは男の女装を可愛いというのか？

『お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？』

『掃除？さっさと済ませてくれよ？』

二人が立ち上がる。

『ありがとうございます。それでは——』

『ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて』

『くたばれええっ！』

『ごぼああっ！』

思い違いにもほどがあるが、兄さんが常夏コンビの坊主頭にバックドロップを喰らわせた。

「え？今のってやり過ぎたんじゃ……」

「いや大丈夫だ。むしろ浅かったくらいだ」

そのためか坊主先輩はすぐに復活した。

『こ、この人、今私の胸を触りました！』

兄さんが叫ぶ。さて、そろそろオレたちの出番かな。

『ちよつと待て！バツクドロップする為に当ててきたのはそつちだし、大体お前は男だと——ぐぶあつ！ごふつ！』

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「この発情期のサルどもが！オレが天誅を与えてやる！」

坊主先輩に思いっきり蹴りを喰らわせてやった。別にオレたちの料理をバカにしたからではない。痴漢行為に対する罰としてだ。

「何を見ていたんだ!?明らかに被害者はこつちだろ！」

「黙れ！たつた今、あのウエイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！俺たちの目は節穴ではないぞ！」

いや。正直節穴だと思う。正確には雄二の目がであるが。

「ウエイトレスさん。そつちで倒れている人は任せたまよ」

「え？あ、はい。分かりました」

兄さんに任せるように言うとなんと、ブラと瞬間接着剤を取り出した!?え？何するつもり？

でも、こつちも気になるけど今は……

「さて、痴漢行為の取調べの為、ちよつと来てもらおうか」

「じっくりと話を聞かせてもらいますよ?」

こいつらを連行して情報を吐かせることの方が大事だ。

「くつ！行くぞ夏川！」

モヒカン先輩は更に状況が悪くなると思ひ逃げ出す。

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてろ変態めつ！」

坊主先輩は兄さんによってブラを付けられ、そのまま走り去って行った。

あ、そのための瞬間接着剤ね。

「逃がすかつ！追うぞアキちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

「んじゃ、オレも……」

「光正はダメ。まだ時間あるでしょ?」

時間というのは恐らく三回戦までのことを指しているんだろう。その意味でだったら時間はあるか……

「分かった。あの二人を追いかけるのは雄二と兄さんに任せるよ」

「うん。そうするといいよ」

「……光正。少しいい？」

「ん？霧島さんか？何か用かな？」

「……雄二と吉井兄の会計。後連れの三人も」

会計？あーなるほどねえ。……って、雄二と兄さんって実質頼んでないのも同じだと思うけど……。

「……お会計は、夏目漱石を一枚か坂本雄二を一名のどちらかとなります」

「坂本雄二を一名でお願い」

「……ありがとうございます」

雄二……悪いとは思ってない。千円で売り飛ばしたのは……まあ、気にするな。

「光正。お会計は五百円玉ワンコインか吉井光正を一名のどちらかです」

「はい。五百円玉」

「……光正。お会計は吉井光正を一名か吉井光正の人生のどちらかです」

「おかしいよね!?あまりにも理不尽な選択肢だよね!？」

と言うか、オレを差し出すのもオレの人生を差し出すのも変わらない気がする。

「さあ、どちらか選んで」

「……第三の選択肢。無視して帰る」

「えっ!?あつ、こ、光正!本当に帰らないで下さい!冗談が過ぎましたから!お願いですから!」

結局オレは根負けをして、三回戦が始まるまでAクラスに滞在することになった。

チャイナドレス

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【①可愛らしさ ②統率力 ③行動力 ④その他（ ）】
また、その時のリーダー候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『①可愛らしさ』 候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『①可愛らしさ』 候補……姫路瑞希 木下秀吉 島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです。

吉井光正の答え

『①可愛らしさ』 候補……天草紫乃』

教師のコメント

君が質問にまともに答えてくれて先生は嬉しいです。

坂本雄二の答え

『④その他（結婚相手）』 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

「で、三回戦は不戦勝じゃったと?」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

「まあ、運が良かったということだ」

三回戦。会場に向かったオレたちを待っていたのは相手の棄権による不戦勝という結果だった。まあ、三回戦の科目はオレにとって得意とも苦手とも言えない教科だったのでよしとしておこう。

「ならば、済まぬがこっちの建て直ちに協力してくれんか?」

秀吉が申し訳無さそうに表情を曇らせながら言ってくる。別に秀吉の責任じゃないのにな。

「雄二、何か良い方法は無いの?少しは考えていたんじゃないのか?」

「ああ。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのある事をやる必要があるそうだな」

そう聞きながら空席だらけのオレたちの教室を見る。

悪評の元を断ったとは言え、流れた悪い噂は簡単には消えることが出来ない。雄二の言うとおり、何かインパクトのある事をしなければお客は来てくれないだろう。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室を見渡す。オレや兄さんも見渡しているが、こんな設備の教室では特に出来そうも無い。

「雄二、何かアイデアはある?」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大な筈だ」

そう言つて雄二が取り出したのは、刺繍も見事な水色と白のチャイナドレスだった。

「どうか、どつから取り出したのそんなもの。」

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじやろうな。コレを宣伝用に——」

まあ確かに秀吉の言うとおり、確かに宣伝にはなる。王道だけど悪くない。

「ああ。コレを——明久が着る」

それはインパクトがありすぎる……が。

「よつしや、メイクは任せろ」

「ちよつ……！お願い、許して！メイド服の次にチャイナまで着たら、きつと僕はホンモノだつて皆に認識されちゃうー！」

うーん。確かにそれは弟のオレからしたらよくないな。兄弟の縁を切りたくなるレベルに。

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらおう」

「あ、なんだ。良かった〜」

「オツケー。それならいいよ」

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……？」

……まあ、秀吉はセーフということだ。

「たっだいま〜！つて、なんだ。アキつてばメイド服脱いじやったんだ」

「あ……残念です。可愛かつたのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいなく」

と、ここで女性陣が戻つて来た。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘く無いよ〜」

兄さんがにこやかに笑つて断つた。気持ち悪い笑顔だ。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

そう言った雄二と兄さんは逃さないかのように、チャイナを片手に退路を断った。まるで、狙った獲物を逃さないかのようにだ。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

若干引き気味になるエモノ……もとい女子二名。残念というべきか逃げ場は残されていない。

「やれ、明久！」

「オーケー！へっへっへ、大人しくこのチャイナ服に着替え痛あつ！マジすんませんでした！自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前……」

「はあ。いろいろと情けねえ……」

島田さんは近づく兄さんを迎撃した事により、あつさりやられるのを見た雄二とオレは呆れた。ただし、兄さんの心配はしない。

「どうしてまた、急にそんな事を言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりする事は無い、って言ってたと思うけど」

兄さんを迎撃した島田さんは渋い顔をする。

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ」

「そうそう。兄さんはチャイナドレスが好きだから」

「大好——愛してる」

あ、嘘つこうとして失敗したやつだ。

「……お前は本当に嘘を吐けないヤツだな」

「ああ、心底バカだと思うぞ」

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為にすしね！」

島田さんと姫路さんが、渋々従うという体裁を保とうとしているんだらうが、本心が兄さん以外にバレバレだ。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

この子は本当に良い子だな。とても島田さんの妹とは思えない。

まあ、冗談はおいといて……

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が……」

「……………!! (チクチクチクチク)」

「…………… (チクチクチクチク)」

「ムツツリー二に光正!? どうしてそんな凄い勢いで裁縫を!? しかも息のあった絶妙なコンビネーションでチャイナドレスが出来上がって……って言うかさつきまでムツツリー二はいなかったよね!?」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

何故だろう。格好良い台詞のはずが、凄く格好悪く見える。まあ、今は集中だ集中。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

姫路さんがそう言いながら腕時計を確認している。そっか、姫路さんたちの試合はこれからか。

「いや、今着替えてもらいたい」

「え?」

雄二の言葉に二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

そう言えば。召喚大会の三回戦からは一般公開が始まるんだっただけ。客が集まっているから宣伝には持つて来いだ。……つと、後はこの調整をして……

「こ、これを着て出場しろって言うの……?」

「流石に恥ずかしいです……」

まあ二人がああ言うのも無理もないだろう。一般客だけでなくメディアもいるから、かなり大勢の人の前でチャイナドレスを着て動き回るのは流石に恥ずかしいと思う。

「二人とも、お願いだ」

兄さんはそう言って頭を下げる。何時に無く真剣な顔だ。……はあ。本当に兄さんは誰かの為なら自分から頭を下げれる。相手が姫路さんなら尚更だ。本人は自分の我俣だと思っているんだろうが……そんなところがオレにはない、兄さんを尊敬するところなんだから

うな。でもまあ……

「明久……。お前は本当に——チャイナが好きなんだな……」

「メイド服だけでなくチャイナドレスも好きなんだな……」

そんな空気。今はいらねえな。

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

姫路さんの言葉を遮った島田さんが色よい返事をする。

「あ。は、はいっ！これくらいお安い御用です！」

そして、姫路さんも快諾した。

『兄さん。余計な事を考えていただろ？』

兄さんにアイコンタクトを飛ばす。今、良からぬことを感じたから。ん？チャイナドレスはって？後の細かい微調整はムツツリー二に任せた。

『……何の事かな？』

ごまかすのが下手だ。

『例えば、姫路さんにお安い御用なら今後もちよくちよくお願いしようとか』

『光正。これ以上言うなら、天草さんに「光正はチャイナドレスが好きなんだよ」って吹き込むよ？』

『脅しのつもりなら百年早いぞ』

『……僕の方が兄さんだけどね……一応』

だから、どうした。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がFクラスである事を強調するんだぞ」

そうすれば喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRになって、二つの目的を同時に果たせる。

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出て行く島田さんと姫路さん。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです！」

さすがムツツリーニ。もう微調整を終わらせて、チャイナドレスを完成させた。

「というか、なんで光正は手伝ったの？もしかしてロリコ……」

「しゃべるな。そしてロリコンじゃない。気まぐれだ。ただの」

そう、これは気まぐれだ。

「ふむ。それでは着替えるとするかの？」

「ちよ、ちよつと秀吉！ここで着替えるの!?きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ！」

バカなのか？なんで秀吉が女子更衣室で着替えるの？

「……最近、明久がワシの事を女として見ておるような気がするんじゃないが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「そうだよ。秀吉は秀吉。他の何者でもない」

「うんうん。雄二と光正の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

「……俺が言ったのはそう言う意味じゃない」

「……無論。オレもだ」

どうやら兄さんの頭がおかしいみたいだ。今後、兄さんには精神科か、脳外科へ行かせ……。

「んしょ、んしょ……」

「……………!! (ボタボタボタ)」

「は、葉月ちゃん！君もこんな所で着替えちゃダメだよ！ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

この空間を一言で言い表すなら……カオスだ。

四回戦に向け

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

この声は姫路さんと島田さんか。どうやら戻ってきたみたいだな。「丁度良かったよ。二人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

二人が大会に向かった後、兄さんとチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月ちゃんは校舎内を歩き回って宣伝をしていた。最初は効果が薄いように思われたけど、徐々に増えてきて、少し前辺りからだいぶ席が埋まり始めた。今のところ順調といったところだ。

「良かった。段々持ち直してきたのね」

「良かったです」

女性客も徐々に増えてきたことから味についての噂も流れ始めているのだろう。もちろんいい意味でだが。というか、段々とチャイナ以外の目的のお客さんも増えてきている。こりゃあ、腕によりをかけて作らないとな。

「それじゃ二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オツケー」

さて、ウェイトレス二人も帰還してきたことだし、飲茶をもっと入れなければ……？

「ムツツリーニ。茶葉がもう僅かなんだけど」

「……………ストックが空き教室に置いてある」

「あ、そういえばそうだったね。でも、茶葉の為に離れるわけにもいかないしな……」

とか言っている間に茶葉が切れてしまった。

「至急取りに行かせないとな」

「次のオーダー……って？二人してどうしたの？」

すると、オーダーを取ってきたのか島田さんがやってきてオレたちに声をかけてくる。

「ああ、島田さんか丁度いいや」

「……………明久に茶葉を取りに行くよう伝えてほしい。至急だ」
「そんなのアンタたちが伝えれば……………って、手が離せそうにないわね。
分かったわ」

島田さんはそのまま、兄さんの元に行く。そして、伝言を受け取った兄さんがそのまま教室から外へ出ていく。茶葉を取りに行ったのであろう。

「おい。餡子も足りないぞ」

「……………遅いよ……………まあいいや。他にも補充が必要なものはない？」

「……………今のところオーケー」

「分かった。雄二いー」

「ん？何か用か？」

「悪いけど兄さんを追いかけて餡子も持ってきと伝えて」

「了解だ。すぐに行く」

こういう時に行動してくれる代表は有能だ。ただの偉そうな置きものでは無いな。

「さあ、調理担当のみんな！どんどん作っていくぞ！」

『おうー！』

この数分後、兄さんと雄二が頼んでおいたモノを持ってきてくれたが、何かがあつたらしく雄二が思案顔になっていた。まあ、今はそんな事より料理料理

そんなこんなで二時間が経過した。

「明久、光正。そろそろ四回戦の時間だろ？」

「え？もうそんな時間なの？」

「マジで？」

現在の時刻は午後二時過ぎだった。時間が経つのは早いなあ。

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？実はわたしたちもそろそろ出番なんですよ〜」
なるほど。つまり次の対戦カードはオレと兄さんペア対島田さんと姫路さんペアという事か。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこかに行っちゃうの？」

葉月ちゃんが兄さんのズボンの裾を握っていた。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事なんだ。だからおとなしく待っていないとダメだ」

雄二が葉月ちゃんの頭を撫でる。意外と子供の扱いに慣れてるよ
うにみえる。

「……もしかしくなくとも、雄二ってロリコン？」

「ダメでしょ光正。雄二はロリコンじゃなくて霧島さん一筋なんだから」

「お前ら後で覚えとけよ……！」

さすがの雄二でも葉月ちゃんの前では暴力沙汰を起こせないらしい。まあ、後の報復が怖いけど……

「う〜。でも……」

不満げに頬膨らませる葉月ちゃん。

「その代わりに、良い子にしていたら——」

そんな彼女に雄二は小さく微笑んで。

「バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」

爆弾を投下した。しかも威力が核兵器レベルのである。

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

葉月ちゃんはそう言い残し物凄い勢いで厨房に消えていった。

「ち、違うんだよ葉月ちゃん！僕には君が期待するような財力はないんだ！ねえ、聞いてる!？」

というか、オトナのデートって、何するんだろう？大人がデートすれば、大人のデートになるのかな？あ、でも葉月ちゃんは小学生か。「というか、財力がないと言うけど、仕送りの9割ぐらいを趣味に使う

から……だろ？」

要するに自業自得だ。

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て？」

恐ろしい島田さんの声。捕まったら処刑は免れないだろう。

「美波ちゃん、ちよつと待っててください」

そこに姫路さんの仲裁が入る。

「次の対戦相手は吉井君たちのようですから。召喚獣でお仕置きした方が遠慮なくできますよ？」

そして、笑顔のまま死刑宣告。うーん。本当に彼女はFクラスに染まってきたているみたいだな。

「ちよつと待った！僕の召喚獣はフィードバックつきなんだよ！姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に——」

「フン、望むところだ」

「雄二！お願いだから勝手に僕の生命をを左右しないで！」

「上等よ。早く会場に向かいますよ。アキがどんな声で啼くか楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久にどこまで大きな悲鳴をあげさせられるか、じっくりと見せてもらおうか」

そして兄さんの味方はいなくなつた。え？オレはって？

「そうだ！光正なら僕の味方だよね？」

「却下」

「却下!?敵になるとも味方になるとも言わず却下!?返答がおかしいよね!？」

え？味方になるわけないじゃん。何言ってるの？

勝利に犠牲は付き物

『それでは、四回戦を始めたいと思います』

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、オレたちはステージ上へ。

そして、辺りを見渡すと外部からの来場客の為に作られた見学者用の席はほぼ満員なのが見えた。

これなら、宣伝効果も抜群だろうな。

『四人とも、準備はいいですか？』

「はい。では——」

大きく息を吸い、召喚獣をよぶ。

「二「試験召喚！」「三」

オレたち四人の声綺麗に揃い、それぞれの足元に魔法陣が現れる。

自分たちからすればいつもの光景でも、外部からの人にとっては珍しい様子で小さく歓声があがる。

ちなみにだが、外部の方にも分かりやすくするためなのか、ディスプレイに点数を表示するらしく、情報処理に少し時間がかかっている。

『では、四回戦を——』

審判の向井先生が開始宣言をしようとする。が……

「ちよつと待ってください」

誰かに止められた。いや、止めたのオレだけだね。

「少しマイクを拝借しますよ」

そう告げてオレは返事も待たずにマイクを借^{奪い取る}る。

『清涼祭にご来場の皆様。こんにちは』

兄さんもオレの意図を組み取り姫路さんと島田さん呼び寄せ。

『ここにいる私たち四人は、本格飲茶を提供する二—Fの中華喫茶で働いています。このように可愛らしい女子も一生懸命頑張っ^て働いていますので、よろしければどうぞお立ち寄り下さい』

オレがお辞儀をすると、兄さんや姫路さん、島田さんが動きに合わせて大きくお辞儀をした。

「「よろしくお願いしますー」」

ついでに既に召喚された召喚獣達もぺこり、と動きを揃えさせる。これで少しは印象に残るだろう。

「先生。ありがとうございます。マイクをお返しします」

そして宣伝を終えなので、マイクを審判の先生に手渡し、軽く頭を下げる。

『——と言う事だそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちのいる二―Fに立ち寄って見て下さい』

苦笑しながらも宣伝に協力してくれるとは、あの先生はノリが良い。そこにはきちんと感謝しないとな。

『さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Fクラスの四人とも、良い試合をお願いします』

先生がそう告げると、オレたちから少しだけ距離を取った。

「アキに光正。ここまでよく勝ち残ってきたわね。でも、ウチらに勝てるとは流石に思っていないでしょう？」

わあー余裕だねえ。強敵となるはずの三年生が受験勉強のためほとんど参加していないんだ。この大会、優勝候補と言われているだけあって、オレたちは眼中にないらしいな。

「甘いよ島田さん。君たちは確かに優勝候補だ。しかし、それ故に勝ち上がってくる事は簡単にオレたちは予想できた。それなら、対策はいくらでも打てるというものだよ？」

オレは大型ディスプレイを指差して自信満々に応えた。

『Fクラス 姫路瑞希&島田美波

古典 399点& 6点』

「こ、古典!? 四回戦は数学じゃなかったの!?!」

狼狽する島田さん。さすが、帰国子女だ。ただえええ日本語が読めないレベルなのに古典が分かるわけがない。

「君たちに渡した対戦表だが——アレは雄二の手作りだ」

「だ、騙したわねっ!!」

そうだ。島田さんと姫路さんに渡した対戦表には細工がしてある。対戦相手には手を加えていないが対戦科目には少し手を加えてある。「さあこれで勝負は殆ど二対一！オレたちの勝ちは貰ったようなものだな、兄さん！」

「その通りだよ光正！6点しか取れていない美波の召喚獣なんて、はつきり言っていないも同然さ！」

「くっ！なんて卑怯な連中なの！」

そんな呻きをよそに、ディスプレイにはオレたちの点数も表示される。

『Fクラス 吉井光正&吉井明久

古典 104点& 9点』

「……………兄さん」

「……………正直、悪かったと思ってる」

「……………」

「……………」

あ、これどうしよう。オレは古典を使うと分かった瞬間に、ひたすら文法を詰め込んでいつもの1.5倍ぐらいの点数をとったのに、姫路さんの前だと風の前の塵に同じだ。どうやって勝とう。

「よし、光正！ここはそれぞれ個人戦で行こう！僕は美波を受け持つから、光正は姫路さんを頼む！」

「待て！それではオレの負担が大きすぎる！」

オレと姫路さんの点数差は約4倍。兄さんとは約4.5倍。

……………あれ？これもしなくとも詰めゲー？

「わかってる！だからそこは、得意の頭脳プレイでカバーするんだ！」

「なんて無茶を言いやがるんだこのクソ兄貴！」

このクソ野郎。自分はいなくてもそこまで支障がない点数だからって……………ん？いなくても支障がない？

「……………仕方ない。こうなれば兄さんの言うとおり頭を使ってやる。――島田さんに姫路さん」

「はい？」

「なによ？」

「兄さんが如月ハイランドのペアチケットを手に入れようとしている、と話をしていたよね？」

「この話を覚えてくれていればいいけど……」

「それがなにか？」

「良かった。ひとまずセーフだ。」

「一緒に行こうとしている相手が雄二だと言う話だが——あれは嘘だ」

「まあ、普通なら誰でも分かるよね。でも……」

「えええっ!?!」

「この二人には分かってないみたい。」

「そ、それじゃ、一体誰を……?」

「そんなの、決まっているじゃないか」

「女子だよ。……と言おうと思ったがそれでは面白くない。よし、ここはあの人を使うか。」

「兄さんが誘おうとしているのは、島田さん。君——」

「ええっ!?!あ、アキつてば、ウチと幸せに……」

「——の妹だ」

「殺すわ」

「素晴らしい殺気だ。微塵も嘘だと思っていない。」

「待つんだ美波！僕は別に葉月ちゃんをどうしようなんて思っていない！——」

「妙に仲が良いと思ったら……。まさか、そういうことだったなんてね」

「目が座っていてオレでも恐怖を感じる。でも、その矛先はオレじゃないからいいよね？」

「やっぱり吉井君にはお仕置が必要みたいですね？」

「ひ、姫路さん……?」

「おっと、にこやかに兄さんを見ている姫路さんの背後に阿修羅像が見えるよ。触らぬ神に祟りなしだね！」

「瑞希！アキの召喚獣をボコにして！ウチはアキの本体をボコにするから！」

「わかりました！」

「わからない！二人の言っていることが僕にはさっぱりわからない！」

うん。オレにも分からない。

「兄さん！そのまま姫路さんの召喚獣を抑えるんだ！」

オレは自分の武器の中でもっとも攻撃力のある両手長剣を構え、他の6つの武器を捨て身軽になる。普通ならこんな事するのは愚策だが対戦者の二人が兄さんに気をとられているため安心だ。

「そんなことしようものなら僕が殺されるよ！」

「知るか」

「少しは考えろよ！」

「行きますっ！」

姫路さんの召喚獣が一瞬で間合いに迫った。気のせいだろうか、攻撃速度がやたらと速い。

「わ、わ、わ！」

そして兄さんの召喚獣はギリギリのところまで攻撃を避けていた。避けるよりも早く取り押さえしてほしいのだけど。

「アキ！おとなしく殴られなさい！」

「美波！それは反則行為だよ！」

こっちには兄さん本体に直接攻撃を仕掛ける島田さん。思ったけどこれで向こうの反則負けになるんじゃないや……

『反則はありません』

……どうやら、そんな甘い考えは捨てた方がいらしい。

『兄さん。こうなれば一瞬だけ姫路さんの武器だけ抑えてくれ。後はオレに任せろ』

アイコンタクトを飛ばすと兄さんはそれを分かってくれたらしい。

「おおおおおっ!!」

ザクっ！

「くうううっ!!」

兄さんの召喚獣が姫路さんの召喚獣が持っている両手大剣を痛みを伴いながら封じた。長くは持たないか。

「うおおおおっ！」

ザクっ！

姫路さんの召喚獣の背中に深々と刺さる大剣。だが、さすが点数差四倍だ。一撃で仕留められなかった。

「もう持たない！」

「安心しろ。兄さん諸共葬ってやる」

そう言つて、姫路さんの召喚獣の背後から移動しつつ、唯一捨てなかつた右腰にかけていた太刀の柄に手をかけ……

「き、キサマ、謀つたな光正いーっ！」

「くたばれ姫路さん！兄さんと共に！」

区別する事無く居合切りの要領で一閃。姫路さんの方は多分問題ない。召喚獣が戦死するだけだ。しかし、兄さんにはさぞかし強烈な痛みが届いているだろう。

「あ、きやあつー！」

防御しようにも虚しく、斬り捨てられた姫路さんの召喚獣。流石に高得点である姫路さんの召喚獣でも大剣といい居合斬りといい戦闘不能は免れないだろう。

「人体切断!？」

そして兄さんは頭のおかしいことを言っていた。何となく考えを読んでみると『人体切断マジックって失敗するところな感じなのだろうか』つと、やはり、よくわからんことを考えていた。

「瑞希っ！」

そして島田さんが斬り捨てられた姫路さんの召喚獣に目を向ける。そんなあからさまな隙……

「よそ見禁物油断大敵。さらば島田さん！」

オレが見逃す訳が無いよ。

「しまっ……いー！」

「これで決まりだ」

ザクつとに音を立て、島田さんの召喚獣に太刀が深々と突き刺さつ

た。さすが、一桁の召喚獣。わざわざ斬りに行く必要がなかったな。

『あく……えくと……』

何とも言い難い展開に審判の向井先生が困っていた。

『姦計を巡らせ、味方もろとも相手を葬った吉井光正君の勝利です！』

「アイ アム ウィナー」

上手い言い方だ。そして隣では痛みのがあまり気絶した兄さんだった。

準決勝に向け

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです……」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ」

島田さんのジト目と姫路さんの悲しそうな視線が兄さんに向く。

恐らくだが一番被害を受けたであろう兄さんが責められているのを見ると原因を作ったということオレの胸が少し痛む……？あれ？ちつとも痛くないや。

「まあまあ二人とも。そこまで言ったら可哀想だよ。しっかりとオレたちが二人の代わりに優勝するからさ」

優勝しないと学園長との約束を果たせないしね。

「光正君。本当に大丈夫ですか？」

姫路さんが確認のためか聞いてくる。島田さんと兄さんは何やら小声で話している見たいだが……まあ、無視で。

「ああ、油断せず上手くやる。というかオレよりも、兄さんを応援してやってよ。兄さんに人並みの点数を取ってもらわないと厳しいからさ」

「それもそうですね、吉井君」

「ん？何かな姫路さん？」

「絶対に優勝してくださいね……？」

兄さんの顔を、上目遣いに覗き込む姫路さん。凄い威力が出ているだろう。これには兄さんも……

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部上手くやってみせるさ！」

……簡単におだてられるだろう。無論、姫路さんにその自覚はないようだが。

「やれやれ。それなら明日の朝くらいしつかり起きてよ——つと。

へえ、かなり増えたものだ」

「そうだね。結構いい感じだね」

「良かった。宣伝の効果があつたみたいですね」

「そうでなきや、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないもの

ね」

それでも、ここまでの賑わいっぷりは予想以上。この分なら失われた分は取り戻せそうだ。

「あーバカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんが兄さんの姿に気付く、店の中から駆け寄ってくる。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んにゃく……」

兄さんが葉月ちゃんの頭を撫でている。撫でられている本人は気持ちよさそうにして、それを眺めている兄さんの顔もほころぶ。

「バカなお兄ちゃんはロリコンなお兄ちゃんでもあるんですか？」

「光正にバカなお兄ちゃんと呼ばれると無性に腹が立つ。後、ロリコンなお兄ちゃんじゃない！」

まあ、そりやそうだろうね。むしろ、ロリコンだったらオレが嫌だわ。

「明久。戻ってきたようじゃな」

「お、聞くまでもねえかもだが、どっちが勝ったんだ？」

トレイ片手に持つ秀吉と用意されたエプロンを着ている雄二がやってきた。聞くまでもないって言うのはオレたちが勝っていると信じているからだろう。

「光正、かな？」

「そうね。光正の一人勝ちね」

「ですね」

「ブイ」

「？明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

まあ、ある意味で負けたのは兄さん一人のような気がするけど……
気にせず行こう。

「光正。宣伝ご苦労だった」

「ああ、大役は果たしたよ」

「さて、数少ないウエイトレスが固まっていたら客が落胆する。今は喫茶店に集中するぞ」

そういえば、お客さんたちの視線がこちらに集中している気がしな

くもないな。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんね」

「そうね。ちよつと視線が気になるけど、売り上げの為にも頑張りますか」

「……ワシは一応男なのじゃが」

「秀吉。絶対に性別をバラしちやダメだよ」

さてと、オレも働きますか！

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「店の方は頼んだよ」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、光正。負けたら承知しないからね！」

「わかつてるって」

「ベストを尽くそう」

喫茶店で働くこと一時間。準決勝の時間が近づいてきた。決勝戦は二日目の午後に予定されているので今日の試合はこれで終わりだ。

「明久、光正。この試合は特に負けられないからな」

雄二がオレたちの肩を掴み彼なりのエールを送ってくる。というか、目の色がマジ過ぎてで怖いよ？後、掴まれている肩も痛いし。まあ、何故彼がここまでマジなのかというところ……

「霧島さんと木下君のお姉さんが相手なんて、大変そうですね……」

そう。二年生でも、上位の二人、学年主席の霧島さんと学年で五本の指に入る木下さんが相手だからだ。雄二の場合は霧島さんがいるからだと思うけど……。というか、この二人にはオレみたいな弱点科目もなければ、姫路さんのような甘さもない。厳しい戦いになるだろ

う。

「いいか。お前らに策は授けた。この策で絶対に勝利を勝ち取ってこい」

まさか雄二のやつ、策が破られる、そんな可能性を考えていないのか？いや、きつと相手が霧島さんなせいで正常な思考が出来ていないからだろう。

「雄二。万が一の時はどうする？勝利優先？」

「ああ。最悪どんな手を使ってもいい。あの二人に勝て」

よし、雄二の策が通用しなくなったら、オレの作戦を使おう。

「いいかお前ら。今まで以上に気合を入れろ。絶対に勝て！お前らが負ければ——」

そうか。よくよく考えればオレたちが負けると、姫路さんは転校するし、教室の設備が……というか、この学園の存続の危機かもしれないのか。何か、責任重大？重圧が半端じゃないなあ……。

「俺が今後の人生を失う！お前らの命が懸かっていると思え！いいな！」

あ、そこなの？正直そこはどうでもいいや。

こうして、オレたちは仲間の声援を受け、準決勝に向かうのだった。

やはり勝利に犠牲は付き物

『お待たせいたしました！これより準決勝を開始したいと思います！』

オレたちが到着すると審判を務める先生のアナウンスが流れた。どうやら時間ギリギリだったらしい。

『出場選手の入場です！』

さてと……

「行くぞ！」

「おうっ！」

拳をぶつけ合い、入場し、お客さんの前に立つ。向かい側からは対戦相手の霧島さんと木下さんがやってきた。

「まさか、Fクラス生徒がここまで残るとは正直予想外だわ」

木下さんが疑問とも侮蔑とも取れそうな言葉を発す。まあ、確かにそれは思ったけどね。

「予想外ねえ。まあ、頭が足りていなかったということだ」

「へえ。言ってくれるじゃない。でも不思議ね」

「何が？」

「もしFクラスから優勝者を本気で出そうと考えるなら、姫路さんと光正君。この二人がペアで来られたらかなり優勝の可能性があったと思うのだけど」

まあ、一理あるね。少なくとも島田さんより点数的には上だし……でもそれやると本来の目的が達成されなくなるんだよな……。

「そこは雄二に聞いてくれ。何でもオレたちは雄二に参加するように言われたからな」

「坂本君が？」

「ああ、優勝商品が狙いらしい」

「本人は？彼が出ればいいじゃない」

「生憎、Fクラスの喫茶店を経営するのに雄二の力は必要不可欠だね。こうして、大会に出る余裕があまりないんだよ」

「ふくん」

木下さんは納得したような感じになる。まあ、嘘はついていない。

「光正。雄二が言っていた作戦って?」

「ああ。木下さんと秀吉を入れ替える作戦」

「ということは今日の前にいるのは秀吉か!さすが秀吉。光正と話しているのを見ても本物としか思えない。——頼んだよ秀吉!」

「ふふっ」

「秀吉。木下さんの演技はいいから、早く僕らと——」

「秀吉?秀吉ってあのゴミのこと?」

木下さんがステージ脇の一角を指す。そこにあつたのは……

「ひ、秀吉!?どうしてそんな姿に!」

ボロボロにされ、しかも手足を縛られた秀吉の姿だった。

「何故だ!雄二の作戦は完璧だったはず!」

「……雄二の考えていることぐらい、私にはお見通し」

幼なじみってすっげえ……。

「ま、匿名の情報提供と……」

そっぴいなながら木下さんは指をさす。

「彼の情報提供のお陰かな?」

「身近なところに裏切り者があ!?!」

兄さんが驚くのも無理はない。その裏切り者はとても近くにいる存在だったのだ。そう、とても近くに……。

「やだなあ兄さん。オレはフェアにやりたいだけだよ」

まっ、その裏切り者ってオレなんだけどね。

「そもそも気付こうよ兄さん。オレが平然と木下さんと会話していたこと」

雄二の作戦を知らないなら迂闊に動き作戦が相手にばれるのはよくないし、知っているなら秀吉にボロを出させないために入れ替わる木下さんと話すのは得策では無い。まあ、考えが及ばなかったということ、雄二の考えた策は半分失敗だね。主にオレの裏切りのせいでもあるけど。

「……すまぬ雄二。ドジを踏んだ」

倒れていた秀吉が起き上がり、申し訳なさそうに唇をかむ。

まあ、裏切るつもりなら秀吉を事前に止めとけって話だが、こっちの方が面白そうだと思っただということだ。

「……………!! (パシャパシャパシャパシャ!)」

「ムツツリーニ! いつの間に!?!」

そして、カメラを構えたムツツリーニがオレたちの前に現れる。

「撮影そなんかして写ないで、早く秀吉真の縄後を売ほていて欲あげしてよ!」

「兄さん。本音が混ざってるよ」

本当に兄さんは嘘のつけない人だと思う。

「……………了解」

小さく頷くとムツツリーニは秀吉の縄を解いた。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

「アハハ、そっちこそギブアップしてくれるとオレたちが喜ぶよ。

……………それにギブアップしてくれたら霧島さんにメリットがあるしね」

「……………何?」

お、喰いついた。さてと…………

「ムツツリーニ。頼んでおいたものを!」

「…………… (さっ)」

「霧島さん! これを見るんだ!」

「なっ! 光正それは……………!」

「こうせええええええええええっ!」

隣にいる兄さんも驚く。フフフ、無理もない。ん? 今観客席の方からゴリラの鳴き声があったような……………気のせいかな。

「……………ムツツリーニ。何でそんなの作っちゃったの? 需要が無さすぎるよ」

「……………俺は仕事人。報酬さえ受け取れば、頼まれた仕事はしっかりこなす」

「か、かっこいい……………ん? でも、光正は何を報酬に用意したの?」

「ん? ああ、兄さん所有する成人向けの本」

「ちよつと待つんだ! 何勝手に人のシークレット本を報酬にしているのさー!」

「報酬は明日渡そう」

「……………分かった」

「分からなくていいから!」

まあ、報酬はしつかりと渡さないかね。

「これが欲しければ降参するんだ!」

「……………雄二の写真集……………欲しいかも……………私の雄二コレクションが増える」

雄二コレクションって何だ? 何故だろう。触れてはいけない気がする……………

「だ、代表!」

そう。オレが頼んでおいたものは雄二の写真集だ。決して、女装ものでは無い。ムツツリーニが手際よくやってくれたおかげで綺麗な一冊が出来た。

「では、少し中を見てみますか?」

「……………(こくこく)」

オレは霧島さんの元に届けに行く。すると……………

「お前は何を考えていやがる! 光正!」

息を切らし、大声で叫ぶ赤ゴリラ。もとい雄二がオレと入れ替わるようにして壇上に立つ。やれやれ……………

『秀吉と木下さんを入れ替えても無駄だよ。絶対にどこかでボロが出る。だったら降参させた方がいい』

霧島さんに写真集を軽く見せている間、オレはアイコンタクトで雄二と会話する。

『分かった。降参させるという案はいい。ただな……………何で俺の写真集が作られているんだよ!』

『霧島さんを釣るため』

『バカ野郎! その俺の黒歴史となりかねない本を寄越せ!』

『へいへい』

「……………あつ」

「ごめんね霧島さん。……………これ以上は降参してからだよ」

そう言い残し、もとの自分の位置まで戻る。

さて、これで彼女の頭に降参という二文字が選択肢として刻まれたはずだ。さあ、ダメ押そう。

『雄二。オレの指示通り台詞^{セリフ}を言ってくれないか？そうすれば確実に落ちる』

『ツチ。どんな手でも使えって言ったのは俺だ。分かっただろう』

フフフ。さあ、ゲーム開始だ。……念のため秀吉を呼んでおこう。

〈翔子、俺の話を聞いてくれ〉

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

〈俺はどうしてもこいつらを優勝させたい〉

「俺はどうしてもこいつらを優勝させたい」

〈もし、こいつらが優勝できたら俺はお前にプロポーズする〉

「もし、こいつらが優勝できたら俺はお前にプロポ——」

〈愛している、翔子〉

「——って誰が言うかボケエ！」

「兄さん！」

「オツケー……くたばれ」

「くぺっ!？」

兄さんが優しく？後ろから雄二の頸動脈を押さえる。よし……

「秀吉、頼む」

「分かったのじゃ」

ここで秀吉の出番。声真似で止めを刺す！

「だからここは譲ってほしい。そしたら必ず優勝させる！そして、この2人が優勝したら結婚しよう」

ちよつと意味が分からないが、最後だ。

「愛してる、翔子」

「……雄二。私も愛してる……」

攻略完了。というか、指示していない台詞が追加されていたような……気のせいか。

「ま、待て……。俺は愛してなど——」

「兄さん」

「うん」

「——こぺっ!？」

素直になれない奴だ。仕方ないから首をひねって静かにさせてあげたよ。……兄さんが。

「ふははははは！これで最強の敵は封じ込めた！残るは君だけだ、木下優子さん！」

「ひ、卑怯な……」

霧島さんが雄二の亡骸に抱き着いて、胸元に顔を埋めている。雄二の手足が力なく垂れ下がってるのは気のせいであろう。

「でも、負けるわけにはいかない！行くよ——試獣召喚っ！」

「ふふっ。それはどうかな？この勝負科目が保健体育だったことを恨むんだね！」

これは雄二に考えていた残りの半分だが……まあ、生かせるものは生かす。どれだけだ。

「いくよっ！試獣召喚！（新巻鮭）」

「……………試獣召喚」

オレと兄さんの言葉が重なり、その後、静かに呼ぶ声があった。出現する召喚獣は二体。片方はオレの召喚獣だが、もう片方はたとえAクラスの木下さんでも太刀打ちできない強さを持った——

「え!?片方、土屋君の……!」

ムツツリーニの召喚獣である。これは雄二の考えた秘策『代理召喚（バれない反則は高等技術）』である。ただし、この秘策には欠点がある。それは時間が経つとバレてしまう点だ。まあ、そんな欠点は……
「……………加速」

「ほ、本当に卑怯——きやあっ!」

初撃から腕輪の能力を駆使して沈めるので大した問題ではない。

『Aクラス 木下優子&霧島翔子

保健体育 321点&UNKNOWN

VS

Fクラス 吉井光正&土屋康太

「よしっ！僕と光正の勝利だ！」

正確にはオレとムッツリー二のな。

『……ただいまの勝負ですが——』

あつ、やべつ。物言いがつきそうだな。

「霧島さん。オレたちの勝ちでいいよね？」

「……それは」

「翔子愛してる（秀吉）」

「……私たちの負け」

霧島さんも認めてくれたし、これで正式な勝利だ。文句の言いようがない。

『……わかりました。吉井双子ペアの勝利です！』

勝ち名乗りを受け、オレたちは手を挙げ観客に向き直る……が、観客たちはオレたちを冷めた目で見ていた。まあ、そうだな。召喚獣の大会なのに召喚獣出てきたの一瞬だし。

「はい、霧島さん。約束のもの」

「……ありがとう」

「それじゃ、僕らはこれで」

とりあえず、ペコツつと一礼。罵声が聞こえてくる前に教室へ撤退しよう。

「光正。なかなかの読みじゃったな」

「まあね。でも兄さんとムッツリー二の代理召喚も成功して良かったよ」

「………作戦勝ち」

「僕ら四人のチームワークの勝利だね」

これで残るは決勝だ。さて、気合を入れ直すか……。

「ところで、雄二をあのままにしておいて良いのか？」

「え？別にいいんじゃない？」

「何か問題あった？」

「そうか。二人が言うのであれば良いのじゃが」

「まあまあ。それはこの清涼祭で話せなかつた分ということだ」

「そうそう。それに雄二もたまには素直になるべきだと――」

「霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとおったので心配になつての」

「き、霧島さん！雄二には店の経営があるからクスリは許して！」

「雄二はまだ必要不可欠な存在なんだ！頼むから今は勘弁してくれ！」

引き返したオレたちが見たのは、虚ろな目をしてタキシードに着替えている雄二の姿だった。

暴走と救出

「明久、光正。今日という日はお前らをコロス」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ?」

「正気に戻ってよかったじゃん」

腹を殴り、薬を吐かせた後で冷水につけたら、なんとか雄二は正気に戻った。うーん。やはりというべきか身体が頑丈にできているように思える。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか」

「そーだそーだ。相手が霧島さんって時点で雄二の策は詰んでいたんだよ」

「ぐっ。それを言われると反論できん……」

どうにも雄二は霧島さんが相手だと冷静に物事を考えられていないように見える。やれやれだ。ん?オレはって?そんなオレは常に落ち着いている。どんな状況でも冷静に考えているさ。

「ところで姫路や島田は教室にいるのか?」

「え?まだ確認していなけど、いるんじゃないの?」

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思うんだが……」

また、妨害があるかもしれないということか。どうやら、兄さんも材料取りに行った時襲われたらしいし、可能性は十二分にあるか。

「……………雄二」

教室の前まで戻ってくると、ドアの前に立っていたムッツリーニが駆け寄ってくる。どうやら、雄二の懸念は当たってしまったようだ。

「ムッツリーニか。何があったのか?」

「……………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええっ!? 姫路さんたちが!」

全く、何故こんなに次から次へと問題が発生するんだよ今年の清涼祭。でもまあ、彼女たちが連れてかれてもオレ個人には支障がな――

「……………後、客で来ていた天草も」

「……………(つかつか)」

「おい光正。どこに行く」

「攫ったクソ野郎共を葬りに行く」

許せねえ。紫乃を攫うとはいい度胸だ。骨の髄まで後悔させてやる。

「つたく。明久が騒ぐのは目に見えていたが、お前まで怒るとは正直予想外だ」

「怒る？違うよ雄二。オレはキレているんだよ」

「ってそんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの!?どこに連れてかれたの!?相手はどんな連中!？」

「ああもう。お前から一旦落ち着け。これは予想の範疇だ……天草も連れてかれること以外」

よかった。雄二が紫乃が連れてかれることを予想の範疇だとか抜かしやがったら今ここで葬るところだった。

「え？そうなの？」

「もう一度俺たちに直接何かを仕掛けてくるか、喫茶店にちよっかいを出すか。そのどちらかで妨害仕事を仕掛けることは予想出来ていた」

「なんだか随分と物騒な予想をしていたんだね」

「引つかかることが随所にあったからな」

「それに関してはオレも同感だ」

今回ばかりは頭に来ている。自分でもここまでキレるとちよつとしたことすべて吹っ飛びそうだ。

「ムツツリーニ。連れてかれたところは分かるか？」

「……………もちろん」

ムツツリーニが取り出したのは何かの機械。

「なにこれ？ラジオみたいに見えるけど」

「……………盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

「場所が分かれば、後は簡単だ」

犯人をぶっ潰し、人質を開放する。実にシンプルだ。

「かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様方？」

「そのニヤついた目は気に入らないけど、今回は雄二に感謝しておく

よ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「それが向こうの狙いだろうな」

ただ、タイミングが遅い気がする。後一時間早ければオレたちの大会に支障を出せたが……

「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムツツリーニ、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」

「……………わかった」

「雄二、僕らはどうするの?」

「何を抜かしているの兄さん?」

「王子様の役目は決まっているだろう?」

茶目っ気たっぷりの目がこちらに向く。緊急事態でなければ、目潰しを仕掛けていただろう。

「王子様の役目って?」

「お姫様をさらった悪者を退治することさ」

『さてどうする?坂本と——吉井双子だったか?そいつら、この人質を盾にして呼び出すか?』

『待て。吉井双子ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』

『坂本って、まさかあの坂本か?』

『ああ。出来れば事を構えたくないんだが…………』

『気持ちに分かるがそれも行かないだろ?依頼はその三人を動けなくする事なんだから』

ムツツリーニの持っていた盗聴器から、音楽に混じって会話が聞こえてきた。

依頼？オレの中で依頼したと思われる人物が一人しかピックアップできられないのだが……

(雄二、光正。この連中って……)

(ああ。黒幕に依頼されたそこのチンピラだろうな)

(というか雄二。いい加減に放せ)

(お前は放すとすぐに乗り込んでしまうだろうが。もう少し耐えろ)

ムツツリーニに案内されたのは、文月学園から歩いて五分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに紫乃たちは連れて行かれたみたいだ。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよ！』

『そうですよ。小さい女の子を盾にするなんて、最低な行いだと思わないのですか？』

聞こえてきたのは島田さんの怒鳴り声と明らかに怒気を含む紫乃の声だ。成程な。葉月ちゃんを捕まえて人質にしているから、抵抗できずに此処へ連れて来させられたのか。

『お姉ちゃん、だつてさ！かわいー！』

『ギャはははは！』

外道共の声はおよそ十人。余裕では無いが十分対処出来る人数だ。上等だ。今すぐその口を黙らせてやるよ。

(待て明久に光正。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムツツリーニがうまくやるまで待っている)

(……わかったよ)

(放せ雄二。そろそろ限界だ)

(お前が暴走すると止める奴がいなくなる。耐えてくれ)

『……灰皿をお取り替え致します』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！ズリー！それなら俺二番ね！』

パーティールームの中から下品な笑い声が響き渡る。最早こんな奴等には手加減は必要ないようだ。

(ハナセユウジ……!)

(どんどん力を入れるんじゃねえ! 全力で押さえつけてるのがもう限界なんだ! いい加減に鎮まれ!)

『あ、あのっ! 葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さい!』
『だつてさく。どうする?』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな?』

『やつ! さ、触らないで——』

『ちよつと、やめなさいよ!』

『こんな事してどうなるか分かってるの!?!』

この紫乃の言葉を聞いた刹那。オレは直感した。
今出ていかなければ紫乃が傷付くと……

(お、おい! 光正!)

『あーもう。うっせえ女共だな!』

ドン、と何か突き飛ばした音。そして数秒遅れて聞こえるのはガシヤアーンというテーブルを巻き込んで倒れた音。

「こ、光正……」

「つてえな!」

蹴り飛ばされた不良が立ちあがり拳を構える……が。

「おせえよ」

「グハツ」

回し蹴りの要領で再び壁に蹴りつける。

「光正。どうしてここに……」

「オレだけじゃない」

すると、再びドアが開け放たれる。

「おじやましまーす!」

兄さんだ。

「光正君に……吉井君?」

「光正、アキ……」

「ハア? お前誰よ?」

ドンッ

「グハッ」

「おいおい誰がそんなこと決めたんだよ？」

何か勘違いした野郎の頭を掴みそのまま壁に叩きつける。

「おい！坂本にその狂ったやつ」

そこの狂ったやつとはオレのことだろうか？心外だ。オレは至つて正常なのに。というか雄二。君はいつの間にか乱入してきたんだね。

「このお嬢ちゃんがどうなつてもいいのかア？」

卑怯な奴だ。葉月ちゃんを羽交い絞めにして人質に取るなんて。

「いいか？おとなしくしているよ？さもないと、ヒデエ傷を——」

「……………負うのはお前」

ゴインッ

「あがあっ！」

白目をむいて倒れる外道。その背後にはクリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立つムツツリーニが。これぞ、因果応報つてやつだらうか？

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

「葉月っ！良かった……。怖かったよね…………？」

解放された葉月ちゃんを島田さんが抱きしめる。

「おいおい狩りの時間はまだ終わつてないぜ？死にたい奴からオレの前に——」

「光正！」

「……………おい、どういうつもりだ」

若干涙目の紫乃がいきなりオレを抱き締めてきた。

「光正。いいから落ち着いて。私はほら、光正のおかげで無傷だから……………ふう。悪かった暴走して。大丈夫か？」

「うん。良かった。さっきまでの光正、今までで一番怖かったから」

そう言いながら、紫乃がオレの頭を軽く撫でる。

「もう大丈夫だ。お前もオレも」

何とか正気に戻れたみたい……………というかオレつてそんなに怖かつ

たのか？

「吉井君っ！」

向こうでは姫路さんが腕を広げて兄さんに駆け寄り、兄さんは姫路さんに抱き付くつもりであったが……。

「吉井い！ヤスオをよくも！」

「ぐぶあっ！」

チンピラのパンチが迎えてくれていた。

「……………!!」

「な、なんだコイツ？血の涙流してるぞ……………？」

姫路さんからの抱擁を邪魔された事に兄さんの怒りは頂点になった。うん。やっぱり、兄さんはバカだ。

「姫路さん、ちよつと待ってて！ コイツをシバき倒した後でもう一度——」

「姫路に島田！後、天草も！お前らは先に学校に戻っている！」

「雄二！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

まあ、妥当な判断だ。

「くはははは！それにしても丁度良いストレス発散の相手が出来たな！生まれてきたことを後悔させてやるぜえっ！」

「じゃあ、オレも行ってくるよ、殺さない程度にね」

「うん。気をつけてね」

オレはさつきまでよりも清々しく穏やかな笑みを浮かべて不良に相対する。

「こ、これが坂本か……………！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……………」

「ってか何だアイツは!?さつきよりもさらに笑顔だぞ！」

「あんな清々しい笑顔で人をボコれるか普通!？」

今のオレはとても気分がいい。さあ、もつと悲鳴を聞かせてくれ！

「ところで、どうして秀吉だけ縛られているの？」

「……………とても良く似合ってる」

「姉上に縛られた時の縄が残っておつての……………それと、何故かワシだけ随分と尻を撫でられたのじゃが……………」

「あはは……………」

「ところで光正のやつは大丈夫かの？狂った笑顔から今では純粋な子供が見せるような笑顔に変わったんじゃないが……………」

「うん。人を殴りながら笑顔の時点でもう人として終わっていると思う。実の弟だけだ」

「……………救いようがない。明久の学力と同じくらいに」

「まあ、そうじゃのう」

「ちよっと待つんだ！僕の学力がアレと同等の酷さって言うのは納得できない……………って二人とも僕から目を逸らさないで！お願いだから目を合わせて！」

ババア召喚

誘拐騒ぎも解決して、喫茶店の一日目も終了したFクラスの教室。そこにはオレと雄二、兄さんの三人が残っていた。

「お前ら。そろそろ来る時間だぞ」

テーブルで読書をしていると雄二がそう言いだした。

「？来るって、誰が」

「誰を呼んだんだ？」

「ババアだ」

ババア……あー学園長ね。

「学園長がわざわざここに来るの？」

「本当に？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」
「話ねえ……ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

「そうだよ。相手はオレたちより歳が遥かに上なんだよ？用事があるならオレたちが動かないと」

「用事もクソも……この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因が——えええっ!？」

雄二が当然のように告げた言葉に兄さんが驚きの声をあげる。

まあ、オレも今回の事件の黒幕は教頭だと思うが、その原因が学園長にある……少なくとも今回の事件の一端は学園長の責任だと思っている。

「あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！」

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分な挨拶だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室の扉が開く。

「来たかババア」

「久し振りババア」

「でたな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

学園長はあくまで自分は被害者ですといった様子で肩をすくめる。

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話してないのは充分な裏切りだと思うがな」

「同意」

「……ふむ……。やれやれ。賢しいヤツらだと思っていけど、まさかアタシの考えに気づくとは思ってなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていた。あの話だったら、オレたちに頼む必要性がない。もつと高得点を叩き出せる優勝候補を使えばいいから」

「あ、そういうえばそうだね。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段を取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

つまり、効率が悪くてもオレたちを擁立する必要があったということだ。

「話を引き受けていた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「率直に言えば、オレたちを召喚大会に出場させる為にわざと渋った。そうでしょ？」

「そういうことになるな」

ようやく兄さんも少しずつこのロジックが分かり始めたようだ。

「明久。あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案？えーっと」

「科目を決めさせろってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したワケかい」

「ほんと、ちゃっかりしているよね」

ババアの筋書きに乗ったと見せかけて実は手を打っておく。うん。狡猾で合理的だ。

「ああ。めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑んだ」

「提案を呑んだということは、他の人たちじゃなくてオレたちが優勝しないとババアは困る」

「他にも学園祭の喫茶店ごときで悪質な営業妨害が出た。そして、俺らの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したりしたのが決定的だった。ただの嫌がらせならここまでではない」

確かに。今思うとムツツリーニが盗聴器を取りつけていなかったら取り返しのつかないことになっていただろう。……………盗聴器を取りつけたことは問題だけど。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……………すまなかったね」

と、突然ババアが頭を下げてくる。ええ!?あのババアがあ!?

「アンタらの……………特に兄の方の点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えてたんだろうけど……………決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

もしかすると、このババア。オレたちが思っているよりいい人かもしれない。

「まあ、敵もオレたちを甘く見過ぎだ。オレと雄二が策をしつかり考えればこんな大会ぐらい問題なく決勝まで進める」

「……………あれ?結構問題の連続だったような……………」

それは言わないお約束だ。

「さて、こちらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそっちの番だ」「はあ……………。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……………」

「どうせ、オレたちはここまで関わらされたんだ。話して下さいよ。全部」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして、学園長はオレたちに真相を明かした。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないの

さ」

だろうな。予想通りだ。

「ペアチケットじゃない!? どういうことですか!？」

「アタシにとつちやあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品なのさ」

「もう一つ……『白金の腕輪』だな」

「あの特殊能力がつくとかいうやつだろ」

白金の腕輪は二つある。一つはテスト点数を二分して二体の召喚獣を同時に召喚することのできる腕輪。もう一つは教師の代わりに立会人になって召喚フィールドを作ることのできる腕輪。こつちは使用者の点数に応じてフィールドの範囲が変化し、科目はランダムに選択されるらしい。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る? 回収して欲しいじゃないわけじゃなくて?」

「あのな……。回収が目的なら俺たちに依頼する必要ないだろう? そもそも、回収なんて真似は極力避けたいだろうし、な」

雄二が学園長を揶揄するように話を振る。

「坂本といい吉井弟といいよく頭が回るねえ……。そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術の革新は使って見せてナンボだからね。デモンストレーションもなしに回収したら、新技術の存在自体を疑われることになる」

なるほど。できればということ是最悪の場合はそれも考慮していいんだらう。

「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか?」

「……欠陥があったからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長。

「で? その欠陥はオレたちなら問題ないのか?」

「そうさ。アンタたちが使うんなら暴走は起こらずに済む……って言いたいんだけどね。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけだからね。他の生徒には頼めなかったのさ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

雄二が苦笑いする。

「えっと、つまり……？」

「アンタらみたいなのが『優勝の可能性のある低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められてるってことでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

本当に兄さんはバカだ。よく今のを褒められていると捉えられるね。

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……もう片方の同時召喚用は、現状だと平均点程度で暴走するからそっちは吉井兄専用にと」

「雄二、これは褒められていると取っていいだよな？」

何故？

「いや、バカにされてる。物凄い勢いで」

「なんだとババア」

「いい加減自分で気づけ！」

流星に雄二が怒鳴る。

「ん？でもババア。さっきオレたちが使うなら暴走が起きなくて済むって言ったけど本当か？」

「正直言つて、吉井弟。アンタは白金の腕輪を使えないさね。だから、明日は決勝以外の科目の総合点数をその兄と同じくらいまで調整してくれさね」

「ん。分かった」

「まあ、それでもアンタに持たせておくにはいろんな意味で危険な代物だが」

うーん。となると明日の朝、数学と化学と物理辺りを0点にして、ちよこちよこ修正かけるか……。よし。もし白金の腕輪を手に入れたら雄二にあげよう。

「話を総合すると、俺たちの邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間……他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「いいかい兄さん。オレたちの邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るってことでしょ？そんな学園の失態をよしとするヤツなんて、この文月学園に生徒を取られた他校の経営者の可能性が高い。違う？」

オレの説明を聞いてようやく納得したようだ。やれやれだ。

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかなからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いないさね」
「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」

「まあ、どうせ買収されたとかくだらない理由だろ」

そうでなければ協力する理由が見当たらない。

「あのさ、コレって——かなりまずい話じゃない？」

「一言で言えば、文月学園の存続問題だな」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われている。そんな状態で暴走などという問題が起これば、学園そのものの存在意義も問われるだろう。

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したら——」

「残念ながらそうもいかない。決勝戦の対戦相手を知っているか？」

雄二がズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を追ってくとオレと兄さんの相手は、

「常夏コンビ……」

「あの二人は教頭サイドの人間。堂々とお客さんたちの前で暴走を起こすだろう」

「つまり、回収の交渉の余地はない」

「悪いが、あんたたちにはなんとしても優勝してもらおうしかないんだよ」

学園長の表情も硬い。事態はすでに深刻になってしまっている。

「まさかこんなことになっているとはな」

雄二までそんなことを言い出す。オレもここまでの事態に発展しているとは微塵も思っていなかった。

「学園長、質問です」

「なんだい？」

そんな中、兄さんがいきなり学園長に質問をする。

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起らないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

なるほどねえ。理解したよ。

「二人とも。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうだな。帰ってやることもあるし——明日も早いしな」

「うんうん。もうここにいる意味もないしね」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るから……アンタたち。明日は頼んだよ」

「はい」

こうして学園祭初日は幕を閉じた。

勉強しよう

「光正。その……一緒に帰る?」

玄関に行くと紫乃が待っていた。後ろには兄さんと雄二がいていつもならいじられたり嫉妬されたりしていたが、今日の二人はそんな事する余裕がない。まあ、オレも本当は一分一秒が惜しいが……

「じゃあ、帰るか」

……オレにはここまで待っていてくれた紫乃に対し、そんな断るという残酷な答えを与えることができなかった。別に待っていたのは本人の勝手だからオレには関係ないし断っても気に病む必要はない……気に病む必要はないんだが……

「兄さん。食材買って帰るから遅くなる。夕食は三人分でいいな?」

「うん。分かった」

「悪いな光正」

「気にするな」

兄さんと雄二は足早に家を目指す。そりやそうだ。時間は有限なんだ。後十何時間で兄さんの日本史をどこまで引き上げられるか。これが決勝の鍵となるのだから。

「じゃあ、帰るか……」

「うん……手繋いでいい?」

「いいよ」

「ありがとう」

今日の紫乃の手は前繋いだ時よりもどこか儂げで弱弱しく感じた。歩き始めて十数分ぐらい経っただろうか。

「ちよつと、その公園で休憩しない?」

「分かった」

ちよつと小さな公園があったので休憩がてらベンチに腰掛ける。

「悪かった紫乃。お前を巻き込んでしまって……」

「え……?」

「不良に連れてかれた件。オレがもつと警戒すべきだった」

オレが営業妨害に関してもつと重く受け止めていたら?もつとあ

らゆる可能性を考慮して対処していれば？紫乃が巻き込まれることも紫乃に……いや、彼女たちに怖い思いをさせなかった。これは完全にオレのミスだ。対処を怠った。相手を軽視した。それゆえに起きてしまったものだ。

「こ、光正は悪くないよ……それにほら。私は気にしていないし……」
「嘘だ」

「え……？」

「本当はすごく怖かった。今も怖い。でも、オレに心配させたら明日の決勝戦にも迷惑かもしれないし、オレにも迷惑がかかるかもしれない。だから、気持ちを抑えている……違う？」

「そ、そんなこと……」

「オレは知っている。紫乃は普段は強く見えても実は弱いことも。自分より他人を優先させてしまうことがあるのも。でもさ、今ぐらいは感情をさらけ出してもいいんじゃないか？」

そう今ぐらいは。少なくとも、この事が本当に意味で気にしなくてもいいようにするには必要なことだ。

「うう……ほ、本当は怖かったし、今も怖い……」
やはりか。

「ほら、胸を貸してやるから……思う存分泣いてくれ」
そう言つて抱き寄せる。

「こ、光正……うわああああああん」

「ごめんね光正。あんなに泣いちやって」

「いや、気にしなくていい」

どれぐらい経つただろうか。かなりの時間紫乃は泣き続けた。

……まあ、オレの制服の前が涙で濡れたんだけど気にしない方向で。

「制服汚れちゃったね」

「ん？ああ、俺が何とかするからいいよ別に」

「脱いで」

「はい？」

いま彼女は何と言ったのだろうか。オレには理解できない。

「私が洗っておくから脱いで」

「ええーっと。新手の追いはぎ？」

「こういう時はなんて言えばいいんだっけ？ああ……」

「きやーこの変態ードスケベー貧乳ー（棒）」

「ちよつと待って。明らかに最後に貧乳はいらないでしょー！」

「あはは。まあ、制服のことは気にするな」

「制服は今はおいというて、何。さっきのは弱った私に対する追撃？」

「お、それも楽しそうだね。でも今はいいや」

さすがに今はマズい気がする。本当の意味で彼女を壊しかねない。

「ねえ、光正。もし私に何かあったらまた助けてくれる？」

そんなの決まっているじゃないか。

「もちろんだ。何度でも助ける」

たとえ自分を犠牲にしようとも。

「ふふ、でもどうして？」

「ん？」

「どうして、私を助けてくれるの？」

どうしてってそんなの……あれ？どうしてだろ？紫乃のことが好きだから？いや、それでは理由が安直過ぎるし……あれれ？何でだろう？そもそも助ける理由なんてあったっけ？いや特に今回の場合は聞いた瞬間一瞬で思考も吹っ飛んだけど……あれ？何で思考が吹っ飛ぶ程にキレたんだ？え？どうして……？

「ふふ。相変わらずの光正で安心した。答え、いつか見つかるというね」

「いや、そもそも答えがあるのか分からないんですけど……」

「そこら辺も含めて考えるのは大切だよ」

「ええ……」

「これは難題だ。理由なんてないんじゃないかな……？」

「ありがとう。家まで送ってくれて」

「ああ、明日の朝も迎えに来るよ」

「ふふ。これから毎日迎え来てくれると嬉しいけどなあ」

「いいよ。毎日迎えに行つてやる。ただし、オレの時間に合わせろよ？」

「うん。じゃあまた明日！」

「……つてあれ？何でオレ毎日迎えに行く的な発言をしたんだ？クソ面倒なはずなのに……」

「まあ、今は明日の決勝戦だな」

「オレはスーパ－の袋を抱え、紫乃の家を後にした。いつ食材を買つたんだ！つて？そんなのアイツが泣き止んだ後に決まつてるじゃないか。」

「家にて……」

「二人ともご飯だよ」

夕食が出来たので二人を呼ぶ。二人というのはもちろん雄二と兄さんである。雄二は一旦家に帰ってから荷物をまとめてオレたちの家に来た。雄二も兄さんに対し思うところがあったのだろう。

「悪い。先食べててくれ」

「後、五分……」

「冷めても知らないよー」

「というわけなので、」

「いただきます」

え？二人を待たないのだった？ああやって言う時は自分がいつ食べれるか分からなくなるパターンなので、先に食べておくのが賢明だ……と。

「風呂準備もするか」

お湯をためるのに時間がかかる以上、いつでも入れるように準備するのは大事だ。思い立ったら即行動。風呂入れてくるか……

「あれ？五分じゃないの？」

風呂にお湯を入れ始めて、食事のテーブルに戻ってくると兄さんと雄二がいつの間にか食べ始めていた。

「さすがに腹減ってな。集中が持たなかった」

「そう」

兄さんは無言で食べ続ける。

「それにしても兄さんの集中力は凄いよね」

「ああ。見ていて思うのだが……こいつ普段から勉強していればもっと賢くなってたんじゃないのか？」

「普段から勉強できないのが兄さんだから」

普段から勉強していればもう少しマシになっていたのだと思うと、ちよつと頭を抱えなくなる。

「ここ数日で日本史はある程度伸びているはずだ。ここで最後の仕上げがどこまで出来るかだが……」

「ああ。昨日までと同様、前半は雄二。後半はオレがやる」

「とりあえず、俺は限られた時間で徹底してやるから、残りは頼むぞ」「ああ」

補足だが雄二を交えての勉強会は今日が初めてじゃない。清涼祭の大会に出場が決まってからのここ数日。特に日本史を重点にやってきた。お陰でオレも雄二も兄さんも寝不足な日々が続いているが、明日の決勝戦は学園の存亡がかかっている以上そんなことも言えない。

「ごちそうさま」

一応兄さんの為に栄養バランスをいつもよりよく考えて夕食は作っている。別に縁起を担ぐ気もないので豚カツとかそう言うのは

度外視して作った。

「オレもごちそうさま。さて、格ゲーやるか」

「……お前はそれが練習になると思っているのか？」

「まあ、召喚獣の操作というか、立ちまわり方を考えるにはオレは格ゲーが今のところやりやすいと思うけど……あーもし、白金の腕輪を手に入れたらあれか。それでフィールド貼って操作練習すればいいのか」

格ゲーでもいいけど、それはあくまで参考程度にしか考えていない。あまりその感覚でやり過ぎると相手がゲーマーだった時に簡単に読まれてしまう。うん。やはり、実戦こそが一番の練習だね。

「んじや、やりますか」

「本番は明日だしな」

オレたちの夜はまだまだ長いようだ。全ての決着は明日つける。その思いを秘め、ゲームに向かった。

決勝戦の朝は早い

「紫乃。お前のことが好きだ」

目の前にはいつもと雰囲気が違う彼の姿。

「オレと付き合ってくれないか?」

ストレートな告白。この付き合っては前の言葉から考えるに告白と呼ばれるものだろう。そう。私は光正に告白されたのだ。だって私の答えは決まっている。

「は、はい。喜んで」

「よかった……」

そして彼は身体を二、三步分私に近づいて、顔を私の顔に近づける。もしかしてこれはキスしようとしているのかな?

そう悟った私は彼を受け入れようと目を閉じた――

しかし、待てども何も変化はなかった。目を薄っすらと開けてみると見知った天井……私の部屋の天井だ。あれ?これはもしかして

……

「夢オチイイイイツ!？」

え？今までのが夢だというの？確かにあの光正が私が好きなのはあり得ないと思うけどさ！ええ!?!まさかこんな夢を見るほど私は彼のが好きになつてしまったの!?!というか、落ち着いて考えよう。何でキスシーンの前で目が覚めたの私いー!?!そのまま夢の中にいれば光正とあんな事やこんな事が出来たのに……!？」

「紫乃。起きたのなら朝食よ」

ドアの向こうから呼ぶのは母の声。良かった。いつも通りだ。ということは、さっきの声は外には聞こえてな……

「どんな夢を見たか知らないけど、朝から夢オチだなんて叫ぶ普通?？」

「聞こえていた!？」

「お、お母さん！少し弁明させて!？」

「いいのよ紫乃。私の娘の頭がおかしいことは今に始まったことじゃないわ」

実の娘に対し頭のおかしいだのストレートに言える人は珍しいと思う。というか……

「頼むから！弁明させてください!？」

「分かつてるから。大方、意中の男子が夢の中に出てきて告白される夢でも見たんでしょ？我が娘ながら純情な乙女ねえ」

この人はエスパーじゃないかと思う。いや、ここで当てられるのは尺だ。胡麻化さないと……

「ちちち違うから!べ、別に光正に告白されてないから!？」

「ほうほう。予想通りお相手は光正君と」

しまった。私としたことが墓穴を掘ってしまうとは。

「去年から名前が出ている光正君。一度会ってみたいものねえ」
「会わなくていいから!？」

この後の朝食はいつもよりにやけている母を目の前にしながら食べるのであった。

というか、どうしよう。あんな恥ずかしいこと考えておいて朝から光正の顔見れないんですけど……。

徹夜してしまった……。決してゲームで徹夜したんじゃないよ。兄さんの勉強なんだけど……。うん。まさか徹夜することになるとは思いもしなかった。……ただえさえ睡眠不足なのに……

「ふあああああ……」

大きな欠伸を一つ。さすがに眠たいや。でもまあ、今日は大事な日だ。よし、今日の夜は寝るから頑張つて働くか。

「光正。待たせてごめんね」

紫乃の家の玄関前。家から出てきた彼女は一言目にそう言うが……

「おはよう紫乃。大丈夫？顔赤いけど……」

「こ、これは違うよ！」

何が違うのだろうか？

「きつと光正の顔が白くなっているから相対的に赤く見えるだけだよ！」

「いや、オレの顔が白くても自分で見えないから比べられないけど……」

「というか、オレってそんなに生氣のない顔している？」

「さ、さあ！行こうよ光正！」

あれ？もしかしなくてもごまかされた？無理やり手を引いていくが……

「あれ？紫乃の手って、こんなに熱かったっけ？」

後、手汗も凄いが……。まあ、これを言うと彼女も可哀想だし、オレ

は紫乃だから特に気にしない。

「これも違うのよー」

だから何が違うんだ？

「きつと、光正の心が絶対零度の冷たさを誇っているから私の手が熱く感じるだけなのよー」

グサツ、という効果音がびったりだろうか？言葉という槍に心臓を貫かれた感じだ。

え？オレってそこまで冷たいかな……多少は温かさもあると思うんだけど……あれ？睡眠不足で頭が回ってないや。あーしかも手ではなく心が冷たいって言われると。

「そうだよね……オレ。心冷たいもんね……別に分かったことだし、気にしてないよ……うん」

「わわっ！誤解で光正の心は温かいよ」

……今日の紫乃は大丈夫かな？

アニメで言うところ、目がぐるぐる回って絶賛混乱中って感じがするんですが……

「どのくらい？」

「液体窒素ぐらい」

わーい。80℃ぐらい温かくなっただけでもー190℃ぐらいで氷点下だけどく

「うん。紫乃くとりあえず、静かにしてようか？心を落ち着けてね」

「ご、ごめん……取り乱したりして……」

「いいよ。紫乃のそういうところ可愛いから。見て癒されるから」
本当に癒される。ここまで疲労している状態の時には特にだ。

「へっ……／＼／＼」

つと、また手から伝わる熱が大きくなっている。ふむ。冬とかだと簡易なカイロになりそうだ。

学校に着く頃にはだいたいぶ落ち着いたのであろう。普段通りの彼女に戻った気がする。

日本史とその他諸々のテストを受け終え、教室に入る。

「おはよう雄二。姫路さんに島田さんもおはよ」

「光正もおはよ」

「光正君ですか。どこに行っていたんですか？」

「兄さんと一緒にテストをね」

兄さんと違い日本史だけ受ければいいというわけでは無かったので時間がかかったけど。

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ……」

兄さんもさすがに眠いらしい。まあ、オレは頑張って耐えるけど。

「もう、そんなんで決勝戦は大丈夫なの？相手は三年生らしいじゃない」

「そうみたいだね。それも結構上位の人たちみたいだし」

「そういえば、そうだったな。変態とかですっかり忘れていたけど変態Ⅱバカでないんだ。油断せずに行かないと。」

「大丈夫だよ。三年生はその分テストも難しいからね。ハンデはないよ」

「そういうことじゃなくて、ウチはアンタたちの……特にアキの実力を心配しているんだけど……」

呆れたような島田さんの台詞。ベストは尽くした。後は知らん。

「そんな心配をしている暇があるなら喫茶店の準備でもしてくれ。ふわあ……」

「そういえば、雄二も連日夜遅くまで付き合ってもらったっけ？そりゃ、眠くて当然だ。」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえないかな？……このところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

「そうだったんですか。それならゆっくり休んでください」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「そうそう。オレたちに喫茶店は任せてくれ」

「……………（コクコク）」

全くこの二人は仕方ない。ここはオレの腕の見せ所だ。

「そいつは助かる。これで俺らも安心して熟睡できそ……………おい光正。お前今なんて言った？」

「え？オレたちに喫茶店は任せてくれと言ったんだが？」

何か間違ったことを言ったのだろうか？

「……………お前も休め」

「大丈夫だよ。働けるから」

「あはは。光正は頑固だからね……………どうするのさ雄二？」

「まあ、でも予想の範疇だからな。そろそろ回収屋が来るはずだ」

回収屋さん？何を回収するつもりだろう？

ガラツ

ドアが開くとそこには……………紫乃がいた。そして近くまで来ると

……………

「来て」

首をつかまれ抵抗出来ずに連れてかれる。えーつと……………回収屋さんが紫乃で回収物がオレか。というか、オレはどこに連れてかれるんだ。

「……………」

「そう言うわけで、光正もいないが頑張ってくれ」

「分かったわ。そうそう、起きられそうになったら起こしてあげるけど……………必要？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえっ？」

「十一時？試合は一時からじゃなかった？」

「一番混み合うお昼時ぐらいは手伝うよ。光正もいないしね」

「んじゃ、十一時には俺も起こしてくれ。こいつらと違って大会もないしな。屋上で寝ているから。ほわあ……………」

「それなら僕も屋上にいくからよろしくね」

光正が眠りについてから三時間ぐらゐが経過しただろうか。現在は十一時くらいだ。あの後渋る光正を連れて行ったのは保健室。理由としては、ここなら静かに寝せられると思ったからだ。

でもまさか、光正があゝの状態で働くつて翔子経由で聞いた時には驚いた。それだけ、彼はクラスに迷惑をかけたくなかつたのだろう。変なところで相変わらず真面目だ。本当に相変わらずだ。

今彼はどんな夢を見ているのだろうか？私の出てくる夢……だと嬉しいかな。

「ねえ光正。私たちの出会い覚えてる？入学式で私たちは出会ってここまで来た」

あの頃の私からしたら想像もつかないだろう。ここまで光正の事を好きになるなんて。

「あの頃から……いえ、私が貴方を知る前から貴方は優しい人なのよ。何だかんだ貴方は言いつつも自分をいくらでも犠牲にして他者を助けようとしているよね」

そう。私の料理や昨日の不良の件。その他にもいろいろとあるが……

「私は貴方のことが好きです。容姿だけでなく、その優しいところも全部ひっくるめて好きです。大好きです」

これは恋だ。今なら自信をもってそう言える。私は光正が心の底から好きなんだ。

「ごめんね光正……」

私は寝ている彼に近寄り……

舞台は整った

「……えーっと。光正……いつから起きていたの？」

しばらく硬直していた彼女が口を開く。いつから起きていたといわれましても……

『ねえ光正。』つてところからかな？」

「……それって全部じゃない……」

おっと、するとオレはタイミングよく起きたことになるな。我ながら凄たいタイミングだ。

目の前には両手で手を覆い隠した紫乃が耳まで真っ赤にして座っている。どうしよう凄可愛い。

「でもまさか、寝ていて、無抵抗な人間に対してキスしてくるとは……なかなかやりますなあ。紫乃さん」

「言わないで。これ以上は恥ずかしくて死にそう……」

「しくしく。オレのファーストキスだったのに……」

嘘では無い。少なくともオレが覚えている限り初めてだから。ただ、ファーストキスとか正直気にしたことがないが。

「えーっと。私も初めてだから……おあいこで……」

「そうなるわけないじゃん」

「ですよー」

明らかに落胆している紫乃。もしかして、嫌われたとでも誤解しているのかな？このままだと、逃げだしそうだな……誤解したまま。

「紫乃。ちよつといい？」

まだそこまで体力が回復していないがそんなこと関係ない。気力と気力で立ち上がる。

「え？な、なに……？」

彼女は告白してきた。まあ、寝ているオレに対してだが。それでも、答えぐらいは返そう。……いい機会だしね。

「紫乃」

「……はい」

「オレもお前のことが好きだ。大好きだ」

「え……?」

嘘偽りのない本当の気持ちだ。

「オレと付き合ってくれ」

「……はい！喜んで」

そして、今度はオレから、紫乃にキスをする。

「光正……」

「紫乃……」

正面から彼女の顔を改めて見る。やっぱり可愛い……ああ、全身から力が抜けて……

「つて、光正!?大丈夫ですか!?!」

「大丈夫だ。問題ない」

「問題しかないですよ!?!ほら、横になつてください!」
支えられながら改めてベッドに横になる。

「悪いね……」

「こんな調子で決勝戦大丈夫ですか……?」

「気合で治す」

「まさかの精神論!?!」

「多分、三十分あれば回復出来るはず……ということでおやすみ……」
「全く……おやすみ光正」

こうして、オレと紫乃は晴れてカップルとなったのだ。

「さてと。行こうか光正」

「そうだね。雄二、オレ達は抜けるけど大丈夫?」

「大丈夫じゃなくても行かないとマズイだろうが」

あの後本当に三十分ぐらいで回復させ、手伝いをするためにFクラスに戻ってきたが……結局オレは一時間。兄さんは三十分ぐらいしか手伝っていない。

兄さんは雄二やクラスメートの計らいで寝かせてくれたそうだ。まあ、オレも元はと言えば雄二のおかげか。なんだかんだ言いつつもこのクラスの人は優しい。もっと普段からこの優しさを見たいよ……

「決勝戦なんだから気合入れなさいよ」

「後で私たちも応援に行きますね」

島田さんと姫路さんから声がかかる。昨日に引き続いてチャイナ姿の二人組。二日目の売り上げが好調なのも、彼女たちのおかげであろう。

「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ?」

「相手は腐っても格上。いろんな意味で油断大敵だぞ」

「……………優勝」

「分かってる。試召戦争の時みたいなハマはしないよ」

「油断も慢心もない。ただ全力で叩きのめすだけだ。じゃ、行ってくる」

秀吉、雄二、ムツツリーニの三人が突き出した手に軽く拳をあてて、オレと兄さんは会場に向かって歩きだす。

「決勝戦を前に最後の妨害がくるかもしれないって思ってたけど、何もなかったね」

「小細工が通用しないと諦めたんじゃない?それか、オレたちの居場所が分からなかったか」

「そっか。屋上も保健室も普通は人来ないもんね」

屋上は放送機器を使う人、保健室は人が来る場所で、この清涼祭中はいつもいない人がさらにいない。というか、保健室も先生いなかった気がするんだけど……まあいいか。

「喫茶店の方は秀吉とムツツリーニが違法品にしか見えないスタンガン常備で警備しているし」

「砦として、あの雄二もいるんだ。大抵の連中は逃げ帰っていくね」

……というかあのスタンガン。服の上からでも通電するって言うていたけど……やっぱりアウトだろ。

「よその心配はいらない。ただ、勝つだけ」

「そうだね」

それつきり特に会話もせず、黙々と会場に進んでいく。

「へえ、観客多いね」

「流石は決勝戦だね」

まあ、特に何も思わないけど。

「吉井君たち。入場が始まりますので急いで下さい」

オレたちの姿を見つけた係員の先生が手招きしている。うんうん。こうして係員まで用意されているということはやはり、決勝戦は違ってみただね。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスの声は今まで聞いた事のない声だった。もしかするとプロを雇ったのかもしれない。まあ、世間の注目を集めている大会だからね。可能性として充分に考えられる。

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください」

係員に軽く背中を押される。

オレと兄さんは頷きあって、観衆の前に歩み出て行った。

『二年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・吉井光正君です！皆様拍手でお迎え下さい！』

盛大な拍手が雨のように降ってくる。そう言えばこの観衆の中に姫路の父親がいるのかな？まあ決勝戦だからいるとは思うけど……お、紫乃発見、応援に来てくれたんだ。

『なんと、決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

おお。あの司会者は中々良いことを言ってくれる。そうすれば何処かにいるであろう姫路のお父さんには好印象だからね。

まあ、もちろんそれだけじゃなく、『試験召喚システムのおかげで、最低クラスの生徒もやる気を出して学力を上げている』と言うPRも含まれているだろうけど。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じくAクラス所属・常村勇作君です！皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！』
コールを受けてオレたちの前に姿を現したのは、昨日、散々迷惑をかけてくれた例の常夏コンビだ。同姓同名の二人組の線も考えていたけどどうやら違ったみたい。実に残念だ。

『出場選手が少ない三年生ですか、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

同様に拍手を受けながら、常夏コンビはゆっくりとオレたちの前にやってきた。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した——』

アナウンスでルール説明が入る。まあ、知っていることだし、無視しよう。

「やつほー先輩たち。もう子供の悪戯はネタ切れですかー？」

口火を切ったのはオレだ。いや、待っていて時間を取られるのも無駄だしね。

「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮しだったんだがな。Fクラス程度のオツムじゃあ理解できなかったか？」

うーん。Fクラス程度のオツムと言われましても……実力だけならAクラスレベルなんだけどなあ。オレと姫路さんは。あ、後は雄二もかな？

「残念ですが、先輩。貴方の言葉はAクラス所属でも理解出来ないですよ？まずは日本語を……いえ、人語を覚えてから出直してください。サル山の坊主大将さん？」

「て、テメエ、先輩に向かって……！」

先輩？だからどうした。

「先輩。一つ聞きたいことがあります」

「あんだ？」

「教頭先生に協力している理由は何ですか」

「兄さんが共謀した理由を聞いた。そういえば、それはオレも聞きたい。」

「……そうかい。事情は理解してるってコトかい」

「大体は。それでどうなんですか？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」

「そうですか。そっちの——常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあな」

「……そうですか」

呆れた。そんなことの為に営業妨害をするとか……何考えてるんだろう。

「本当は小細工なんて要らなかつたんだよな。Aクラスの俺たちとFクラスのお前らじゃ、そもそもの実力が違い過ぎる」

おっと。この先輩たちはどうやら一回戦を見ていないらしい。

まあ、丁度いいけどさ。

「そうですか。それなのに態々ご苦労なことですね。そんなにオレと兄さんが怖かつたんですか？」

「ハッ！言ってる！お前等の勝ち方なんて、相手の性格や弱味につけこんだ騙し討ちだろうが。俺たち相手じゃ何も出来ないだろ！」

まあ、あの坊主先輩の台詞には確かに一理あるように思える。オレたちが今まで勝てたのは、相手の事を知っていたというのも大きい。その点では今回の対戦相手には今までの戦法が一切通じない。

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

長かった説明がやっと終わって、審判役の先生がオレ達の間立つ。

「『試獣召喚』」

掛け声をあげ、それぞれが召喚獣を喚び出す。

常夏コンビの召喚獣の装備はオーソドックスな剣と鎧。高得点者

の召喚獣らしく、質はかなり良さそうな物に見える。

『Aクラス 常村勇作&夏川俊平

日本史 2009点&197点』

なるほど。確かにAクラスに所属しているだけのことはあるね。点数はかなりのものと言える。ここまでの得点があるとすれば、あの召喚獣もただの見掛け倒しではなくかなりの強さを持っている筈。どうやら本当に見た目とは裏腹に勉強が多少は出来るみたいだ。

「どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」

常夏コンビがディスプレイを示し、オレたちに自慢してくる。

「というか、これだけの実力があるなら、受験に充分通用すると思うんだが。」

後、兄さんは怒ってるかもしれない……いや、確実に怒っている。『できることをしようと思わずに、僕たちの人生で一度しかない高校二年生の学園祭を壊そうとした』『僕の大切な人たちに取り返しのつかないような酷いことをしようとした』という理由でね。

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」

「夏川。あまり苛めるなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ？」

ククツとモヒカンの趣味の悪い笑い方が聞こえた。

ねえ、兄さん。オレも同感だよ。

こんな奴らの為にすべてを奪われるのはバカげているよな？

「……前に」

「あん？」

「前に、クラスの子が言っていた」

「なんだ？晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」

ギャハハハ、と笑い声を出す坊主先輩。

『好きな人の為なら頑張れる』って」

……それって、姫路さんが言っていたことじゃないか。まあ、オレ

も――

「ハア？コイツ何言ってるんだか」

「――僕も最近、心からそう思った」

――オレも心の底からそう思うけどな。

『Fクラス 吉井明久&吉井光正

日本史 166点&231点』

「なっ!？」

点数が表示されたディスプレイを見て、常夏コンビが驚愕の声をあげる。ほお……ここまで上げたか。

「アンタ等は小細工無しの実力勝負でブツ倒してやる!」

「覚悟して置けよ?先輩方?」

召喚獣が獲物を構える。

舞台は整った。見せてやろう。オレたちFクラスの力をな!

決勝戦！

「兄さん。あそこまでオレや雄二に付き合わせたんだ。ここで負けたら承知しないよ」

「わかってる。勉強教えてくれてありがとね。雄二もだけどそれなりに頭いいじゃん」

「……兄さんに比べれば誰でもそうでしょ。——行くよっ」

武器を太刀以外捨て、身軽になる。装備が軽くなったので兄さんよりも先に動くことが出来る。

「夏川！こっちは俺が引き受ける！」

モヒカン先輩が慌ててオレの正面に立った。向こうが出遅れたおかげで、オレの召喚獣はかなり相手に接近出来ていた。

「それじゃ、僕の相手は先輩ですね」

「上等じゃねえか！多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ！」

隣では坊主先輩の召喚獣が剣を構えて兄さんの召喚獣に突進する。動きは速いが……。

「先輩、取り乱し過ぎですよ？ただの突撃じゃ避けてくれと言ってるようなもんです」

兄さんの召喚獣は半身を右にずらし、小さな動きで相手の身体を避けていた。あんなバカ正直な攻撃は兄さんには通用しない。まあ、それだけじゃなく……。

「何で当たらねえんだ……！」

「モヒカン先輩。そんな攻撃じゃ当たりませんよっ」と

「くっ……ちよこまかと……！」

こちらもちちらで最小限の動きで躲し、攻撃を地味に当てていく。この戦法は相手を焦らせ、冷静な判断力も失わせられる。

「つと、この……！」

隣では坊主先輩の召喚獣が振り向きざまに横薙ぎの一撃を見舞ったが……。

「ふっ！」

兄さんの召喚獣はその一撃を小さく屈んでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るっていた。流石は召喚獣の扱いが長けている兄さんだ。避けてすぐに三度の反撃をすることはある程度操作に慣れていないと出来ない芸当だ。

「くうっ！」

悔しそうな声を出す坊主先輩。兄さんの召喚獣からの攻撃を何とか剣で防御した後は、仕切りなおすように大きく一歩下がった。

「ほいっ」と

「くそっ！」

こっちゃんも、モヒカン先輩の召喚獣は攻撃を回避し、そのまま大きく下がる。

「テメエ、試召戦争じゃ60点程度だったくせに……！」

坊主先輩は語気も荒く兄さんを睨んでいる。ふむふむ。台詞から察するに、ある程度はオレたちの情報を集めていたようだ。

「お前の方も文系科目は苦手だったはず……！」

おっと、坊主先輩じゃなくて、モヒカン先輩がオレを睨んでくる。本当に調べたんだなあ。

「今でもそんなもんですよ。この教科以外は、ね？」

「というか、試召戦争終えてから時間は経っているんです。点数が上がっていても不思議じゃないでしょ？」

「野郎……！最初からこの勝負だけに絞ってやがったな……！」

「こいつ……！舐めたことを……！」

「その通り。よくわかりましたね、先輩」

「舐めたこと？別に日本史が取れているだけです。何か問題でも？先輩？」

まあ、雄二は初めから優勝させる気だったからね。そのつもりで科目指定をしたから。

「仕方ねえ。二年相手に大人げないが、経験の差ってやつを教えてくださいよー！」

そう告げると、坊主先輩の召喚獣は大きく跳び退って、兄さんだけじゃなく坊主先輩本人からも距離を取った。使役する本人からも距

離を取るなんて、一体何をするつもりだろう？そんな事をすれば戦闘がしにくくなる筈なのに。

「余所見している場合じゃねえぞ！」

そう言っただけでモヒカン先輩の召喚獣が突撃してくる。それによって、思考の中断を余儀なくされる。仕方ない。隣は兄さんに任せるしかないのか。

「お前の知らない戦い方があるんだよ」

チラッと坊主先輩の召喚獣を見ると、剣を腰だめに構え、まるで力を溜めているような感じに見える。何だ？オレたち二年生の知らない特殊能力でもあるのか？

「おおおおおっ！」

目の前のモヒカン先輩と相対している最中に坊主先輩が更に力を込めるように声をあげる。

「行けっ！」

兄さんは牽制しようと召喚獣を敵に向かって走らせる。

「そら、引つかかった」

と、坊主先輩のからかうような声が聞こえると。

「く——そおっ！」

兄さんがいきなり苦しそうな声を出した。

「これが経験の差ってやつだ」

何だ？坊主先輩は一体何をしたんだ？兄さんの方を横目に見てみると、何やら目を擦っていた。

ダメージを受けたはず。何で目を？まさかあの坊主先輩……！

「ぐうううっ！」

今度は坊主先輩の召喚獣が兄さんの召喚獣に攻撃を仕掛ける。

目が見えてない兄さんは勘で避けようと操作しても、相手は見抜いているかのように攻撃している。

「くっ、フォローを……！」

「させるわけねえだろ！」

キンッ

オレの召喚獣が兄さんのところに行くのを妨げるモヒカン先輩。

こっちはこっちで兄さんの召喚獣が攻撃された事により、兄さん自身にも痛みがフィードバックして更に苦しそうな声を出していた。「そっぴいやお前、『観察処分者』なんだよな？こいつはさぞかし痛えだろうなあ」

おまけと言わんばかりに兄さんの召喚獣の顎に拳を叩き込む。

兄さんは痛みを耐えられなくなったかのように倒れようとした。

「兄さんっ！そんなところで終われるのかよっ！」

「……っ！」

ダンッ！

一喝によつて思いつきり足を地面に叩きつけて踏み止まった。

そうだ。オレの尊敬する兄さんならたとえ苦しかったとしても好きな人のためなら何度でも立ち上がるはずだ。このまま終わるはずがない。

「よし。いけるね、兄さん？」

「……当然っ！」

そうだ。こんな奴らに負けるなんて、オレは絶対に嫌だからな！

「悪あがきを！すぐに止めをくれてやるぜ！」

坊主先輩の召喚獣が駆けて攻撃をするが。

「——んのおおっ！」

兄さんは痛みを堪えながら、召喚獣を動かして敵の脇をすり抜ける。そのがら空きの背中に大きく蹴りを放つ。しかし、傷の影響により大して威力は無いが、体勢を崩すことが出来たので少し時間ができる。

「光正っ！」

「おうっ！」

兄さんの様子を確認するまでもない。今ので全部分かった。オレは太刀を一本捨て、残った方を鞘にしまう。そして自身の召喚獣ももう一方の敵であるモヒカン先輩の方に突っ込ませた。

「舐めんなっ！」

迎え撃つようにモヒカン先輩の召喚獣が剣を振り下ろす。対するオレの召喚獣は防御も回避もしない。ただ一直線へと迫る。

「もらったあー！」

モヒカン先輩の召喚獣の剣がオレの召喚獣の首を両断する。その寸前、

ギインツ！

兄さんの召喚獣が投げた木刀が当たり、敵の剣の軌道を変えた。

「ぐっ！しまっ——」

振り下ろされた剣が不発になった以上、オレの召喚獣は絶好の攻撃ポジションにいることになる。さすが兄さんだ。最高のフオローを最適なタイミングを無駄にしないっ！

「一閃っ！」

オレの召喚獣の太刀の峰がモヒカン先輩の召喚獣を叩き込む。

それと同時にオレの声と会場の歓声が重なった。

「野郎！得物を手放すなんて上等じゃねえか！」

そして、兄さんの召喚獣には坊主先輩の召喚獣が迫った。だが……。

「っ?!邪魔——！」

坊主先輩の召喚獣の動きが一瞬鈍る。その原因は、オレが敢えて吹き飛ばしたモヒカン先輩の召喚獣。それが坊主先輩の視界を遮ったからだ。

兄さんはその隙を狙って召喚獣を前に出す。坊主先輩の召喚獣は剣を振り下ろすがタイミングがずれて攻撃を避けられた。

「チイツー！」

坊主先輩の召喚獣は空振りに終わった剣を戻し、再び兄さんの召喚獣に攻撃を加えようとする。しかし、もう遅い。

「くらえっ！」

兄さんは反撃と言わんばかりに頭突きをさせた。威力は無い。だが、相手の動きを牽制させるには充分だ。

「兄さんっ！」

オレの召喚獣は持っていた太刀を兄さんの召喚獣に向かって蹴り飛ばす。

「待つてましたー！」

飛んでくる太刀の柄の部分を片手でキャッチする。ナイスパスだろ？ 決める兄さん。

「くそおおっ！ お前ら如きに三年の俺が——！」

「くたばれええっ！」

両者の召喚獣が同時に攻撃する。見ると兄さんの召喚獣は左腕が切り落とされている。

アレはかなりの痛みがフィードバックされているだろう。あの様子では兄さんは召喚獣ともにもう戦えない。

だが……。

「まあ、オレたちの計算どうりだな。お疲れ、兄さん」

坊主先輩の召喚獣には太刀が喉に突き刺さっていた。

『吉井・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしやああー!!」

審判の宣言により、召喚大会の優勝者はオレたちに決まった。

兄さんは叫び、喜びを表す。オレは……

「……………(グッ)」

紫乃のいる方へ拳をつきだす。勝ったぞ紫乃。オレたちの優勝だ！

祭の終わり

バカテスト 英語

頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【①】と【②】に当てはまる語を答えて下さい。

『マザー（母）から【①】を取ったら【②】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【o t h e r】（他人）です』

教師のコメント

その通りです。motherから「M」がなくなると他人という単語になります。こう言った関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

吉井光正の答え

『マザー（母）から【money】を取ったら【o t h e r】（他人）です』

教師のコメント

どうして君たち双子は母からお金を取ろうとするのですか？

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

「もう体力切れ……」

放送を聞いた途端に足から力が抜けて座り込む。

怒涛の勢いでオーダーが入ってくるため、効率良く回す必要があり、頭と手が疲れた。ウエイターとかウエイトレスも大変だと思うけど、意外とコックも大変だ。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「さすが兄さん。疲れていても気になるんだ」

「なっ!?べ、べつにそういうわけじゃなくて!」

「後夜祭の後に話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じゃない」

秀吉が返事をする。まあ、問題はあらかた解決したはずで大丈夫だと思うけど……。

「じゃ、ウチ等は着替えてくるわ」

「ええっ!?どうして!？」

いや、どうして着替えないんだよ。

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ？」

……何か求めている答えと違う気がする。

「すいません。すぐ戻りますので」

「待つて！二人とも考え直すんだ！カムバアーツク！」

「お前が考え直せ。バカの兄さん」

ちなみにだが葉月ちゃんにはチャイナドレスを着たまま帰ったそう。いろんな意味で恐ろしい子だ。将来大物になる予感がするよ。

「ふむ。ならばワシも——」

「させるかっ！せめて秀吉だけは着替えさせない！」

兄さんが阻止するかのようによに秀吉の足にタツクルする。……アンタは何考えてんだ？さすがにこんな奇行に走る身内の考えを読みたくないし分かりたくない。

「なっ!?何をするのじゃ明久！」

「……………（フルフル）」

……………ムツツリーニもかあ。一体君たちは秀吉に何を求めているんだい？

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ。光正もな」

兄さんとムツツリーニを呆れたような目で見ているのは疲れを感じさせないクラス代表。オレでもかなり疲れていると言うのに、随分とタフな奴だな。

「学園長室じゃと？三人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちよつとした取引の清算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行こうと思う」

ああー清算ねえ。忘れてたよ。

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「……………（クイクイ）」

「あ、ムツツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

うーん。秀吉の着替えをさせない為と一緒に行かせるつもりかな？本当に今だけは兄さんの考えている事がさっぱり分かんない。

「困ったのう。雄二に光正、なんとか言ってやってくれんか？」

「んく……………ま、いいだろ。秀吉とムツツリーニも行こうぜ。明久を

説得するのも面倒だし」

「絶対に最後の为本音だろ。というかもう諦めろ」

まあ正直言つて、説得するのは時間と労力の無駄だ。

「やれやれ。雄二に光正まで……仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

「よし。ほら明久にムツツリーニ。足を放してやれ」

「うん」

「……………（コクリ）」

「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじやろうに……………」

まあ、一部のマニアには需要があると思う。

コンコン

「光正。いる？」

「あー紫乃か」

「よかった居た。坂本君。光正少し借りていい？」

オレはモノですか？

「あーまあ、いいか。コイツいなくても支障はねえだろ」

「ありがと。行こつ光正」

「ほーい。雄二何かあつたら連絡して」

「そんなお前に連絡が必要な事態が起きると思えんがな」

雄二たちは学園長室へ向かい、オレは紫乃に連れられる。

そして連れてかれたのは人目のつかない校舎裏。

「ここでもいいか……………」

「それで？こんなところに連れて来た理由は——」

言葉を遮るようにして急に抱き着いてきた。そして、耳元で…………

「優勝おめでとう。光正」

「…………つたく。そんなこと言うためだけに連れてきたのかよ」

「うん。そうだよ。本当は、すぐに言いたかったんだけどね……」

「まあ、なんだ……その……嬉しいよ。ありがとう」

何だろう。優勝した時にも色んな人に言われたけど紫乃に言われるのがやっぱり一番嬉しい。

「でもなんで今？」

「だって、AクラスもFクラスも打ち上げやるでしょ？さすがに今ぐらしいかタイミングないかなあ〜って」

なるほど。確かに考えている。

p r r r p r r r

ん？誰かの携帯から音がする。誰のだ？誰の携帯だ？

「あ、オレのか………もしもし？」

『光正。緊急事態だ』

「何があつたの？端的に頼むよ」

『常夏コンビに学園長室での会話を盗聴された』

「あー分かった。常夏先輩を探して録音機を押収してとっちめればいいんだね」

『おう。ムツツリー二と秀吉も探しているはずだ』

「りよーかい。じゃあ、切るね」

やれやれ、言ったそばから……

「じゃあ行つてくるよ」

「ちよつとこつち向いて」

「ん？」

振り向きざまに軽いキスをされる。……ええ？

「気をつけてね。いってらっしやい光正」

「ああ。任せろ」

やっぱり、好きな人に応援されるっていいね！

バンツ

「だ、誰だ!？」

「お前は……!？」

新校舎屋上を蹴破ると放送設備を弄っていたと思われる常夏コンビがいた。

「いや〜予想通りここにいたか。分かりやすいね〜先輩？」

「テメエ……どうしてここが……!？」

「え？バカは高いところが好きかと」

「誰がバカだ!？」

「常夏先輩ですよ」

「二つに纏めるな!？」

え？二人で一人とかいうやつじゃないの？え？違うの？

P r r r r P r r r r

「はい。もしもし」

『光正か！常夏コンビの居場所が分かったぞい』

「うーん。分かったも何も目の前にいるんだけど……」

『何と！では、そのまま取り押さえ——』

「おい！なんかこつち来たぞおおおつ!？」

「ゲエツ!？マジかよおつ!？」

「……ごめん秀吉。何か兄さんたち(多分)がやらかして花火玉がこつちに向かっているんだけど……」

花火玉(?)はまっすぐにオレらのいる屋上に——

ドオン！ パラパラパラ

——直撃した。幸い、オレたち三人に怪我はない。

『お、お主。だ、大丈夫か!？』

「ああ。花火って怖いのが。一回切るわ」

こんなに間近で花火を見たことがない……ん？

「もう一発来てんだけど……」

「な、何だつてえええつ!?!」

ドオン!　　パラパラパラ

二発目の花火はスピーカーカーに直撃した。ん?あいつらの狙いつて

……

「あのバカ共の狙いは放送機材か!」

ツチ、だからといって打ち上げ花火を使うか普通!?オレに言つてくれれば破壊の一つや二つ——つて考えている間に三発目だとお!?

「常夏バリアー!」

「先輩を盾にするか普通!?!」

「オレは自分の命が惜しいんだ!」

「このクズ野郎が!」

ドオン!　　パラパラパラ

三発目の花火は無事(?)放送機材に命中。木っ端みじんのガラクタに変えた。

「おい!逃げるぞ常村!」

「分かつてる!」

おっと、逃がすわけにはいかない。

「ここは死んでも通さないぞ!」

「テメエと遊んでる場合じゃねえだ吉井弟!」

「そこをどけえ!」

「先輩方」

「何だ!?!」

そう言いながらこちらにやってくる四発目の花火玉を指す。先ほどと違い少し低いが大丈夫か?というか、このコースつて校舎直撃ルートだよな?

「最期は一緒です」
「ふざけるなああああああつ！」

ドオオオオン！ バラバラバラ

終わりの終わり

「痛てて……。随分と殴られたよ……」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

公園で打ち上げの準備をしていると、顔の面積が倍ぐらいに晴れ上がった雄二と兄さんがやって来た。顔の面積が倍になってたのは捕まった時に鉄人に殴られまくったからだろう。

「む。やつと来たようじゃな」

「あ、秀吉に光正……。どうしたの光正？制服もボロボロだし何よりその包帯巻かれよう」

「頭だけじゃなくて腕や足にもか。厨二病にでもなったか？」

何も分かってない二人が気軽に声をかけてくる。フッフ……

「テメエらの花火のせいだこのクソ野郎共がああつ！」

「えええつ!?光正が頭打っておかしくなったあつ!」

「大丈夫か光正。脳外科か精神科でも行くか？」

「テメエらが行ってこいよ!このバカ共!」

「何でそんなに怒ってるのさ」

「テメエらがオレが屋上にいるにも関わらず四発も花火玉をぶち込んだからだろうがあつ!」

「……そうなのか。秀吉」

「う、うむ。光正は確かにその時屋上におったぞい」

「……俺も確認した」

「あはは……。運が悪いね……」

「本当に……。可哀想な奴だ……」

何だこの複雑な気持ち。顔の面積が二倍になるほど殴られた奴に言われると……。こんな奴らに怒っている自分がバカに見えるくる。

「はあ。で？解放が早かったのは教頭の件が関係しているのか？」

「ああ。最後の花火玉が教頭室に飛び込んだおかげで、その修繕という名目でガサ入れができるからな。ババアもこれを機に徹底的に教頭を調べ上げてその尻尾を掴むだろう」

「爆発させるなら教頭室だけにしてくれ。あの子の脱出劇は大変だつ

「ただぞ」

「お、お疲れ……」

まあ、なんか怒るのも疲れた。

集合場所の公園は既にFクラスのメンバーで一杯になっている。特に店も取らずに、菓子とジュースを用意しての公園での打ち上げ。まあ、これはこれでありだろう。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「さすが問題児コンビだ」

「……………（コクコク）」

「……………コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ」

コイツらの悪評はますます学園中に広まる事になったが……………うん。正直自業自得だと思う。

「あれだけのことをやっておいて、退学になるどころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだつて気になるし」

「ん、ありがとう」

島田さんが雄二と兄さんにジュースの入ったコップを渡し兄さんが礼を言う。

オレも自分の手元のジュースを飲むが……………ん？ちよつと苦みがあるな。誰だよ安物を買ってきた奴は。

「そーいや、店の売り上げはどうなってる？」

オレは飲み物を持ってきたままその場に留まっている島田さんに聞いてみる。実行委員だから一番わかっているはずだけど。

「そうね。凄いつて程じゃないけど、たった二日間の稼ぎにしては結構な額になったんじゃないかしら」

島田さんが収支の書かれたノートを見せてくれる。確かにそれほど多くはないが、二日間の額としては決して少なくない。

「ふむ、どれどれ……………」

後ろから雄二が覗き込む。

「この額だと、机と椅子は苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」
「うくん……。やっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

喫茶店ともなると、どんなに人気が出ようともお客さんの回転に限界はある。あの短時間ではこれぐらいが限界だろう。

「すいません。遅くなりました」

そこに後ろから姫路さんの声が聞こえてきた。

「はいっ！お父さんもわかってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！」

要するに転校は阻止できたということだ。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

おっと、いい感じの雰囲気になっているな。邪魔ものは退散退散。
「……って、これ『オトナのオレンジジュース』って酒じゃねえか。誰だよ間違えたやつ。というか、よく買えたな」

ちなみにこの酒のせいで、姫路さんが酔っ払って兄さんに抱き着いていたり、酔った島田さんが兄さんを吹き飛ばしたり……。まあ、兄さん。今日はお疲れさん。

夜はまだまだこれから。そう思いながらオレはこの一時を楽しむのだった。

次の日……

「おはよう紫乃」

「おはようこうせ……その頭の包帯どうしたの!？」

「ん? あー怪我した」

「怪我した!?! どうしよう病院で精密検査を……」

「軽く見てもらったけど大丈夫だったよ? ほとんど掠り傷だし」

「ダメだよ光正! 頭の怪我は軽く見ちゃいけないんだよ!」

「あ、はい……」

「どうしよう。これで光正がバカになったら……元からバカなのにこれ以上バカになったらもう救いようがない……!」

「大丈夫だよ。これぐらいの怪我でそこまで悪化しないって」

「そっか。でも、既に救いようがないほどバカですよね?」

「言いたいことがあるみたいだな。言葉じゃ足りないから拳で語り合おうか」

「どうやって拳で語るのですか? 頭逝かれたんです?」

「よし。そこを動くな。今から蹴り飛ばしてやる」

「ふふん。その足の怪我で追いつけるものならやってみるといいです!」

「上等だ!」

この光景を見ていた人たちは思った。

仲の良いカップルだなあ……と。ついでに爆ぜろ……と。

閑話

雄二&霧島さん結婚大作戦！ ①

「吉井夫妻の？恋愛テクニク講座」

「……ねえ、紫乃。これなに？」

「……これはね光正。私たち夫婦が恋愛の秘訣を教えるコーナーだよ。本当は翔子と坂本君がやる筈だったんだけど……ちよつとあつてね。私たちがやることになったんだ」

「……あえて何があつたかは聞かないでおこう」

「うん。多分聞かない方がいいと思うよ」

「でも、このタイトル、『の』以外全部嘘じゃない？」

「じゃあ、吉井夫妻（予定）でいいんじゃない？」

「……なら、いいか」

「では、ハガキの紹介です。『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です』」

「うーん。周りの人から仲良しって言われるとなんだか照れるね。まだ夫婦じゃないけど」

『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたら良いでしょうか？』」

「え？どうしたらって、どうしようもなくない？」

「うんうん。夫の浮気には私も心配になるね。とても他人事とは思わない」

「……うーん。オレって信用ないのかな……」

「だから、私が翔子と一緒に考えた浮気防止方法を教えて上げる」

「ええっ!?霧島さんと考えた!?それって、主にオレと雄二が被害に遭うやつでしょー」

「用意するものは三つ」

「え？道具が必要なの？」

「一つ目は——」

「一つ目は……」

「——『密室』」

「ちよつと待って！密室だど!?何故場所指定だし!?」

「二つ目は——」

「え？無視？まあいいや。二つ目は？」

「——『足枷』」

「ストツープ！急に犯罪臭がしてきたぞ！大丈夫なのか!?!」

「三つ目は——」

「み、三つ目は？」

「——『筋肉隆々のオカマ達』」

「やめて！足枷を付けられ密室に閉じ込められた上にオカマたちを放り込んでどうするつもり!?!」

「その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげるといい」

「紫乃が怖いよ!?!」

「……以上、『バカなお兄ちゃん大好き（十一歳）』ちゃんからのおハガキでした」

「差出人小学生!?!大丈夫なのかいろいろと!」

「……ところで、紫乃さん。さっきのはもちろん冗談だよね？」

「……本当はビデオカメラもほしい」

「待って。オレがいろいろと死ぬ」

「オカマたちにやられる光正……（じゅるり）」

「よし、紫乃。話し合いでもしようか」

「光正。家族会議を始めたいと思う」

清涼祭が終わったとある夜。兄さんが急に家族会議？というものを開くとか言い出した。

「議題は？」

「如月ハイランドのプレミアムチケットについて」

「如月ハイランドのプレミアムチケット？あれって、それで入場すると結婚を強要させられるからって、兄さんが雄二に無断で霧島さんにあげたよね？」

「うん。そうだよ」

「じゃあ、話し合うことなくない？」

「やれやれ……光正がここまで愚かだとは兄さん。思わなかつたよ」

カチンと来た。あの兄さんにバカにされてカチンと来た。

「いいかい光正。あんなチケット一つで雄二が素直になれるんだったら霧島さんも苦労してないんだよ？」

「むう……」

一理ある。確かに雄二は企業の企みを知ってしまった以上、頑なに拒否するのが目に見える。

「今もこうして、雄二と一緒に婚姻届を出そうとしている彼女を見て何も思わないのかい？」

「いや、雄二が18歳以上にならないと婚姻届を出しても門前払いを受けて終わりだろ」

「でも、このままだったら例え雄二が18歳以上になっても婚姻届を出せないでいるんだよ？それは可哀想じゃないか！」

熱弁しているところ悪いけど、さつきから『これで雄二に日頃の復讐ができる』って考えているよね？霧島さんの為とか言いつつ、そのところ大丈夫か？

「決して雄二への日頃の復讐じゃないんだ！」

……わあお。絶対に復讐を考えていたよコイツ。

「でも、プレオープンって確か今週末だろ？オレたちには何もできなくねえか？」

オレたちはあくまで一介の高校生。多大な権力もなければ、実行するだけの金もまた信頼度もない。うん。本当に何も無いな。つまり干渉できないってことだ。

「あーうん。そこは当日アルバイトって形で……」

「アルバイトだと？よく採用されたね兄さん」

まあ、アルバイトを雇っているなら話は別だ。ん？でもおかしいな……

「あそこ、アルバイトの募集なんてしていたか？」

「いいや。多分してないと思うよ？」

おい。

「……じゃあ、どうやってアルバイトって形で潜入するんだよ……」

「えーっと。ババア長のコネ？」

「権力の乱用だな。で？誰が潜入するんだ？」

「えーっと、僕と秀吉、ムツツリー二に姫路さん島田さんに——」

何だいつものFクラスのメンバーか。まあ、そりやそうだよな。と
うかオレは声かけられて無いから当然今回のメンバーから外されて——

「後、光正に天草さん」

——なかった。

「おいこら。しつかり確認を取ったよな？」

「えっ？もちろん取ったに決まってるじゃないか」

「よく紫乃がオーケーしたな……まあ、霧島さんのためなら引き受けても不思議じゃないか」

「ん？天草さん？彼女は光正が来るっていったら即効でオツケーくれたよ？」

「オレが了承してないよな？アルバイトで潜入することに関して」

「え？光正は声かけなくても参加決定でしょ？何言ってるの？」

「何言ってるの？はこっちのセリフだこのバカ！」

オレだって断りたい気分の時だってあるんだぞ！まあ、紫乃が参加決定になった以上オレも参加するけどさ！

「まあまあ光正。そんなに怒るとよくないよ？せつかく怪我也治って

きたんだし」

「誰のせいで怪我したんだと思ってるんだ……！」

「え？常夏コンビ」

「まあ、そうだけどき！」

否定はしない。しないけどき……直接校舎壊してオレの怪我をする要因作ったのアンタらだからな。

「それにしてもタフだよな。常夏コンビも光正もよくあの瓦礫と花火の中生きていたね」

「……その原因を作った本人がよくもまあぬけぬけと……」

はあ。なんかこれ以上話を続けても無意味な気がする。

「で？オレの役割は何だ？当然役割を分担でもしてあるんだろ？」

「うーん。光正の役割か……暗殺？」

「誰をだよ！」

「じゃあ……隠蔽？」

「何をだよ！」

おいおい暗殺や隠蔽が必要な作戦ってなんだよ……

「まあ、当日までに考えておくよ」

「もう日数そう残ってないけどな」

こうして、今日の家族会議は幕を閉じた。

雄二&霧島さん結婚大作戦！ ②

日は流れ週末……オレたちは如月ハイランド入場ゲート前にいた。
「もうすぐだね」

「そうだな」

スタッフに変装しているオレと紫乃、そして本物のスタッフは此処にやってくる雄二と霧島さんを待っていたのだ。

スタッフに変装といってもまあ、兄さんの要望なんだよな……というか、絶対バレるでしょ。

「うーん。やっぱり、紫乃にその胸は不自然だと思っよ」

「むうー。というか、普段よりそこそこ大きくなっただけでそこまで言わなくても……」

オレはアイマスクと帽子を、紫乃はアイマスクに胸当てを詰めて、絶壁から巨乳（偽）に。後は髪型を地味にポニーテールにしたぐらいだ。……こっちの髪型の紫乃も可愛いなあ……。

「おっと。どうやら来たみたいですね。ではスタンバイをお願いします」

「了解です」

さてと演技スタートかな。

「いらっしやいませ！如月ハイランドへようこそ！」

「如月ハイランドへようこそ（そー！）」

オレと紫乃は声を合わせ、雄二と霧島さんを歓迎するポーズをする。

「……………」

オレと紫乃を見ている雄二は、驚いたような感じでこっちを見ている。まあすぐにバレるよね

「……………おい。光正、ここでアルバイトか？」

「コウセイ？ダレデスカ？ワタシ、ワカリマセーン」

「……………急に外人ぽく見せようとしても無駄だろ……」

そう言うと雄二は携帯を取り出して……

「まあいい。確認させてもらう」

そう言つて、携帯電話のどつかのボタンを押す。恐らく、オレの携帯電話にかけているのだろう。だが、爪が甘いな。

『あ、雄二。どうした？こんな休日に電話かけてくるなんて珍しいじゃないか』

「なっ?!」

「どうかしましたか？お客さま？」

「悪い後でかけ直す……………テメエは一体何者だ？」

ポケットに携帯電話をしまい直す雄二。

フフフ、目の前にいる相手に電話かけたと思つたら実は別のところで本人が出て来るもんな。さぞ驚いただろう。まあ、電話に出たのはオレの声真似をした秀吉なんだけどね〜

「私でスカ？私はただのしがないスタッフデース」

「そんなはずはねえ。だつてそつちの女は天く——」

すると雄二は隣にいた紫乃を指差し正体を暴こうとするが。

「——あれ？人違いか？」

ある一部分。本物の紫乃とは雲泥の差もある部分を見て途中でやめた。

まあ、そのおかげで紫乃が雄二を殴りかかろうとしたので見えてないところで抑えつける。

『光正。坂本君は私が殴り飛ばす』

『ダメだよ紫乃。そんなことしたら作戦が台無しになる』

やれやれ。本当に紫乃は胸のことを言われると暴走しかけるよな……………

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」

スタッフの人が本題に戻すためなのか、チケットの確認をしている。

「……………はい」

霧島さんがポケットから例のチケットを出す。

「拝見しマース」

「ではワタクシモ」

スタッフが受け取り、オレとチケットを確認する。そして、雄二た

ちの顔を見て笑顔のまま一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

オレたちの様子に霧島さんが不安そうに表情を曇らせて聞いてくる。

「イエ、そんなコトはないデスヨ」

「ちよつとお待ちくだサーイ」

スタッフがポケットから携帯電話を取り出し、雄二たちの方に背を向けて電話をし始める。

「——私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

雄二たち仕留める。オレたちハッピー。

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

「……ウエディングシフト？」

霧島さんが首を傾げている。そう言えば如月グループのジnkスを知らないんだっけ？

「気にしないデくだサーイ。コツチの話デース」

取り繕ったように元の雰囲気に戻るスタッフ。うーん。露骨に怪しいと思うんだけどなあ。

「アンタ、さつき電話で流暢に日本語を話していなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

「ユーのミミ腐ってるネエー」

「彼らは外国から来たのです。日本語はまだ慣れていませんから聞き間違いでしょう」

設定としてオレは日本語が下手な外国人ってことになった。まあ、紫乃までその設定を入れるとこの如月ハイランドの配置する人の基準に疑問を感じる。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

甘いな。そんなわけにいくか。

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてなしさせていただきマース」

「不要だ」

「ソコをナントかお願いしマース。頭下げマスカラ」

「ダメだ。というか、頭が全く下がってないんだが……」

「この通りデース。ほらサガツタデシヨ？」

「却下だ。いや、本当に僅かしか下がってないしな」

クソ、頑固な奴だ。さっさと承諾してくればいいものを。

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「止めろ！そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

え？何で？どうしてスタッフの一言にそんな危機迫った顔になるの？あんなにオレの言葉は斬り捨てていたのに……まあ取り敢えず了承してくれたので良しとするか。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポツ）」

霧島さんはスタッフの言葉に仄かに頬を赤らめていた。なるほど分かりやすい。

「お待たせしました。カメラです」

そして帽子を目深に被ったスタッフこと変装した兄さんがカメラを片手に現れる。

「アナタが持つてきてくれたのデスカ。わざわざありがとうございます。助かりマース」

スタッフが礼を言いながらカメラを受け取ると、雄二が自身のポケットに手を入れる。

「悪いがもう一回電話をさせてくれ」

「わかりまシタ」

そう言った雄二は携帯を取り出して電話する。

p r r r r p r r r r

「ああ、すみません。僕の携帯ですね」

あ、その電話出たらいけないやつ。

「……………いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……………」

「人違いですっ」

ダッ！

やれやれ！これだからあのバカは！

「あっコラ！逃げるなテメエ！ええい、放せこの似非外国人共！」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（三十五歳）、通称スティーヴでース。吉井ナントカさんではありませーン」

「ソーデス。ハナコの兄貴は吉井ナントカではありませーン」

「ええい黙れ！人種性別年齢氏名全てに堂々とウソをつくな！しかもどう考えてもその名前で通称スティーヴはないだろ！というかハナコの兄貴って何なんだよ！後、俺は吉井なんて苗字は一言も言っていない！」

すげえ……………全部一息で言った。言い切った。どんな肺活量してるんだコイツ……………」

「翔子、すまんがちよつと我慢してくれ」

「……………??？」

ん？何を我慢するの？と疑問に思っていると雄二が霧島さんのスカートを掴んで捲り上げ……………一瞬で視界が暗転した。

「光正は見ちやダメ」

小声で囁く紫乃。ふむ。つまり、紫乃の手によってオレの視界は覆い隠されているようだ。

「咄嗟に懐のデジカメに手を伸ばすあの動き……………。やはりムツツリーも来ていたか」

視界が明けるとカメラを構えた人……………ではなくキツネの着ぐるみがそこにいた。

成程。どうやら雄二はムツツリー二がいなかどうかの確認をする為にスカート捲りをしたのか。え？そんなことのためだけにやったの？

ん？雄二の事だから、兄さんやムツツリー二以外にも、手伝いに来

ている秀吉や姫路さんとかの存在にも気付いた可能性が高いな。と
いうか、秀吉がばれたら芋づる式でオレと紫乃もばれるんじゃないか？と
いうか、もうバレてるだろ。

「……雄二、えっち」

霧島さんが少し怒った顔をして雄二を見ていた。そりやそうだ。
いきなりスカートを捲られて怒らない女性はいない。いたらただの
変態だ。

まあ、その事に雄二は動揺して、

「なっ!?ち、違うぞ翔子!俺はお前の下着になんか微塵も興味がな
いっ!」

「……それはそれで、困る」

「ぐあああああつ!理不尽だああつ!」

バカな事を言ったために顔面にアイアンクローと言う名の折檻を
受ける事になった。ん?頭蓋が軋む音が聞こえるぞ。幻聴か?それ
とも気のせいか?

「でハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

霧島さんに折檻されている雄二に、スタッフはそのまま二人を撮影
した。え?何でそんな写真撮っちゃったの?

「スグに印刷しマース。そのまま待っていて下さい」

えっ?印刷するの?マジで?

「……わかった。このまま待ってる」

「ぐあああああつ!このままだと俺の頭蓋がっ!」

「お、お客様。そこまでにした方がよろしいのでは?」

「オー、ユーの旦那サンお陀仏ネエー」

「いい加減にその白々しい演技をやめろ光正!後、誰が旦那だ!」

あ、バレてた。まあ、そんな予感はしていたけどさ。

「——はい、どうぞ」

程無くしてスタッフが写真を持ってきた。と、同時に霧島さんのア
イアンクローから解放される雄二。

「……ありがとう」

霧島さんは嬉しそうに写真を受け取る。

「……雄二、見て。私たちの思い出」

咳き込んでいる雄二に霧島さんが写真を見せつける。後ろからオレたちも拝見拝見くつと。

「……なんだ、この写真は」

雄二がそう言うのは無理もない。オレも同じ感想だ。

何故ならその写真に写っていたは霧島さんの後頭部と折檻に悶える雄二だから。そして……。

「サービスで加工も入れておきまシタ」

そんな二人を囲うようなハートマークと、『私たち、結婚します』という文字。そして、雄二と霧島さんの周りを、未来を祝福するように天使が飛び回っている。

ふむ。二人の事を知らない人が見たら、どういう経緯で結婚に至ったのか気になる一枚だ。後、幸せになれそうになさそう。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスカ？」

「キサマ正気か!? コレを飾る事で此処になんのメリットがあるというんだ!」

……スタッフ。これはさすがにオレも雄二と同意見だ。こんな写真を見た客は間違いなくドン引きするから。客が絶対に減るから。

「……雄二、照れてる?」

「すまない。どこからどう見てもこの写真には照れる要素が見当たらない」

霧島さん。さすがにそんな写真で照れる男はいないと思う。

『ああつ! 写真撮影してる! アタシらも撮ってもらおうよ!』

『オレたちの結婚の記念に、か? そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

と、いきなり偉そうな態度でキャラキャラしたカップルがやって来た。見るからに鬱陶しい奴らである。頭湧いてるんかな?

「すいません。こちらは特別企画ですの……」

スタッフが断るとする。当然だ。何しろ今回のウェディングシフトは、雄二と霧島さんだけが対象だから。

『ああつ?! いいじゃねーか! オレたちやオキヤクサマだぞコルア!』

『きゃーっ。リユータ、かつこいーっ!』

男の方が睨み付けるようにスタツフを威嚇してくる。見たとおりのチンピラその者だなく。というか、その姿を見て喜ぶ女もかなりバカそうだ。オレは絶対に近づきたくない人間だ。

『だいたいよお、あんなダツセエジャリどもよりオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ?』

『そうよっ! あんなアタマの悪そうなオトコよりもリユータの方が一〇〇倍カツコイイんだからあ!』

オレから言わせれば、アンタらみたいなのこの世のゴミ……コホン。見た目も中身もクズ……バカツプルを撮影して飾ってしまったら評判はガタ落ちになると思う。

あれ? 雄二と霧島さんがいつの間にかいなくなってる。まあ、雄二が連れ出したんだらうけど。

『ああっ!? グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について投書すつぞコルアっ!』

『そーよっ! アタシたち、オキヤクサマなんだからねっ!』

あー鬱陶しい。オレこういう存在を見るといらつくんだよなあ。

「……………(ツカツカツカ)」

「(ぐいっ) 光正ダメ。私たちの目的を忘れないで」

「……………分かったよ」

そしてそのまま、紫乃に腕を引かれオレたちはその場を後にした。

雄二&霧島さん結婚大作戦！ ③

あれから一旦スタッフルームに行き、そのまま厨房へ。まあ、ランチの仕込みだ。

というか、何でプロに混ざって一介の男子高校生が仕込みをしているのだろうか？よく認められたなあと自分でも感心している。

そして今、監視カメラの映像から雄二と霧島さんの様子を見ている……が。

「……何故こうなった？」

お化け屋敷にその後二人が向かったのはまだ分かる。だが何故……

「どうしたら、釘バットを持った霧島さんが雄二を追いかける状態になるんだ……？」

意味不明だ。理解に苦しむよ。

「あ、光正。仕込みは終わり？」

「お疲れ様〜」

すると、兄さんと紫乃が部屋に入ってくる。

「そっちもお疲れ」

「頭撫でて〜」

「はいはい」

どうやら、紫乃はお疲れのようだ。仕方ない。ご褒美としてやってあげよう。

「ところで、兄さん。何でこの二人がお化け屋敷でリアル鬼ごっこをやっているか知ってる？」

「お、狙い通りに行ったんだね」

「ん？狙い通りに？それってどういうこと？」

コイツまさか、この作戦に乗じて日頃の恨みを晴らそうとしているんじゃないだろうな。

「ああーうん。秀吉に雄二の声真似をさせてね。【姫路の方が翔子より好みだな。胸も大きいし】って、言ってもらったんだ」

なるほど、秀吉の声真似ともなれば機械を通した時、その人の声だ

と勘違いしても不思議ではない。というか、そんなことを雄二の声で言ったら霧島さん怒るに決まってるじゃん。

「ふーん。で？釘バットはどこから？」

「お化け屋敷の仕掛け」

「なるほど。で？目的は？」

「えっと、危機的状況に陥った男女は強い絆で結ばれるって言うでしょう？それを参考にかな」

うん。分かった。やっぱり兄さんは兄さんだ。

「はあ……このままだと向こうの溝が深まりそうな気がするけど……」

「何か言った？」

「なんでも。ところでそのボイスレコーダー何？」

「あーこれ？さっきの秀吉の声真似の雄二用と実験用が入ってる」

実験用？あーそれって、本人の声に聞こえるか実験でもしたのかな？でも、秀吉だから大丈夫だと思うけど……

「実験用の方も聞いてみたい？」

「どちらでも」

まあ、秀吉の事だから実験用とはいえ、本人の声にしか聞こえないだろう。

そう考えていると、兄さんがボイスレコーダーを弄り、スタートさせる。

ピッ

『島田さんの方が紫乃より好みだね。胸も大きいし』

アハハ〜面白いセリフだ。しかも、オレの声だし。アハハ……

「コ・ウ・セ・イ？」

「テメエクソ兄貴！なんて文章を流しやがる！」

「ふ、二人共ごゆっくり〜」

兄さん逃亡。この密室に残ったのはオレと紫乃。ただし、紫乃は今ちよつと……いや、かなり怖い。まるで現在進行形で追いかけている

霧島さんのようだ。

「さっきの文章について聞かせてくれるかな？（ニッコリ）」

「さっきまでの会話聞いていたよね!? あれは、秀吉の声真似だって!」

「……………本当に?」

「そうだって! そもそも、オレは巨乳恐怖症なんだ。胸が大きい方が好みとかありえないだろう?」

「そっか……………うん。そうだね」

よかった……………どうやら誤解は解けたみたい。

「……………ってあれ? 私ってもしかして島田さんより胸ないの?」

「さあ、仕事だ仕事。張り切っていこー」

「待って光正! せめて私の方が……………私の方が胸大きいって言って!」

いや、無理だからね。感覚で分かっても、実際どちらが大きいかわかんないし。

向こうがパット入れていたら分かんないし……………まあ、プールとか行けば分かるんじゃない?

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます!》

まず、会場にマイクを使つて声を響かせる。このイベントの司会はオレだ。存分に楽しませてもらう。

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらつしやっています!》

言うど、雄二の飲んでいた水が鼻から少し逆流した。アハハ、見てて面白いな。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました! 題して、【如月ハイランドウェディング体

験」プレゼントクイズ〜!」

出入り口を閉鎖する重々しい音が聞こえる。さすが兄さん。雄二はこう言ったイベントに関して、すぐに逃げ出すから退路を絶たせなければいけないって、言ってたからな。案の定、雄二は逃げ出せなかった事に悔しそうな顔をしていた。さすがお見通しだね。

《本企画の内容は至ってシンプルです。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解すると、最高級のウエディングプランを体験して頂けると言う物です!もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありません!》

そこは大問題だろうが気にしない気にしない。

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん!前方のステージへとお進み下さい!》

オレが二人を名指しし、席を示すと、レストランにいる観客が一斉に雄二たちへと目を向ける。さあ、もうこれで逃げられないよ。

『……ウエディング体験……頑張る……!』

『落ち着け翔子。そう言った物はだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだっ!耳が千切れるっ!行く!行くから放してくれっ!』

霧島さんに耳を引っ張られながら壇上へと無理矢理上がらせていく雄二。

スタッフが二人を誘導し、解答者席へと案内する。

《それでは【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズを始めます!》

二人が席に着いたのを見たので、クイズを始めると宣言する。

解答方式は至ってシンプル。雄二と霧島さんの間に大きなボタンが一つセットされているのでそれを押して口頭で解答してもらおう。

えーつと、兄さんから渡された問題は……え?大丈夫かこれ?

《では、第一問!》

ボタンに手を伸ばし、間違える気満々な雄二の姿が見える。でも、ごめんな、雄二――

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかつ?》

――オレには、この問題の意味が分からない。

——ピンポーン!

雄二とオレが呆然としている中、霧島さんがボタンを押した。おつと、いけない。

《はいっ!翔子さん!では答えをどうぞっ!》

取り敢えずオレが霧島さんを名指しすると、

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子!恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

雄二の言うとおり、聞いているこっちまで恥ずかくなる答えだった。まあ、正解にするけど。

《お見事!正解です!》

雄二は正解と言ったオレを睨む。

いや、ごめんね雄二。兄さんから、どんな奇抜な解答でも正解にしろって言われているんだ。オレも無理があると思うけど……まあ、出来レースだからいいよね?

一応、雄二には観客に見えない角度でサムズアップして答えておこう。

《第二問!お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか?》

うん。やっぱり、オレが問題の答えが分からない。適当に教会辺りでいいのか?

——ピンポーン!

今度は雄二が素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。というか問題がクイズじゃなくて質問になっている気がするんだが。

《はいっ!坂本さん!答えをどうぞっ!》

「鯖の味噌煮!」

コイツは頭がおかしいのか?まあいいや。

《正解です!》

「なにいつ!?!」

そりゃ驚くよねえ!場所を聞かれたはずなのに鯖の味噌煮が正解だもん。

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です!》

「待ていつ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

当たり前だ。強引で何が悪い。(もう自棄になっている)

《第三問！お二人の出会いはどこでしょうかつ？》

とりあえず、雄二の言葉を無視して第三問に入る。今回は明確な答えがあるので雄二が素早くボタンを押そうとする。だが……。

「……させない」

ブスッ

「ふおおおつ?!目が、目があつ！」

霧島さんが雄二に目潰しをしたので、押す事が叶わなかった。

——ピンポーン！

《はい、翔子さん！解答をどうぞ！》

「……小学校」

あ、やつと、嘘偽り騙し胡麻化し強引な解答でなく普通の正解が出た。よかったよかった。

《正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼馴染なのです！》

オレはすぐに解説を加える。まあ、雄二が目を突かれたのに仲睦まじいとは無理がある気もするが……そんな事はどうでもいい。

《では、第四問参ります！》

——ピンポーン！

オレが問題文が読み上げてようとしている最中に雄二がボタンを押してきた!!

あの野郎問題を無視しやがった！そつちがその気なら……！

「——わかり」

《正解です！それでは最終問題です！》

雄二の回答を無視して正解と答える。フハハ！問題を無視した仕返しだ！

『ちよつとおかしくなくい？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ？』

いきなり不愉快な口調で言う女性の声が聞こえた。ん？どこかで

聞き覚えがあるぞ？

オレを含めたその場の全員が声の主を探る。すると、女性の他にも男性が呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くにまで歩み寄ってくる。

確かあの二人って、ゲート前の時に現れたチンピラカップルだったっけ？正直、面倒事は勘弁してほしいんだけど。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか——』

『ああっ!?!ゴタゴタとうるせーんだよ！オレたちやオキヤクサマだぞコルア！』

あーあ。また勝手な事を言ってるよ。どうしたら、そんな上から物を見ることが出来るんだろう？

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど〜?』
『で、ですが——』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！オレたちもクイズに参加してやるって言ってたんだボケがっ!』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで!』

『そ、そんな——』

慌てるスタッフを無視し、チンピラカップルがズカズカと壇上に上がる。そして設置してあるマイクの一つをひったくる。

うーん。コレはちよつと不味いかな。此処で邪魔されたら計画が台無しになってしまう。

『じゃあ、問題だ』

雄二のことだ。どんな簡単な問題でも間違えるつもりだろう。頼むからマシな問題を——

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ!』
「……………」

——はあ？

『オラ、答えろよ。わかんねえのか?』

…………うん。確かにその問題は分からないと言えば分からない。そ

もそもヨーロッパは国というカテゴリーに属していないから、首都を答えるなんて無理な話だ。うん。不可能である。

うん。飽きた。コイツ等どうでもいいから、さっさと進めよう。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウエディング体験】をプレゼントいたします》

オレがそう言うのと、チンピラ共がすぐにコツチを見て睨んでくる。うわあーその程度じゃ怖くねえんだけど。

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ!?オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

はいはい。吠えれば解決するのは、人間じゃないですよ。解決すると思ったら大間違いです。

『マジありえない!?この司会バカなんじゃないの!?!』
ピキッ

ふざけてるのか?こんな頭が飾りで脳みそくんが旅立ったもぬけの殻に?脳内が暴力を使えば解決すると思っ込んでいる奴に?バカだと言われているだど……?!

チンピラカップルが騒いでいる中、ステージに幕が下りてくる。ふむ。丁度いい。

「おい、アンタら……」

『何だその眼は!文句でもあんのかああん!』

「……………次はねえぞ」

睨みと共に一言言い残す。

しかしまあ兄さん以上のバカがいるなんて驚いたよ。世界は広いもんだ。

雄二&霧島さん結婚大作戦！ ④

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい！》

二人の準備が終わったらしく雄二と霧島さんのウエディング体験が始まった。この園内にいる人たちの何割かはスタッフが混じっているが、しつかりと一般客もいる。

因みにアナウンスに関してはオレではなく、しつかりとしたプロの司会者である。さすがにメインイベントはプロの方でないと、オレにプレッシャーがかかる。そんなのはお断りだ。

「二人ともどんな風になっているのかな？」

「霧島さんはともかく雄二はな……」

オレと紫乃は客席側にいる。もうオレの役目は終了したので紫乃と一緒にウエディング体験を観客として見物する。

そして新郎役の雄二が壇上に立ち、司会者は進行しようとする。

《それでは新郎のプロフィールの紹介を――》

プロフィール紹介だなんて、随分と本格的な事だなあ。多分、兄さんから聞いて細かく下調べをしたと思うけど。

《――省略します》

手抜きかよ。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ〜』

『ここがオレたちの結婚式に使えるかどうかが問題だからな』

『だよ〜』

声の主は……………ああ。最前列に座っているチンピラか。しかし、あそこで大声を出しながら会話をするとはね。見た目どおりでマナーが欠如した奴らだ。

《……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってるの〜？』

『違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ？』

『だよね〜っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分が良いか悪いかってのが問題だろ？な、これ重要じゃない？』

『うんうん！リユータ、イイコト言うね！』

『それに俺はあの天草グループで働く、いわばエリートだぜ？俺を指摘しようものなら天草グループが後ろ盾してくれる』

『さすがリユータ！あつたまい〜！』

調子に乗って下卑た笑い声が会場に響く。ああ。本当に調子に乗ったクソ野郎どもだ。

「紫乃」

「ええ。もし、邪魔するようなことがあれば即刻クビね」

「……………というか、なんであんなの雇ったんだ？」

「……………私に言わないで」

というか、本当に働いてるのか？嘘の可能性も否定できんが……………まあいい。

《——それでは、いよいよ新婦のご登場です》

心無しか音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。

舞台上に立っている雄二たちの方でスモークが足元に立ち込めると、否応無しに雰囲気盛り上がる。

そして、雄二の前方に一条のスポットライトが点された。

《本イベントの主演、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から急に光が入った事により、オレは思わず目を瞑ってしまう。

そして、再び目を開けたその先に見たのは、

「……………」

霧島さんの余りの綺麗なウエディングドレス姿にオレは言葉を失った。

『……………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰の者ともわからない

台詞。だが、その言葉は、他の観客達もそう思っているはず。

霧島さんはそんな観客の事は気にせず、真つ直ぐと壇上に立っている雄二の前に向き合う。

「……………翔子……………綺麗になっているね……………」

「……………本当に綺麗だな……………」

オレたちが小声で会話をしている中、花嫁の霧島さんが俯き、ブーケに顔を伏せていた。ソレと同時に静かに震えだしているようにみえる。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが……………？》

司会者が仕事を思い出したかのようにアナウンスを入れる。

泣いている？……………確かによく見たら霧島さんが静かに泣いている。何があつた？

「お、おい。どうした……………？」

壇上にいる雄二が泣いている霧島さんに問いかける。

会場から静寂が消え、観客の間に少しずつザワつきが生まれだす。

そんな中、霧島さんは、

「……………ずっと……………夢だったから……………」

涙混じりの掠れた声で答えた。

《夢、ですか？》

「……………小さな頃からずっと……………夢だった……………。私と雄二、二人で結婚式を挙げること……………。私が雄二のお嫁さんになること……………。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……………」

霧島さんの台詞にオレたちを含める会場にいる観客達が再び声を失う。彼女が自身の夢を語り、願いが叶ったと言ったからだ。口数の少ない少女が紡ぐ言葉にはそうさせる力があつたのだ。

おめでとう。霧島さん。

「……………だから……………本当に嬉しい……………。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……………」

霧島さんがそこまで言うのと、後は言葉にする事が出来ずに再び静かに泣き始めた。

彼女の言葉に胸を打たれたのだろう。観客たちの中から鼻を吸る音が聞こえて来た。もらい泣きをしているのだろう。

「うう……良かったね。翔子……」

隣にいる紫乃も感動して涙を流しているし。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようにです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

さて、雄二はこの状況で何を言うつもりだ?さすがのあいつでも逃げだすことはしないだろうな。きつと、本心で答えてくれるはずだ。

「翔子。俺は——」

『あーあ、つまんなーい!』

折角、ツンデレの雄二が本心を言おうとしたのに誰だ!この空気をぶち壊したバカは!

『マジつままないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれなくい?』

『だよなく。お前らのことなんてどうでもいいっての』
ピキッ

『つてか、お嫁さんが夢です、つて。オマエいくつだよ?なに?キャラ作り?ここのスタッフの脚本?バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観る為に貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない?ギャグにしか思えないんだケドお』

『そつか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持つてるヤツなんていねえもんない!』

『え〜っ!?コレってコントなのお?だとしたら、超ウケるんだケドお〜!』

好き勝手な事を言い、霧島さんを指差して笑い始めるチンピラども。すると、

《んだとテメエらっ!もういっぺん言ってみやがれ!》

《あ、明久君!落ち着いてっ!ステージが台無しになっちゃいます!》
司会者の声ではなく、舞台裏の方から暴れている兄さんの声が聞こ

えた。チンピラどもの発言に兄さんは腹を立てたのだろう。まあ……

『スタッフが怒るとか、本当にコントグへっ!?』

オレもいい加減頭に来たけど。

『誰よ！リユータに向かつてスチール缶何てモノ投げたのは!』

『いい度胸じゃねえか！誰だぶつけたやつは！出てコイヤア!』

チンピラどもがキレル。沸点低いねえ〜

「あーすみません」

手を挙げ、オレがやった犯人だと名乗り出る。

『テメエさっきのバカ司会者か！何のつもりだゴルアア!』

「ゴミ箱と間違えました。すみませんねえ。ゴミにゴミをぶつけてしまつて。後……」

「あーまた、ゴミにゴミをぶつけてしまったか。まあ、ゴミ同士仲良くやっついていくでしょ」

『テメエ……！俺を怒らせると天草グループが……!』

『そうよ！リユータは天草グループの社員なのよ！天草グループが守ってくれるわ!』

一歩また一歩チンピラの方へと近づく。嗚呼、こんな醜い存在を近くで見ないといけないのか。

「バーカ。こんな公の場でそんな礼儀も知らない行動をして、まだ天草グループの社員でいられると思つてんの？頭大丈夫？あ、ごめんなさいね。頭大丈夫ならこんな事しないか。というか、脳みそ入ってる？」

『テメエ……!』

「あーそういえば、ここに天草グループの御令嬢様がいるよ。まあ、もう、上への報告は済んでるぜ？」

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

『は、はったりよ！そんなのはったりよ!』

「へえ〜はったりなんて言葉を知ってるんだ〜まあ、試してみればわかるし……」

チンピラどもの目の前に立つ。

「……次はねえって言ったよな？三秒で失せろ」

目で威圧し、今抱いている憎悪を憤怒を殺意を全て言葉に乗せる。すると、一瞬震え、そのままチンピラどもは会場を後にした。無言で。何も言わずに。いや、何も言えずに……か。

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですか？》

司会者の発言に、オレは壇上の方を見る。そこには霧島さんがいつの間にかいなかった。立っていた場所にブーケとヴェールを残して。

《霧島さん？霧島翔子さんっ！皆さん、花嫁を捜して下さい！》

全スタッフが一斉に霧島さんを探し出す。

そんな中雄二が会場から出ていくのが見えた。

「雄二。手伝おうか？」

「ん？俺は翔子捜索は手伝わんぞ？便所行ってえしな」

「あ、そう」

「それに。お前、鳥肌立ちまくってるぞ？それに震えているようだし、チンピラに怖気付いたか？」

「アハハ……あのクソギヤルに近づきすぎた。胸があるにもかかわらずに」

「なるほどな。じゃあな光正」

「ああ。任せたよ雄二」

これから雄二がやろうとすることにオレは止めるつもりがない。まあ、既に社会的制裁は済んでいる。後は、頼んだよ雄二。

「光正！雄二は！」

「ん？便所だつて」

「あいつ……！」

「まあまあ兄さん。あのツンデレの雄二だよ。霧島さんの場所は分かっているはずだ」

「……まあ、確かにそうだね。……大丈夫？巨乳に近づいた？」
「察して」

「光正の相手は天草さんに任せるよ」

「こういう時だけ、自分の体質が嫌になってくる。観客にもちらほら巨乳が混ざってるせいで、思うように進めない。」

「光正……」

「泣いたせいで目が真っ赤だぞ?」

「光正こそ。巨乳に近づきすぎたんじゃない?」

「……まあ、巨乳に加えて嫌悪対象に入ってたから尚更かもな」
「ん?」

「何でもないよ。じゃあ、帰ろっか」

「うん!」

「やれやれ。今日は疲れたなあ。」

「でも、霧島さん。綺麗だったね」

「ほんとにね。翔子、綺麗になってよかった……」

「まあ、雄二もあんなに綺麗なお嫁さんでさぞ羨ましい」

「ふふん。でも、私も綺麗さでは負けないはずですよ」

「はいはい」

「なんですかその適当さ。結婚式では言葉も出ないほど綺麗になって見せるんだから!」

「期待しないで待っているよ」

「むか。絶対に綺麗になるんだから!」

「知ってるよ。お前が元から綺麗なことぐらい。」

「こうしてオレたちの『雄二&霧島さん結婚大作戦!』は幕を閉じた。」

I F 並行世界の物語

とあるいつもと変わらない朝。僕は目が覚めた。
鳴り響く目覚まし時計によってだ。

「おはようございます。明久お兄様」

ベッドの横に立っている人影。ああ、光正か……ん？光正？

「ごめん。今なんて言った？」

「おはようございます。明久お兄様」

明久お兄様!?!どうしたんだこいつは!?!ついに頭が逝かれたのか!?!
いつも散々僕のこと貶す男がお兄様を付けて呼んでるだど!?!

「……何が狙いだ？命か？富か？名誉か？」

「狙いですか？そんなものございせんが？」

しかも今気付いたがこの男。燕尾服を着ているぞ!?!まあ、仕入れる
ルートはいくらでもあるが……それにしても……。

「君は誰だ？」

「はて？吉井明久お兄様の弟にして、名を光正と申します」

仕方ない。あくまでシラを切るといふのなら、確かめてやろう。

「じゃあ、これを見るんだ！」

バンツと、見せつけたのは巨乳のグラビア写真。僕の知ってる光正
なら震え戦き、逃げようとするはずだ。

「やはり、明久お兄様の好みは巨乳の方なんですな。私はそういうの
もいいと思いますよ？」

な・ん・だ・と!?!普通に見ても何も感じないのかこいつ!?!

「そんなことより、明久お兄様。朝食の用意が出来ております」

……ここは何処だろう。夢の世界なのか……?だって、あの光正が
僕の為に朝食を作ってくれるはずがない!?!というかこいつ敬語だし
何なんだ!?!

……夢の世界だと思っていました。しかし、頬を掴つても痛いです。

そんなことを思いながら学校に行こうとする。お？あれは雄二と霧島さんかな？そうだ！光正の異常事態を知らせないと……！

「雄二！霧島さん！大変だー！」

「吉井兄。どうしたの？大丈夫？何が大変なの？」

ちよつと待て。霧島さんはこんなに口数が多くないぞ。もう、この時点で嫌な予感しかしない……

「どうしたんだ明久？固まってるが」

おお！雄二！君だけはまとも——

「俺の翔子がどこか可笑しいのか？」

——じゃない!?俺の翔子!?僕の知ってる雄二なら思つていてもそんなことを口には出さないぞ!!

「もう雄二つたら俺の翔子って」

「ははっ、当然だろう。俺たちは結婚を約束した大の仲良しだからな」

……なんだコレ。僕の知っている光正と天草さんと同レベルのバカップルぶりだぞ？

「……………(スタスタ)」

あれはムツツリーニ！そうだ、ムツツリーニならこの状況何とかしてくれるかもしれない！

「ムツツリーニ大変だ！雄二と霧島さんが物凄いバカップルになってるー！」

「……………ムツツリーニ？」

ま、まさか！ムツツリーニが自分ということに気付いてないのか!?というかこの時点で明らかにおかしいけど……!!

「……………康太！雄二と霧島さんがもの凄いバカップルになってるんだけどどうしようー！」

「……………いつものことだろ？何を今さら」

い・つ・も・の・こ・と・!?」

「ははは。寝ぼけてるのか明久？」

「そうよ。私たちは学年一のカップルで有名でしょ？」

「何を言ってるんだ？学園一だろう？」

「違うわ。日本一」

「じゃあ、世界一だな」

「ううん。宇宙一」

わあー本当のバカップルじゃないかー。ここまで来ると僕の知る
光正と天草さん以上かも。

「というか明久。康太のことムツツリーニとか言ってたが奴がムツツ
リなわけないだろ？」

「え……………」

待つんだ雄二。ムツツリーニからムツツリが抜けたら何が残るん
だ。

「そうよ？土屋君は学年一ウブで有名なの」

「……………そんな事実はない」

ほら、ムツツリーニも否定しているよ。さすがにあのムツツリーニ
が学年一ウブなわけがない。

「あ、あんなところにスカートが捲れている子が……………」

「……………(ダツ)」

おかしい。普段の彼ならカメラを構え言われた方向に走り、シャツ
ターを切ると同時に鼻血を出すのに、今の彼は言われた方向と真逆の
方向に猛ダツシュしている……………。演技でもこんなことやつに出来る
はずがない！

「一体何が何やら……………」

「まあ、独り身のお前には辛い現実だろうな」

雄二が素直になるとこんな感じなのか……………後、辛いのは僕が独り身
であることに關してじゃない。

ん？独り身といえれば光正の彼女がまだ残ってる！

「……………あ、紫乃と吉井弟だ。おーい」

そうだ。天草さんはまともなはずだ！……って、あれ？腕組んでるのは恨めしいがまだ分かる。

問題は……

「ねえ雄二。何で天草さん。あんなに怯えた感じでの？」

「何寝ぼけたこと言ってるんだよ。天草は極度の男性恐怖症だろ？」

おっと。こりや大問題だ。というか、もうこの時点で僕の知っている天草さんじゃない。

「あれ？男性恐怖症じゃ、光正も苦手なんじゃ……」

「まだお前頭が起きてないのか？えーつとな……」

なんでもこっちの光正は幼い時にこっちの天草さんを助けたことがあったそう。その時点で天草さんは既に男性恐怖症だったらしいが、光正の優しき（こっちの光正には優しきが存在したのか）に触れていくうちに光正だけは大丈夫になったそう。そして、約一年程前から付き合っているとのこと。

おかしいな。こっちの雄二は霧島さんへのツンがなくなって、僕にも優しい気がするよ。

「あれ？天草さんってあんなに小さかったっけ？」

「はあ？一日で背が何センチも変わるわけないだろ？」

「それもそうだね……」

そんなこんなで、僕は教室へ向かうのだった。

教室にて、秀吉が女子の制服を着ていたがもうそこはスルーだ。むしろ秀吉の性別が『秀吉』から『女』になっただけで、他のメンバーの変わりように比べたら可愛いものだ。

「あれ？光正は？」

「はあ？あいつはAクラスだろ？何言ってるんだ？」

そりやそうか。僕の知ってる光正も本来はAクラス行けたレベルだったし、不思議じゃないか。

「明久君。おはようございます」

「あ、姫路さん。おはよう」

よかった。姫路さんはいつもと変わってないみたい。まあ、姫路さんまでおかしいわけがないか。

「ところで明久君。消しゴム落としちゃって、探してもらえませんか」「あ、うん」

「ちよつと小さめのやつなので探しにくいと思いますが……」

申し訳なさそうに言う姫路さん。

僕も探そうと四つん這いになる。すると、僕の腰に誰かが座った。

「雄二。僕は今探しているから乗らないで」

「はあ？俺がお前の上に座るわけないだろ？」

「え？じゃあ、誰が……」

「あれ？この椅子。なんで喋るんでしょうか？不思議ですね」

ははは。姫路さんの声僕が僕の背中の方から聞こえるぞ？まっさか

「もうダメですよ瑞希さん。明久さんを椅子にしてはいけないと何度
も言っているでしょう？」

そして美波が注意する。口調がおかしいがもうそんな些細なことで驚かないぞ。

「違いますよ美波ちゃん。明久君がどうしても私のげぼ……椅子に
りたいと言ったので仕方なくです」

はははっ。あの優しい姫路さんが僕を下僕扱いしようとするわけ
ないじゃないか。

「そうだったのですか？」

「はい。明久君がどうしてもって言うので」

「言っていないよね！一言も言っていないよね」

「明久君。そんなに私の爪先を啜えたいですか？」

どこの変態だよ！

文字通り受け取るとどここのド変態が望むプレイなのだ。まあ、文字通り受け取らないのなら、これ以上喋ると僕の口を姫路さんの足で塞ぐという意味だろうか。

ああ神様。どうか。どうか優しい僕の知っているもとの姫路さんを返してください……

「全くお主らは……もう朝のHRじゃぞ？西村教諭が来る前に座るのじゃ」

「私たちはもう座ってますよ？ねえ。明久君？」

「瑞希さん。冗談はそこまでにして、早く席に戻りましょう」

あはは……誰か助けて。

バカ+プール!!? ①

先週末に行われた兄さん提案の『雄二&霧島さんの結婚大作戦』は無事?に終わり、取り敢えずはいつもどおり平穏な週末の朝。

「じゃあ、兄さん。オレは泊りがけで紫乃の家行って来るから」

「せっかく、雄二が泊りがけで遊びに来るのに……。まあ、光正は彼女優先か」

そう、今日はお泊り会……。というか、ゲームで遊ぶ予定だ。おそらく徹夜だろうか……。まあいい。覚悟はできている。というか、本当に紫乃もゲームにはまったよなあ。

「冷蔵庫空だけど大丈夫?」

「うん。雄二に夕食は任せてあるんだ」

……。あの男に任せると碌なことにならないと思うのだが……。

「後、今日はガス止められてるから」

「何でさ!光正!今月分は払ったの!」

「……昨日まで使えてただろうがこの阿呆」

というか、弟にガス代、水道代、電気代などを払わせ、任せている辺りどうかと思うのだが。

「今日はマンション全体で止められてガス関係の修理点検だと。明日の昼頃には使えるそうだが、まあ、気をつけることと言ったら……。シャワーが水しか出ないことか?」

「ははは、別に冷水でも問題ないでしょ」

確かに問題はないな。

「んじゃ、行って来る」

「いってらっしゃい」

こうしてオレは特に何も持たずに家を出る。え?明日の服はって?何でか、紫乃が持つてるんだよねえ……。不思議だ。

そして、もしもこの日、ガスが使えてお湯が普通に出ていたとしたら、あんな事件(?)は起きなかつただろうに……

夜……

「こ、光正……これ以上は……これ以上はダメえ」

「ダメ。やめるつもりは無いよ？」

「私。も、もう——」

「ははは」

「——ダメって言ったのに！」

テレビの画面に映る、WINNERの文字とLOSERの文字。

「もう！何であそこでやめなかったの！そうすれば私が逆転勝利できる可能性があったのに！」

「ははは！オレは相手に逆転できる可能性を与えない！」

これはオレが清涼祭の一日目の夜にやっていた格ゲーである。紫乃に聞いてみたら、既にお買っていたそうなので対戦する形になった。

「……いじわる」

「いじわるで結構だ」

余談だがプレイ時間は紫乃の方が長い。まあ、そのせいで最初は向こうも勝てると思っ込んでいたが……お察しの通りだ。

「バカ！阿呆！光正！」

「……光正は貶し言葉じゃないよ？」

というか『正しい光』って書くんだ。貶し言葉になる要素が見当たらない。

「もう一戦……って言いたいけど汗かいたしな。風呂入るか」

「そうね」

やはり、紫乃も風呂に入りたいそうだ。すると、彼女は何かをひらめいたような顔になりニヤついている。なんか面白いことでも考えたのかな？

「ねえ、一緒に入る？（にやにや）」

「うん。いいよ」

「え……？」

「ん？どうした？」

即答するオレと急に固まる紫乃。ん？どうしたんだ？

「ほ、本当に……？」

「だって、一緒に入りたいんでしょ？いいよ。一緒に入る？」

「で、でも……私の裸なんて見ても……それにその……」

「あー一緒に風呂入って襲われないか心配ってこと？」

「光正に襲われる分ならいいけど……」

一体彼女は何を言ってるんだらうか？

「ほら、行くんでしょ？置いてくよ」

「わわ、ま、待ってえー！」

この時オレは知らなかった。同時刻、二人の少年が兄さんと雄二パンツ一丁で学校のプールを無断で使用していることに。まあ、知らなくて当然か。

をつけるのはマナー違反だよ。

「というか、ここ男湯って書かれていたけどいいの？」

「光正だからいいんじゃない？」

「あ、そう」

　というか、家の風呂が男湯と女湯がわかれている時点で庶民のオレからは想像もつかないや。

　にしてもいい湯加減だ。癒されるねえ

『本当だな』

　あ、オレの中の悪魔。久しぶり。

『おう。久しぶり』

　どうしたの？何かあった？

『ん？オレも湯船に浸かりたいなと』

　悪魔なのにか？

『悪魔差別は良くないぞ？』

　それもそうか。

「えい」

　バツシャーン

「光正！ちよつとお湯をかけるなら分かるけど、何で大量にかけたの！？」

「暇つぶし」

「子供ですか!？」

「というか、やっと、正面向いたね」

「あ……」

「隠しても無駄でしょ？」

「もう……本当にマイペースなんだから」

　紫乃は諦めたようで。オレの隣まで移動し、肩を寄せてくる。

　ああ、いい気分……

『おい光正！もうこのまま襲っちゃまおうぜ！』

　貴様はオレの中の天使！オレを悪の道へ引きずり込もうっていう魂胆か！

　……あれ？なんか字面がおかしい気が……

『なんだよつれねえなく』

でも、襲つてもいいかも……

『天使。落ち着きなさい。今は休むことが大切です。それに、光正も。天使の言葉に耳を傾けると後に後悔しますよ?』

『おい光正。まさか悪魔の言葉に耳を傾ける気じゃないよな?』

『おっと、それは悪魔差別ですよ?』

……おかしいな。どうやっても、悪魔の言い分が正しいようにしか聞こえない。

というか天使。

『ん?なんだ?』

貴様は現れることを禁止したはずだ!

『ああ、天使がまるで流星のように飛んで行く』

『光正……オレは何度でも復活するからな!』

はた迷惑な天使だ。

「光正どうしたの? さっきから黙っているけど?」

あ、すっかり黙り込んでしまった。

「もしかして——」

まさか、バレたのか? オレの中で紫乃を襲うか襲わないか葛藤が起きていたことに……

「——私に症状が発動した?」

……はい?」

「光正の巨乳恐怖症が発動したってことは、私の胸が成長した証! なるほど、私って普段着痩せするタイプだったのか……!」

見当違いにもほどがある。

「いや、それはねえから安心しろ」

「何が安心しろですか! この……?」

「ん? どうした紫乃?」

「い、いや……光正って筋肉質なんだね。腹筋も割れてるし……胸筋もあるし……あれ? もしかしなくても私より胸囲ある?」

「それはねえだろ。……そう言うことにおこ?」

「う、うん……触れちゃいけない領域だね。触れたら……私が地獄を

見そう」

ここに、二人の間で触れてはいけないものが出来た。

「……ねえ光正。キスしていい?」

「唐突だな……まあ、いいけど」

チユツつと、軽く触れあうだけのキス。……と思っていたら。

「んん——!?!」

紫乃の舌がオレの口の中に入り込んで来た!?!ええっ!?!何が起きてるの!?!というか、コイツは何してんの!?!よし、ここは落ち着こう。そうだな。冷静さを保とう。

「はあ……はあ……ふふ……」

どのくらい紫乃に口の中を蹂躪されたかは覚えていないが……相応長い時間だったと思う。紫乃が唇を放した時に、透明な糸が二人の舌を繋いでいたが、すぐに切れた。

「どう光正?ゲームで負けた仕返しは?」

「ははは……予想外だったよ」

……って、思ったけどよくよく考えたら人の寝込みにキスをするよ
うな奴だしな……まあ、いいけど。

「えっへん。最初の何されているのか分からず戸惑う光正は中々珍しく、見物だったのですよ」

何だろう。言われっぱなしじゃ終われない。

オレは紫乃の耳元に顔を近づけ……

「頑張って舌を入れようとしている紫乃も可愛かったよ」

「はう／＼」

「じゃあ、もつとする?」

「うん……んんっ」

その後、何度も互いの唇を重ね合わせていくうちに紫乃がのぼせて倒れかけるといふことも起きたが、なんか、オレたちらしいなあと思っただ。

同時刻、文月学園では二人の少年が鉄人に捕まっていたとかい
とか……

バカ+プールⅡ? ②

そして週明け。朝のHRが始まるまでの時間。オレたちはいつものメンバーで卓袱台を囲んでいた。

「つてなことがあつて、おかげで散々な週末だったよ」

「そうじゃったのかそれは災難じゃったのう……」

二人によると、雄二が先週末にオレたちの家に泊まりに来ていた時に、どういうわけか、二人で買ってきたコーラやゼリーをぶちまけるような喧嘩になり、たまたま家のガスが使えなかったせいで水しか出ずシャワーを浴びれなかったので、学校のプールに忍び込んで鉄人に見つかったらしい。

「つたく、おまけに二人は散らかした後で片付けなかったからな。家に帰った時に何事かと思つたぞ?」
「というか、後処理ぐらいしていけよ」

家に帰るとリビングにコーヒーマシンやコーラをぶちまけたと思わしき跡やとろろてんが散らかっていたんだ。片付けぐらいしとけよな……。

「ん。お主は一緒にいたのではないのか?」

「いいや? 紫乃の家に泊まりに行つていた」

まあ、お陰でオレは巻き込まれずに助かつたけど。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

「……………重労働」

隣でムツツリーニがそう呟いた。でも、実際その通りだと思う。

「だよね。あんなに広いところを掃除なんて、考えただけでも気が滅入るよ」

「褒美というほどじゃないが、『掃除をするならプールを自由に使つてもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え? そうなの?」

「ああ。だから秀吉とムツツリーニも来ないか?」

ん? オレは?

「ちよつと待て。オレにお誘いは?」

「何言つてんだ光正？お前は強制参加に決まってるだろ？」

……あれおかしいな？何でオレの意見って毎回聞かれないんだらう？

「ただし、光正とムッツリーニには掃除を手伝ってもらうけどな」

「……………」

オレもですか。というか、ムッツリーニが領こうとしていたのに雄二の言葉を聞いて動きを止めたぞ。まあ、さっきムッツリーニ自身が言ったように、プール掃除は重労働だからな。労働したくねえ……。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ」

即答だった。どうせ二人の水着を見たいのだろう。

「うむ、そうじやな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやろうし、相伴させてもらおうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？結構大変だと思いうけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じや」

秀吉は自ら進んで掃除をすると言い快諾していた。

「おい。オレもプール掃除強制なのか？」

「当たり前なことを光正は何言ってるの？」

いつかこいつらに仕返ししてやる……………！

「んじや、あとは向こうの二人だな。おい、姫路、島田」

よく通る声で雄二が二人を呼ぶ。

「どうしたの坂本？何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

すると、呼ばれた二人はすぐにやってきた。

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「え？」

プールという単語で二人が一瞬ビクンと反応する。

「ん？二人とも何か予定でもあるの？」

一応オレが聞いてみる。さすがに雄二たちも強制はさせないだろ

う。ああでも、二人がいないとムツツリー二の来る可能性が減少するけど。

「い、いや、別に予定はないけど。その、どうしようかな……？プールっていうと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですね。水着ですよね……。その、えつと……」

島田さんは自らの胸部へ姫路さんは自らの腹部へ、それぞれ視線を送る。というか、プールに水着じゃなかったら何で泳ぐつもりだ？ダイビングスーツ的なヤツか？

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……一つ言っておくと、秀吉は来るぞ。水着姿を明久に見せに、な」

雄二はそう言うが、別に秀吉は兄さんに水着姿を見せにくるわけじゃない。つまり、これは二人を誘うための狂言だ。

そんな雄二の言葉を受けて、島田さんと姫路さんは目つきを変えて秀吉に鋭い視線を送った。

「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

「そ、そうですねっ！木下君はズルいです！」

「??お主らは何を言っておるのじゃ？」

二人に非難されて秀吉は困惑の表情を浮かべる。

「で、どうすんだ二人とも？」

「い、行くわ。その、イロイロと準備して……」

「そ、そうですね。準備は大事ですよ」

複雑そうな顔をしながらも、参加を決意したようだ。というか、秀吉の性別が男って認識しているよね？

「そう言えば、いい加減水着を新調せねばならんわ。丁度良い機会じゃから買いに行ってくるかの」

秀吉が顎に手を当てて呟く。

「う、ウチも新しいの買おうかな……？」

秀吉につられたのか、島田さんも水着を新調するようだ。

「あれ？でも美波ちゃん。この前の水着の話をしていた時には『去年買ったばかりで今年は要らない』って……」

「み、瑞希！余計なこと言わないの！こ、今回買うのは……そう！勝負

用だから別口なのよ！」

「島田。焦って更に墓穴を掘ってるぞ」

「少し静かにした方が身のためだよ？」

「……気のせいよ」

「というか、勝負用って言ったら兄さんは勘違いして競泳水着とか思ってるぞ？絶対」

「あ、そうだ雄二に光正。霧島さんと天草さんにも声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」

「もちろん声を掛けるよ」

「だって、後に知られようのものなら……うん。あれだね。」

「うんうん。雄二も大人になったね。まあ、光正が天草さんを誘うのは分かってたけど」

「いや、そういう問題じゃない」

「そう。特に雄二はそういう問題で済む話じゃない。」

「??それじゃ、どういう問題さ」

「いいか、想像してみろ明久。俺の立場で、後々になってから翔子に知られるという状況を」

「……あんまり想像したくねえなあ……。」

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「俺の死体の処理の方法まで想像する必要はないが、まあそんなところだ」

「素直じゃない雄二でもそこまで来たら声をかけざるをえない。」

「とにかく全員オツケーのようだな。んじや、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

「そんな雄二の締め台詞とほぼ同時に、鉄人がドアを開ける音が教室に響いた。」

「紫乃。今週末空いてる?」

「光正からのお誘い!も、もちろん空いてるけど……」

「プールに行かない?」

「プール?でもまだ時期が早いと思いますよ?」

「いやねえ……」

——事情説明中——

………ということなんだ」

「なるほどです。………ということは水着を新調しないと」

「ん?どうして?」

「光正には関係………ある?」

「??でも紫乃なら何着ても似合うと思うよ?」

「光正………」

「ただ、胸が余りそうな奴はやめた方がふべガあ!」

「今言ってはいけないこといきましたね!ふーんだ。似合う水着にするもん!」

「ははは。期待してるよ」

文月学園お昼の放送

今日は金曜日。明日からは休みなのだがまあ、明日はいろいろあつて学校に来ることになっている。まあ、学校に来る原因になったのは主に僕と雄二だったりするが。

「明久。明日は寝坊するなよ?」

「ははは。誰に物言ってるのさ」

今は昼休み。いつものメンバー(光正を除く)で昼食を囲んでいる。

まあ、僕は昼食という名のソルトウォーターだけだね。

「当然。光正に起こしてもらうに決まってるじゃないか」

「自分で起きる考えはないんじゃない?」

「……………明久らしい」

僕が寝坊しず起きようと頑張るより、寝坊しなさそうな人に起こしてもらおう方が確実だ。まあ、僕も頑張つて起きようとは試みるけどさ。

「失礼します」

そんな他愛もない話をしている中、Fクラスに律儀に入ってきたのはAクラスの天草さんだ。

「……………あれ?……にもいない?」

誰かを探しているご様子。といつてもFクラスまでやってきてわざわざ天草さんが探す相手なんて一人しかいないだろう。

「お、天草じゃないか。どうしたんだ?」

「あ、坂本君。それに他の皆さんも……。あの、光正見てないですか? トイレ行って来るつていつてから行方不明なの」

一応補足しておくとう光正と天草さんはほとんど毎日のように昼休み一緒に過ごしている。僕らの昼食メンバーに光正が入ってないのはそのためだ。まあ、これは始業式二日目あたりからずっとなのでいい加減慣れているが。

え? 女子と二人きりで昼休みを過ごすことに関して妬ましくないのかつて? 僕らは……………まあ、姫路さんと美波と秀吉がいるからまだ抑えられているけど残りの皆は一時期毎日のように襲撃に行つたんだ。

その時の結果は……彼らの名誉の為に伏せておくけど。今は、もう諦めたらしい。昼休みはだけどね。

「悪いがこつちには戻ってきてないぞ?」

「可笑しいな。光正の行動パターンからして、ここにいないとなると何処にいるんだろう?」

さすがに光正と相思相愛の天草さんでも常に光正の居場所が分かるわけでは無いみたいだ。

「明久。一応双子だろ? お前なら光正の行きそうな場所が分かるんじゃないのか?」

「そんな天草さんでも無理だったんでしょ? 僕にはお手上げだよ」

天草さんに無理だったことを僕ができるわけない。

「うーん。どこ行つたんだろう?」

僕らも一緒に考えてみるが、あまりヤツが何処にいるのかイメージが湧かない……うーん。

ピンポンパンポーン

すると、急に放送がかかる。先生の呼び出しかな?

《さあ今日も始まりました文月学園放送部によるお昼の放送。パーソナリティを務めさせていただきますは二年Cクラス新野すみれです》
……何これ?

「雄二。何これ?」

「ん? 明久知らないのか? 一週間に一回ぐらいやっている放送部のお昼の放送だぞ」

「あまり聞いたことないんだけど……」

「お主らは昼休み騒がしいからのう」

「……………(コクコク)」

「そうかな?」

まあ、確かに異端審問会が暴れたり、僕を雑用に使おうと狙う教師から逃げたりしてゆっくり過ごせるほうが珍しいけどさ。

「そうよ。毎日のように騒いで……」

「賑やかでいいじゃないですか」

あれを賑やかで済ませてはいけない。

《さあ、お昼の放送。今月のお題はずばり『学年一のバカップル特集』です。先週は一年生の方をゲストにお招きしましたが今回のゲストは二年生です》

おっと。光正が何処にいるか分かったぞ。天草さん以外のメンバーも分かった様子だ。

《では、ゲストの二年Fクラス、吉井光正さんです》

(((予想通りだ……)))

「ええっ!? 光正が何で放送部のところに!？」

え? 自覚なかったの?

《二年Fクラス所属吉井光正です。本日はよろしくお願いします》

あの光正が真面目に返している……だど? まあ、そりやそうか。

「ちよつと待つて! 私光正が放送に出るなんて聞いてないですよ!？」

《あのく吉井くん。大丈夫ですか? 勝手に無断で強制連行してきておいてアレですがそこまで震えなくとも……》

《この震えは別なのでお気になさらず》

あ、強制連行されたから天草さんも知らなかったのか。

「……ムツツリーニ。新野って胸があるのか?」

「…………目測CくDカップと推定される」

「なるほど。良くも悪くもいつも通りってことだね」

「あやつも大変じゃのう」

光正。死なずに帰ってきてね。

《ところで新野さん。オレがここに呼ばれた理由って?》

《はい。二年生バカップル筆頭の彼氏さんにお越しいただきました》

《バカップル筆頭? 誰と誰が?》

《吉井光正さんと天草紫乃さんのカップルです》

(((お前も自覚なかったんかい……)))

《そんなの誰が言ってたのさ》

《二年生253名にアンケートを取ったところ見事一位に輝きました。ちなみに二位は坂本雄二さんと霧島翔子さんのカップルです》

「待て待て待てい! 俺と翔子はカップルじゃねえぞ!？」

「……そう。私たちは夫婦なの」

「どわあ!?!翔子!?!急に現れるな……って、夫婦でもねえよ!」

急に現れた霧島さん。僕も彼女の気配に気づかなかったので驚いたが……

「あれ?僕、アンケートに答えた記憶ないよ?」

「ああ。俺もねえぞ」

「……………(コクコク)」

ふむ。雄二とムツツリーニもアンケートに答えた記憶が無いとなるとアレはやらせかな?

「ん?ワシはしっかり答えたぞ?」

「はい。私も答えましたよ明久くん」

「一応、うちも答えたわ」

「あー私も翔子と坂本君って答えたっけ」

「……………私は紫乃と吉井弟に一票」

対して女性陣はアンケートに答えたと言っている。ふむ、実に不可解な謎だ。

「謎は解けたな」

「へ?」

「あの253という数字は二年生総勢300人から丁度秀吉を除く俺たちFクラスの男子を引いた数に一致する」

な、なるほど……

「って何でさ!何で僕らだけ除外なのさ!」

「当たり前だろ?俺たちに聞いてみる。……………まともな回答が得られないのは明白だ」

くっ……………否定できない……………!

《ではでは、最初の質問に参りましょう》

《質問?ああ、答えればいいのね》

《ベタですが、ずばり『彼女の好きどころ』です》

……………もし雄二が呼ばれていたらここで放送終了だったんじゃない……

《そうですね……………彼女の全部が好きです》

「こ、光正……………/」

それを聞いた天草さんは耳まで真っ赤にしている。……………ツチ。

《なるほど。教科書通りの回答ありがとうございます。……具体的に
は？》

《そうですね。容姿はもちろんですが、やはり内面でしょうね。彼女
はとても優しいですから》

まあ、天草さんは光正に対し時々暴走しかけるけど、基本優しい人
なのだ。

《さすがバカツプルの片割れですね。聞いている側としてはブラック
コーヒーが欲しい気分です》

僕らが欲しいのはブラックコーヒーじゃなくて、光正の肅正です
ね。

《では反対に『彼女の嫌いなところ』もしくは『直してほしいところ』
です》

《そうですね……》

「こ、光正……？」

不安そうに発せられる言葉を聞こうとする天草さん。あのバカの
ことだ。どうせ嫌いなところはないとか答えるのだろう。

《強いて言えば……》

「……光正？」

光正焦らすのはやめてあげて！天草さんがもの凄い不安になっ
ているから！

《紫乃はもっと自由でいいと思いますよ。今も充分自由な気もします
が》

《自由ですか？》

《はい。少なくともオレに対してだったらいつどんな行動をしようと
本気で怒ることはありませんから。ただ抵抗させていたただく場合は
ありますけどね》

「光正……／＼」

どうしよう。僕の異端審問会という名の血が騒ぐ……！

《なるほど。ありがとうございます。正直爆ぜろと思える放送でし
た》

《いえいえ》

《では、最後に一言どうぞ》

《紫乃。愛してるぞ》

「私も愛してる……」

『「もう我慢できねえっ!!」』

「あの野郎ここまで全校放送でのろけるなんて……!」

『モテない俺たちに対する当てつけか!』

「……………万死に値する……………!」

『我慢できねえ! 乗り込むぞっ!』

『「おうっ!!」』

僕は^光肅正対象正のいる放送室に乗り込もうと立ち上がったその刹那!

《まあ、雄二みたく彼女である霧島さんと結婚式はまだあげてませんが》

「……………いいことを言う」

「あげてねえからな! あれは企業の策りや……………はっ! 殺気!」

^光肅正対象雄二チエンジ。

「つて明久にムツツリーニ! お前らはくつつけようとした側だろうがあー!」

「そんな事実の確認されてない!」

「テメエらなあっ!」

嫉妬の炎は今までよりもドス黒く大きく燃え上がっていた。

「覚えていやがれ光正! いつか絶対にこの借りを返してやる!」

『「Let's party!!」』

《以上。最後まで惚気全開、彼女さんへの愛全開のゲスト吉井光正さんでした〜次回は三年生。こちらのバカップルぶりもなかなかですよ?》

《へえ〜誰が出るの?》

《おっとネタバレ禁止ですが、一言で言えば凹凸カップルですね》

《そうですか。では、また次回! お昼の放送で会いましょう!》

《それ私のセリフです!》

《See you and next time we look

f o r w a r d t o 》

《だから私のセリフをとらないでくださあああああ！》

この放送によって光正たちのバカツプルぶりは全校に知れ渡ることになった……。

そして、あまりの恥ずかしさと嬉しさに天草さんが倒れ保健室に運ばれたなんてこともあった。

バカ+プールⅡ? ③

そして週末。オレと紫乃は二人で校門前に向かっていた。
「全く。何を準備することがあるのやら」

紫乃の家の前で軽く待たされたオレは疑問をぶつける。

「乙女には準備も必要なの。ふふ、これで光正を惱殺^{のうざっ}してやるんだから」

「脳殺^{のうざっ}だと……!」

この女……このプールでオレを殺すつもりか!

「……何故か光正がおかしな勘違いをしている気がするんだけど……
気のせい?」

「はは、気のせいだよ……お?」

オレの視線の先には既に先に行かせた兄さん。後、姫路さんと秀吉、ムツツリーニがいた。

「バカなあああああっ!」

そして、兄さんとムツツリーニの絶叫が響き、同時に地面に突っ伏す。何やってんだ?あのバカどもは。

「二人してどうしたんだ?」

「光正聞いてよ!秀吉の新しい水着がよりにもよって男物のトランク
スタイプなんだよ!」

「当たり前じゃないか」

何言ってるんだコイツは。

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃからな。ここらで一
度ワシが男じゃということを再確認させようと思ったのじゃ」

「酷いよ秀吉!君は僕のことを嫌いなのかい!」

「……見損なつた……!」

「な、なんじゃ!?!なぜワシは責められておるんじゃ!?!」

「き、気にしないでいいと思いますよ。木下君」

「光正。なんでこんな状況になつてるの?」

「いつものことだ。気にするな」

……やはりこいつらバカだろ。そう、呆れていると、

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」
「わわっ!」

島田さんの妹の葉月ちゃんが急に兄さんに飛びつき、兄さんが驚いたような声を出す。

「もう葉月ってば。アキがびつくりしてるでしょ?」

少し遅れて島田さんがやって来る。

「やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」

「えへへー。二週間ぶりですっ」

兄さんの背中で天真爛漫を体現したように笑う葉月ちゃん。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですかっ?」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

呼んだらきつと、君のお姉さんがオレの兄さんを八つ裂きにしていただろう。

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃて。どうしてもついでくるって駄々こねてきかないもんだから……」

島田さんが溜息まじりに呟く。

「あれ?坂本はまだ来てないの?ウチが最後だと思ったのに」

「ん?あいつのことだしもう来ているだろ?」

「はい、もう来てますよ。今職員室に鍵を借りに行つて……あ、丁度戻ってきたみたいです」

姫路さんが説明していると、校舎の方から雄二と霧島さんの姿が見えた。

「おはよう。雄二に霧島さん」

「おはよう。翔子。坂本君」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「……おはよう」

一応二人に挨拶をしておき、二人も挨拶を返す。

「お兄さん、おはようですっ」

葉月ちゃんは大柄な雄二に物怖じもせず挨拶をする。そう言えば最初あつた時も怖がつていた様子がなかったっけ?

「ん？チビツ子も来たのか」

「チビツ子じゃないですつ。葉月ですつ！」

「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」

「はいっ」

楽しそうに葉月ちゃんの頭をポンポンと手を置く雄二。意外と子供好き（意味深）で葉月ちゃんの来訪を喜んでいる（意味深）ようだ。
「んじゃ、通報するか」

「待て光正。何に対してかは分からないが多分誤解だ」

誤解？雄二がロリ好きつてこと？あーでも雄二は霧島さん一筋のツンデレか。

「とりあえず、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉通り一旦男女に別れる……しかし、何故か葉月ちゃんがオレたちに付いて来ようとする。一応葉月ちゃんを追い返そうとする……

「ここら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていけないとダメだよ」

兄さんが代わりに言う。ん？なんで秀吉も？

「えへへ。冗談ですつ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……？」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

こつちでは島田さんまでもが秀吉を女子扱いしていた。

「し、島田!?!?!にお主までそんな目でワシをみるように!?!嫌じゃ！女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ！」

当然だが、頑なに女子更衣室を拒む秀吉。

「あの……。それなら、木下君は一人で別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

そこに姫路さんが手を挙げて提案する。

「まあ、兄さんたちを納得させるには妥当だろ」

「……おかしいと思うのは私だけ？」

大丈夫だ。オレもおかしいと思ってる。

「ぬ、ぬう……得心行かぬが、この際我慢じゃ……。水着姿を見せればきつと皆もワシの事を見る目が変わるはずじゃ……」

などとブツブツ言いながら、水着の入った鞆を握り締めた。オレの予想だと、何かをやらかしていそうな気がする。

「よし。決まったならさっさと行こうぜ。時間が勿体無い」

「うん。そうだね」

「ほーい」

「……………（コクリ）」

こうしてオレたちはそれぞれの更衣室に向かった。

そして二十分後……

「やっぱり女子はまだ着替え終わってないか」

「そうみたいだね」

「まあ気長に待とうよ」

「……………（コクリ）」

トランクスタイプの水着に着替えたオレたち四人はプールサイドで女子たちの到着を待っていた。兄さんとムツツリーニが嬉しそうにしているのが丸分かりだった。まあ、オレも紫乃のは楽しみだけだ。

「ムツツリーニ。心の準備はできてる？命に関わるからね？」

「……………問題ない。イメージトレーニングを256パターン、昨晚済ませてある」

「一体どんなパターンがあつたの？」

「……………そして256パターンの出血を確認した」

「致死率100%じゃないか」

どうあつてもムツツリーニは助かりそうにない。ムツツリーニ。骨は拾ってやろう。

「お、誰か来たぞ」

不意に雄二が呟く。顔を向けると、更衣室の方から小さな人影が見える。スクール水着をきた葉月ちゃんだった。

「どどどどうしよう雄二に光正!?!あれってスクール水着だよね!?!そんなものを着た小学生と遊んでいたら逮捕されたりしないかな!?!」

「……………弁護士を呼んで欲しい（ボタバタバタ）」

「警察呼ぼうか?」

「お前ら二人も落ち着け。小学生の水着姿でそこまで取り乱すな。後、光正は警察沙汰にするな」

まあ、こんなことで呼ばれる警察も可哀想だろうけど。

「お兄ちゃんたち、お待たせですつ」

そこに葉月ちゃんが駆け寄ってくる。小学生に不釣り合いな胸の膨らみはおそらく、島田さんの胸パットを勝手に使ったとかだろう。だって、オレが恐怖してないんだからな。

「懲役は二年程度で済みそうだね」

「……………実刑はやむをえない（ボタバタバタ）」

「もう牢屋で生活しろ」

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ。光正もこいつらの入る牢屋の気持ちを考えてろ」

毎日血で汚れる牢屋……………うん。可哀想だ。

「こ、こら葉月っ!お姉ちゃんのスレ、勝手に持って行ったらダメでしょ!?!返しなさいっ!」

現れたのは、胸元を手で隠している島田さん。なんとなく予想通りだった。

「……………パット」

「ほえ?」

ポソリと呟いたムツツリーニの視線を兄さんが追う。そこには、パットが腹にずれた葉月ちゃんの姿。

「ん?ってことは、今美波が返しなさいって言ったのは、葉月ちゃんが

つけている胸パツ——」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」

「だ、ダメだよ美波！その一撃は僕の記憶どころか存在まで消し去りかねないからー！」

「そうなるとオレに兄貴が居なくなるのか……それもいいかもな」

でもそうすると、姉さん避けがいなくなってしまう。うーん。悩ましいところだ。

「ううう……折角用意してしてきたのに……葉月のバカ……」

哀しげに呟く島田さん。オレの隣では島田さんの水着姿を兄さんが眺めていた。

「な、何よ。やっぱりこの格好、どこか変なの……？」

「い、いや。そんなことないよ！その、すごく似合っているよ！」

「え……？アキ。それ、本当……？」

「う、うん……。手も脚も胸もバストもほっそりとしていて、すごく綺麗だと脚の親指が踏み抜かれたように痛いっ！」

島田さんが兄さんの足を踏みつけていた。

「今、ウチの胸が小さいって二回言わなかった？」

島田さんが目を吊り上げ兄さんを睨む。うん。オレも確かに聞いたよ。

「島田、そう怒るな。明久は口ではああ言っているが、明らかにお前の水着姿を意識してるぞ」

「そうそう。兄さんはさっきから動揺しまくりだよ？」

「ゆ、雄二に光正！何を言ってるのさ！僕は別に動揺してなんか……っ！」

「あ。そ、そうなの……？もう、アキってば。素直にそう言えばいいのに……バカ」

島田さんが小さな声でそんなことを言い出す。そんなこと言ったら……！

「美波の胸、小さいね」

「アンタの目を潰すわ。左右均等に、丁寧に」

ほら、自分の口で再び命の危機を迎えているじゃないか。全く

……つと、急に視界が真っ暗だ。

「だくれた♪」

何か前もやったことある流れだな。

「貧乳」

「死ね」

「グアアアアアア!? 背中がああああ!」

振り返ると紫乃が立っていた。ん? あれって、バンドウビキニとか言うやつだっけ? 黒色の水着でフリルって言うのが胸元に付いてる。

……可愛いなあ。

「光正?」

「……………(ぽえく)」

「ん。光正どうした?」

「……………(ぽえく)」

「ああ。もしかして、天草の水着姿に見とれているのか?」

「……………はっ! いいいや、そんなことあるよ!」

「……………それを言うならそんなことないだろ? (にやにや)」

「光正……………(ぽっ)」

クツ……………オレとしたことが動揺してしまった。だって仕方ないんだ。紫乃が可愛すぎるんだから。

後に聞いた話だが、紫乃の着ていた水着。正式にはティアドバンドウビキニと言うらしい。

「ふうく紫乃」

「なにかな?」

「凄く可愛い」

「ふふっ。ありがとう」

ようやく普通の状態に戻ることが出来た。

すると、更衣室の方から四人目が現れた。霧島さんだ。

兄さんは霧島さんの水着姿に完全に見入っているようだ。そして、霧島さんは自然な仕草で雄二に歩み寄ってきて……………

「……………雄二。他の子を見ないように」

そのまま流れるような動きで雄二の目を潰した。

「ぐああああつ！目が、目があ!!」

「凄いわ……坂本の目を潰す仕草まで綺麗なんて……」

「うん……あの姿を見れるのなら、雄二の目なんて惜しくないね……」

「そうだね……」

「はは、光正。震えているけど大丈夫?」

「も、モンダイナイ」

「問題しかないね……」

「そりやお前らには実害がないからなつ!」

のたうつ雄二が声をあげるが、正直倒れそうだ。服を着た状態でアウトな人が水着でだと?もう、震えが止まらない。

「ふえ……お姉さん、とっても綺麗です……」

ちなみに、霧島さんが着ているのは、白ビキニと水着用のミニスカートを組み合わせたものだ。

「……そう言われると、嬉しい……」

葉月ちゃん言葉に霧島さんが頬を赤めている。

「ほらほら雄二。雄二も霧島さんに言うべきことがあるでしょ?」

兄さんは雄二の背中を押す。

「翔子」

「……うん」

「ティッシュをくれ。涙が止まらない」

「このバカ雄二!もつと他に言うべきことがあるじゃないか!」

「視界を奪われて他に何を言えと!」

「まったく、雄二にも困ったもんだよね光正、ムツツリーニ」

「多分兄さんよりはマシだよ」

ムツツリーニはというと、輸血作業に忙しいのか、ほとんど喋らない。兄さんが水を向けるが、一向に反応がないご様子だ。

「あ、あれ、ムツツリーニ?」

「どうした?気絶でもしてるのか?」

さつきから明らかにこの男の様子がおかしい。水着の女子たちを前にあのムツツリーニが呆けているとは考えにくい。

「………すまない、明久、光正」

を上げている。そういやさつき、いつもは冷静な霧島さんも声が震えていたような気がする。

「ありがと紫乃。少しは落ち着いた」

「うん。でも顔色が悪いよ？大丈夫？」

「紫乃。傍から離れないで」

「……光正………／＼」

ふうー大丈夫だ。いざとなれば逃げるか兄さんを犠牲にすればいい。そうだ。いつも通り大丈夫だ。

「み、皆さん何をしているのでしょうか……？」

この騒動の元凶は自覚がないらしく、姫路さんだけが混乱している。

「あはは。なんでもないよ姫路さん。ただ、少しだけ時間をもらえるかな？」

「は、はあ……」

兄さんはゆっくりと目を開ける。

「姫路さん。今日はいいい天気だね（ブババババ）」

「あ、明久君っ?! 凄い勢いで鼻血が出てますよ!」

身体は正直なようだ。格言うオレも一歩ずつ近づくとたびに震えが止まらず鳥肌が立つ。

「……これって、もう本当に病気じゃ……」

そう思ったら負けだ。

「ごめん姫路さん、もう少しだけ待って」

「は、はい。よくわかりませんが、待っています」

「ありがとうございます」

兄さんが鼻を押さえながら上を向く。すると……

「た、大変っ！明久君が出血多量で死んじゃいそうですっ!」

さつきより、出血量が増えてた。変な妄想でもしたのだろうか？

「バカなお兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「ああ、うん、ありがとうございます葉月ちゃん」

葉月ちゃんがティッシュを持って兄さんに寄っている。

「さて、それじゃ改めて」

姫路さんの水着姿をもう一度視界に入れる兄さん。今度は何とか堪えてるようだ。

「あの……明久、君……?」

「……………」

「そ、そんなに変ですか……?」

「へ、変じゃないっ!かなり似合っているよ!」

「本当ですか?」

「本当だともっ!なんなら命を賭けてもいい!」

まあ、この男が嘘をつけるわけがないだろう。

「良かったあ……ここ一週間、ご飯を抑え目にした甲斐がありましたあ…………」

「瑞希。アンタはやっぱりウチの敵ね……覚えておきなさいよ……!」

我に返った島田さんは姫路さんの胸を親の敵のように睨みつけていた。

「う、うう……。俺は未だに目が見えないんだが……全員が揃ったのか?」

目を突かれた痛みのせいか、涙をボロボロと流す雄二が目を開けずにごちらを向いた。

「秀吉がまだだよ?」

まあ、秀吉は結局校舎で着替えることになったからここまで来るのに時間がかかるのだろう。

「……………秀吉はトランクスタイプ…………」

輸血が間に合い復活したムツツリー二が寂しそうに一言洩らし、兄さんも同時に哀しそうな表情になる。

「光正君は大丈夫ですか?顔色が悪いようですけど……?」

「姫路さん。お願いがあるんだ」

「はい?」

「半径十メートル以内に近づかないでくれ」

「えーつと……多分それは不可能じゃないかと……」

「分かった。五メートルにしてくれ。お願いします」

「ははは、気をつけてはみますね」

ふうー交渉完了だ。

「……まだ、姫路さんと翔子もダメなの？」

「姫路さんはこれでも二メートルより外なら大丈夫になったし、霧島さんも一メートルより外なら大丈夫だが……水着は別だ」

「早く、身近な女子ぐらいは慣れてあげてよ？」

「頑張る」

これでも成長した方だ。そう、成長した方なんだ。

「バカなお兄ちゃん。どうしてそんなに哀しそうな顔してるの？」

一方葉月ちゃんが心配そうに兄さんの顔を覗くが、まあ、心配する必要はない。

「心配かけてごめんね葉月ちゃん。ちよつと寂しくなっちゃただけなんだ。気にしないで」

「そうよ葉月。アキのことなんて心配するだけバカらしいから、気にしないで……」

そんな言葉の途中で、島田さんが絶句していた。なぜ？

「待たせてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじやが、いかにせん校舎からプールまでが遠くての」

原因は女物のトランクスタイプの水着を着た秀吉だった。

うらん、そんなに待ってないよ秀吉
「☆●◆▽□♪◎？」

「落ち着け明久。ここは地球だぞ」

「せめてオレたちに分かる言語で話そう？」

あれえ？今日は雄二が常識人に見えるぞお？不思議だなあ。

「ど、どうじゃ……？これで少しは男らしく見えるかの……？」

恥ずかしそうに、だが少し見せ付けるように秀吉が兄さんに歩み寄る。

「わっお姉ちゃん、とつても可愛いですっ」

「んむ？『可愛い』じゃと？島田妹よ、何を勘違いしておるのか知らんが、ワシは見ての通り男じゃぞ？」

「ふえ？でも、葉月はその水着、女の子用だと思っす」

「な、なんじゃと!？」

「嘘だろ？今気付いたのか……？」

「き、木下……！アンタ、どこまでウチらの邪魔したら気が済むの……！」

「木下君は卑怯です……！トランクスだなんて私たちを油断させておいて最後の最後に裏切るなんて……！」

基本構成は島田さんと同じようなスポーツタイプ。上は肌に張り付くようなショートタンクトップ。下は普通のパンツ。その上にショートパンツのようなズボンを、一番上のボタンを外した状態で重ねている。うん。疑いようなない歴とした女物だね。

「秀吉！やっぱり秀吉は僕らの気持ち察してくれていたんだね！」

「………永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

随分と安い友情だなあ。

「ち、違うのじゃ！ワシは本当に男物を買った筈じゃ！きちんと店員にも『普通のトランクスタイプが欲しい』と言ったのじゃぞ!!」

「多分、その店員さんは勘違いしたんでしようね……何も知らずに木下君に『トランクスタイプの水着が欲しい』なんて言われたら」

「………そうね。ウチでも間違いないそんな感じの水着を勧めるわ」

「木下君って。女の子でも通用するよ」

「そ、そうじゃったのか……ワシも少しおかしいとは思ったのじゃ。なにゆえ男物に上があるのじゃろうかと……」

床に手をつきショックを噛み締める秀吉。でも、今回は秀吉にも非があると思う。

そして、オレたちのそんなやり取りの隣で、霧島さんは雄二に心配そうに声をかけていた。

「………雄二。目、大丈夫？」

「ん？ああ。大丈夫だ翔子。だいぶ見えるようになってきた。だが、心配するなら目潰しなんて……」

「………それなら、もう一度（ブスッ）」

「さ、三度目!?お前俺に何か恨みでもあるのか!？」

「………ここには雄二に見せられないものが多すぎる」

プールに来たというのに、雄二は水に入る前に病院に運ばれそうな

勢いだった。

バカ+プール!!? ④

軽い準備体操を終え、一泳ぎした後にはオレは秀吉と雄二と共にビーチボールで遊んでいた。

「それにしてもお主は泳ぐの速いのう。はい、光正」

「まあね。一応遠泳も出来るよ。はい、雄二」

「本当に多彩な奴だな……そら、秀吉」

オレたちは平和そのもの。プールの中でビーチボールをトスしたりレシーブしたりして遊んでいる。先ほど、島田さんと姫路さんのよく分からないやり取りもあったが、特に気にしていない。

「そういや、雄二は霧島と一緒にいなくて良いのかの? はい、光正」

「そうそう。一緒にいなくていいの? はい、雄二」

「別に四六時中一緒に訳でもねえしな。それに、今は天草と一緒にいる。そら、秀吉」

「ほう。にしても、天草と霧島は仲がよいのう。はい、光正」

「あーうん。昔からの友達らしいよ? はい、雄二」

「なるほどな。そりゃ、翔子も天草とは一段と仲がいいわけだ。そら、秀吉」

実に平和なやり取りだ。兄さんが会話にいないだけでこんなにもスムーズにかつ被害者0で会話できるのか。

「おーい、霧島さーん! 天草さーん!」

ん? あの兄さんが霧島さんと紫乃に何の用だろう? ああ、葉月ちゃんも一緒に居るから、何かのゲームをしたりして、遊ぶのだろう。

「平和な一時じゃな……」

「そうだねえ……」

「そうだな……お? なんだ? いきなり足が——」

「ん? 大丈夫雄二?」

「おわあっ!?! だ、誰だ!?! 誰が俺を水中に(ガポガポ)」

雄二が溺れかけていた。

「全く雄二ったら。何を学校のプールで溺れ……」

一瞬で水中に引きずり込まれた。

「ゆ、雄二に光正!?大丈夫かの!？」

大丈夫って言われたら大丈夫だ。雄二みたく暴れていると無駄に体力と酸素を消費するだけ。

ここは落ち着いて、水中に引きずり込んだ犯人である紫乃が何を考えているのかを見るべきだ。

『どうして溺れてくれないの!』

彼女はこう目で訴えかけてきている。うんうん。何故溺れないといけないんだ?後、いい加減足を解放しろ。

『溺れてくれないと次のステップに行けないじゃない!』

一体オレの彼女は何を吹き込まれたんだ?彼氏を溺れさせて一体何をしようというのだろうか。

『何が狙い?』

『水中鬼って遊び。光正を溺れさせて人工呼吸をしたら私の勝ちなの』

ほほう。つまり、オレが溺れなければオレの勝ちになるのか?いや、違うな……

『紫乃ちよつとおいで』

『???いいけど』

手招きをして彼女を呼び寄せる。さつきオレを溺れさせて人工呼吸をしたら紫乃の勝ちって言った。ということとはだ。

『光正やめて!笑いがこらえられない……!』

脇とかお腹とかをくすぐって笑わせる。水中で笑うと、当然だが空気が口から出ていく。まあ、普通は浮上すればいいけど、オレが拘束しているから無理か。というか、くすぐり攻撃は紫乃弱いなあ。頭の中にメモメモと……

カポツ

一際大きな気泡が口から出てくる。うん。紫乃が水を飲む前にやっとなないと、ガチで命に関わるからな。

彼女の口を口で塞ぎ、空気を送り込む。

「んっ……」

そして、口を放し、浮上する。

「ぷはあ……し、死ぬかと思った……」

「あははは」

「わ、笑い事じゃない！」

「いや、オレの勝ちだね」

「え？」

「相手を溺れさせて人工呼吸した方が勝ちなんですよ？」

「何でこの男には勝てないの……というか、息長く続きすぎじゃない？」

「ん？肺活量が多いからな」

「……絶対そういう問題じゃないと思う……」

彼女は一体何を問題にしているのだろうか？

「ねえ光正。気付いたけど……」

「ん？」

「水中だと皆にバレずにキスできるんだね」

「じゃあする？」

「いや、やめとく。ちよつと……とかかなり疲れたし」

「そうだね。まあ、紫乃があんな遊びをするからだけど」

「想定外だった。光正が溺れても慌てなかったのが」

「溺れた時はまず慌てずに対処する。常識でしょ？」

「普通は分かっているもできないの」

そういうもんかな？

「じゃあ、ありがとうございますか」

「そうだね」

オレたちの水中鬼はオレの勝利で幕を閉じた。さあ、雄二と霧島さん、それに巻き込まれた兄さんの三人での水中鬼は誰が勝者となるのやら。……多分雄二が勝つことは無いな。

「あれ？プール使ってるの誰かと思ったら代表と紫乃だったの？」
オレと紫乃がのんびりと休憩していて、雄二たちの水中鬼を眺めているとどこかで聞いたような声がプールに響いた。

「……愛子？」

「あ、ほんとだ」

霧島さんが動きを止めて声のした方を向く。雄二と明久も死闘を一旦中止して同じほうを見た。もちろんオレと紫乃もであるが。

「Aクラスの工藤さん。あれ？どうしてここにいるの？」

そこにいたのはAクラスの工藤愛子さん。試召戦争でムツツリーニと戦っていた。まあ、あれ以降、清涼祭の準備で多少関わったかな？つてレベルの人で兄さんとかは名前が出てこないかもしれない。

「ボク？ボクは水泳部だから」

「そうか。だが、今日は水泳部は休みになっているはずだぞ？」

あー掃除という名目のためにか。

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど——
——人の声があったから寄ってみたんだ。良かったらボクも混ぜてもらっていい？」

「雄二どうするの？断る理由ないけど」

一応断るとは思えないけど、今回のプールメンバーを集めた雄二に尋ねてみる。

「ああ、別に構わないぞ。俺たちのプールつてわけでもないし——」
言葉を区切つて雄二が島田さんたちのいる方を指差す。

「——既に一人、誰かが増えているみたいだしな」

見てみると、そこには一人知らない女子が増えていた。
『お姉さまっ！どうしてプールに行くのならミハルに声をかけてくれないのですか!?ミハルはこんなにもお姉さまのことを愛しているのに!』

『ミハル!?アンタどうしてここにいるのよ!プールで遊ぶなんて誰に

も言わなかったはずなんだけど!」

『ミハルにはお姉さまを害虫から護る為の特別な情報網がありますから!』

あれは誰だろう? 島田さんの知り合いらしいけど、仲良しには見えない。現に島田さんはその女子から逃げ回ってるし。

(ぶるぶる) また、胸のある女子が増えた……」

「えーあれBカップぐらいだよ?」

「駄目だ。胸がある時点でオレの天敵だ」

「天敵しかないじゃない……」

それは仕方のないことだ。

「なにやら賑やかになってきたのう」

秀吉が危なげない泳ぎで兄さん達の方に向かっていった。その後ろには姫路さんと葉月ちゃんが時折足をつきながらこ向かっている姿が見える。葉月ちゃんは泳げないわけではなく、姫路さんのペースに合わせてるようだ。

「あれ? 優子——じゃないみたいだね。弟君だっけ?」

「ふむ。そうじゃが。お主は姉上の友人かの?」

「うん。クラスメイトなんだ。あのさボクも泳いでいいかな?」

「ん? 遠慮する事はなからう。ここは学校のプールじゃからな」

「まあ、気付いたら一人増えてるレベルだし、もう一人増えても変わらないでしょ」

「ありがと。それじゃ、水着に着替えてくるね」

スポーツバッグを掲げて更衣室をの方向かう工藤さん。すると、その途中で振り向いて。

「覗くなら、バレないようにね♪」

と言いつつ残していった。

本人公認の覗きか……ここは、どうするべきか。

「……雄二。今動いたら捻り潰すから」

「明久君。余計な動きを見せたら大変な事になりますよ?」

「光正。動いたら沈めるから」

兄さんと雄二の二人だけでなく何故かオレまでもが迂闊に動けな

くなつた。まあ、沈められてもある程度息は持つけどね。さあ、残つたムツツリーニはどうするつもりだろうか？

「つてムツツリーニがいないね。どうしたんだろ？」

兄さんの言うとおりに、ムツツリーニの姿が見当たらない。うーん。あのムツツリーニが静かにしているのはおかしい。

「ムツツリーニならば、ほれ、向こうで血液の補充で忙しそうじゃぞ」
「……なるほど。どうりで静かなわけだよ……」

カメラを構える余裕なんてなく、必死に血液パックを付け変えている姿がやけに哀れに思えた。

バカ+プールⅡ? ⑤

バシツと水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く。

「あのさ、雄二に光正」

「なんだ?」

「どうしたの?」

オレの膝を枕に寝ている紫乃を撫でながら答える。

遊び疲れたのだろうか。寝顔も可愛いなあ……。

「僕の気のせいかもしれないんだけど」

「ああ」

「うん」

ズバン、と勢いよくサーブを打つ音が鳴る。

「あの二人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーをやってない?」

「大丈夫だ。俺にも険悪な雰囲気に見える」

「誰がどう見てもそんな雰囲気だよ?」

『美波ちゃん!絶対に譲りませんからね!』

『上等よ瑞希!スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね!』

ボールよ割れる、と言わんばかりに全力で打ち合う姫路さんと島田さん。最初は仲良くやっていたように見えたんだけど、何でいつの間にあんな事になったんだ?

「ときに明久」

「ん?なに、雄二?」

「この前俺がお前にやった映画のペアチケットはどうした?」

ペアチケット?ああ、そう言えば雄二はウエディングプランが終わった翌日、兄さんにペアチケットを渡していたっけ?きつと、それについて言ってるんだろう。

「姫路さんと美波が随分と観たがっていたから、それなら二人で観てくるといいよってあげちゃったよ」

「……間違いない。それが原因だ」

「……ああ、それしか考えられない」

「へ?何が?」

『負けた方が諦めるって約束、忘れてないわよね!』

『もちろんです!美波ちゃんこそ負けてもお約束を破らないで下さいね!』

『そっちこそ!』

「ほう……。姫路と島田の勝負とは面白いのう。どちらが優勢なのじゃ?」

疲れたのか、秀吉もプールから上がって兄さんたちの座るベンチに座りながら雄二に聞く。

「今のところは姫路が優勢だな」

「んむ?それは意外じゃな。球技ともなれば島田の方に軍配が上がりそうなものじゃが」

「姫路と島田の一对一ならそうだろうけどな」

そう言つて雄二はそれぞれの陣地と思わしきところを顎で示した。姫路さんのいるところでは霧島さんが、島田さんのいるところではミハル(?)とか言う人がそれぞれボールを追っていた。

「なるほどのう。霧島は運動神経も良いようじゃな。島田と互角とは、なかなかやるではないか」

もし姫路さんと島田さんだけの勝負だったら島田さんの圧勝だっただろう。しかし、今回は霧島さんがパートナーである事によってそうはならなかった。霧島さんは勉強だけでなくスポーツも万能であり、巧みにボールを島田さんのいないところに落とし得点を挙げている。

「それにしても、島田の相方は動きが不自然じゃな。故意に手を抜いておるように見えるのじゃが」

「あ、秀吉もやっぱりそう思う?」

「うん。あの人、確実に手を抜いているよ」

島田さんのパートナーはさつきからミスばかりしている。サーブは全部外しているし、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばす。でも、構えや動きを見る限り、かなりの腕前だと思うのだが……。

『美春。アンタ、絶対手抜いてるでしょ……!』

『そんなことありませんお姉さま!美春はお姉さまの為に全力で(手

を抜いています！す！」

『これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい！』

『はい！美春もお姉さまの為に本気で（手を抜いています）す！あんなのとデートなんて、お姉さまの為になりませんから！』

『アンタ、さてはウチを負けさせる為にこつちに來たわね……！』

『ほらお姉さま！ボールがきましたよ！』

『あっ!?もう、早く言いなさいよっ！』

島田さんたちが言い争いをしているうちに、姫路さんが打ったサーブが静かに二人の陣地に落ちた。

「はい。これで15点。一セット目は代表&姫路チームの勝ちだよ！」

審判をしている工藤が手を挙げて、最初の勝負の終了を告げる。

「一セット目？」

「大方三セットマッチだろ。五セットもやるとは思えないからな」

「確かにそうだね」

「遊びなのに随分本格的だね。コートチェンジもしてるし」

「お姉ちゃん、ファイトですっ」

無邪気に姉の応援をする葉月ちゃん。島田さんのパートナーが手を抜いているのに気づいていないのだろうか？

「続いて二セット目いくよ。サーブは島田さんチームだったよね？」

島田さんのいる方にボールが投げ込まれる。島田さんはそのボールを拾ってパートナーに渡した。

「それじゃ二セット目っ！」

「ああっ！手が滑ってしまいましたあっ！」

工藤さんの合図と同時に宙に舞ったビーチボールは、サーバーの後ろへと飛んでいった。

「はい、0対1だよ」

壁に当たって戻ってきたボールを再び工藤さんが島田さんのコートに入れる。

「パートナーがあのだまじや、島田の勝利はないな」

その様子を見て、雄二が勝負の行く末をそう評した。

「そうだね。いくら美波が上手でも、一人じゃ勝ち目はないよね」

「パートナーが紫乃だったら島田さんも勝てるだろうに」

「あはは。でも、天草さんが入ると姫路さんが不利になっちゃうと思うけど」

「そこは仕方ないだろ。勝負の世界なんだから」

「もはやこの勝負は見えたも同然じゃな」

雄二の意見にオレたちも同意し、意見を出す。

『……美春。もう一度言うけど、次のサーブからは本気を出しなさい』『ひ、酷いですお姉さまっ！美春はお姉さまの為に一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて！』

『下手な演技はいらないわ。よく聞きなさい美春。これが最後の警告よ』

『お姉さま信じてくださいっ！美春はお姉さまに嘘なんてつきません！』

『いい？ここまで言ってもまだ本気を出さないと言うのなら——』

『ですから、美春は本気を出してますと何度も』

『——ウチは明日から美春のことを、「清水さん」って呼ぶことにするわ』

『……………』

黙り込む清水さん（?）。別になんの問題もないと思うけど。

「ねえ、いまのサーブ見た!? 垂直に変化したよ!」

「どうやればビーチボールであんな芸当ができるのじゃ!」

「流石の翔子もアレは取れないな……………」

「ほえ?あの程度。オレと紫乃も出来るよ?やろうと思えば」

「「え……………」」

「ん?何その顔。疑ってる?じゃあ、やってみるよ」

そう言って手近にあったビーチボールを座ったままでサーブを打つ。

パァンッ!

「ね?垂直に折れたでしょ?」

「二それもだけどボール割れたよな!?」

「あー力加減ミスったか……まあ、座った状態だしな」

（（何なんだコイツの身体能力……））

『お姉さまごめんなさい！美春は嘘をついていました！』

『いいのよ美春！これから友達でいきましょうね！』

公衆の面前でヒシと抱き合う二人。なんだか、お芝居を見ている気分だ。

「でも、こうなると形勢は一気に逆転だね」

「そうじゃな。可哀想じゃが、姫路はお世辞にも巧者とは言えんからのう」

「うんうん。さっきまでの動きと雲泥の差だよ。あの人」

「やれやれ。姫路も可哀想にな。折角のデートのチャンスが奪われるとは」

パァンッ！

大きな破裂音がプールに響き渡った。

「むう。凄い威力じゃ。まさかビーチボールを割るほどとは」

「え？今の音って光正が垂直サーブ見せた時と同じ……ボール破裂したの？」

「うむ。島田の相方がサーブを打った瞬間に破裂したのじゃ」

プールの水面にはボールだったものと思われるが破片が浮いてる。一体、どんな力でボール打ってたのやら。

「ん？もう朝……？」

「あ、起きた？」

「こちらは今の音で目が覚めたらしい。

「むにゃ……光正大好き」

「はいはい。ありがとうね。オレも大好きだよ」

「えへへ」

尚この時、凄まじい殺気を二人から感じたが全面スルーした。

「あ……ごめんなさい。美春、ちよつと力を入れすぎてしまいました。代わりを探してくるので、お姉さまたちは休憩してください」

そう告げてパートナーの子はプールを出て行く。用具室にでも向

かったんだらうう。

「……ちよつと疲れた」

「そうですね。ボールが見つかるまではお言葉に甘えて休みましょうか」

休憩の為に、バレーをしていた皆がプールから上がってくる。

「お疲れ様。皆凄く気合が入っていて、観ていて面白いよ」

兄さんが最初に上がってきた姫路さんに声を掛ける。

「あ、はい。ありがとうございます。私も皆と一緒に遊べて嬉しいです」

「あはは。それは良かったよ」

「ところで、どうしてプールを借りることができてたんですか？」

姫路さんが顎に指を当てて尋ねる。あれ？兄さんや雄二から聞いてないのかな？

「まあ、ちよつとイロイロあってね。プールの掃除を引き受ける代わりに一日貸してもらったんだよ」

イロイロ……ねえ？

「え？お掃除ですか？このプール全部を？」

「うん。でも、一人でやるわけじゃないよ。僕と雄二とムツツリー二と秀吉と光正の五人でやるんだ」

本当にオレを数に含めていやがるこいつ。オレの意思は関係ないのか？

「プール掃除？それならうちも手伝おつか？」

その会話を聞いていたのか、傍にいる島田さんが掃除の参加を申し出た。

「私もお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし」

「光正。私も手伝うよ？」

姫路さんや寝ていた紫乃も当然のように手を挙げる。うんうん。人手が増えるのはありがた——

「ありがとう。でも、掃除は僕らだけで充分だよ。道具は五人分しか借りてないし」

——おいコラ何勝手に断ってんだよこのクソ兄貴。道具ならどつ

からか借りればいいだけの話だろうが。こんなところで貴重な労働力を逃すなよ。まあ、紫乃に働かせるつもりはねえけど。

「そうですか」

「う〜ん、道具がないなら仕方ないわね」

「そうだね〜」

「あ、そうでしたっそれならっ」

姫路さんが何かを思い出したかのように手を打つ。その瞬間、オレと兄さんと雄二とムツツリー二と秀吉は本能的に何かを感じ取った。これは……？

「ちよつと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙ってたんですけど——」

姫路さんがにこやかに言葉を紡ぐ。

その間にオレたち五人が目まぐるしくアイコンタクトをやり取りしていた。

「——実は、今朝作ったワツフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（兄さんの声）

「ガチンコ、水泳対決ーっ!!」（雄二と兄さんの声）

「イエーッ！」（オレと秀吉とムツツリー二の合い手）

姫路さんの台詞を聞き終える前にタイトルコールが入る。

突然の事態についてこれず、女子たち全員が目丸くする。

「明久、ルール説明だ！」

「オツケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」
「そう本当にただの水泳勝負だ。誰が速く泳げるのかを競うだけのもの。」

この勝負は、一位二位とそれ以外で大きな違いがある。姫路さん特製ワツフルは三つで、オレたちは五人。つまり、生き残ることが出来るのは二人。

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたんですかっ？急に水泳勝負なんて、葉月ビツクリですっ」

「葉月ちゃん。男にはね、大切なものを賭けて戦わないといけない時っていうものがあるんだ」

「ふえー。お兄ちゃんたち、かつこいいですつ。プライドを賭けた勝負ってやつですわねっ」

賭かっているのはプライドじゃない。命だ。

「よくわかんないけど、五人の中で誰が一番速いのかは興味あるわね」
「そうですね。体力なら坂本君が一番に見えますけど……」

「……動きの速さなら吉井双子や土屋も引けを取らない」

「頑張つてね光正」

事態の深刻さを分かっているのか暢気な言葉が聞こえる。はあ。何でこんなことになったのやら。

「へえー、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

工藤さんがスタート兼ゴール地点に立つ。25メートルのプールだから、50メートル勝負は往復になる。オレたちはスタート地点に着く。オレは丁度真ん中のレーンだ。右隣に雄二、左隣に兄さん……最悪の二人に挟まれた。

「はい、行くよ！位置について——」

工藤さんのコールが響く。

オレは飛び込みの姿勢を取りながら考える。

ムツツリー二は大量の出血で弱っているから心配ない。秀吉もまあこの面子的に大丈夫。

「よーい——」

とりあえず、普通にやった場合は、兄さんと雄二とオレの中の二人が助かる。

まあ、兄さんと雄二のことだ。

「——スタートっ！」

「くたばれこうせええっ！」

兄さんと雄二が互いに跳び蹴りをオレに向かって放っていた。まあ、オレを狙ってくることは想定どうりだ。故に対処も簡単。しゃがんで躲し、二人が交差する瞬間に飛び込みそのまま深く潜る。
『くそっ！やっぱり雄二も僕と同じことを考えていたね!?!』

『光正さえ潰せば俺の優勝は決まったも同然だったのに……!』
こいつら最低だろ……そう思いながらプールの底ギリギリを静かに速く泳ぐ。

「あのさ、二人とも。取っ組み合いもいいけど、弟君とムッツリーニ君はそろそろ折り返しだよ?」
というか、紫乃のお気に入り君は? 姿が全く見えないんだけど……あ、あんなところにいたのか」

そこへ工藤さんが余計なことを言ってくれる。おかげで兄さんと雄二はオレたちの妨害をしようとしなかった。

「な、なんじゃ明久!? お主は隣じゃろう!？」

「ダメだよ秀吉! ここは通さない!」

何かよくの分らない会話が繰り返される。ふうー

「ゴールつと」

「明久、放すのじゃ!」

「逃がすもんかあああつ!」

プールから上がり後方を見ると、兄さんが秀吉の前に立って妨害している。

「……? なんだろう?」

急に兄さんが素っ頓狂な声を上げる。一体何をしたんだ?

「あ、明久君っ! なにをしてるんですかっ!？」

そこに姫路さんの血相を変えたような声。

「へ?」

「それです、それ!」

姫路さん血相を変え、兄さんの手を指差す。

「あはは、そういえばコレ、秀吉の水着に似ているね」

「あはは、ほんとだ。兄さん何やってんだよ」

「んむ? そういえば胸元が涼しいのう」

何か違和感を覚えたのか、秀吉はその場に足をつけて立つ。

あー、上の部分がなくなってるねえ。

「……死して尚、一片の悔い無し……!!」

遠く離れたレーンからムッツリーニのそんな言葉が聞こえてきた。
そして朱に染まっていく水面。あ、コレまずいやつだ。

「つてやっぱりコレ秀吉の水着!?!ごごごめんなさいっ! 神に誓って僕は何も見てないから!」

「待つんじゃ明久! ワシは男じゃぞ! どうしてそこまで慌てるのじゃ!?!」

「うおっ! 大丈夫かムツツリーニ!?! この出血量はマジでやばくないか!?!」

「……………構わない。むしろ本望……………」

「わああっ! ムツツリーニが大変な事に!?! 血が物凄い出ているんだけど!」

「き、木下っ! とにかく胸を隠さない! 土屋の血が止まらないから!」

「いいイヤじゃっ! ワシは男なのじゃ! 胸を隠す必要なんてないのじゃ!」

「木下君、我儘言っちゃダメです! 土屋君が死んじゃいます!」

「…………愛子。救急車の手配、頼める?」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま愛しています……………」

「あはは…………大変なことになったね」

「まあ、いつも通りだろ」

「光正! お前も手伝え!」

「へいへい」

結局、ムツツリーニは何度も峠を迎えながらも、オレたちと救急隊員の懸命な延命措置によって一命を取り留めた。

そして週明けの朝、兄さんと雄二は鉄人に生活指導室に連行されていた。

バカとプールを足すと陸なことにならないね。

「そういうえば、光正。泳いでいた時、一回も浮上してなかったけど、息は持ったの?」

「ん？五十メートルぐらい浮上しなくても泳ぎ切れるよ？」

「あはは……そりゃ、水中鬼で勝てるわけがないよ。というか、身体能力高くない？」

「今さら？まあ、そこそこはあるつもりだよ？」

「本当に人間かな……」

「人間だよ！」

バイトしよう ①

バカの兄さんは叫んだ。

「どうかしたの、じゃないよ母さん！通帳を何度確認しても残高が三九円のままなんだけど！僕への仕送りを忘れてない!？」

電話越しの母さんに向かって。

おかしいな。オレはすっかり振り込まれていたけど……あ、そういえば今月のお小遣いは普段より二割多かつたな。なんか関係あるのか？

「息子への仕送りを横領!?!くそおつ！父さんに言いつけやるっ！」

オレはゲームをしながら、電話をかけている兄さんを見る。相変わらずうるさいなあ。

「父さんと光正も共犯なの!?!」

待て待て待て。何故オレも共犯扱いなんだ。しかも何の共犯だ何の。

「僕の生命の源を家族三人で仲良く等分だなんてアンタら最低だ！」

いきなり、最低呼ばわりとかいい度胸じゃないか。ちよつと表出やがれ。

「しかも微妙に力関係が出ているし！父さんが可哀想だよ！」

急にどうした？共犯の次は可哀想？というか、オレは？

「……父さん……どうしてこんな人と結婚したの……?？」

知らねえよ。父さんに聞けよ。

「え？ああ、うん」

ん？雰囲気が変わった？

「……ごめん母さん。電波が悪くて聞こえないんだ」

……コイツは何をぐまかしているんだ？

「え？光正に代わって？まあ、僕はいいけど……光正ー！」

ツチ。面倒だなあ。とりあえず、中断して……つと。

「はいもしもし?？」

『もしもし?光正』

「で？オレに代わって何の用だ?？」

『頭の悪い方の息子の成績を教えしてくれる?』

「……別にいいけど。あんまり教えたくないかな」

だって……ねえ。

『いいから教えなさい』

「だって教えると、母さん。あまりのショックで寝込んでしまうよ?」

あまりの酷さに、母さんが倒れてしまわないか心配だ。

「ちよつと待つんだ!どうして僕の成績がそんな悪いみたいない方するのさ!」

当たり前じゃないか。何を言ってるんだ?

『覚悟はできてるわ。だって、明久は人類の想像を遥かに超越するくらい頭が悪いんだから』

「……」

言葉もなかった。実の母親にここまで思われている兄さんって一体……?

「でも母さん。二年生になってから兄さんも成長したんだよ」

そう成長はした。

「光正……」

兄さんがいいこと言った的な目でこちらを見る。

「やつと九九が言えるようになったんだよ!」

『……うちの明久はいつから小学校二年生になったのかしら』

「九九ぐらい言えるわ!」

「……とまあ。そんな話をするレベルです」

『もういいわ。じゃあね光正。明久によろしく』

「ほーい」

『あ、仕送りは打ち止めって言っというて』

プツッ

「兄さん。母さんから仕送りは打ち止めって」

「何だって!?!くそつ!こうなったらストーカーのようにリダイアルを連打してやるっ!息子の強さを舐めるなよっ!」

「程々にしとけよ」

こうして、オレはゲームに舞い戻るのであった。

「……それで、嫌がらせ撃退音を鳴らされた後に着信拒否に設定された、と」

「うん。酷いと思わない？あの人、きっと僕の母親じゃないと思うんだ」

「自業自得だバカ野郎」

「そうか。お前らも苦労しているんだな……」

昼休みの教室。母さんについて兄さんが雄二に愚痴を言っていた。すると、雄二から意外な反応が返ってくる。

「ど、どうしたの雄二？そんなに同情してもらっても気味が悪いんだけど」

「そうだよ雄二。急にどうした？熱でもあるのか？」

「いや、母親についての苦労は俺もよくわかるから……」

雄二は遠い目をしながら窓の外を眺める。その表情には哀愁が漂っているようにも見える。雄二の母親はそんなに苦労する人なのかな？

「して、明久はどうするのじゃ？」

飲み物のパックを片手に持っている秀吉が兄さんに問い掛ける。秀吉が飲んでるのは豆乳。美容にいいって前TVで言っていたわけ？まあ、何飲もうが個人の勝手だが。

「うくん……。正直、困っているんだよね。向こうも意地になっているみたいでなかなか電話が繋がらないし、会いに行こうにも海外なんて遠すぎるし……」

「というか、オレたちって、母さんも父さんも何しているのかとか何処にいたりとか良く知らないよね」

「……それって、かなりの問題じゃ……」

「気にしたことないけど？」

「あ、そう」

うーん。本当に父さんと母さんは何している人なんだろう？何か海外企業の経営コンサルタント？みたいなことやってるって聞いたことがある気がする。

「……………自分で稼ぐしかない」

何かの雑誌を見ながら呟いたのはクラスメイトの土屋康太。通称ムッツリーニ。

ただ最近彼は、ムッツリじゃなくて只のオープンスケベにしか見えない。

「だよね。何か良いアルバイト見つけないとなあ」

「できれば、日払いで……だろ？」

「うん。後、高校生でも働けるところ」

そりやそうだ。

「バイトか。それなら、駅前の喫茶店でバイトを募集していたぞ」

雄二が顎に手を当てながら呟く。

「駅前の喫茶店？」

『ラ・ペデイス』だったか？あの何語だかよくわからん名前の店だ」

「へえ。あのお店、バイトの募集なんてしていたんだ」

「確か、今週土曜日だけの募集で、11:00〜20:00勤務で8800円程度、未経験者歓迎とか」

「日雇いで未経験者歓迎？それは僕にとって都合がいいけど——何かありそうだね」

「ほんと、裏がありそうだね」

普通の喫茶店でこんな日雇いのアルバイトなんて頼まないし、未経験者歓迎ってもう普通とは考えにくい。

「確かに珍しい募集の仕方じゃが、そう訝しむほどのことでもなからう。大方、突然人員が減って急場をしのぐ為に募集をかけておる、と

かその程度じやろ」

まあ、そうとも考えられる……か。

「……………そもそも、明久に選り好みをする余裕はない」

「う……………それは確かに……………」

「じゃが明久よ。光正には仕送りがされているんじやろ？ だったら良いのではないか」

「光正がさ。僕が対価を払わないとご飯をくれないんだ。酷いと思わない？」

「何でオレが貰った金で兄さんの面倒を見ないといけないんだ。それにオレは兄さんと違ってバイトをちよくちよくしていたからな」

「そうなの？」

「そうだわ」

まあ、高校生ともあって日雇いとか短期のやつしかやってないけど。まあ、最近は、紫乃優先だし、バイトはそこまでしてない。

「んじや、明久も面接に行くか？」

「え？ 『明久も』 ってことは、雄二もやるの？」

「そのつもりだ。というか、元々俺がやろうと思っていたバイトだからな」

なるほど。どうりで詳しいわけだ。

「なんじや。雄二も何か入用じやつたのか？」

「ああ。ちよつと……………自分の部屋に鍵をつけたくてな。とびきり頑丈なやつを」

うーん。なんとなく想像出来てしまう自分が怖い。

「それで、募集って何人くらいだったの？」

「確か、四く五名ってなっていたぞ。結構広い店みたいだし、それなりに人数が必要なみたいだな」

ふーん。そうなんだ。

「五人くらいか。それなら、秀吉とムツツリー二と光正も一緒にどう？」

まあ、悩む必要はないか。あれ？ 今回は聞かれたなあ？

「そうじやな……………演技の幅が広がるかもしれん。何事も経験じや」

「……………カメラの購入資金の足しになる」

「まあ、あつても困ることないしいよ」

まあ、ムツツリーニの厨房での腕前は知っているし、オレとしてもかなりのものができる気がする。

「そうと決まれば、早速今日の帰りに面接に行こうよ。募集終わっちゃっても困るし」

「そうだな。そうすつか」

「了解じゃ」

「……………（コクリ）」

「ほーい」

そんなわけでオレたち五人は学校帰りに『ラ・ペデイス』へと寄り、その場で面接を受け、全員採用となった。

バイトしよう ②

「ああ……。よく来てくれたね……。今日一日宜しく頼むよ……」
「は、はい。宜しく願います」

アルバイト当日の土曜日。開店一時間前に集合したオレ達五人を、店長さんは今にも倒れそうなほどの弱々しい姿で迎えた。……大丈夫か？この人。

（ねえ。この店長さん、本当に大丈夫なのかな？）

（多分大丈夫じゃない）

（むう……。何かきっかけがあればスグにでも富士の樹海に向かいそうなほどに弱っておるのう）

秀吉の感想は何か当たってる気がする。押せば倒れて天に召されそうだ。

（これは噂なんだが……。この店長、奥さんと娘に逃げられたらしい）

雄二が実際声を潜めながら言う。なるほど、奥さんと娘さんがいながら人手が足りなくなっているのか。つまりこの日雇いのバイトは、帰って来てくれるまでの繋ぎである。

（あれ？でも、前に来たときはバイトの女の子も何人かいたはずだけど……）

（その連中がどうしたのかは知らないな。ここにいないってことは何かあったんだろ）

あんな状態の店長と一緒に仕事をするのが嫌になって辞めた……。とオレは推測する。うん。店長があの状態なら一緒に働きたくない。「それじゃあこれ、君たちの制服……。サイズが合わなかったら言うてね……」

店長がオレたち全員に畳まれていた制服を渡すが……。

「二サイズが合いません」

渡された瞬間、オレと兄さんと雄二とムツツリー二の声が綺麗に重なった。

「性別が合いませんぬ」

一方秀吉の方は、何故かうエイトレスの制服を渡されていたよう

だ。

「あれ……？おかしいな……。きちんと目測したつもりだけど……」

店長が首を傾げている。でも、どう見ても合っていないんだよなあ……特に雄二。

「そうかな……。でも、坂本君と黒髪の方の吉井君はSで、もう片方の吉井君はMで、土屋君はエロ——じゃなくてLに見えたんだけど……」

この店長、意外と侮れない。オレたちの性癖を見ただけで見抜くとは……！この観察眼は一体!?!

「……………エロなどに興味は無い」

「「なにいつー!」」

ムツツリーニの今世紀最大の嘘に、オレと兄さんと雄二の声がハモった。

「ムツツリーニ。さすがにそれはない」

「そうだよムツツリーニ。いくらなんでもそのウソはないよ」

「そうだぞムツツリーニ。ウソは人を騙せる範囲でつくものだ」

「……………!! (プンプン)」

否定するムツツリーニ。しかし、オレたちの前では無意味に等しい。やれやれだ全く……

「まあ、それは置いといて僕のサイズは多分Lだから、ムツツリーニと交換しますね」

背の高い雄二と一緒にいる兄さんは小さく見られがちだが、一応平均より背が高い。ついでにオレよりも。

「……………Mなら丁度いい」

兄さんとムツツリーニは持っている制服を取り替える。

「店長。俺はきつとLLになるので、交換してもらえますか?」

「オレも多分Mで行けると思うので、交換して下さい」

オレと雄二は交換する相手がいないので、店長に制服を手渡す。

「そっか……そうだよね……。うっかりして制服と性癖を間違えちゃったよ……」

なんて豪快な間違いだ。尊敬に値するよ。

「じゃから、ワシのは性別が合わぬと言っておるのに……」

ロッカー室はそこまで広くないようなので、まずはオレと兄さん、ムッツリーニの三人が着替える。

「なんだか学園祭の時みたいだね」

「……………喫茶店に縁がある」

「ほんとだねえ〜」

ロッカーの中に自分の荷物を置き、二人と話ながら着替える。

ここの店の制服は、黒のズボンとYシャツに同じく黒のベストを重ねた一般的なギャルソンスタイル。それとズボンの上に前掛けのよな黒のエプロンをかけ、首元に小さなネクタイを付けて完成。

「お待たせ、二人とも」

「やつほー」

「……………待たせた」

ロッカー室からオレたちは出てきた。すると、雄二と秀吉はオレたちの姿を見て楽しそうに笑う。

「ははっ。意外と似合うもんだな。それっぽくないか」

「なかなかの男前じゃぞ、三人とも」

「そ、そうかな…………？」

「ありがと〜」

「……………照れ臭い」

雄二と秀吉の台詞に恥ずかしそうな顔をする兄さんとムッツリーニ。

本物の喫茶店の制服。ちよつと気取った感じで恥ずかしいが、

まあ、これはこれだ。

「では、ワシらも着替えるとするかの」

「そうだな」

感想を述べた雄二たちは、制服を手にロッカー室へと入って行った。

さあ、働くかと思った、その時、

「バカ雄二！何を堂々と秀吉と一緒に着替えようとしているのさ！」

「……………万死に値する……………っ！」

向こうがドアを閉めて鍵を掛けた瞬間、兄さんたちがこじ開けようとしていた。

『お前らは何を言っているんだ。一緒に着替えも何も、男同士なんだから全然問題ないだろうが』

全くだ。何か問題あるのか？

「雄二！それはあくまで戸籍上の話だよ！」

『待つのじゃ明久！事実でもワシは男じゃぞ!』

戸籍上つて何だよ？

『あー、わかったわかった。着替えが終わったら話を聞いてやるから、今は落ち着け二人とも』

面倒くさそうに答える雄二。

「雄二！どうしても考えを改めないのなら」

『あん？突入はするなよ？ドアの弁償なんて冗談じゃないからな』

「突入はやめてよ？後々面倒になるんだから」

弁償代がバイト代から引かれるなんて冗談じゃない。下手すりやマイナスだ。

「霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する！」

それがどうしたの？そう思ってる……………

ガチャッ

「俺は廊下で着替えよう」

雄二が出てきた。

「よしよし。それじゃ、僕らは店長のところに行こうか」

「……………（コクリ）」

「ほーい」

「というか、本当に雄二が出て来る必要はあったのか？だって、秀吉って男だよ？」

「それにしても、本物の喫茶店か……。学園祭ともちよつと違って新鮮だよね」

「……………面白い」

「喫茶店はあまりバイトしたことないんだよなあ……………」

「まあでも、こういう経験も悪くないか。」

「ムツツリーニと光正はキッチン担当？」

「……………面接の時にはそう言っておいた」

「ああ。オレにはホール担当は無理だ」

「アハハ……………ある意味命がかかってるもんね……………」

「万一にも、姫路さん級が来た日にはオレは逃げだしたくなる。」

「そんなこんなでオレたち三人は店長の待つホールの中に足を踏み入れる。」

「……………(ぼー……………)」

「店長さんは椅子に座って口から魂を吐き出していた。」

「て、店長。大丈夫ですか？」

「ん……………ああ、大丈夫、大丈夫さ……………。こうやってボク一人でも立派に店を切り盛りしていたら、きつと二人も帰ってきてくれるさ……………」

「どうやら、店長は現実と空想の区別が曖昧になっているみたいだ。」

「ねえ二人とも。やっぱりの店長ヤバくない？」

「うん。帰りたくなってきた」

「……………危険かもしれない」

「小声で話すオレたち三人。」

「だよね。ちよつと確認してみようか？」

「確認？」

「……………どうやって？」

「(軽い日常会話をしてみるよ)」

「兄さんは店長に近づき始める。日常会話？どんな会話をするつもりだろうか。」

「あの、店長」

「……………ん？ああ、なんだい……………」

「今日は良い天気ですね」

「……………そんな定番過ぎる会話じゃ一言で終わってしまうんじゃないか？」

「ああ……………そうだね……………お父さんってウザいよね……………」

「会話になっていない。」

「えーっと……………、お客さん一杯来るといいですね」

「兄さんも流石に店長の返答には付いて行けずに話題を変更した。確かに店についての話なら無視は出来ないはずだ。」

「ボクの可愛い可愛い娘はね……………、一歳になるまでは『お父さん大好き！』が口癖だったんだよ……………」

「店長。それは記憶の捏造です」

「もうダメかもしれない……………」

（どうしよう光正、ムツツリーニ。全然会話になっていないんだけど）
（会話って難しいね……………）

（……………娘の話は？）

（なるほど。それなら反応があるかもね）

「確かにムツツリーニの言うとおり店長さんは娘の事ばかりを呟いているから、その話題ならきつと会話をしてくれるはずだ。」

「あの……………」

「うん……………。うん……………？」

「店長の娘さんってどんな——」

「五秒やる。神への祈りを済ませろ」

「一瞬だった。一瞬で店長さんは兄さんの首にナイフを押し当てた。」

「ま、待って下さい店長！って言うかそのナイフどこから出したんですか!?!」

「て、店長さん!?!」

「あ、ああ、ごめんね……………。そういえば君はアルバイトに来てくれた子だったよね……………。ボクの可愛い可愛い天使に手を出すクソ野郎じゃないもんね……………」

「そ、そうですよ。嫌だなあ」

「あはは……。ごめんね……」

店長は笑いながら懐にナイフを戻す。……この人要危険人物だ。

(光正、ムツツリーニ。この店長はセーフ？アウト？)

(どこがセーフに見える？)

(……………チェンジ)

アウト三つ。妥当な判断だ。

というか、今日一日この店長さんと仕事するの？給料倍にして生命保険かけてもらわないとやっていけないよ……。

「むう……。やはりワシだけ別の制服というのは……」

「諦める秀吉。これも仕事だ」

「……確かにこれも給金のうち。諦めるかの……」

後ろから秀吉と雄二の声が聞こえて来た。

「あ、二人とも。結構時間がかかって——っ!？」

兄さんが秀吉たちのいる方へと振り向いた瞬間に大きく目を見開く。

一応オレも見るが、そこには上背のある雄二のよく似合ったギャルソン姿と、

「すまぬ。この服は存外複雑な作りで。着付けに難儀しておったのじゃ」

秀吉は困ったようにヒラヒラのエプロンドレスの裾を摘んでいた。うん。兄さんが驚いている原因は秀吉で間違いない。

「ひ、秀吉。その……、凄く似合って——」

秀吉の格好を褒めようとする兄さん。しかし……

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

その姿を見るなり、店長は両手を大きく広げて怪鳥のように秀吉に飛びかかった。

「な、なにごとじや!？」

「て、店長!?!何をトチ狂っているんですか!?!」

「落ち着いてください店長!何を考えてるんですか!?!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

ダメだ！言葉が通じない！

「仕方ない！雄二、迎撃を！」

「了か——ダメだ、あたらねえ！なんて動きだ!？」

「ムツツリーニ！店長にスタンガン！」

「……………目標が絞れない……………」

「光正！何とかして！」

「指示が大雑把すぎんだよ！というか当たんねえ！」

雄二とムツツリーニとオレの攻撃を簡単に避けるとは……………！とい
うか残像を伴うかのような動きはなんだ！人間じゃないのか!？」

「秀吉っ！」

「な、なんじゃ!？」

「店長の動きを止める！『父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の
子』の台詞を大声で叫ぶんだ！」

「よ、よくわからんが了解じゃ！」

本当によく分かんねえ！

『…………お父さんなんて、大つつっキライ!!!』

役者になった秀吉がたっぷりと嫌悪や怒りの込められた台詞を言
う。娘（偽）にこんなこと言われたら、流石の店長も動揺して動きが
止まる筈…………。

「そうかつ！それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入ろうつ
！」

全然効果がないじゃん！というか、会話のキャッチボールがおかし
いだろ！どこをどう繋いだらお父さんと一緒にお風呂に入るなんて
選択肢が出てくるんだよ！

「こうなったら実力行使しかない！秀吉は下がって急いで服を着替え
て！光正、雄二、ムツツリーニ！全力で行くよ！」

「雄二、兄さん！オレと三人であの店長化け物さんの動きを封じること
に専念！ムツツリーニ！止まった隙にスタンガンを！」

「……了解っ！……」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

最大出力のスタンガンを四回押しつけて、店長を床に沈ませた。

……もう人間じゃねえ……というか、バイト代の代わりに討伐報酬をください。

バイトしよう ③

「で、どうしようか」

「どうするもクソも、店長がこんなじゃ何も出来ないだろ。『本日臨時休業』とでも書いて入り口に貼っておこうぜ」

「ま、仕方ないよね」

先ほどまで大暴れしていた店長さんは、白目を剥いて倒れている。幸いにも店内の被害は特になかった。しかし、オレたち五人だけでのまま店を開けるのは正直無理だ。

「バイトはまたの機会じゃな」

店長さんの暴走対策の為、エプロンドレスからギャルソンスタイルに着替えた秀吉が呟く。

「仕方ないな。また他のバイトを探すとするか」

「……………残念」

「無念」

「え？つてことは、バイト代は——」

「出るわけないだろ。働いてないんだから」

「そうそう」

「そ、そっか…………。そうだよね…………」

雄二の言葉に兄さんは俯いてしまった。まあ、仕方ない。お金の方……………というか、母さんと一度交渉してみるか……………面倒だけど致し方なし。

カランコロン

「いらっしやいませっ」

突然扉が開いた音がして、兄さんが入ってくるお客さんに挨拶をして……………つてちよつと待て！

「良かった、あいてるみたい。時間潰す場所なくて困ってたのよね」

「ほんと、助かったね」

兄さんの言葉を返事と勘違いして、OL風のお客さん二人が店に入ってきた。

(おい明久！何勝手に招き入れているんだ!?)

(ご、ごめん！わぎとじゃないんだ！ちよつと頭の中でシミュレーションをしていたらタイミングよくお客さんが来ちゃったから……！)

(フルフル。あの人たち怖い……)

(……それを言うなら、暴走した店長の方が怖かっただろうが……)

(アハハ……相変わらず胸のある女性が苦手なことで……)

初対面というか、見知らぬ人だとなお一層ダメである。え？普段はどうしているかって？頑張って避けるかまず、見ないようにするかのどっちかだけど？

(参ったのう。もはや追い返すこともできぬような雰囲気じゃし……)

(………店長が目を覚ますまで頑張るしかない)

(よ、よし。頑張つてやるか！)

(うう……。ごめん……)

今更謝つても遅いよ。別室に寝かせている店長が目覚めるまでオレたち五人がやるしか道はないんだから。

(やれやれ、仕方ないな……。まあ、メニューを限定したらなんとかなるかもしれないし、できるだけやってみるか。明久と秀吉はウェイター、光正とムツツリーニはキッチンを頼む。俺はドリンク関連を担当する)

(別にメニューを限定する必要もないけど……うん。オツケー)

(了解じゃ)

(………わかった)

雄二がカウンターに入り、オレとムツツリーニは裏手のキッチンへと姿を消す。そして兄さんと秀吉はウェイターなのでホールに残る。

「ムツツリーニ。食器と調理道具は全部そろってる？」

「………。(コクリ)」

「食材と調味料は？」

「………。(こことそこ)」

よし。暇だ。別に仕込みをする必要はなさそうだし、兄さんたちの接客の様子でも見るか。

カランコロソ

お？お客さんが来たみたい。接客するのは兄さんか。まあ、失敗はしな——

『いらっっちゃッ！』

今、噛んだな。

『………っ！』

入店してきた三人のお姉さんが必死に笑いを堪えて俯いているみたいだ。兄さんが顔を赤らめて泣き出しそうな顔になっている。

そして兄さんは気を取り直して、大きく息を吸って——

『——いらっっちゃ』

ダッ！

また舌を噛み秀吉のいる方へと逃げ出してしまった。

『あつ！キミ、案内は!?!』

『大丈夫だよ！私たち全然笑ってないから!?!』

『もう一回だけ頑張ってみて!?!』

お姉さんたちは兄さんに励ましの言葉を送っている。心優しいね

く

『な、なんじゃ明久!?!なにゆえダツシユで戻ってくるのじゃ!?!』

兄さんは逃げちやダメだと思い、また出入り口にいる客と向かい合う。

『す、すいません。ちょっと気が動転してしまいました……』

兄さんが頭を下げると、お客さんは笑顔で許してくれた。心の広い人で助かったな。

『それでは、こちらのお席へどうぞ』

兄さんは気を取り直してお客さんを窓際のボックス席へと案内させる。その後はメニューとお冷を出して、注文が決まるまで離れて待機した。

『……む。そろそろ注文が決まったようじゃな』

最初に入って来たお客さんの注文の対応をするために、秀吉が近づいていく。

『ご注文はお決まりでしょうか?』

『エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットを二つ下さい』
『畏まりました。エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベット
をお二つですね。少々お待ち下さい』

メモを取り、秀吉がこちらにくる。

「エスプレッソ一、レモンティー一、シャーベット二じゃ」

「あいよ」

「……………（コクリ）」

「ほーい」

注文を告げられたので、オレと雄二とムツツリーニが動き出す。

「というか、シャーベット？何か作りごたえがないな……………まあいいけど」

「……………これか……………もうほとんど完成形」

「確か季節のシャーベットだから……………お、あつたあつたレシピだ。
えーっと？季節の果物をカットして乗せる」

「……………今はさくらんぼ」

「オツケー。……………つて、やっぱり仕事ないんだね」

さくらんぼならカットする必要がない。

「……………どうせ、これから増える」

「それもそっか」

客が増えれば注文が増える。注文が増えれば厨房が忙しくなる。
ということは案外、今の時間は貴重かもしれない。

「……………秀吉。完成」

「こつちもだ」

「じゃ、よろしく」

「うむ。任せるのじゃ」

すると、秀吉と入れ替わるようにして、兄さんがやって来る。

「ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホッ
トケーキ、モンブランを一つずつと、頑張つてを三つ」

「……………なんでお前は客に励まされているんだ？」

「……………早速何かあつた？」

「……………えーっと。頑張つてを三つ……………？」

とりあえず、オレたちがシャベットを作っていた間に何があったんだ？

不思議なことも起きるなあと思いつつながら、ムツツリーニと分担しながら手早く作る。

「えーつと、兄さん」

「何？」

作り終えたものを兄さんに渡しながら。

「頑張つてね」

「……………フアイト」

「二人してやめて！僕にそんな目を向けないで！」

「……………頑張れよ。明久」

「雄二まで!?!これじゃ、まるで僕ができない可哀想な子みたいじゃないか！」

……………事実だろ？

そして、時間が流れ、厨房もだんだんと忙しくなってきたころ……

「光正」

「ん？どうした？」

「ミルクの在庫あるか？」

「ミルクの在庫？」

一応確認に行ってみるが……

「在庫はないよ？もしかして切れたの？」

「ああ、どうやら搬入も遅れてるらしいな。秀吉と明久に伝えてくるか」

「いつてらっしやい〜」

「というか、清涼祭でも思ったんだが……お前何品同時に作ってんだよ」

「え？クレープ作りながらパンケーキとホットケーキを焼いてモンブランとチーズケーキを作ってるだけだよ？」

「……いろいろと凄いな……お前」

んー？何が凄いのだろうか？

そんなこんなで調理している時……

『雄二、注文——つて、あれ？』

雄二が探しものをしている最中に兄さんがやって来る。まあ、兄さんでもドリンクぐらいは作れるだろ。

『でも、ブレンドってどうやって作るんだろう？』

あー何種類かのコーヒー豆を使って淹れるやつね。ここのブレンドが何豆を使ってるか知らないけど……というか兄さん大丈夫だよね？

『そっか、アイスコーヒーにホットコーヒーをブレンドすればいいんだ。僕って……天才？』

……それはただのぬるいコーヒーだ。

その後そのぬるいコーヒーに客は怒り（ちなみに注文したのは懐かしの坊主先輩らしい）、いざいざが起きた結果、秀吉が着替えることになったそうだ。

バイトしよう ④

カランコロン

「はい、いらっしやいませー」

秀吉が着替えに行ってるので、僕がお客さんを迎えに出る。すると、そのお客さんはこちらの顔を見るなり明るく微笑んだ。

「こんにちは、明久君。遊びに来ちゃいました」

「え？姫路さん？」

「やつてるわね、アキ。へえ。結構似合ってるじゃない」

「あれ？美波まで？」

予想外だ。こんな休日にたまたまクラスメートが僕が働いているところに来るなんて。

「ほらほら、店員さん。ぼーっとしてないで席まで案内してくれない？」

ニヤニヤと美波が僕に手を振って見せる。

「そ、それじゃ。えっと、何名様ですか」

けど、いくら相手が友達でも今はお客さん。きちんと接客しないと。

「五人です」

「え？五人？」

え？五人？目の前には姫路さんと美波しかいないみたいだけど、後三人は誰だろう？

「一人はちよつと遅れているわ。それと、残りの二人は」

美波が言いながら指で店の奥を指す。

『……雄二。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ!?!いる筈のない翔子の声が聞こえるぞ!?!呪いか!?!』

Aクラス代表の霧島さんがいつの間にか雄二の真後ろに立っていた。そして、

『……………(ぼー)』

『……………』

『……………かっこいい……………』

Aクラスの天草さんが厨房を……その中に居る光正を見つめて頬を赤く染めていた。

「明久君たちがバイトをしているって教えてくれたの、霧島さんと天草さんなんですよ」

「あ、そうなんだ」

ここで『霧島さんと天草さんにも誰にも話していないはず』なんて言うのは野暮だろう。恋する乙女たちの行動力ってことにしておこう。

「とにかく、こちらへどうぞ」

「はーい」

ふうーせつせと作るのも大変だなあ。

「ムツツリーニ。そっちは？」

「……………間もなく完成」

「オツケー」

ん？そういえば、さっきから視線を感じるけど？そう思って厨房の戸の方を見ると。

「……………（じー）」

紫乃がこちらを見ていた。何でいるの？とか聞いても無駄な気がする。

「悪いムツツリーニ。少し厨房から離れるわ」

「……………分かった」

オレは戸のほうまで近づいて、

「……………（じー）」

「……………（ひょい）」

首ねっこを掴んで持ち上げる。

「……あ、光正偶然だね」

「偶然で厨房の前で会えるか。客として来ているんだろ？連れは？」

「えーっと、姫路さんと島田さんに霧島さんと……」

「よし、席まで運ぶから大人しくしてろ」

「はーい」

全く……あれ？オレって紫乃に今日ここでバイトって伝えたっけ？用事があるとは言ったけど……

「あ、光正君」

「へえ〜光正も似合ってるじゃない」

「……紫乃おかえり」

「どうもありがとうね。ほら、ここに座る」

「……はーい」

「全く……兄さん。注文は決まってるの？」

「いや、まだみたい」

「そっか」

なら、後は兄さんに任せておくか。ん？このテーブル……四人テーブルに二人席を組み合わせて六人まで座れるようになってる。後一人か二人って誰だ？

「光正注文」

「オレじゃなくて、兄さんに言えよ。まあ、いいけどさ。何？」

「光正を食べたい」

「断る」

「えーじゃあ、光正が欲しい」

「はいはい。オレも紫乃が欲しいよ」

「……ツチ」

「ん？兄さん舌打ちした？」

「ウウン。ナンデモナイヨー」

絶対舌打ちしただろ。

『すみませーん。注文いいですか？』

おっと、秀吉もないし、兄さんがここの相手をするととなると。

「オレが行つてくるしかないのか」

「光正!?大丈夫なの!?相手は女性だよ!」

「大袈裟だなあ紫乃。一分だ。一分なら耐えられる」

「本当に?」

「……やつぱり三十秒かも」

くっ……見たところ女子大生か。しかも二人だと?さすがにキツイ。だが、バイトだ。仮面を付けるんだ。演技をしろ。

「はい。ご注文をお伺いします」

「えつと、ショートケーキとホットケーキを一つずつください」

「かしこまりました」

よし、さっさとオーダーを伝えて厨房に戻ろう。

「ちよつと待つて」

「はい。何でしょう?」

早く戻らせて!そうしないとオレが死んじゃう!

「君つてここの新人さん?」

「いえ、日雇いのバイトです」

「そうなんだ。君みたいな子がここのアルバイトになったら私、常連になるのになあ」

「あ、それ分かる。ねえ、ここでは働かないの?」

「今日は友人の付き添いでバイトしていますので、ここで働くかはちよつと……」

誰か助けて!早くオレは戻りたいんだ!そうだ!兄さんなら何とかしてくれるかも!

一縷の望みにかけて、目の前の女性陣に見えないようにハンドサインを送る。が……

『え?二人じゃなかったんですか?そ、そうですか。それなら……』

『も、もちろんじゃない。ね、アキ?』

『う、うん。もちろんだよ!雄二も入れた四人で来たのさっ』

ゴキン

『……吉井。残りの一人は、誰?』

『も、もう一人はあの人よね、アキっ』

『そ、そう！あの人だよ、えつと……えつと……高橋先生と一緒に来たのさっ』

ゴキツゴキン

『ふぬあぁっ!?手首の関節が一度ハメられてまた外された!』

『だからどうしてアンタはそうやって頭の悪いウソしかつけないのよっ！高橋先生と一緒に来るわけないでしょ!』

『え!?え!?やっぱリウソなんですか!?そうなると美波ちゃんと二人できたんですか!』

気付けよこのバカ野郎!というか何の話してんだよ!

「じゃあさ、アドレス交換しようよ」

「君とはもつと話したいしさ」

「只今仕事中ですので……」

よし、次だ。Help me Yuji!

『……A heli sh gate has opened. Compensate the crime with your death. Are you ready, Yuji?』

『な、なんだ!?どうして翔子がいきなり戦闘態勢になっているんだ!』

そんな事しているよりもさっさとオレに気付けよ!頼むから救いの手を差し伸べてくれ!

『……(ゴオオオオオオオ!)』

そして紫乃!頼むからその殺気と嫉妬の炎を消してくれ!

……というか、何故バイトで三人の命がかかってるんだ?意味が分からん。

「君つてさあ。彼女とかいるの?」

「実は学校でモテてるんじゃない?」

ハッ!この流れは……行ける!

「そうなんですよ。彼女持ちなのでね。これ以上貴女方のような女性と話していると彼女が嫉妬しちゃうので、これで失礼しますね」

すでに嫉妬の炎が上がってることに関してはスルーしよう。

というか、胸の部分差し引いても紫乃の方が絶対に可愛い!内面も外見も!

カランコロソ

やつとの思いで女性客を振り切った後、誰かが店内に入ってくる。

『ごめんね、遅れちゃった——って、皆何をしているの……?』

入店してきたのは、木下優子さん。秀吉の双子のお姉さんだ。

『……優子』

でも、珍しい組み合わせだなあ。つと。

「ムツツリーニ、注文表」

「……………了解」

「ちよつと休む。震えが止まらん……」

でもオレには無関係。働きたいが……今は迷惑をかけそうなので休む。

『代表に島田さん、ちよつとは落ち着きなさい。お店で暴れるなんて良くないわよ?』

何故か、雄二と兄さんに罰を与えようとする霧島さんと島田さんに注意する木下さん。

『……でも、雄二が』

『アキのバカが』

『言い訳しないの。他のお客さんに迷惑でしよう?』

『……………わかった』

『確かにその通りね……』

木下さんの台詞が聞いて動きを止めたような感じの二人。

『うむうむ。姉上も良いことを言うのう』

『そうだね秀吉。お姉さんのおかげで助かった——って、その格好はどうしたの』

厨房から顔を覗かせてみると、いつの間にか兄さん達の近くにいる秀吉。……ただ、何故か最初のウエイトレスの制服で。

『うむ。それがじゃな、サイズの合う替えの制服が見つからなかったので、こっちで代用しておるのじゃ』

なるほど……って納得していいのか?

『まあ、いいんじゃない?お客さんもウエイトレス姿の方が嬉しいだろうし』

そういう問題か？

『そういうものかのう？』

『そういうもんだよ』

いや違うだろ。

『秀吉、ちよ〜〜といいかしら？』

すると、木下さんが兄さんたちの前にやってきた。

『んむ？なんじゃ、姉上？』

木下さんにながしりと手首を掴まれた秀吉が小さく首を傾げる。

『いいからいいから。吉井君、このお店ってトイレはどこにあるの？』

『え？向こうの奥だけど』

『そう。ありがとう』

兄さんがトイレのある場所を指すと、木下さんは秀吉の腕を掴んでトイレの方へと歩き出した。

『あ、そうそう。代表と島田さん』

そして、一言。

『さっきの台詞、撤回するね。他のお客さんに迷惑でも、気に入らないものは気に入らないもの。存分にやっちゃいませよ♪』

そしてボタン、とトイレのドアが閉まる音が聞こえた。

『姉上、どうしたのじゃ？何故ワシの腕を掴むのじゃ？』

『アンタ、どうしてそんな短いスカートで動き回っているのかしら？前にアタシ言わなかったっけ。アンタが余計なことをするとアタシまでそういう目で見られるからやめろ、って』

『はっはっは。何を言っておるのじゃ。姉上は家におる時は殆ど下着姿で生活しておるではないか。今更体裁を取り繕わんでも——あ、姉上っ！ちがっ！その関節はそっちには曲がらなっ——！』

トイレから不穏な会話と聞こえてはいけけない音が聞こえた。

『……雄二。許可が下りた。高橋先生とのデートのこと、全部聞かせてもらおう』

『なんのことだ!?それと聞かせろと言いなながら聞く耳持たないように見えるのは気のせいか!?!』

再び雄二を尋問しようとする霧島さん。

『あ、あの、明久君！さっきの話ですけど、本当は美波ちゃんと二人きりだったんじゃない？……！』

『ちっちゃい違いのよ瑞希！アキはバカだから記憶が違っていただけで……！』

『あがあつ！美波、落ち着いてまずは僕の腕を解放して！このままだと僕の腕に関節が一つ増えちゃう！』

そして、迫る姫路さん、間接技をかける島田さん、やられる兄さん。阿鼻叫喚となっている状況に、

『き、君たち！お客様の前で何をしているんだ！』

鋭い叱咤が店内に響き渡った。

『て、店長……？』

『まったく、人が倒れている間に何をしているんだ君たちは。店をあけてしまったことはともかく、お客様の前でこんな真似をしているなんて、何を考えているんだ！』

おお、ここまで大声で聞こえてくる正論だ。

「……………光正。料理完成した」

「分かった……………あれ？オレが運ぶしかないのか？」

「……………（コクリ）」

オレは料理を運ぶ。すると、

「お客様、大変失礼致しました。どうぞお気になさらずにごゆっくりと——」

店長が頭を下げて客にフォローを入れていた。ふう。これで店に平穏が戻る……………そう思っていると、

カランコロン

直後、カウベルの音が甲高い音をあげた。見てみると、母娘と思しき二人組が店内に入ってきた。

「どう、お父さん。少しは反省した？」

店長に告げるのは、ドリルのような髪型をしている見覚えのある女子。

ん？お父さん？……………もしかしてあの子が例の店長の娘？

「注文のショートケーキとホットケーキです」

「ありがとうね」

「いえいえ」

ふう。これで近づかなくて済む。

「み、美春……!?ディア・マイ・エンジェル……!」

店長の動きが止まる。今にも泣き出さんばかりの表情だ。

「店長、良かったですね。娘さんと奥さん、帰ってきてくれたじゃないですか」

「吉井君……。ありがとう……!」

兄さんが店長に言葉をかけると、店長は兄さんに礼を言う。まあ取り敢えず事態が収拾出来たようだからいっか。

「美春……。もう、どこにも行かないで——」

涙を流しながらよろよろと娘さんに近づく店長。対する娘さんも、ゆっくりと店長に歩み寄って——

「ああっ!美波お姉さまじゃないですか!さては美春に逢いに来てくれたんですね!?そうならそうと言ってくだされば、美春もベッドを用意してお待ちしていましたのに!」

「み、美春!?ここってアンタの家だったの!?!」

その途中で娘さんは進路を変更して思いつきり島田さんに抱きついた。

「……………み……は、る……?」

「て、店長……?」

その様子を見て店長の動きが止まる。凄く黒いオーラが店長の背中に見える気がするんだが。あれは紫乃の放つ殺気よりも一段と黒い。

「……………キサマが」

地獄の底から響くような、低く、小さい、店長の囁き声。

「キサマが、娘を誑かす女かあっ!!」

そして動きが一気に急加速した。あの動きムツツリーニの召喚獣並みかな?

あと、娘を誑かす女っていまいち意味が分かりかねないんだけど……

「て、店長！落ち着いてください！店長が落ち着いてくれないと、また皆が暴れ出しちゃいます！それと『娘を誑かす女』って言葉はどこがおかしいということに気付いてください！」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

説得失敗。全然止まる気配がない。

『……雄二。処刑、再開』

『だから何を言っているんだ!?お前は どうして俺が処刑されなきやぐあああつ!』

『秀吉、まだ気を失わないでね?ここからが本番なんだから』

『あ、姉上!ちがつ!その関節もそつちには曲がらな……つ!』

「明久君っ!まださっきの質問に答えてもらっていません!美波ちやんとデートしたんですか!?!」

「お姉さまとデート!?!この腐った豚野郎が!?!許せません!八つ裂きです!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアア——ツツツ!!」

「ち、違うのよおじさん!ウチは美春じゃなくてアキと——」

「み、美波!僕を巻き込まないでよ!って、どうして店長が僕に襲いかかってくるの!?!誰か、助け——っ」

……………よし。

「ムツツリーニ。オレは急用思い出して帰るから。もし、バイト代でたら兄さんに渡しといて」

「……………分かった」

「じゃあ、そう言うことで」

着替えを一瞬で終わらせ、自分の荷物を更衣室から取り出す。そして……

「帰ろ?紫乃」

「うん」

一人取り残された紫乃を回収して帰還する。

こうして、この地獄からオレは脱出したのだ。

「光正。あの女の人たちよりも私のこと好き?」

「当たり前じゃないか。比べるまでもないよ」

「えへへくやっぱり、光正は光正だね」

「何言ってるんだが」

「ねえ、せっかくだからこのままデートしない？」

「よし。じゃあ行くか」

その日の夜、ようやく母さんに電話が繋がった兄さんは今日の端末を説明し、何とか仕送りを得るのであった。

学力強化合宿編

平和な朝に贈る悲鳴

「翔子」

「……隠し事なんてしていない」

「まだ何も言っていないぞ？」

「……誘導尋問は卑怯」

「今度、誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。んで、今背中に隠した物はなんだ？」

「……別に何も」

「翔子、手をつなごう」

「うん」

「よつと……ふむ、MP3プレーヤーか」

「……雄二、酷い……」

「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入ってるんだ？」

「……普通の音楽」

——ピツ 《優勝したら結婚しよう。愛している。翔子》

「……」

「……普通の音楽」

「これは削除して明日返すからな」

「……まだお父さんに聞かせてないのに酷い……。手もつないでくれないし……」

「お父さんってキサマ——これをネタに俺を脅迫する気か？」

「……そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

「翔子病院に行こう。今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

「……子供はまだできてないと思う」

「行くのは精神科だ！——ん？ポケットにも何か隠してないか？」

「……これは大したものじゃない」

「え、なにになに？『私と雄二の子供の名前リスト』か。……ちよつと待てやコラ」

「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」
『『しようこ』と『ゆうじ』で『しようゆ』か。……なぜそこを組み合わせてるんだ」

「……きつと味のある子に育つと思う」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

『『しようゆ』って女の名前だったのか……』

「光正。明日から学力強化合宿だね」

「そうだな」

「楽しみだね」

「そうだな」

「……どうしたの？機嫌悪いの？」

「いや、何故かこの学力強化合宿がタダじゃ終わらない気がする……」

「あーそういえば光正。結局清涼祭も普通に終わらなかったもんね」

「ああ。だから、今回の学力強化合宿も絶対に問題が起きるとオレの直感が告げてるんだ」

「直感ねえ」

「というか紫乃はいつもよりテンションが高いな。何か良いことがあったのか？」

「えへへ分かる？」

「ああ、いつもは手を繋ぐ程度なのに、今日は腕まで組んで自分の胸を

押しつけゴバアツ!？」

「もうく光正たらしく本当に……ジヨウダンガスキナンダカラ」

「アハハ……ウ、ウン。オレ、ジヨウダン、ダイスキ」

「どうしたの？固まっちゃって？」

「な、何でもないよ。それよりテンション高い理由は？」

「うん。だって、学力強化合宿って、去年もだけどほとんど自習だったでしょ？ということとは二日目から四日目の三日間は光正と自習できるわけなのです」

「でもAクラスとFクラスで自習室が違ったらどうするの？」

「翔子を説得して、一緒に乗り込む」

「うん。絶対にその説得は成功するよ」

「まあ、テスト受けたりしたら、アレだけど、でも普段の平日より長く一緒にいられるのです！」

「そうですか」

「光正は嬉しくないの？」

「嬉しいけどね。ただ……」

「ただ？」

「……寝込みを襲われないか心配で心配で」

「もうまだ清涼祭の引っ張るの？」

「じゃあ、襲わないって誓える？」

「うくん……分かんない」

「襲うか分かんないって……」

「ううん。違うの」

「何が違うの？」

「いざ夜になった時に私がどんな行動をするかが分かんないの」

「……よし、木下さん辺りに紫乃の監視を頼もう」

「そ、それはやめて！監視されるって何か悪いことしたみたいじゃん！」

「はあく分かったよ。頼むから皆の前では自制してくれ」

「はい。皆の前ではね………ハッ！気付いてしまった」

「どうした？」

「この合宿を休めば一週間二人でイチャつけるのでは……もしかして私って天才？」

「ん。じゃあ、紫乃はお留守番ね。オレは合宿行くから。バイバイ」
「あっ！待って光正！冗談だから！私も合宿行くから！」

普通に教室についたオレはのんびりと窓の外を眺めていた。

「おはようじゃ。光正」

「ん。おはよ」

「そーいや、下で明久に会ったぞい。今日は珍しく早かったのう」

「あはは。でも、兄さんが早起きして学校に来ると何かが起きるよね」
「確かにのう。今日はどんな厄災が明久の身に振りかかるんじやろうな」

過去の例から考えると、例えば、ラブレターが入っていて、クラスメートに殺されかけたりとか、鉄人の雑用とか。

「おはよう光正に木下。何話してるの？」

「おはようじゃ島田。いや、明久が早く来たから今日は何が起きるのかを考えていたのじゃ」

「うんうん。あの兄さんが早く来ると碌なことにならないし、今回は何が起きるのかと」

「光正。いくらなんでもアキが早く来たぐらいじゃ問題なんてそうそう起こらな——」

『最悪じゃあ——っつ!!』

窓の外から爽やかな風が入ってくる。

それらと共に、兄さんの叫び声も風に乗って聞こえてくる。

「ほらね。もう、問題起きたでしょっ。」

「本当ね……」

さあて、今回はどんな厄介事を兄さんは持ち込んでくるのやら。

平和だった朝 平和だった二人

「明久。一体何があったのじゃ?」

教室に戻った兄さんに、秀吉が声をかけた。

「遂に頭逝かれた?」

「べ、別になんでもないよ。あははっ」

兄さんは何でもないように振舞っている。だが、朝から意味もなく屋上（推定）で叫ぶ程うちの兄さんはおかしくなかつたはずだ。……多分。

「ウソばかり。さっき窓から妙な叫び声が聞こえてきたし、何か隠してるでしょ?」

「あ、美波。おはよう」

秀吉の陰から島田さんが現れて兄さんに問い詰める。

「おはようアキ。それで、何を隠しているのかしら?まさか……」

島田さんの目がいつもより更に釣りあがる。あと一歩で攻撃態勢だ。

「やだなあ美波。本当に何も隠してなんか」

「まさか、またラブレターを貰ったなんて言わないわよね?」

「島田さん。もう少し言葉に気をつけたら?」

「そうだよ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

島田さんの台詞にクラスメイトが、いつでも兄さんを殺せる準備をしていた。迷いが無いあたりさすがと言うべきか何と言うべきか。

「皆、カッターはまだ早いわ。落ち着きなさい。だいたい、どう考えてもアキがラブレターなんてもらえるわけないでしょう?隠しているのは別の物に決まっているわ」

まあ、そりやそうか。

「ふふん!そのまさかさ!今朝僕の靴箱にラブレターが」

バカか。そんな言い方したら……

ドスツ! (カッターが畳に刺さる音)

殺されるだろうが。安いプライドなんてその辺に捨てておくか野

良犬に食わせておけ。

「次は耳よ」

「心の底からごめんなさい」

「それじゃ、正直に答えなさい。何を隠しているの?」

「はい。実は僕が隠していたのは、きよ——」

島田さんは兄さんを詰問すると、兄さんは白状しようとするが途中で止まった。……きよ?

「きよ、きよ……」

『「きよ」何よ?』

きよ……きよ……あ、脅迫状か。

「きよ、競泳用水着愛好会の勧誘文!」

おかしすぎる返答が来た。うん。これは脅迫状(確定)だな。

「ほ、本当なの、アキ?」

なんとこの兄さんの嘘に引っ掛かる人がいた。

というか、それって昨日兄さんが見ていたテレビ番組からだよね?

阿呆なの?

「勿論本当さっ!」

引っ掛かっている島田さんに無理矢理信用させるように力強く断言している。でも、オレと秀吉が引っかかっていないんだ。無意味に等しい。

「そ、それにしては捨てる素振りがなかったけど……。もしかして、入会する気なの?」

「ま、まあね!前から興味があつたからね!」

「そ、そうだったの。初耳だわ……」

おそらく言った本人も初耳だ。

「でも、よりによって普通の水着じゃなくて競泳用だなんて……。一体どのへんに興味を持ったの?」

「そ、それは……」

「うん」

「——密着具合」

変態だ。

「島田。わかっておるとは思うのじゃが一応言っておくと、今のも全部明久の嘘じゃからな？明久にそんな趣味があるわけなからう？」
「そうそう。そんな趣味があるなら兄さんは毎日プールに通っている」

決して泳ぐためとは言っていない。

「ええっ!? 凄いいリアルなウソだったから危うく騙されるところだったじゃない!」

「どこが？」

「傷ついた! 今の一言で僕は毎晩枕を涙で濡らすほどに傷ついた!」

「自分で枕カバー洗えよ」

「心配するのそこお!」

「これが最後よ。今度こそ正直に言いなさい。何があったの?」

恐らくここで言い訳しようものなら肉体的な死を迎えるだろう。

「実は、今朝僕宛てに脅迫状が届いていたんだ」

予想的中。

「あ、なんだ。良かったあ……」

そして何故か島田さんは胸を撫で下ろしていた。クラスメイトが脅迫状を送られたと言うのに何故安心してらんだろうか？

「して、その脅迫状にはなんて書いてあったのじゃ?」

「そうそう。文面は?」

「これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近付かないこと』って書いてあるんだ」

兄さんが手紙を出して内容を読むと、オレと秀吉はすぐ考え始める。

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおける異性に対してなんらかの強い気持ちを抱いておるな」

「なるほどね。脅迫状を送った人は兄さんに嫉妬してる。つまり――」

「うん。手紙の主はこのクラスのたった二人の異性、つまり姫路さんか秀吉に好意を寄せているヤツだっということがわかるね」

「明久。金属バットを取りに行つた島田が戻つてこないうちに逃げる

のじゃ」

「オレしくらね」

この後兄さんがどうなろうと自業自得だな。

「え？僕の推理どこか間違ってた？」

「どこが間違ってたと思う？」

「だって、光正には脅迫状届いてないんですよ？ということはどういうこと？うちのクラスの中で誰か女子と交流のある男子全員に送ったわけでは無い。で、僕が光正より親しい異性って言ったら姫路さんと秀吉。ほら、完璧な推理でしょ」

どこが完璧だ。

「後は光正を脅迫しようものなら脅迫した側の命がいくつあっても足りないから、僕だけって線もあるかな」

ああ。オレを脅迫しようものなら生まれたことを骨の髄まで後悔させてやる。

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや。なにに、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か。写真って、こっちの封筒に入っているやつかな？」

兄さんは脅迫状を読みながら、もう一つの封筒を取り出す。封筒の中身を出した兄さんにオレと秀吉も一緒に見ると、中身は三枚の写真だった。

一枚目の写真に写っていたのは——メイド姿の兄さん。

「この前の学園祭の服装じゃな」

「い、いつの間に撮影なんて……」

「物好きもいるんだね」

男の女装を盗撮なんて、普通はしないだろう。

「こうして改めて見ると、やはり似合っておるのう」

「まあ、言えてるね。汚くはない」

「それ、全然嬉しくないよ……」

兄さんは溜息を吐いて、オレと秀吉に二枚目の写真を見せないように隠しながら見ている。

「……………」

「明久。どうしたのじゃ?」

「……トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだから……」

「あ、明久!?自我が崩壊するほどの物が写っておったのか!」

「遂に壊れたか?」

おかしな事を言ってる兄さんはオレと秀吉を無視して、三枚目の写真を見ると――

「もういやあああつっ!」

――発狂した。

「何じゃ!?一体何が写っておったのじゃ!」

「見ないで!こんなに汚れた僕の写真を見ないでえっ!」

「大丈夫だよ兄さん。兄さんはもともと穢れてるから」

「それはそれで酷くない!」

「とりあえず、落ち着いてよ。皆が見てるよ?」

と言うか秀吉の言うとおり、一体何が写っていたんだろう?まあ後で見るか。

「はあ、はあ、はあ……。恐ろしい威力だった……。これは僕を死に追い詰める為の卑劣な計略と言っても過言じゃない……」

「考えすぎではないかのう。メイド服くらい、人間一度は着るものじゃ」

「それは嘘だろ」

秀吉が頭の可笑しいことを言っていると、

「明久君、光正君、木下君。おはようございます」

後ろから姫路さんが挨拶をしてきた。

「この声は――やっぱり姫路さんか。おはよう」

「おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじやな」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

まあ、兄さんにとっては、姫路さんは心安らぐ存在だからなあ。と

「どうか、何でこの二人って付き合わないのだろうか？まあ、何でもいいけど。」

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらおうでしょうかの。姫路、少々良いか？」

姫路さんの姿を見て、秀吉がそんな事を言い出す。

「はい、なんででしょうか？」

「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があったらどう思うかのう？」

正直、その入り方はダメだと思う。

「うくん、そうですね……もしそんな写真があったら……取り敢えず、スキャナーを買います」

「へ？スキャナー？なんで？」

「何でそんな物が必要なの？」

「だって、その……」

兄さんとオレの問いに姫路さんは少し恥ずかしそうに頬を染めてこう答えた。

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないじゃないですか……」

「はい。兄さん。飛び降りようとしなさい」

「明久落ち着くのじゃ！飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

「放して二人とも！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

窓から飛び降り自殺をしようとする兄さんをオレと秀吉が何とか止めている。

「そ、そうじゃ！ムツツリーニじゃ！ムツツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して——」

なるほど。盗撮盗聴はムツツリーニの管轄内だろうし。

「ムツツリーニに笑われる？」

それは諦めろ。

「違う！事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ！」「おおっ！なるほど！」

兄さんは飛び降りをやめる。

「ナイスアドバイスだよ秀吉！流石は僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違いじゃろう!？」

「あの……どっちも間違いだと思えますけど……」

「諦めるんだ姫路さん。もう、この2人は助からない」

「は、はあ……」

そう。きつとこの2人は脳に不治の病を抱えているんだ。

「それじゃ、僕はムツツリーニに話があるから！」

兄さんがムツツリーニを見つけてすぐに直行した。

「ところで、明久君のメイド服姿がどうか……」

「ひ、姫路ーワシと話でもせんかの!？」

秀吉には姫路さんの相手をしてもらい、オレは兄さんと一緒に行かせてもらおう。兄さんについてった方が面白そうだ。

「助けてムツツリーニ！僕の名誉の危機なんだ！」

兄さんがムツツリーニののいる席に倒れこむように駆け寄る。すると、雄二が遮るような感じでオレたちの目の前に現れた。

「というか、兄さんに名誉ってあったか？」

「後にしろ。今は俺が先約だ」

「あれ？雄二？」

「雄二もムツツリーニに相談？」

あれ？いつもよりツンツン頭が元気がない。何かあったのだろうか。

「ムツツリーニ、何の話？」

「……………雄二の結婚が近いらしい」

結婚が近い？普通じゃないの？

「雄二と霧島さんの結婚？そんな既に決まってることより、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうってことの方が重要だよ！」

「なんだと？お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

オレも同感だ。

「黙れこの妻帯者！人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこの変態！とつととメイド喫茶へ出勤しろ！」

「……………」

「……………」

「……………傷つくならお互い黙ってればいいのに」

「お互いの傷を抉り合うなんて笑えるねえ……プククッ」

「黙れ学年一のバカッパルのバカの方！」

「よし、上等だ。貴様ら表に出ろ」

「というか、バカッパルのバカの方って何だよ。」

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んで良かったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子供が出来たことにされているのかと……………」

「そうそう。というか、雄二。寝込みに既成事実とか作られてない？」

「まあ、さすがに冗談だけど。」

「…………お前ら。笑えない冗談はよせ」

「…………あれ？笑えない冗談って……。まさか霧島さんは本気でやろうとしてるの？」

「で？雄二は何があったの？深刻そうだけど」

「ああ。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ」

「MP3プレーヤー？それくらい別にいいんじゃないの？雄二だって前に学校に持ってきてたし」

「へえ、持ってきてたんだ。まあ、兄さんは一時期ゲームとか諸々持っていては没収されていたけど。」

「いや、アイツは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

「霧島さんは機械オンチだったのか。何でも出来そうなイメージがあったけど……まあ、人は誰しも苦手なものはあるか。紫乃も料理苦手だし。」

「そこで怪しく思って没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「……………」

「一瞬、先の召喚大会の準決勝を思い出す。そのプロポーズを捏造し

てしまったのがオレだと言う事実には罪悪感が湧いてきた……？あれ？湧いてこない気が……まあ、湧いたことにしといて。

というか、霧島さんが大好きな人からのプロポーズを録音していたなんてね。あの人の記憶力なら一言一句違えず覚えていたであろうというのに。

「き、霧島さんは可愛いねっ！そんな台詞を記念にとっておきたいなんて……」

「よほど気に入ったのかな」

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのような」

「ほうほう。こりゃ、結婚も近いですなあ」

「……お前には罪悪感がないのか？この計画犯及び実行犯」

「ないよ？」

「どこから罪悪感が湧くのだろうか？」

「まあこいつにそんなの求めても無駄だよな」

「酷くない？」

「一応MP3プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、オリジナルを消さないことには……」

そう言っただけで雄二が取り出したものはどうみても再生専用のプレーヤーだ。確かにこれの中身を消したところで問題の解決にはならないだろう。

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械オンチだからな。密かに集音機を仕掛けるなんてことが出来るわけないから、きつと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

まあ仕方ない。多少はオレも絡んでいるんだ。協力するのが吉か。

「……………明久は？」

ムッツリーニが兄さんの方を向いて聞いてきた。どうやら兄さんの事情も聞いてくれるみたいだな。

「実は、僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうなんだ」

「ごめん。伝わってないと思う。」

「……………何があつた？」

「ごめん。端折り過ぎた。要するにね——」

——事情説明中——

「——そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだと思う」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「……………脅迫の被害者同士」

「固い絆で結ばれている」

「こんなことで仲間ができて……………」

面白い関係だなあ。

「……………光正は？」

「ん？兄さんに付いてきただけ。特に何も無いよ」

「……………そうか」

「そうそう」

オレが言い終えたタイミングで、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。どうやら西村教諭が来たみたいだ。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げる西村教諭は手に大きな箱を抱えていた。さっき言った強化合宿のしおりが入っているんだろう。

「……………とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその二を持ってくるよ」

「……………必ず調べ上げておく」

ムツツリーニが快く引き受けたのを見たオレたちは、西村教諭に何か言われないうちに素早く席に戻る。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあ

れば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきたので、オレも一冊取って残りを後ろに回した。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

西村教諭のドスの聞いた声で言う。

とりあえず、該当箇所を見ておくか。オレは冊子を捲って集合時間と場所の書かれている部分を確認する。

今回オレたちが向かうのは卯月高原という少し洒落た避暑地で、この街からは車だと大体四時間くらいで、電車とバスの乗り継ぎで行くと五時間くらいかかるところだ。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

AクラスやBクラスはリムジンバスとかで快適に向かうんだろう。オレたちFクラスは狭いバスや、バスの荷物置きかも。後は西村教諭が引率だけと言う事も……。

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは……現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ!?!』』

嘘……だろ?」

いざ卯月高原へ

強化合宿の日記

強化合宿一日目の日記を書きなさい。

姫路瑞希の日記

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようです。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています。

土屋康太の日記

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日記

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませぬ。

吉井光正の日記

『電車に乗りいつものメンバーと移動。面倒だったが、お互いに話したりするうちに一層友情が深まった……そんな気がした。ただ、移動

中は暇なので携帯ゲーム機を持ってくるところを許可して欲しいと切実に思った』

教師のコメント

前半はとて面白いことを書いているのに後半は願望になってますよ？何を目的とした合宿かをもう一度見直してみましよう。

翌日。オレたちFクラスは電車に乗って合宿場へと向かっていた。

「よし、本を読み切った。秀吉、後どれぐらいで着く？」

「後、二時間くらいじゃのう」

秀吉に時間を聞くとなんと後二時間はこの暇で退屈な時間が続くらしい。あー暇だ。

秀吉の隣に座っているムツツリーニは昨日の調査のせいで疲れたのか、ぐっすりと眠っている。

よし、兄さんたちの方へいこう。

「暇だから来たよー」

「あ、やっぱり？ねえ雄二、何か面白いものはない？」

「鏡がトイレにあつたぞ。存分に見てくるといい」

「あ、オレ手鏡あるよ。見る？」

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？」

「いや、違う。お前の顔は割と——笑えない」

あ、笑えないんだ。オレも毎日のように見ているから笑う要素が見当たらないんだけど。

「笑えないほど何!?笑えないほど酷い状態なの!？」

「頭が？」

「確かに……ってなわけあるか!」

いや、笑えない程に酷いと思う。

「俺が面白いと言ったのはお前の守護霊のことだ」

「守護霊？そんなものが見えるの？」

「霊媒師にでもなった？」

「ああ、見えるぞ。明久の背後に血みどろで黒髪を振り乱している珍しい守護霊が」

「そいつはどう考えても僕を護っていないよね」

守護しない霊。ただの害じゃないか。

「安心しろ。半分冗談だ」

「あ、なんだ。ビックリしたよ」

「本当は茶髪だ」

「そこは一番どうでもいいよね!?!」

全くだ。

「ん？でも、その守護霊ってすぐ近くに居そうだよね」

「すぐ近くだと？」

「それって、雄二に折檻する時の霧島さんじゃないの？」

「……………光正。悪い冗談はやめてくれ」

「黒髪で血みどろ、そこに口数の少ないとか頭がいいとか加えたら霧島さんじゃん」

「……………よし、話題を変えよう。明久」

「……………そこで僕に振る？」

これ以上続けるとおかしな話になると悟った雄二は、兄さんに話題を変えるように言う。

「ね、ねえ美波、何を読んでいるの？」

そして兄さんは話題を変えるように、小さな本を読んでいる島田さんに問い掛けた。

「ん、これ？これは心理テストの本。一〇〇円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの」

「へえ。面白そうだね。美波、僕にその問題を出してよ」

「うん。いいわよ」

退屈しのぎが出来たと思った兄さんは、ワクワクしながらページを

捲る島田さんの問いを待っている。オレも退屈凌ぎになるかな？

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』」

色でイメージする異性ねえ。

『①緑 ②オレンジ ③青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

「えーっと——って、美波。そんな怖い顔で睨みつけられてると答えにくいんだけど」

「べ、別にそんなわけじゃ……！いいから早く答えなさい！」

「ん……順番に、『緑↓美波 オレンジ↓秀吉 青↓姫路さん』って感じかな」

おかしい。一人同性が混ざってる。そう思っていると、

ビリイツ！

島田さんの手元から凄いい音がした。

「み、美波さん……？どうして本を真ん中から引き裂いているのですか？」

「どうして……」

「はい？」

「どうしてウチが緑で瑞希が青なのか、説明してもらえる？」

なんか知らないけど凄い怒ってる。というか心理テストでそこまで怒る事なの？

「ど、どうしてと仰られましても……」

「怒らないから正直に言ってみて？」

あ、これ言っちゃいけない奴だ。

「前に下着がライトグリーンだったから」

「坂本、窓開けて」

「捨てる気!? 僕を窓から捨てる気!？」

「島田。窓からゴミを捨てるな」

「そうだよ。ゴミはゴミ箱だよ」

「雄二に光正。今サラツと僕をゴミ扱いしたよね？」

「いいのよ。ゴミじゃなくてクズだから」

「クズはきちんとクズカゴに入れるべきだ」

「そうだよ。どちらも窓の外へ捨てるものじゃないよ」

「そして雄二も光正もクスを否定しないんだね……」

すると雄二はヒョイと島田さんの手元の本(だったもの)を取り上げてた。

「あつ！ちよつと坂本!?!」

「何々？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青は——なるほどなあ。光正」

「ん？どうした？」

「お前だつたらこの三色の異性なんて答える？」

「ええー『緑↓姫路さん オレンジ↓島田さん 青↓紫乃』かなあ？」

「ほほう。これは信憑性が高まったと」

すると雄二は兄さんと島田さんを交互に見て嫌な笑みを浮かべている。

「さ、坂本！返しなさいよ！」

「悪い悪い。面白そうだったもんで、つい借りちまった」

そうやって謝る雄二をむくれつ面で睨む島田さん。あーさっきの雄二の発言からも青の連想する異性が何を示すかなんとなく分かった気がする。

「そう思うんなら雄二も参加したら？光正みたいに」

「オレはもう参加していることになってるの？」

「そうだな。島田、俺もちよいと混ぜてもらえるか？」

「それはいいけど……。そ、それより、さっきの問題に深い意味はないんだからね！」

「ああ。わかってるって」

深い意味が無いなら何で本を破いたのだろうか？すごく気になる。

「ワシも参加していいかの？」

そして、こちらの様子を見てた秀吉がこつちに来た。

「別にいいけど」

島田さんは何故か不満顔だ。さっきの心理テストの結果が関係しているのか？というか、心理テストを妄信すると危険だと思うけど。かなりのレベルで。

「それはありがたい。……ところで明久。さっきの答えじやが」
「ん？」

『次の色でイメージする異性を挙げて下さい』とあったのじやが、オレンジでイメージするのは誰じや？」

「秀吉」

「……少し、嬉しいから困る……」

秀吉がうつむきがちにそんなことを言い出した。遂に頭がおかしくなったか？

「ところでムツツリーニは参加しないの？」

「どうやら眠っておるようなのじや。色々調べものをしておったとか」

ムツツリーニもお疲れだからね。こつち来る時には既に船を漕いでいたし。

「そつとしておいた方が良さそうだね」

「うむ」

流石に寝ているところを起こすのは可哀想だ。

「あの、私もいいですか？」

兄さんの正面に座っている姫路さんがおずおずと手を挙げていた。

「そうだね。皆でやろうよ」

不機嫌そうな島田さんに代わり兄さんが返事をする。さすがに島田さんでも姫路さんを仲間外れにする気はないだろう。あつたら子どもだ。

「ところで美波ちゃん。さっきの問題の『青で連想する異性』って——」

「……教えない、絶対に」

「そ、そんなあ……」

うーん。やつぱり、子どもだろう。心理テストなんて少し信じて楽しむぐらいがいいのに。本気にし過ぎるのは良くないと思うよ。

「はあ……。ま、いいわ。第二問いくわよ」

島田さんが溜息をつきながら読み辛くなった本を開く。うーん。疑問だけど、島田さんの握力はどれ位あるんだろう？本を引き裂くに

はある程度握力があるはずなんだけど……

『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』だって。どう?」

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」と秀吉。

「オレは9・5」とオレ。

「僕は1・4かな」と兄さん。

「私は3・9です」と姫路さん。

それぞれの答えを聞いた後、島田さんはゆっくりとページを捲った。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ——」

島田さんが順番に指を差しながら、

「クールでシニカル」↓雄二

「落ち着いた常識人」↓秀吉

「意志の強い人」↓オレ

「死になさい」↓兄さん

「温厚で慎重」↓姫路さん

と、告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「意志が強いのか……?」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった?」

「温厚で慎重ですか」

口々に感想を述べているオレたち。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ——」

さっきと同じように島田さんが順番に指を差して、

「公平で優しい人」↓雄二

「色香の強い人」↓秀吉

「クールでシニカル」↓オレ

「惨たらしく死になさい」↓兄さん

「意志の強い人」↓姫路さん

と、告げた。

「秀吉は色っぽいのか」

「光正は冷たい感じがするのう」

「姫路さんは意志が強いそうだね」

「ねえ、僕の罵倒エスカレーターしてなかった？」

「坂本君は優しいそうです」

心理テストで面白いと盛り上がる会話。そんな感じで心理テストを何問かやってみた。

そうこうしていると、

「……………(トントン)」

ムツツリーニが兄さんの背後に現れた。

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

「おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で起きた」

「あれ？もうそんな時間？」

携帯電話を取り出して現在時刻を確認する。現在の時刻は午後1時15分。普段ならもうとつくに朝食を済ませている時間だ。

「確かに良い頃合じやの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

「うんうん」

オレたちは各々用意した昼飯を用意しようとする。

「あ、お昼ですね。それなら——」

と、姫路さんが傍らに置いてある鞆を手繰り寄せて中から何かを取り出そうとした。物凄く嫌な予感がする。

「——実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」

予感的中。姫路が取り出したのは大きなお弁当箱だった。しかも手作り。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「ごめんね。オレも自分で作ってしまったんだよ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつての」

「……………調達済み」

即座に自分の昼飯を見せる雄二・オレ・秀吉・ムッツリーニの四人。自衛策は万全だ。

え？オレは自分で作つたのかつて？まあ、電車の中で昇天しても困るしね。でもあれから成長して60%昇天する料理になつたんだよ。「そういうわけで、明久にでもご馳走してやつてくれ」

雄二が勝ち誇つた顔を兄さんに向けていた。

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑つた（パシッ）」

「……………足が滑つた（グシヤッ）」

「ああつ！パン！僕のパン！」

雄二が叩き落としムッツリーニが踏みつける。見事な連携プレーだ。

「全く。食べ物を粗末にしないでよ？」

「あはは。そうだよ。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に——」

兄さんは惣菜パンを拾うとする……………が。

「——してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。だから明久は姫路の弁当を分けてもらつてくれ」

雄二がまた妨害する。

「……………!!（ガンのくれ合い）」

「おっと、ゴメン雄二。僕も手が——」

「滑らないようにきっちり掴つかんでおいてやるからな」

「……………!!（メンチの切り合い）」

「あの、明久君。良かったら……………」

姫路さんがおずおずと弁当を兄さんに差し出す。うううなんていい人なんだ。

「あく、えっと、その〜」

「アキ。良かったらウチのお弁当も食べてみる」

兄さんは何かひらめいたのか、

「ありがとう！美波も分けてくれるんだね！それならいつそのこと、皆でお弁当を広げて少しずつ摘まもうよ！」

考え得る限り最悪の提案をしてきた。

「わ、ワシとムツツリーニと光正は向こうの席なので遠慮させていた
だこうか」

「や、やるなら、そこの四人でやるといいよ」

「……………！・（コクコクコクコク）」

オレたちは元の場所へ避難する。

その後、いろいろあつて兄さんが天に召された。

調査と乱入と冤罪と

「300ジュールチャージ」

「了解」

「電気ショックを与える。離れてくれ」

「では、一発目」

ドンツ

「もう一回だ」

「では、二発目」

ドンツ

「かすかに動いた。なら、後一回」

「では、三発目」

ドンツ

オレたちは合宿所に入り、自分たちの部屋で最初に行っていること。

それは――

「明久、起きたか！良かった……。電気ショックが効いたようだな……」

――兄さんの救命活動だった。

なぜ、兄さんの命が風前の灯火になっていたか？理由は簡単、姫路さんの手料理を食べてこうなったのだ。

「起きた？頭は大丈夫？自分の名前フルネームで言える？」

「バカにしないでよ。僕は吉井明久でしょ？」

「雄二。どうやら記憶障害があるようだ」

「ええっ!?何でさ!」

「だって、ヨシイ・バカ・アキヒサがフルネームなのにミドルネームを言い忘れてる。これは記憶障害の疑いがあるぞ」

ところで、本当に名前にバカって入ってる人って実在するのかな？
バーカーって人はいた気がするけど……。あ、そもそも海外ではバカって言わないか。

「誰がバカだよ!」

「茶番はその辺で終わらせるぞ」

「へーい」

「何か答えを聞いてない気がするんだけど……」

そこは諦めろ。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買
い取って合宿所に作り替えたらしいぞ」

わあ、金持ちだなあ。というか、作り替えたってことはあれか。召
喚獣も出せるということか。

「む。明久、無事じゃったか！良かったのう……。お主がうわ言で前
世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

うーんでも、前世の罪を懺悔してたのに、現世の罪。主にオレに迷
惑をかけたことに関しては何も言わなかったんだよな。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」
「うむ。ムツツリーニも含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

見たところ八人ぐらい使えそうな部屋だけど……あれか。問題児
を一ヶ所に集めてオレがその監視役か。それなら納得だ。

「ムツツリーニは何処にいったの？覗き？盗撮？」
「友人に対してどうしてそんな台詞が出てくるんだ？」

ガチャッ

「……………ただいま」

「おかえりムツツリーニ」

「……………明久。無事でなにより」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

「……………情報が無駄にならずに済んだ」

「情報？昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

情報と聞いて雄二が反応した。兄さんも思い出したかのような顔
になっている。

「……………昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「おおっ。さすがはムツツリーニだね」

「……………手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と
断定できる」

「そうなのか。まあ、そんなことをするヤツなんて何人もいないだろうし、断定しても間違いはなさそうだな」

そりゃ、この事件が別々の犯人だところつちが捕まえるのが面倒だ。

「それでムツツリーニ、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

兄さんが尋ねると、ムツツリーニは申し訳なさそうに首を振った。流石のムツツリーニでも犯人の特定は無理だったよう。

「あ、やっぱり犯人はまだわからないの？」

「……………すまない」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

「……………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

どうすれば、お尻に火傷の跡があるかないのかが分かるのだ？ 調査方法がとても気になる。

「……………校内に綱を張った」

そう告げながらムツツリーニが取り出したのは小さな機械。これはアレか。

「……………小型録音機。昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

ですよー

——ピッ 《——らっしやい》

ムツツリーニがスイッチを押すと、内蔵されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響いた。

「随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろう。音質や精度に拘る余裕はないからな」

「辛うじて女子の声ってことは分かるね」

ただ、誰なのかが特定できない。少なくとも紫乃ではないことは確かだ。断言できる。

《……………雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

対する女子の声。声だけでは特定できないが、この独特の話し方と

台詞の内容からして霧島さんで確定だ。

「しよ、翔子……！アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたんだね」

「一途だねえ〜」

まあ、雄二も面白そ——大変そうだなあ。

《毎度。二度目だから安くするよ》

《……値段はどうでもいいから、早く》

《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日——と言いたるところだけど、明日からは強化合宿だから引渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する》

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが来週の月曜まで延びたね」

とは言え、土日は殆ど行動できないだろうから、実質はあと四日だろう。

「でも、今ので相手が二年生つてことも掴めたね」

「……それで、こつちが更なる犯人特定のヒント」

ムツツリーニが機械を操作する。

《——相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた……》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女おとめに対して酷いと思わな
いかい？》

それ以降は他愛もない商談がいくつか続いた。

「………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかっていただけ女子なのは間違いないだろうね」

ムツツリーニの情報に、兄さんと雄二は間違いなく女子と断定し

た。それにしても隠れて商売をしてる人がムツツリーニ以外にもいたとは驚きだ。

「犯人を特定できる有益な情報だけど、お尻の火傷か……。仮にスカートを捲ってまわったとしてもわからない可能性があるし、うーん……」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ……」

「何でこいつら真剣に女子の尻をばれないように見る方法考えてんだよ……」

他にも方法があるだろう方法が。

「お主ら、さつきから何の話をしておるのじゃ？」

秀吉が首を傾げながら聞いてきた。あれ？兄さんはまだ秀吉に事情を話してなかったの？

「秀吉、実はね——（割愛）」

兄さんが簡単に事情を説明する。恐らく秀吉なら事情を話せば協力してくれるだろう。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

一緒に考え始める秀吉。

「そうだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

何故そうなった？

「明久。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

「それは無理だ、明久」

雄二が何かを兄さんに放って渡した。強化合宿のしおりかな？

「どうして無理なのさ？」

「無理に決まってるだろ」

「そうじゃ、ワシは男じゃと」

「3ページ目を開いてみる」

雄二に言われて兄さんは3ページ目を開く。

合宿所での入浴について

・男子ABCクラス：20：00～21：00 大浴場（男）
 ・男子DEFクラス：21：00～22：00 大浴場（男）
 ・女子ABCクラス：20：00～21：00 大浴場（女）
 ・女子DEFクラス：21：00～22：00 大浴場（女）
 ・Fクラス木下秀吉：20：00～21：00 個室風呂④
 ※個室風呂①～③を使用したい場合は理由と共に担任に申請すること。

「……くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「あれ？そういうことかあ……？」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

「そうやって五人で思考を続けていると……。」

——ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

もの凄い勢いでオレたちの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきた。えっ？オレたち何かやらかした？

折檻と情報交換と……

「な、なにごとじや!？」

狼狽える秀吉。当然だ。急に女子たちが乱入してきたのだからな。

「木下はこつちへ!そつちのバカ四人は抵抗をやめなさい!」

先頭に立つ島田さんが、そう叫んだ。

「オレは抵抗してないんだが?」

「あの三人をみなさい」

言われたように窓の方を見ると、そこから脱出しようとする兄さん、雄二、ムツツリーニがいた。

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじや……?」

「バカだろお前ら……」

でもまあ、今はそんなの問題じゃない。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ?」

窓を閉めながら女子勢に向き合う雄二。兄さんとムツツリーニも貴重品の入った鞆を下ろしながらそつちを向く。というか、貴重品を持っていくという考えがあったことに驚いたよ。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

島田さんの後ろから出てきて高圧的に言い放つたのはCクラス代表の………小山さんだ。名前を思い出すのに時間がかかったわけでは無い。そして、後ろで並んでいる大勢の女子も腕を組んでうんうんと頷いている。

「犯人?犯人ってなんのことさ?」

「コレのことよ」

小山さんがオレたちの前に何かを突きつけてきた。何だコレ?

「………CCDカメラと小型集音マイク」

そう言った物に圧倒的に詳しいムツツリーニが代わりに答えてくれた。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

へえ。

「え!?それって盗撮じゃないか! 一体誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの?」

「まさか、感情論だけで決めつけたのか……」

もし、そうだとしたら頭が足りてないって言うべきか……オレたちに疑われる人材が揃ってるって言うべきか……。そしてそんな状況の中、秀吉が前に歩み出た。

「違う! ワシらはそんなことをしておらん! 覗きや盗撮なんてそんな真似は——」

友人の無罪を立証しようと、秀吉が声を荒らげていた。

「そうだよ! 僕らはそんなことはしない!」

「……………! (コクコク)」

秀吉の反論に合わせて前に出た兄さんとムツツリーニを冷ややかに見る小山さん。

あ、この二人が出たらダメなやつだ。

「そんな真似は?」

「……否定……できん……っ!」

ですよねー。

「ええっ!? 信頼足りなくない!」

諦めろ。普段の行いだ。

「まさか、本当に明久君たちがこんなことをしていたなんて……」

殺気立つ女子の中から一人悲しそうな声をあげたのは姫路さんだった。

「アキ……。信じていたのに、どうしてこんなことを……」

「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね?」

ちなみに島田さんからは信頼の欠片も感じられなかった。

「姫路さん、違うんだ! 本当に僕は——」

「もう怒りました! よりによってお夕飯を欲張って食べちゃったときに覗きをしようなんて……! い、いつもはもう少しその、スリムなんですからねっ!」

……それって捉え方を変えると普段は覗いてもいいって言ってる

ようなものだけど……まあ、兄さん限定だろうな。

「う、ウチだっていつもはもう少し胸が大きいんだからね!」

それは絶対に嘘だ。でも口に出すと――

「それはウソ」

「皆、やっておしまい」

「ご、ごめんなさい! つい咄嗟に本音が!」

素早い動きで周りを取り囲まれ、兄さんとムツツリーニは石畳の上に座らされた。

うん。こうなるよね。しかもこの人たち本気で拷問するつもりだよ。

「雄二頼むっ! この場をなんとか収めて」

『……浮気は許さない』

『翔子待て! 落ち着ぎやあああああつ!』

さよなら雄二。君の事は忘れない。

「さて。真実を認めるまでたっぷりと可愛がつてあげるからね?」

え? オレには拷問がないのかって?」

「光正君も。覗きはいけないことですからね」

姫路さん以下数名（全員胸がある）に追い詰められて絶対絶命のピンチです。

誰か助けて……。

「姫路さん。後は彼女の仕事だわ」

「あ、天草さん」

「光正。連れてくね」

そういうと首根っこを掴まれ、なす術なく連れてかれる。ああ、どこに連れてかれるのだろうか。

連れてかれた場所は……。

「個室風呂①?よく借りれたね」

「まあね。Aクラスの生徒だから、風呂は大人数で入りたくないっていったら簡単に貸してもらえたよ」

さすがAクラス。学校側からも信頼されているようだ。オレは紫乃の肩に手を置いて……

「まあ、紫乃。他と比べることは無いよ。いくら、自分の胸が周り比べて貧相だからって、オレは気にしなふべガアあああ!?!」

「教えてあげる。個室風呂って何故か防音加工がされてるらしいの。だからいくら悲鳴をあげても助けはこないの。分かる?光正」

なるほど。何でここを選んだのかよく分かった。

「情報交換。まず、状況確認からだ」

要するに情報漏洩を防ぐのに最適だと。

「そっちで何が起きた?」

「女子風呂の脱衣所からカメラが見つかった」

「なるほど。それでオレ達が犯人扱いを受けて、乗り込んできた」と

だが、腑に落ちない。本当にあの乗り込んできた女子全員が、『カメラが見つかった。犯人はFクラスのムッツリーニや兄さんたちだ』そうやって考えるだろうか?そうだったら愚かとしか言いようがないが……先導者でもいたのか?

「第一発見者は誰だった?」

「Dクラスの清水さんよ。そして、彼女が『こんな事するのはFクラスの吉井明久に違いありません』って」

あれ?清水さんは乗り込んだメンバーの中に居なかったな。……どういうことだ?

「それでCクラスの小山さんたちが向かってつたの」

なるほど。大体解けた。

「紫乃。99%盗撮の犯人は清水さんだ」

「どうして?」

「二点。一つは第一発見者であること。これは、自作自演の線も有り

うる。もう一つは真っ先に兄さんを疑ったこと」

「一つ目はわかるけど二つ目はどういうことなの?」

「単純な話だ。兄さんより疑わしい人物が他にもいるのに真っ先に名前を上げた点。これは、加えて兄さんの脅迫犯が清水さんということ言っているのも同じ」

「脅迫犯……?」

「あー説明しておこうか」

——説明中——

「なるほどね。これは清水さんが黒の可能性が高くなったわ」

そう。そして、一番重要なのが——

「——本命のカメラはまだ脱衣所に残ってる。あれはダミーだ」

「そういうことね。ダミーを発見した風に装うことでもうカメラが設置されていないと錯覚させる。中々用意周到に練られた計画ね」

これは前々から計画されていたもの。そうでなければカメラやマイクを二つずつ持ってきたりしていない。

「でも光正はどうするの?今から彼女を捕まえて吐かせる?」

「いや、今無理矢理捕まえようものなら、兄さんの女装メイドパンチラが全世界に配信される可能性がある。然るべきタイミングまで待つ」

「タイミング?」

「予想だが、どこかでチャンスが来るはず。だったらそのチャンスを待つだけだ」

「来なかつたら?」

「強行作戦」

「分かりました」

後問題というか、あれなのは……きつと今頃復活した兄さんたちが本当に覗きに走ってるかもしれないこと。まあ、走ってもいいけど……正直。オレは巻き込まれたくないな……

「じゃあ風呂入りに行くか……」

しかし、紫乃が出入り口を塞ぐように立っている。

「……紫乃さんや?そこを通してくれませんか?」

「何で？」

「風呂入りに行きたいんです」

「ここ風呂場だよ？」

「着替えとか、いろいろ入浴セットを取りに行かないと……」

「ここにあるよ」

「何でえええええつ!?!」

ちよつと待て。いつだ？いや、そもそもどうしてここにあるんだ？
持ってきたんだろうけど……

「まさか、乗り込んだときにか……」

「はいです」

なるほど。すぐに助けずオレの入浴セットを持って……ん？

「ちよつと待て。この風呂場に連れて来た理由って……」

「え？混浴するためですよ」

「……情報交換のためじゃないのか……」

オレはなんて勘違いをしていたんだ……。ん？でも待てよ。

「Aクラスって、風呂に入ったんじゃ……」

「ううん。私は入ってないです」

「さっきの話は？」

「Aクラスの友達から聞きました」

「もしも、盗撮騒ぎがなければ？」

「男湯向かう途中で拉致しよ……コホン。連れて来ようと思って
いました」

今こいつ『拉致しよう』とか言わなかったか？

「だってですよ！折角の合宿なのに今日はさっきの騒動でやっと初め
て光正の顔を見たのですよ！これじゃ、普段の学校生活よりも会って
ないじゃないですか！」

余談だが、兄さんのせい（正確には姫路さんのせい？）でオレたちは
夕食をみんなと一緒に食べていない。此処について本来ならすぐ
に夕食だったのだが、途中で電気ショックの機械を借りたり、担架を
借りたりしていて、夕食を満足に取っていなかったのだ。

おかげで食事の時に食堂で会えるはずなのに会えなかったのだ。

「さあ光正脱ぐのです！」

「躊躇いがないのか！オレを脱がすことに躊躇いがないのか！」

「当たり前です！」

「前に一緒に入ったからなのか！」

すると静かになる紫乃。

「私思ったのです」

「……何を？」

「確かに見られたら恥ずかしいです。けど……」

「けど……？」

「光正の裸が見られるのでいいのです！」

「こいつ変態だあああっ！」

オレの叫びも虚しく。一緒に入ることになってしまった。

なってしまったというか嬉しいんだけどね。でもやっぱり……何かがおかしいよね？

録音機 悪戯 ダメ絶対

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強することで姫路さんに得られるものがあったようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません。

吉井光正の日誌

『特になし』

教師のコメント

何か書く努力をしましょう。

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスと合同学習になっていた。

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

合同学習という名の自習。学習内容も指定はない。

「授業？そんなもんやるわけねえだろ」

「やらない？どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容を理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差ないよ」

両方理解できないから……. だろ？

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

「つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。メンタル面の強化が目的だ」

「な、なるほど……」

霧島さんと雄二の息のあった説明により、兄さんは納得する。

「というか翔子。光正と天草を見習って、俺たちも勉強しないか？」

「あれ？光正と天草さん静かだね。てっきりイチャついてるものだと思ってたよ」

「……ONとOFFぐらい切り替えられる」

「……光正。ここ教えて」

「ああ、ここの式は……」

聞かれたので質問に答える。

「ねえ、雄二。思ったんだけど普段の二人と今の二人を足して二で割ったら丁度良くない？」

「奇遇だな明久。俺もそう思い始めた」

「……紫乃は光正が大好きだから。普段は仕方ない」

「まあ、光正も天草さんのこと大好きだしね」

「でも、翔子も明久もよく見てみる。あいつらの肩、密着した状態で勉強しているぞ」

「あれって、邪魔にならないのかな？」

「……大丈夫。あの二人の効き手は逆だから」

そう。オレの効き手は一応左手。紫乃は右手。よって密着しながら勉強してもお互いを妨げることはない。

そんなこんなで時間が過ぎてると……

「あ、代表に紫乃ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは兄の方の吉井君だったよね？久しぶり」

「ふうー休憩……あ、愛子も来たんだ」

「オレも休憩……と。あ、工藤さんもいたんだ」

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

自己紹介でスリーサイズを言う必要はあるのだろうか。

「ん？どうしたの兄の方の吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その……」

「あ、さては疑ってるね？なんなら、ここで披露してみせよっか？」

工藤さんが短いスカートの裾を摘んでいる。兄さんの隣では何故か雄二が目を抑えてのたうち回っていた。霧島さんが指をチョコキにして「……浮気はダメ」と呟いているが無視だ。ちなみに……

「……見ちゃダメ」

「見ないから。手を放してください」

オレは視界を手で塞がれていた。まあ、雄二に比べたら痛みを感じないが。ん？どうやって視界を塞がれているのに雄二たちの様子が分かったのかって？そんなの指の僅かな隙間から見たに決まっているじゃないか。

「……………明久。工藤愛子に騙されないように」

「あれ？ムツツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」
いつの間にかやってきたムツツリーニが冷静に工藤さんの言葉を受け流しているようだ。おかしいな。いつもなら鼻血を出しながらもカメラを構えていると思つてたのに。

「……………ヤツは、スパッツを穿いている……………」

君は何でそんなこと知ってるんだい？

「じゃあ放してもいいね」

「あ、うん」

そして、覆っていた手は消え去った。

「そ、そんな!?工藤さん、僕を騙したね!」

「勝手に騙されたんだろ?」

隣では「俺は目を突かれ損じゃないか……………」と落胆している雄二が呟いていた。

「あはは。バレちゃった。さすがはムツツリーニ君だね。まあ、特技つてわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな?」

工藤さんは、笑いながら小さな機械を取り出した。何それ？

「……………小型録音機」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば——」

小さな機械をカチカチと弄る工藤さん。少し間を置いて、内蔵されているスピーカーから声が聞こえてきた。

——ピツ 《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしているんだ》《やらない?》

「わああああつ！僕はこんなこと言っていないよ!?変なものを再生しないですよー!」

「ね?面白いでしょ?」

悪戯な笑み浮かべる工藤さん。しかし、彼女の見ている方向は兄さんでは無かった。どこ見ているんだろうとオレも見てみると…………

「…………ええ。最っつ高に面白いわ」

「…………本当に、面白い台詞ですね」

そこには氷の微笑をたたえた島田さんと姫路さんがいた。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くの手伝ってもらえる？」

「わかりました。アレですね？喜んでお手伝いします」

机に勉強道具を置いて、学習室を出て行く二人。そして、入れ違いで入ってくる秀吉。

「秀吉、どうしたの？」

「いや。先ほど、島田と姫路に石畳を運ぶのを手伝ってくれと言われたのじゃが、何かあったのかと思ってるの」

あれ？兄さん冷や汗かいてない？

「工藤。今のは録音した会話を合成したのか？」

「うん。そうだよ」

そんな兄さんを気にする様子も無く、隣では雄二が真剣な顔で工藤さんに詰め寄っていた。まさか、工藤さんが犯人だと思ってるのかな？

「光正〜」

「どうした？」

兄さんと雄二が小声で話している時、紫乃は何故かオレの膝の上に座り抱き着いて、

「頭撫でて〜」

「撫でられるの好きだね」

「うん。光正に撫でられるの好き」

「はいはい」

「えへへ〜」

どうやらさつきまでの集中は完全に切れたようだ。

「工藤さん。キミが……」

こちらでは、いつの間にか雄二と話を終わらせた兄さんが工藤さんに何か聞こうとしていたが、途中で言葉が切れた。

「ん？なに、吉井君？」

「あー、えくと、その、キミが——」

「ボクが？」

「キミが——僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

そして、兄さんが工藤さんにセクハラ発言をしていた。

「……ぷっ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」

兄さんのセクハラ発言に笑って流してくれる工藤さん。

「ご、誤解だよ！別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！」

「流石だな明久。まさか録音機を目の前にそこまで言うとは」

「ある意味天才だよ」

「へ？」

どうやら、オレたちの言葉を兄さんは理解してない様子だ。

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

ピッ 《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

「ひあああっ!?!これは合成すらしてない分ダメージが大きいよ!?!お願い工藤さん！今のは消して下さい！」

「こつちの吉井君って、からかい甲斐があって面白いなあ。つつい苛めなくなっちゃうよ」

ピッ 《お願い工藤さん！》《僕にお尻を見せて》

「うあああんっ!?!どんだん僕が変態になってる気がするよ！」

「前からだろ？」

オレがそう言い終えると、何やら殺気を感じた。

「……今の、何かしらね？瑞希」

「……なんでしようね？美波ちゃん」

表情を変えず、島田さんと姫路さんは兄さんの後ろに石畳を設置し始めた。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいオシオキが必要ですよね？」

姫路さんもだいぶ染まったなあ……。

「二人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粹に《お尻が好きって》だけなんだ——待って！今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！あとそつちの皆も笑ってないで助けてよ特に雄二と光正！」

「……………工藤愛子。おふざけが過ぎる」

「ムツツリーニ！助けてくれるの!？」

「……………うまくやってみせる」

兄さんのピンチを救おうと動いたのは他の誰でもないムツツリーニだった。

そう告げるムツツリーニは工藤さんと同じように小型録音機を構えた。あれ？何だか嫌な予感。

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二と光正》の《が好き》ってムツツリーニイーツ！後半はキサマの仕業だな!?!うまくやるって、工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの!？」

「……………工藤愛子。お前はまだ甘い」

「くっ！さすがはムツツリーニ君……………」

予想的中。そして二人は互いをライバルのように睨み合っている。

「……………吉井。雄二は渡さない」

「……………明久さんに光正は渡さない」

そして、霧島さんと紫乃の二人は兄さんを睨みつけていた。

「アキ……………そんなに坂本と光正のお尻がいいの……………?ウチじゃダメなの……………?」

「前からわかってたことですけど、そうはつきり言われるとショックです……………」

「二人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの!?!僕にそんな趣味は——」

バンツ！

兄さんが言い切る前に、突然学習室のドアが開く。入って来たのは脅迫・盗撮・犯容・疑者・筆頭 Dクラスの清水美春さんだった。

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ！」

ああ。変人が増えた。

「み、美春?なんでここに?」

「お姉さまっ！美春はお姉さまに逢いたくて、Dクラスをこっそり抜

け出してきちやいましたっ！」

清水さんが島田さんの姿を認めるなり勢いよく飛びつく。熱烈抱擁の構えだ。

「須川バリアー」

「け、汚らわしいです！腐った豚にも劣る抱き心地ですっ！」

盾にされた拳句口汚く罵倒された須川君は涙を堪えて上を向いていた。

「お姉さまは酷いです……。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こんな豚野郎を掴ませるなんてあんまりです……」

知らないよそんなの。

「ちよつと美春！こんなところで愛しているとかわらないですよ！アキに勘違いされちゃうでしょ!？」

いや、兄さんだけじゃないと思うよ。

「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

そんな中、凜とした声が響き渡った。声の主は……。ああ。Aクラスの久保君だ。

「あ、ごめん久保君」

兄さんは久保君にだけでなく、この部屋にいる全員に対して頭を下げる。

「兄の方の吉井君か。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんという島田さんといい、Fクラスには危険人物が多くて困る」

まあ、危険人物は多いよね。このFクラス、オレ以外全員危険人物だろ。

「それと、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的嗜好が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから」

「え？あ、うん。そうだね」

何か凄いい、重みのある発言だなあ……。

「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい」

「くだらなくなんかありません！美春はお姉さまを愛しているんです

！性別なんて関係ありません！お姉さま、美春はお姉さまのことが本当に——」

「はいはい。ウチにその趣味はないからね？」

島田さんが清水さんを学習室の外に追いやる。これで静かになったかな？

「……性別なんか関係ない、か……」

久保君が妙に思いつめた表情をして清水さんの捨て台詞を反芻していた。あ、兄さんが鳥肌が立ったように寒気が走ってる。まあ、オレには関係ないや。

「性別なんか関係ない、ですか……」

「あのね姫路さん。その台詞を眩きながら雄二と光正と僕を交互に見るのはやめてもらえるかな？きつとキミは誤解をしているよ？知つての通り、僕は《秀吉》《が好き》なんだってちよつと!?!」

また余計な事をする二人だった。でも本当に綺麗に音を重ねているよなあ……。

「け、けど、誤解しないでね？僕は秀吉の《特に》《お尻が好き》なんだ——ってこれだと余計に誤解を招くよね!?!ムツツリーニと工藤さん、とにかくその機械をこっちに渡しなさい！僕を取り巻く環境が変わらないうちに!」

もう手遅れだよ。

「あ、明久……。ワシはどんな返事したら良いのじゃ……?」

「しまった！もう手遅れ!?こうなったら、《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》違う!どうしてこんな場面で久保君のお尻を見る必要があるのさ!」

雄二のお尻を見る必要もないよ。

「吉井君。そういうのは少々困る。物事には順序がある」

違う。順序以前の問題だ。

「分かってる！順序云々の前に人として間違っていることも!」

「アキ、アンタやっぱり女より男の方が……」

「だからどうして皆は僕をソツチの人にしようとするの!?!落ち着いて僕の話聞いてよ!」

やれやれ、大変だなあ。

「ふうー休憩終わり」

「じゃあ、やるか」

「うん！」

結局、この騒ぎは西村教諭が怒鳴り込んでくるまで続いた。

Fクラス出撃!

「そんなこんなで勉強時間や夕食の時間も過ぎ、あつと言う間に入浴時間。オレたちは割り当てられた部屋で顔を突き合わせて話し合いをしていた。」

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

「その可能性は高いだろうな」

「ええーそうか?」

オレは疑問に思う。本当にそうか?それが正しいのか?と。

「だって、昼間の録音機の使い方よう見たでしょ?結構怪しいと思わない?」

「まあ、確かにそうだけど……」

でも、何か引つかかるんだよなあ。一番は、女子風呂を盗撮するメリット。後は、兄さんや雄二を脅迫する動機。工藤さんにはどちらも欠けている気がしてならない。

「現状、最有力の容疑者候補は工藤だ」

「………ん?盗撮する目的も動機も欠けている?もし、どちらも欠けていない人物がいたら?それに加え、この仮定が成り立てば……あれ?やはり犯人はあのんだ。だが、今言ってもこいつらは納得しないだろう。今は様子見だ。」

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる?」

兄さんが工藤さんをつままえようと提案する。

「………それはやめた方がいい」

しかし、珍しくムツツリー二が否定的な意見を述べてきた。

「やめた方がいいって、何か問題でもあるの?」

「………チャンスは一度きり。失敗したら犯人は見つからない」
なるほど。ムツツリー二はしっかりと後先を考えているようだ。

「もし取り押さえて間違いだった場合、それを見ていた真犯人がどうするかをよく考えてみる、ってことだろ?」

「………(コクコク)」

雄二が補足説明を加える。

「ああ、そつか。証拠を隠滅するとか、自分を探さないように更に脅迫するとか、そういつたことを考えるね」

「そういうことだ」

まあ、そうだろ……ん？証拠を隠滅する？それって、どこかにまだ証拠が残ってる……あ、女子風呂のカメラか。なるほど。取りに来たタイミングで捕まえるのも手か。

「けど、あんなに怪しいのに手が出せないなんて……」

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……」

「いつそ、怒られるのを承知でスカート捲りでもしてみる？」

「……………ヤツは、スパッツを穿いている…………！」

「げ。そういうえばそうだった」

スパッツ以前に相手が下着を履いている限りスカートめくつてもお尻にある火傷の跡は確認できないだろう。

「というか、紫乃とか霧島さんに確認してもらえばいいじゃん」

「でも、そんなこと教えてくれるかなあ」

紫乃ならもう事情も説明してあるから教えてくれると思う。霧島さんは……知らね。雄二一人が犠牲になれば教えてくれるだろう。

「……………自分たちで確認するにはやはり女子風呂を覗くしかない」

「やっぱりそうなるんだね…………」

「昨日返り討ちに合ったんでしょ？」

昨日、復活した兄さん、雄二、ムツツリー二と被害者認定された秀吉の四名は姫路さんたちによる折檻の後、女子風呂に突撃した。まあ、布施教諭、大島教諭、鉄人に阻まれ、捕まって補習漬けにされたそうだが。

「そうなんだよね…………。どうしようか？何か作戦を練らないと先生たちのあの警備を突破するのは難しそうだよ」

「作戦とは言うが、あの場所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい」

この旅館にある女子風呂の前は見晴らしの良い一本道だけ。遮蔽物が無ければ、こっそり進入できる通路も無い単純な道で、基本男子風呂と作りは変わらないそうさ。

「そうだな。作戦を立てる時間もないし、基本は正面から攻める以外はないな」

秀吉の言葉に雄二も賛同の色を見せる。普段はオレか雄二がこういう作戦を考えるのだが、午前中はあの騒ぎに、午後は点数の補給の為のテストを受けていた。よって、考える時間も作戦の準備をするような時間が全然無かったのだ。

まあ、オレは今回、いかにして目的を達成するしか考えていないので、覗くための作戦を考えているのは雄二だけだ。もつとも、雄二の事だから、こんな状況下においても何らかの手を打ってるはずだ。

「だが、方法がないわけでもない」

「え？作戦があるの？」

「作戦なんて立派なものじゃないがな。要するに、正面突破を成功させたらいいだけだろう？」

「いや、それが難しいから困っているんだけど……」

兄さんの言う通り、突破するのはかなり難しいだろう。兄さんたちから聞いた話によると、向こうの戦力は教師の召喚獣が二体に鉄人が一体。対するこっちは観察処分者にA級戦犯、ムツツリと演劇バカだ。え？オレはつて？さあ？どうだろうな。

「正面突破しか方法がないのなら、それを成功させるだけの戦力を揃えたらいい。質は向こうが上でも、数で上回れば勝機はある」

「えっと、つまり覗き仲間を増やすってことかな？」

「そうだ」

「なるほど。我がクラスのバカ共を呼ぶのか」

「その通りだ」

……バカということに否定はしないのね。まあ、事実だから致し方なし。

「それじゃ、すぐにでも話をしてこないと。もうすぐお風呂の時間になっっちゃうよ？」

「安心しろ。夕飯時に既に声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

雄二がそう言うのと、まるでタイミングを測っていたかのようにノックの音が聞こえてきた。

「坂本、俺たちに話って何だ？」

須川君を先頭に、Fクラスの男子たちがぞろぞろと部屋に入ってくる。……ってこれFクラス男子全員じゃないか。流石にこの部屋に全員入りきらないから、廊下に残っている人もいるし。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

部屋に入りきらなくて廊下にいるメンバーにも聞こえるように、雄二はよく通る声で告げた。

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえなく』

全員がダルそうにしている。今日一日勉強漬けで疲れているのだから無理もない。

そうやってざわめく皆を見ても雄二は焦って話を切り出すような真似はせず、静かになるのを待ってから続きを口にする。

「——皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『詳しく聞かせろ』』

おい、さつきまでのダルそうな感じはどうしたんだよ。

「昨夜俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで？』

なぜ雄二のセリフに誰もツッコまない？後、俺たちの中にオレは入っていないからね？

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷アガルタの光景だ。どうだ？」

『『乗ったー！』』

Fクラスのメンバーが了承する事に呆れた。いや、予想通りだけだね？まあ、雄二がこの場で『俺たちを脅迫している犯人を見つけたいから協力してくれ』と言ったら彼らは絶対に協力はしなかったと思う。

「ムツツリーニ、今の時間は？」

「……………二〇一〇時」

入浴時間は前半組が二〇〇〇時からなので、今から行けば脱衣を終えて丁度良いタイミングになっているだろう。

「今から隊を五つに分けるぞ。A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニ、E班は光正にそれぞれ従ってくれ」

「おい待てコラ。オレが参加するとは一言も……」

『『了解っ！』』』

言っていないのに……はあ。また強制参加ですか。まあ、予想通りだけどさ。

「いいか、俺たちの目的は一つ！理想郷^{アガルタ}への到達だ！途中で何があろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！神魔必滅・見敵必殺！ここが我らが行く末の分水嶺と思え！」

『『おおおおっ！』』』

「全員気合を入れるろ！Fクラス、出陣^{でる}ぞ！」

『『おっしやあぁーっ！』』』

今オレたちFクラスは一つの崇高な目的の為に一つになった……とか誰かは思ってるんだろうな。まあ、オレがいるから一つになってはいないんだけどね。

「大変だ坂本！」

「何だ？」

「戦力になる方の吉井が拉致された！」

「……光正が拉致だと？あー天草に連れてかれたか」

「E班はどうすればいい？」

「ああ。二つに分かれて俺と明久の班に入ってくれ」

「了解！」

「……ん？だがAクラスは入浴中じゃないのか？どういうこ——」

「坂本！」

「——今度は何だ？」

「女子風呂の護衛に女子多数と教師が五人もいるぞ！どうするんだ？」

「なに？一日で警備がそこまで堅くなっただ？……まあいい。突げ——」

「……雄二」

「——次から次へと……今度は何だ？……つて翔子!？」

「……浮気は許さない」

「翔子待て！落ち着ぎやあああああつ！」

朝の未遂事件！

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略。(※吉井光正に続く)』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

吉井光正の日誌

『そんなこんなで夜中。目が覚めるとオレの目の前には紫乃が、辺りを見渡してみると島田さんと霧島さんも乗り込んでいた。この状況にもおおいに疑問を感じたがまあ、いつも通りな光景だと思いオレは……(※坂本雄二に続く)』

教師のコメント

異様な光景を目の前にしていつも通りと思える君が凄いです。

坂本雄二の日誌

『そしてお気楽な光正と対照的に、こちらでは翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっており(※吉井明久に続く)』

教師のコメント

本当に君たちに一体何があったのですか？土屋君が略した部分がとても気になります。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

翌朝。いつも通り早くに起きたオレは外に出て朝日を眺めていた。起床時刻までまだ余裕があるので外の新鮮な空気を吸っておこうと思っただけだ。

「朝日が綺麗ですね……」

つい言葉に出してしまう。でも、それが思っていることだから仕方ない。

「そうですね……」

また新しい一日が始まる。そんな思いを隣で座っている紫乃と顔を見合わせ共ゆ……？

「何で紫乃がここに居るんだあ!？」

おかしい。オレは確かに一人でここに来たはずだ。何故こいつがここに居るんだ？

「もう……朝からうるさいですよ?」

「あ、ごめ……って違う!何でここに居るんだ!？」

「もちろん。光正あるところに私あります。えっへん」

「……要するに?」

「ストーキングを……わわ!待ってください!冗談ですから!警察を呼ばないでください!」

オレは携帯を取りだそうとしたが紫乃の手によって阻まれる。

「安心しろ。警察は呼ばない」

「じゃあ、何を……?」

「紫乃の家に電話して世界的名医の脳外科の医者を紹介してもらおうと思っただけだ」

「まさか、この男。自分の彼女の頭がおかしいと言ってるの……?」

「何言ってるの？当たり前じゃん」

紫乃の頭がおかしいのは今に始まったことじゃない。

「むか。絶対光正の方が頭おかしいです！」

「ははは。オレのどこがおかしいのさ」

「平然とクラスメートを裏切れるところ」

「それは昨日のことを言ってるのか？」

「それもです。教師陣と女子生徒に『Fクラスの男子生徒たちが女子風呂の覗きをする』という情報をそれとなく流して、警備を堅めさせたり。私に拉致された振りをして、自分は覗きのための行動に参加せず西村先生の補習を逃れたり……クラスメートを裏切って心は痛まないのですか！」

「うん。全然痛まない」

「本当に人ですか!?!」

うん。オレは人だ。そうでなければ紫乃は人外と付き合ってることになる。

「一回、精神科行った方が……」

というか、裏切るのはよくやることだしな。これで大きく裏切ったのは三回目か？まあ、一々数えたらキリがないけど。

「まあ、大丈夫だ。心配いらない」

「……いろんな意味で心配になりますか……」

酷いなあ。そんなに信用ないのか？

「それより、光正。いつものアレをして下さい」

ん？いつものアレ？

そう疑問に思っていると紫乃は先ほどより少し顔を近づけ、目を閉じ、何かを待っている。

ああ、なるほどね。

コンッ

「何するんですか光正！」

「デコピン。威力は十分の一以下に抑えた」

「何故したんですか!?!」

「え？目を閉じてやられるの待ってたんじゃないの？」

「して欲しいことが違います！」

「ははは。分かっているよ」

「もう……」

そう言っただけ目を閉じる紫乃。なるほど。テイク2か。

ツンツン

「ん……？光正？一体何を？」

「頬を突っついてる」

「何故？」

「柔らかそうだったから」

「もう！焦らしプレイはそこまでにして下さいこのドS！」

「でもやられるの好きでしょ？ドMなんだから」

「はあ？」

あ、やっべ。やり過ぎたか？

「言うに事かいて私をドMの雌豚呼ばわりとは……！」

「いえ、雌豚まで言っていないです」

というか、雌豚とは思ってすらいない。

「ふふふ。光正。私の真価を發揮してあげましょう……！」

いや、しなくていいです……と言おうとした時には既に唇は塞がれていた。

すっかり疲れ果てたオレは自分の部屋に戻ってゆっくりと過ごしていた。

「夢オチ!?がっかりだよ畜生！」

すると兄さんが頭の可笑しいことを言い始めた。起きて早々に『夢オチ!?』って叫ぶか普通？叫ぶやつなんかいないだろ。

「おはよう兄さん」

「おはよう光正。相変わらず早いね」

そりゃ、自分の朝食作ったり、去年は自分の弁当も作ってたからな。早起きに慣れている。

「でもなんかもう疲れてない?」

「気にするな」

ここのところだけ鋭いんだよなあ……

「というか、兄さん。そつと背中の方を見て」

「え?背中?」

「うん。とつてもいい光景が広がってるよ?」

そう言われてちよつとワクワクしながら背中の方を振り向く兄さん。

「ぐう……」

「……………最悪だ」

そこにはブサイクな寝顔をしている雄二がいた。

そして、吐き気を催すような光景を見ると、雄二は大きく身じろぎをした。

「んあ……」

口が大きく開いて吐息が洩れる。

「やつちやえよ兄さん。兄さんはいぎという時は出来る男だろう?」

「やめてよ光正!悪魔と同じようなこと言わないで」

……………悪魔?

『お前の兄貴にも俺のような悪魔がいるんじやねえのか?』

ああ、そういうことか。納得だ。

『パパ〜ン。俺^{天使}降臨〜』

消えろ。

『天使が一瞬で塵と化した!?!』

あいつはもう用済みだ。よつてデリートした。

「とにかく雄二!起きろコラあつ!」

「ぐふあつ!」

「もう少し優しく起こしてあげようよ」

兄さんは躊躇なく雄二を布団から蹴りだした。まあ間近で雄二の寝顔を見た兄さんはさぞかし最悪な気分だろう。

「んむ？なんじゃ？雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか」

目を擦りながら秀吉が上体を起こす。更にその隣ではムツツリーニも秀吉と同じく目を擦りながら身体を起こしていた。

「秀吉、またってどういうこと？」

「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は寝相が大層悪いようでのう。明け方はワシの布団の中に入ってきておつて——やめるのじゃ明久！花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！」

「殴るー！コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

秀吉が説明してる最中。兄さんは何を血迷ったのか花瓶で雄二を殴ろうとしていた。

ガチャツ

「おいお前ら！起床時間だ——ぞ……？」

「死ね雄二！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」

「なんだ!?朝からいきなり明久がキまっているぞ!?持病か!？」

「行け行けくもつとやれえ〜」

「ええい落ち着くのじゃ明久！光正も煽るでない！西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………!」（コクコク）」

「……………お前らは朝から何をやっているんだ」

結局、西村教諭とオレを含んだ全員で兄さんを止めて、この場は何とか収まったのであった。

よし、味方を増やそう

「雄二。そう言えば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん？なんだ？」

寝起きの騒動も終えて朝食中。兄さんが正面に座ってる雄二に声を掛けた。

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つからないカメラが一台残っている』って」

「なんだと？」

「兄さん。それ本当？」

「どうやら、仮説が当たっていたな。」

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「いや、そうとは限らんじやろ。それならわざわざ怪しまれるようなことを言うとは思えん」

オレと雄二に代わって秀吉が返事をする。間違いなく工藤さんはシロ。だが、彼女が無実であることを証明するというのもいささか難しい。

「……………確認するしかない」

「やっぱりそれしかないか…………」

まあ、一番確実な方法だろう。しかし、確認するには工藤さんが入浴している必要があるが…………どうせ、防衛隊に入ってるんだろう。

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え？カメラが残っているってことが？」

「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

「……………隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

「5秒って凄いな…………」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

こいつの嗅覚はどうなっているのだろうか。

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

「いや。最初にカメラが脱衣所で見つかった方がおかしいんだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなるよ——」

「……二段構え」

「まあ、簡単に言うとも最初に見つかったカメラはカムフラージュだったということかな。可能性の話だけだね」

「用意周到じゃな」

まあ、ここまでのはさすがに分かったこと。

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りにいけば解決ってことだね」

「……それは無理」

「え？なんで？」

「……時間外だと脱衣所は嚴重に施錠されている」

初日のカメラ及び覗き騒動のせいかな。半分は犯人のせいだがもう半分は兄さんたちのせいである。今回は完全に兄さん達の行動が裏目に出たな。

「諦めて今までどおりの方法を貫けてることか……」

「そのようじゃな」

なぜ彼らは信用出来る女子に頼むという戦略を取らないのだろうか。ああ、覗きをしたせいで信用出来る女子に頼めなくなってしまうのか。……哀れだなあ。

「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

「敗因？うくん、向こうが女子の半分を防衛に回してきたことじゃないかな？後、光正が早々に拉致されたこと？」

まあ、両方ともオレの仕組んだことでもあるが。

「……敵側には工藤愛子もいた」

それはオレは知らないが、ムツツリーニの悔しげな顔を見るから察するに、かなり腹に据えかねているだろう。もしくは、教師を含めた二対一でも保健体育で不覚を取ったのが悔しいと言ったところかな？

「そうだ。昨日の敗因はAクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

うんうん。その通りだ。

「そこで、こちらも更に戦力を増強しようと思う。Fクラスだけではなく他のクラスも味方につけて対抗するんだ」

やっぱりか。Fクラスだけでは、もう限界に来ている。ここは他クラスに助けていただく他ないだろう。

「む？明久、どうしたのじや？」

「うくん。なんか、この作戦がいつものやり方と違う感じがしてなんだか……。ほら、向こうの戦力が大きいからってこっちの戦力を増やすっていうのが、イマイチ僕たちらしくないというか……」

まあ確かに正面突破だけが目的ならとても雄二が考えた作戦とは思えない。……ん？

「ほう……。明久も頭が少しは回るようになってきたな。その通り。このやり方の目的は正面突破だけじゃない」

「んで、他の目的って何？」

「俺たちの保身だ」

「僕らの身を守る？誰から？」

「いいか？今のところは未遂で終わっているから大した問題になっていないが、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が見つからない限り俺たちは処分を受けることになる」

いや、真犯人見つかったても処分を喰らうと思うのだが。

「それを避ける為の戦力増強——つまり、メンバーの増員だ」

「増員が処分を逃れる手段になるって？」

「ああ。人数を増やせば相手の特定は難しくなる。向こうだって戦いながらその場にいる全員の顔を覚えるのは厳しいだろうからな」

まあ、確かにな。でも、男子全員が覗きに参加していたら意味ないだろうけど。

「でも、既に僕らは面が割れてるよね？それなら無意味なんじゃないの？」

「文月学園は世界中から注目を集めている試験校だからな。そんな不祥事があつた場合はひた隠しにするかキツチリと一人残らず処分をするかのどちらかしか選べない。中途半端に一部の生徒だけを罰するようなことになれば、ただでさえ叩かれている『クラス間の扱いの差』についてマイナス要因を増やすだけだからな」

確かに。もし兄さん達だけ罰する事になったら、『出来の悪いFクラスだけは処分を受けて、他の優秀なクラスは手心を加えてる』と言う風に差別してるのではないかと見えてしまう。世間から注目されている事を考えると、学校側はバッシングの元になるような話は避けて隠蔽するに違いない。

まあ、オレだったら全員に処分を下すが。

「なるほど。流石は雄二。汚いことを考えさせたら光正以外に右に出る人はいないね」

「待てクソ兄貴。オレの考える作戦のどこが汚いんだ」

「味方も敵も平然と裏切り最終的な自分の勝利を得ているところ」

否定……できない。

「明久。知略に富んでいると言え」

「そうだ。知恵があると言ってくれ」

ただし、悪知恵だが。

「ふむ。ならば今日は協力者の確保を主軸に行動するわけじゃな？」

「ああ。幸い合同授業の上に殆ど自習みたいなものだからな。動きは取り易いはずだ」

「そうだね。じゃ、まずはどこから行く？」

「当然Aクラスからだ。同じ手間なら能力が高い方が良いからな」

「Aクラスならば昨日の合同授業で交流もあるしう。話もしやすいじゃろうて」

「それがなくても一部のメンバーと交流はあつただろ？」

最も、ほとんど女子だが。

「決まりだな。合同授業の間にAクラスと話をするぞ」

「了解。ムツツリー二もそれでいいよね？」

「……………問題ない」

方針が決定したので、オレ達は朝食を再開した。

「ところで光正」

「ん？なんだ？」

「首筋と喉元の絆創膏はどうしたんだ？怪我でもしたのか」

ツチ。ばれたか。

「ああ。朝散歩していたらちよつと、葉っぱで傷ついて……」

「そうか。てつきり天草にキスマークをつけられて誤魔化しているのだと思っただぞ」

何でこいつは分かるのだろうか。

「僕は悲しいよ。こんなところで兄弟を一人失うことが……」

「だったら、そのナイフをこっちに向けるんじゃない——」

ヒュッ

パシッ

「——ムツツリーニ。手癖が悪いよ？ほら、ナイフを落としたよ？」

「……………ツチ」

「……………お主らはもつと静かに食べられんのかのう」

この後、雄二のせいで真実をごまかすのに苦労した。

他クラスとの交渉

「Aクラスなら久保を説得するのが妥当だな。そんなわけで明久。説得に行つてこい」

「うむ。明久ならば適任じゃな」

「まあ、確かにこの中では交渉役に一番ふさわしいよな」

「……………頼んだ」

満場一致。オレたちは兄さんに久保君の説得を任せた。

「あ、うん。別にいいけど…………でも、どうして僕なの？僕よりも交渉術に長けた雄二や清涼祭の準備でAクラスと親睦を深めていた光正の方が適任じゃない？」

席を立つて久保君のところに行こうとしたところで、オレたち四人に尋ねた。

「……………」

兄さんの問いにオレたちは目を逸らすしかない。

「あ、あのさ。なんだか凄く嫌な感じがするんだけど、本当に大丈夫だよね？」

「そ、そうじゃな。一応、久保はお主に悪意を抱いてはおらんと断言できさる」

「そうそう。少なくとも負の感情は抱いていないよ」

「……………彼に悪気はない」

「なんで三人ともそんな奥歯に物が挟まったような言い方をするの？」

「こういう言い方しか出来ないんだよ。」

「明久、早く行つてこい」

「え？でも…………」

「大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。だから自信を持って」

「あ、うん」

うんうん。オレたち男子の中では一番兄さんが久保君に好かれている。断言してもいい。

「……ただし、いざという時はコレを使い」

雄二が兄さんのポケットにスタンガン(二十万ボルト)を押し込む。兄さんは横目で確認するが、何故交渉のためだけにスタンガンを持たされるのが分かっていない顔をしている。

「そ、それじゃ、行ってくるね」

兄さんは釈然としないながらも久保君のいるテーブルへ向かう。

「光正。この交渉どうみる？」

「うーん。割合的に7：失敗、2：成功かな？」

「残りの1は？」

「……言わなくても分かるだろ？」

「そうだな……」

無事に帰ってくるといういなあ……ついでに兄さんの貞操も。

それから少しして、兄さんがこつちに戻って来た。

「明久。どうだった？」

「大丈夫だった？」

「ごめん。失敗だったよ」

「そうか。まあ、無事で何よりだ」

「いや、そんな危ないことはしてないんだけど」

「いや、かなり危険だったと思う。」

「しかし、そうなる」と他のクラスとの交渉を迅速に進める必要があるな」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？」

「それはわかっている。だが、全クラスに声をかけるとなると休み時間程度では全然足りないからな。なんとしても抜け出すしかない」

雄二が鋭い目付きで鉄人の隙を伺っている。するとそんな様子を見て、島田さんがオレたちに近づいて来た。

「こらっ。アンタたち、また何か悪巧みしてるでしょ」

目ざといなあ。そして彼女が言った『悪巧み』と言う単語に遠くで鉄人がピクツと反応している。

「美波、別に僕たちは悪いことなんて考えていないよ？」

いや、覗きに関して考えている時点でアウトだ。

「はあ……。今更アンタたちに問題を起こすな、なんて無理を言う気はないけど、よりによって覗きなんて……。少しは覗かれる方の気持ちを考えてみたら？」

確かに……。島田さんの言い分ももつともだ。

「よりによってお風呂の覗きなんて……。周りと比較されるし、隠すものはないし、パットを入れることもできないし、寄せてあげること……」

「あの、美波。それって、一部のピンポイントな箇所を見られることを嫌がっているだけに聞こえるんだけど」

なるほど……。

『どうしたの紫乃？急に泣き始めて』

『優子……お風呂って残酷よね……』

『はい……？』

紫乃が何故泣いているのかがよく分かった。

「美波、そういえば」

「ん？なによ」

「須川君が話があるって言ってたよ」

「え？須川がウチに？」

「うん。さっきそう伝えて欲しいって言われたんだ」

須川君？あ、嘘か。恐らく島田さんを引き離す作戦だろう。

「ふうん……。何の用かしらね。ま、後で休み時間にでも聞いてみるわ」

「え？あ、いや、それはちよつと困る、かな……」

「？なんでよ？」

なるほど。今、この場から島田さんに向こうへ行ってもらいたいのだ。後では困る。

「その、とても大事な話だから、すぐにでも聞いて欲しいって言ったんだよ」

「え？大事な話って？」

『大事な話』と言う単語を聞いて島田さんは食いつく。お、この様子ならすぐにも動きそうだね。

「すつつつごく真剣な顔だったから、よっぽど大事な話なんだよきつと」

「えええつ!?ま、まさか、それって……?須川がウチになんて、そんなのありえないよ……。でもでも、旅先だとその手の話は多いって言うし……」

急に赤くなり始める島田さん。おそらく、恋愛絡みと勘違いしているのだろう。そんなわけがないのに。

「今すぐ伝えたいって言ってたから、すぐにでも行かないと可哀想だよ」

「……アキは、それでいいの……?」

島田さんは行くどころか、責めるような、寂しそうな目で兄さんを見ていた。

「え?それで良いも何も」

「だからっ!アンタは、ウチがその、須川とゴニヨゴニヨ……」

「ごめん。よく聞こえないんだけど」

なるほど。言いたいことがよく分かった。

「ああもうっ!要するに、アンタはウチが誰かに告白されたりしたらどう思うのかって聞いているのよ!」

「悪戯かと思う」

即答だった。

「はあ……。シャツについた血って落とすの大変なのよね……」

「いきなり返り血の心配!?僕の出血は決定事項なの!」

そりやそうだ。

「島田。明久はお前がどこにも行かないと安心しきっているんだ。こちらで焦らせてやるのも一つの手だと思うぞ?」

隣で様子を見ていた雄二が妙な事を言いだした。なるほど上手いな。これなら、兄さんには真意が伝わらなくても島田さんには充分に伝わる。

「……そうね。見てなさいよアキ。ウチだって結構モテるんだからねっ!」

雄二の口車の乗せられた島田さんは、須川君がいる所へ向かって

行った。

『島田。そんなに血相を変えてどうした?』

『西村先生。ちよつと須川に用事があるんです。スグに終わりますから』

『そうか。だが、その劍幕だとお前が須川を血の海に沈めないかと心配なんだが』

お。これはチャンスじゃないか?

「明久、光正、秀吉、ムツツリーニ。今だ。見つからないように脱出するぞ」

雄二が自習のフリをしている秀吉とムツツリーニにも声をかける。互いの目を見て小さく頷くオレたち。そのまま音を立てずに入り口に向かい、廊下に出てそつと扉を閉める。

『大事な話? 何のことだ?』

『騙したわねアキッ! 出てきなさいっ!』

兄さんが扉を閉める寸前、島田さんの怒鳴り声が聞こえた。

あと一瞬遅ければ、兄さんは犠牲になっていただろう……。

囹という名の生贄

「……やっぱりこっちにも監督の先生がいるね」

「そりやそうでしょ」

「当然だな」

廊下をこつそり歩くこと数分。オレたちはDクラスとEクラスの
合同学習室の前で様子を窺っていた。

「して、どうするのじゃ？このままでは交渉も進められんが」

「……………侵入も難しい」

ふむ。監督の先生は出入り口の前に陣取っているか。

「よし。オレとムツツリーニであの先生を暗殺してくるわ」

「……………了解」

オレとムツツリーニは堂々と暗殺に向かう…………が。

「待て待て。何故そんな物騒な発想が出来るんだ？」

雄二に止められた。

「え？ダメか？」

「却下だ」

「チツ…………じゃあ、どうするんだ？」

雄二にどうするかを尋ねる。するとヤツは平然と言つてのけた。

「簡単だ。一人を囹にして教師を引き付ければいい」

「断る」

すぐさま兄さんが否定する。当然だ。こういう損——重要な役割
は大抵兄さんに回ってくるからだろう。

「やれやれ。それなら、ゲームで決めないか？」

雄二の提案。こうなったらもう兄さんに勝ち目はほとんど残され
ていない。

「ゲームって、何？」

「古今東西だ」

「わかったよ。やってやろうじゃないか」

「よし。それならいくぞ」

兄さんと雄二は向かい合つて部屋の中には聞こえないように気を

配りながらゲームを開始する。

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

「「イエーツ！」」（オレと兄さんと秀吉とムツツリーニの合の手）」

「古今東西っ」

「「イエーツ！」」

「【A】から始まる英単語っ」

あ、兄さん詰んだ。

パンパン（手拍子） ↓ 雄二の番

「【Apple】！」

パンパン（手拍子） ↓ 兄さんの番

「……僕の、負けだ……」

「一つも思いつかんのか!？」

「嘘だろ!？」

「で、でも、ムツツリーニもこんなこと出来ないよね？あ、双子だから光正もできないか」

あ、この野郎。オレまで巻き込みやがった。

「……………そんなことはない」

「そ、そうなの？」

「……………やってみせる」

「それじゃ、俺↓光正↓ムツツリーニの順で行くぞ。……古今東西、

【A】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子） ↓ 雄二の番

「【Almond】」

パンパン（手拍子） ↓ オレの番

「【AAA】」

「ちよつと待つて三人とも」

兄さんが待ったをかける。どうしたんだろう？

「どうした明久？」

「今の光正の英単語はどうかと思うんだ」

「ん？」

「だって、Aを三つ並べただけじゃないか。本当に英単語なの?」

あれ? 兄さん知らないんだ。まあ、知らなくても無理はないけど。

【American Automobile Association On】の略。『アメリカ自動車協会』のことだよ

「……そうなの?」

「……………光正の言ってる事は本当」

「じゃあ、続行するぞ。ムツツリーニからでいいな」

パンパン (手拍子) ↓ ムツツリーニの番

「……………【AV】」

英単語か? ……あ、英単語だったね。

「はい待つんだ三人とも」

「今度は何だ? 明久」

「今のムツツリーニの英単語はどうかと思うんだ」

「きちんとAから始まっていたらどろ?」

「全く……兄さん知らないの? 【AV】の意味」

「そ、それは……その……ちよつと大人向けの……」

うちの兄さんは何を言ってるんだらうか?

「はあ? 【Authorized Version】の略で
『きんていやくせいしよ欽定訳聖書』のことだろ? なあ。ムツツリーニ」

「(コクコク) ……俺はそれが言いたかった」

「絶対嘘だあ!」

「さて、光正のおかげで問題がないことも分かったし続きをやるぞ」

パンパン (手拍子) ↓ 雄二の番

【Agent】

パンパン (手拍子) ↓ オレの番

【Akinesia】

「……………今、明久って言わなかった?」

「地味に違ってたぞ?」

パンパン (手拍子) ↓ ムツツリーニの番

「……………【Akihisa】」

「待つんだ三人とも。今度こそ明久って言ったよね」

確かにそう聞こえたな。

「いつの間に僕の名前は英単語になったのかな？」

「……………【名詞】バカの意。または相応の人物の総称。【-ful】で形容詞」

「類義語。『foolish』『idiot』。対義語。『smart』

『clever』『kousei』

「何い!? そうやってまるで本当に辞書に載るっているような説明はやめてよ! 後、ちゃっかり自分の名前を入れるな!」

問題あつただろうか?

「例文: He is so Akihisafu! (彼はこの上なく愚かな人物だ)」

ふむ。最近兄さんをバカにする方法がどんどん高度になっている気がする。

「とにかく、固有名詞や略語は反則だからね!」

「あー、わかったわかった。んじゃ、続きいくぞ」

パンパン (手拍子) ↓ 雄二の番

【Arrival】

パンパン (手拍子) ↓ オレの番

【Arriviste】

パンパン (手拍子) ↓ ムツツリーニの番

「……………【Amen】……………ボ」

「ねえ、今小さい声で『ボ』って言ったよね!? 今のは明らかに『アメンボ』だよね!」

そんな事実の確認されていない。

パンパン (手拍子) ↓ 雄二の番

【Action】

パンパン (手拍子) ↓ オレの番

【Active】

パンパン (手拍子) ↓ ムツツリーニの番

「……………【A—☆●◆▽☒€?】」

「ごまかした! 今思いつかなかったから早口でそれっぽく言っつてごま

かしたよ！」

「ふう……。決着がつかないな」

「三人の力が拮抗している。もう充分じゃないか？」

「……………俺たちはよくやった」

「くそおおっ！全然納得いかないっ！どうしてムツツリーニへの判定はそこまで甘いのか！」

「兄さん。そんな大声で騒ぐと——」

ガラッ

「廊下で騒いでるのは誰ですか！今は自習中のはずですよ！」

「うわっ！布施先生だ！雄二、光正どうする……………っていない!?いつの間にか!」

「吉井君、そこを動かないように！」

「やっぱりこうなるのかっ！」

「こらっ！待ちなさい！」

兄さんが布施先生を引き連れ逃走する。

「……………今のうちだ行くぞ」

「……………(こくり)」

「はあっ、はあっ、はあっ……。なんとか、撒いた、かな……………」

「明久、ご苦労だったな」

「無事大役を果たしてくれたんだね」

息を切らしているようだが、布施教諭を撒くのにそんなに体力使うか？

「苦労、したよ、途中から、大島先生が、出てきて……………」

あ、察し。

「そうか。おかげでD・Eクラスの協力を取りつけることが出来た。良くやってくれた」

「次はBクラスとCクラスだね。ファイト兄さん」

「ああ、もう一度頼んだぞ明久」

「そう簡単に引き受けるわけにはいかないよ」

……ツチ。考えるだけの頭があつたか。

「さっきの勝負も納得がいつてないし、もう一度勝負だ！」

あ、これオチが見えたぞ。

「別にいいが、時間の無駄だと思うぞ？」

「ふふつ。そうかな？ 僕をさっきまでの僕だと思わない方がいいよ？」

な、何なんだこの自信はーオレたちに勝つ秘策が有ると言うのかー。

「それじゃ……吉井明久から始まるっ」（兄さんのコール）

「二「イエーツ！」」（オレと雄二と秀吉とムツツリーニの合いの手）

「古今東西っ」

「二「イエーツ！」」

「【O】から始まる単語っ」

パンパン（手拍子） ↓ 兄さんの番

「A u g u s t
オーガスト！」

無事交渉も終わり、何事もなかったかのように戻ってきた自習室。

「光正？ 何処行っていたんですか？」

「トイ——」

「嘘ですね」

「……バレるの早くね?というか言い切つてないんですが。」

「散歩に——」

「正直に言つてください」

「おかしいな?何ですぐにバレるんだらう?」

「ま、まさか紫乃!彼氏の言うことが信じられないと言うの!?!」

「はい。微塵も」

「これはこれで酷い。あまりの信用のされていなさにあのオレでも涙が出そうだ。」

「まあ、いいです。どうせ、戦力増強のために他クラスの男子と交渉していたのでしようから」

「何故わかった?」

「ふふん。光正の事ならお見通しなのです」

「はあ。まあ、当たっていたからよしとしようか」

「これで外していたら可哀想な子になっていただらう。」

「光正。私、思ったのです」

「何を?」

「属性を追加する必要があると」

「いや、ないだらう。」

「ここ最近。他の人に比べて影が薄い気がします」

「いや、全く。」

「そこで私は『ヤンデレ』を目指してみます」

「その方面に走つちやダメだ。さすがにそれはダメだと思う」

「というわけで……コホン。光正。私以外とお話するの……そんなに楽しい?」

「ひいっ!目怖っ!それはヤンデレじゃない!ただの病んでる人だ!」

「ねえ、光正。私と過ごす時間より……そんなことの方が大切?」

「だからそれはただの病んでる人!デレの部分がゼロに近い!」

すると、スイッチを切ったように、目の色が元に戻る。ああ……怖かった。……夢に出てきそう。

「あれ？うーん。何が足りなかったんだろう？」

「愛情だよ！」

「うーん。……あ、血の付いた包丁かな」

「待って紫乃！これ以上おかしな路線に行かないで！」

「え？光正って、ヤンデレが好きじゃないの？」

「どこ情報だよ！」

「おかしいな……明久さんと坂本君に、光正はヤンデレを愛してるって聞いたのに……」

「クソ兄貴！赤ゴリラ！テメエらを今からぶっ飛ばしてやる！そこを動くなよ！」

アイツラ、ゼツタイ、コロス。

『わわっ！た、大変だ雄二！光正が暴走してこっちに襲いかかってくる！』

『何だと!?おい明久！お前なんかまたやったのか！』

『何で僕を犯人扱いするのさ！』

『ええい！応戦するぞ！明久スタンガンは持ってるな！』

『もちろん！出力は！』

『最大に決まってんだろ！行くぞっ！』

この後の記憶は少しトんで気付けば、夕食になっていたことを記す。

メツセージと土下座!

そんなこんなで、出撃前ブリーフィング。

「おい、明久。光正のヤツは?」

「喉乾いたつて。大食堂にジュース飲みに行ったよ」

「あの野郎……本当にマイペースだな。まあ、作戦は伝えてあるし、そこで集合だから丁度いいか」

もう雄二も諦めているけど、光正は実は凄いマイペースだ。基本的にあいつは自由人だからなあ。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけに纏まりが無く、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中がしり込みするのも無理はない」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日よりずっと状況が良くなったよ」

「まあそうじゃな。女子側として入浴の為に最大でも半数しか出てこられんじやろうし、教師を抑えることが出来れば何とかなるじやろ」

防衛側は昨日以上の戦力を保有していないはず、今日こそは……行ける!

「でも、ここまで大きな騒ぎにすると女子の入浴自体が中止になったりしないかな?」

「それはないだろ。教師側にもプライドがあるからな。『覗きを阻止出来ないかもしれないので入浴は控えてください』なんて言うと思うか?」

「ああ、そっか」

確かに先生たちとしても意地があるだろう。召喚獣を使った勝負で生徒に防衛戦を抜かれるようなことはあってもならないのだから。「これは憶測だが……教師側はこの事態を好ましく思っている可能性もあるな」

「え? 僕らの覗きを?」

「ああ。あくまでこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だから

な。目的がなんであれ、召喚獣を使って戦闘を行う以上勉強せざるを得ない。女子側も同様だ。防衛の為には召喚獣が不可欠だからな」

確かに、本当にマズイのなら、この部屋にこの入浴時間中鉄人一体を配置すればいいもんね。しかし、先生たちも自信があるからと言って随分と大胆な行動に出たもんだなあ。

「さてムツツリーニ。作戦開始時刻と集合場所は両クラスに通達してきたか？」

「……………問題ない」

作戦開始時刻は二〇一〇時、集合場所は一階にある大食堂。前半組が脱衣を終えて入浴し始めている頃を狙って仕掛ける手筈だ。

「よし。それじゃ、そろそろ出るか」

「そうだね。他の皆が待っているかもしれないし」

僕らが大食堂に向かおうとしたその時。

「吉井兄っ、大変だ！」

突如ドアが開かれ、クラスメイトの須川君が飛び込んできた。

「須川君、どうしたの？作戦開始まではあと少し時間があるはずだけど」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！今は戦力が分断されて各階に散り散りになっている！」

「なんだって!？」

「それに吉井弟が天草に捕まった！」

「何いつ!?またかあいつは！」

まさか向こうに先手を打たれるなんて！

「……………情報が洩れるようなことはない」

断言するムツツリーニ。そうだ。ムツツリーニがそんなハマするわけがない！

「こつちの考えが読まれていた……………」

雄二が悔しげに呟く。

「坂本。吉井弟から最後のメッセージだ」

「拝見する」

須川君から紙を渡される雄二。僕らも見てみるが、そこには走り書

きをした感じの字でこう書かれていた。

『この作戦が読まれるのは裏切り者が居るからだ。』

裏切り者が自覚していない場合がある。貴重な一回を無駄にするようだが、

背に腹はかえられない。今日は引け。絶対に勝てない。なぜなら、今、防衛の一人に最強の』

これ以降は文字が続いていなかった。きつと捕まって途切れてしまったのだろう。

「そういうことかよ……!」

雄二にはこの文面で光正の意図が分かったようだ。

「自覚していない裏切り者は……俺だ。間違いない。俺が考えを読まれている」

「成程のう。霧島翔子じやな。流石、学年代表の名は伊達ではないな」
「よっぽど雄二の覗きが許せないんだね」

なるほどね。だから自覚していない裏切り者か。そりや作戦を考える雄二の思考が完全に読まれていたら失敗するわけだ。というか、常識はずれの雄二の作戦が読めるほど、霧島さんは許せないんだろうなあ。

「……………だが、迷っている時間はない」

「そ、そうだね!雄二どうする!?!光正は引けって言うてるけど」

「どうするもこうするも、こうなっては作戦なんて殆どないようなものだ。悪いがここで貴重な一回を無駄にするわけには行かない!分断された戦力を一旦編成し直す!とにかく出るぞ!」

「了解!」

須川君も含めた僕ら五人は廊下に出た。

「仕方がない。こうなったからには、各自の判断で行動しろ！」

『『おうっ！任せておけっ！』』

総司令である雄二から事実上の撤退宣言が下った。

「だから書いといたのに。今日は手を引いて新たな策を練り直せつて」

そんな様子を女子たちの陰からこっそり眺めるオレ。そして、

「それで諦められたら苦労してないでしょ」

紫乃である。まあ、紫乃のおかげでオレはあいつらの仲間と思われ
ていない。

「というか、オレでも高橋女史があそこまでの怪物とは想定外だった」
「総合科目7000点オーバーはさすがに強すぎるよね……」

そう。最強の教師高橋女史までもが、この防衛線に加わった今、雄
二たちに勝ち目はないだろう。

ましてや……

『……………』(↑土下座)

『……………』(↑土下座)

『……………』(↑土下座)

雄二の降伏宣言に、雄二と兄さん以外の全員が土下座しているよう
ではなおさらだ。

「……………綺麗な土下座だな……………」

「本当にねえ……………」

バカしかない。

「兄の方の吉井君と坂本君は彼らのような真似はしないのですね。指
揮官としての矜持というものですか？」

「違うな。高橋女史。俺たちには分かっているのさ」

「ええ。雄二の言う通りです。僕らにはわかっているんです。そんな
ことをする必要がないということが」

オレにも分かるけどさ……………」

「まさか、助けが来るとも……………」

兄さんたちの恐ろしいぐらいの余裕に高橋女史は警戒する。

「助け？違うな。アンタは何も分かっちゃいない」

「そうですね。僕らが言っているのはそう言うことじゃない」

そう。兄さんたちが土下座しないのは、決してプライドのためでも援軍を期待しているためでもない――

「坂本君、明久君。覗きは立派な犯罪なんですよ？」

「そういうえばアキには昼間のお礼もしないとね」

「……雄二。浮気は許さないと言った」

――正解は、土下座程度であの三人が許すわけがないからだ。

「ところで光正」

「何、紫乃？」

兄さんたちの行く末を見守ってから個室風呂に来たオレと紫乃。

風呂に入ろうと服を脱いでいた時に声がかかる。

「渡したメッセージ。なんであんなの書いていたの？」

「ああ。まあ、理由としてはそろそろオレが裏切り者というヒントぐらい与えても面白くなるかと」

「ふーん」

答えに満足したのか興味ないのか服を全部脱ぎ律儀に畳んでいる。

「ところで、首の絆創膏はどうしたのですか？」

すると、急にニヤけながら聞いてくる紫乃。

「誰かさんが朝からキスマーク付けただろ？隠すためだよ」

Fクラスの男連中にばれようものならどんな処刑が待っているのか分からないしな。

「……もしかして、迷惑でした……？」

「別に（ぷいっ）」

「なるほど……。これが俗に言うツンデレですか。ふむ。やはり私はヤンデレになるべき……」

「ならなくていい」

「そうですか？」

「そうだ」

紫乃がヤンデレになった日には、オレがいろんな意味で死にそう
だ。

まあ、絶対に嫌いになることはないが。

撮影会

紫乃との風呂も終え、ちよつと散歩をし部屋に戻ってきた。鉄人がオレたちの部屋を嚴重マークしているせいで中々自分の部屋に入らなかったが、一瞬の隙を見つけて入ることが出来た。

「ゴふっ」

普通に四人とも部屋にいたのだが、携帯を見て吐血したかのような感じの兄さんがいた。

「バカあつ！僕のバカあつ！ある意味自分の才能にビックリだよ畜生！」

「兄さんは前からバカでしょ？」

「光正帰ってきたか……で？どうした明久？さつき何か悲鳴が聞こえたが」

「色々大変なことになっちゃったんだ！二人とも今は僕の邪魔をしないで——」

「大変なこと？それは——つとと」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（雄二が兄さんを巻き込んで倒れる音）

バキツ（雄二が兄さんの携帯電話を踏み潰す音）

「明久。大変なこととは何だ？」

「たった今キサマが作った状況だ」

「あくあ。兄さんの携帯が粉々だよ」

兄さんの携帯は、雄二に踏まれて無残な状態になっていた。こんな状態じゃ誰かにメールや電話をしようとしても出来ないな。

「ん？これはお前の携帯電話か。すまん。今度修理して返す」

絶対すまんと思つてないだろ。というか分かつてやっただろ。

「それと光正、今まで何処にいたんだ？」

「紫乃が関わっているって言ったらわかる？」

「……すまん。捕まってたんだよな」

謝る雄二。しかし、雄二の想像しているような事は起きてないのでご安心を。

「いや、今はそんなことどうでもいいから、とりあえず雄二の携帯電話を貸して！」

「あ、ああ。別に構わんが」

雄二が持っている携帯を放り投げるかのように兄さんに渡すと、すぐ調べるかのように何かを調べる兄さん。一応オレも後ろから見てみるが……

坂本雄二のアドレス帳登録……一件 ↓ 『霧島翔子』

「雄二。アドレス帳には霧島さんしかないよ？」

「む。翔子のヤツ、また勝手に俺の携帯を弄りやがったか。機械オチのクセに……。やれやれ。家でアドレス帳を入力し直さないとならないな」

「……………」

アドレスが霧島さんしかない事に兄さんは無言になりながら深刻な顔をしていた。この男は何をやらかしたんだ？

「明久。そんなに深刻そうな顔をしてどうしたんだ？まるで間違えて島田に告白とも取れるようなメールを送ってしまったて弁明しようとしたところで俺に携帯電話を壊されてなにもできなくなってしまうた、なんて顔をしているぞ？」

「なるほど雄二。説明ありがと」

「あははっ。何を言っているのさ雄二。光正も、そんなことあるわけないじゃないか」

「そうだよな。そんなことになっていたら流石に携帯電話を壊した俺が極悪人みたいだもんな」

「前から極悪人でしょ」

「まったくだよ。あはははははっ」

兄さんが笑いながら雄二の携帯を使って何やらメールで何やら文章を打って送信していた。

一応送った文面を見てみると……

【To:霧島翔子 From:坂本雄二

もう一度きちんとプロポーズをしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋

まで来てくれ」

実に愉快だ。

「うん？ 明久、俺の携帯で誰に何を送信し——ゴふっ。ななななんてことをしてくれるんだキサマー！」

「黙れ！キサマも僕と同じように色々なものを失え！どりやああ——っ！」

「おわあっ！俺の携帯をお茶の中に突っ込みやがったな!?これじゃ壊れて弁明もできないだろうがこのクス野郎！」

「そう！その気持ち！それが今僕が雄二に抱いている気持ちだよ！」

「何をわけのわからんことを！と、とにかく今は翔子の部屋に行って誤解を解いてこないと大変なことに——」

「あ、今出たら鉄人先生が……」

ガラツ（雄二が廊下へと続くドアを開ける音）

ドゴツ（廊下にいた西村教諭が雄二に拳を叩き込む音）

グシャベキグチャツ（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな」

「了解です」

ピクリとも動かない雄二の代わりに兄さんが返事をする。なるほど。見つからなくてよかった。

「ちなみに秀吉とムツツリーニはまだ携帯電話買ってないの？」

「うむ。特に必要ないからの」

「……………いざというとき鳴り出すと困る」

「はあ、じゃあ光正貸して」

「ほーい」

オレは兄さんに自分の携帯を投げ渡す。

「さっきまで何か操作していたみたいけど……………おい光正」

「何だい兄さん」

「何で美波の分だけ消されてるんだい？」

「あれれえ〜おつかしいなあ〜？」

「このクソ弟め！」

すると、兄さんはオレの携帯で何か文章を打とうとする。いや、正確には打っていた。

グサツ（花瓶の破片が壁に刺さる音）

「クソ兄貴。ステイだ」

「何故僕が光正に従わないと……」

「余計な動きを見せてみる。次は目だ」

「くっ……お前には兄弟の情が無いのか！」

「ない」

「即答だ?!」

「携帯をそつと床に置いて、手を頭の上に」

「……ツチ」

「そのまま下がって……」

無事自分の携帯を回収する。そこには……

【To：天草紫乃 From：吉井光正】

きちんとプロポーズをしたい。今夜浴衣を着てオレの部屋ま

危ない危ない。というか、ほとんど雄二のやつのパクリじゃねえ

か。取りあえず削除……つと。

「ところで、おまら。いざいざも良いがこの部屋は片付けないとまず

いのではないかの？これでは布団も敷けぬぞ」

「そうだね。とりあえず片付けて秀吉の撮影を始めようか」

「撮影？」

「うん」

「もしかして、秀吉の浴衣姿の写真でも撮ってA〜Cクラスの男子の劣情でも煽るのか」

そして、覗きの仲間に引きずり込むと。

「良くわかったね。一応姫路さんと美波にも被写体になってもらうつもりだったんだけど……」

ああ、兄さんが可笑しなメールを送ったから来ないかもしれないのか。

「んじゃ、なおさら掃除しないとな」

倒れたテーブルを起こし、床に散らばった物を拾って、ゴミは一ヶ所に集める。

えーっと、ムツツリーニの荷物は右(ドサツ)、ガラスの破片は左(ポイツ)、オレの荷物は右(ドサツ)

「兄さん^{雄二}コレは？」

「ん？気絶してるしゴミでしょ」

「それもそうか」

というわけで気絶している雄二は左(ポイツ——ザク)

「ぐああつ！せ、背中にガラスの破片がつ！」

「あ、雄二。起きたなら手伝ってよ」

「そうだよ。雄二のせいでこうなったんだよ？」

「お前らには俺の背中中の傷が見えないのか!？」

「大丈夫。致命傷ではなさそうだから」

「どうせ、雄二だしツバつけりや治るんでしょ？」

「そう思うならお前らにも、こうだっ！」

「ああつ！僕の着替えと荷物がガラスの破片まみれに!？」

「ふうー。兄さんの荷物を盾に生き延びたよー」

「仕方ない。明久だけでもこの痛みを味わえ！」

「それなら浴衣を着るからいいさ！秀吉とペアルックだしね！」

「……………羨ましい」

「お主ら……、ワシの性別を完全に忘れておらんか？」

「そういうしている内に時間が過ぎ……………」

コンコン

控えめなノックの音が扉から聞こえてきた。

「あ、いらっしやい、姫路さん。廊下で鉄人に絡まれなかった？」

「西村先生はいましたけど、お菓子をあげたら通してくれました」

「そう言って手作りと思わしきお菓子を見せる姫路さん。」

「さらば鉄人。安らかに眠れ……………」

オレたちは彼の冥福を心から祈ろう。

「ところで、明久君はどうして浴衣姿なんですか？」

「これ？部屋にあったのを着てみたんだ。折角あるならと思ってさ。」

似合うかな?」

「はい。とつても似合ってます!綺麗な肌や細い鎖骨が凄く色っぽくて!」

どうしよう。彼女からは大切なものが消え失せている気がする。

「姫路。よく来てくれた」

「こんばんは坂本君。お邪魔しますね」

「早速だが、プレゼントだ」

雄二が手に持っていた浴衣を姫路さんに渡す。

「浴衣、ですか?ありがとうございます。ところで話して……?」

手渡された浴衣に戸惑っていた姫路さんだった。

「話というか、姫路さんにお問い合わせがあるんだ」

「お願い?」

「うん。実はね、その浴衣を着た姫路さんの写真を撮らせて欲しいんだ」

「え……っ?」

「あく、その、なんて言うか……」

どう説明しようかと悩んでいる兄さん。しかし……

「……その、明久君と一緒になら、いいですよ……」

姫路さんが条件付きで承諾したのであった。

「それくらいお安いご用さ!僕も秀吉も一緒に写るから!」

ねえ兄さん。少しは姫路さんの気持ちも察してあげて?

「まあ、明久君ですから仕方ないですよね……。それじゃ、ちよつと着替えてきます」

そう言つて姫路さんは浴衣を持って着替えに行こうとする。

「姫路さん、ちよつと待って」

「はい?」

しかし、兄さんが呼び止めた。

「実は撮る写真なんだけどき、友達とかに見せてもいいかな?」

「え?浴衣姿をですか?そ、それは少し恥ずかしいです……」

「何を言っているんだ姫路。浴衣姿程度で恥ずかしいと思つていたら明久の存在はどうなる?バカの上に変態なんて、生きていけないほど

「恥ずかしいことじゃないか」

「そうだよ。その上で生活力ゼロで、金を全部趣味に注ぎ、弟に養ってもらってるなんてもう存在するだけで恥ずかしいでしょ」

「放して秀吉っ！雄二と光正の頭をかち割ってやるんだ！」

秀吉が兄さんの腕を掴んで阻止する。

「とは言え、何もタダで頼もうなんてワケじゃない。それなりの礼はさせてもらおう」

雄二がそう告げながらチョイチョイと姫路さんを手招きした。

「なんででしょうか？」

特に警戒した様子もなく姫路さんが歩み寄っていく。

「ムツツリーニ」

「……………何だ」

「兄さんと姫路さんのツーショット。姫路さん用に一枚ぐらい撮って、渡してあげて」

「……………わかった」

本来は不干渉でいってもよかったが……………まあ、これぐらいはいいだろう。

「交渉は成立した。問題ないそうだ」

「はいっ！少しくらいなら浴衣の裾をはだけでもいいですっ！」

何やら姫路さんが奮い立っている。雄二。君は、姫路さんに何を吹き込んだんだい？

「とにかく協力してくれてありがとう。それなら早速準備をお願いできるとっ！」

「はいっ！」

浴衣を抱えて部屋のトイレに入る姫路さん。

「……………（キュッキュッ）」

ムツツリーニは一心不乱にカメラのレンズを磨いている。

その後、浴衣を着替え終わった姫路さんがトイレから出ると撮影会が始まったのであった。

三日目の終わりは……夜襲!?

ムツツリー二のおかげで写真を収めることに成功したオレたち。兄さんや雄二は昨夜に西村教諭のシゴキに遭っていた所為か、オレたちの部屋は電気を消してすぐに寝息が聞こえ始めた。まあ、オレは現状そんな呑気なこと言えるわけもなく……

「光正……」

取りあえず、目の前で馬乗りになっている紫乃が何を考えているのかを知らなければいけない。

「紫乃……何でかオレの両手両足が動かないのだが?」

後は自身の手足が動かない件についてもだ。

「フフフ……光正。私思うのです……」

暗闇で不敵に笑う紫乃。その手には何か持つてるように見える。そう何か……

「……っ!?おい紫乃!その手に持つてるのはなんだ!」

「絶対に浮気させない方法……二つあるってことに」

こちらの話を聞かずに話を進める紫乃。対してこちらは身体がまるで金縛りにあったように動けない。

「一つは光正を洗脳、服従させること」

「……おいおいこいつなんて言った……?」

「もう一つはですね。如何なる女性をも、光正に会わせないこと」

「二つ目はともかく二つ目は無理だろ。外にできれば女性はいらんだし」

「フフフ。そうですよね」

そう。確率的に二人に一人は女性。だから街に行けば、会う人の二人に一人は女性だろう。

「私。光正が如何なる姿でも愛せる自信があるんです……」

「……おいおいちよつと待てよ……!」

「だからですね……」

右肩に添えられる紫乃が持っていたもの。

「手足全部切り落としますね♪」

それは、チエーンソーだ。

「おいおい、どういうつもりだ……」

「フッフ、賢い光正なら分かりますよね？」

なるほど。外に出さなければいいというわけか……つてちよつと待って！

そんな思いも虚しく動き始めたチエーンソー。右肩と触れるまで後5cm。

「ちよつと痛いですが……我慢して下さいね♪」

後、4……………3……………2……………1……………

「……………はあ……………夢……………か……………」

目が覚めると見覚えのある天井だった。少なくともここ最近よく見ている天井だ。

何か酷い悪夢だったな。細かく覚えてないが、オレの両手両足が何故かなくなつて、首に首輪がついて、リードという名の鎖がついていた記憶がある。そして、そんなオレの上にチエーンソーを持って血まみれで跨り、恍惚の表情を浮かべる紫乃。ふむ。どうしてそんな風に

なったのか分からないが……

「ははっ。ただの夢……だよな」

全く……紫乃がヤンデレを指摘すなんておかしいことを言うからこんな夢を見てしまったんだ。

とりあえず、身体を動かそうと試みる………が。

「あ、あれ？う、動かない……？」

おいおい！確かに夢でも動かなかったけどさ！ま、まさか……金縛り!?つまり、あれは正夢だったのか!?ということは、オレはこれから……！

「………すう……」

すると、オレの胸の上あたりで寝息が聞こえる。あれ？よく見ると布団が盛り上がってる？

「……何だ……ただの紫乃か。よかった……」

見てみると紫乃がオレを抱き枕のように抱きしめる形で寝ていた。あ、可愛い……じゃなくて、こいつ本当に襲いに来たのか？取りあえずチェンソーが無いことから、夢の内容が現実になることはなさそうだ。ふと、周りを見てみると霧島さんと島田さんも乗り込んでいるみたいだし……うん。だいたい分かったよ。

「寝たふりはやめたら？」

「………何で分かったの？」

「襲いにきといて襲う前に紫乃が寝るわけないじゃん」

「……フフフ。ばれたら仕方ないです。こうなったら……」

何か行動を見せようとする紫乃。そんな紫乃に対しオレは……

「ほら、一緒に寝たいんでしょ？」

少し布団の中にスペースを作る。さすがに、オレの上にならずと乗っけてもらっても困る……何故か身震いがするから。

「え……？」

「ほら、寝るよ？明日も早いんだし」

「あ、うん」

こうして、オレたちは抱き合って眠りにつこうと――

「あれ!?やたらと単純!?!」

——したタイミングで奇声を上げる兄さん。

「アキツ！邪魔者が起きちやうでしよ!？」

「むぐうっ!？」

続く島田さんの声。うん。今ので起きたわ。

「はっ！私は本来の目的を忘れるところでした!」

「……本来の目的?」

そして、一緒に寝ようとした紫乃が、

「そうなのです！私は光正を襲いに来たのです!」

あまりにも予想通りの事を言ってくる。

「はあ……で?」

「反応薄っ!」

ちなみにこの一連の会話は小声なため兄さんたち他の人には聞こえていない。

「ふくん。まあ、紫乃がしたいことすれば?」

「フッフ。その余裕後悔すること………あれ?動かないんですけど。あのー、光正さん。名残り惜しいのですが、動けないんで少し抱き着くのやめてもらえませんか?」

「い・や・だ」

「ま、まさかこの男！起きてからここまで私を誘導していたの!？」

うん。大正解。チエーンソー持ってなければオレの勝ちだ。

「そういうえば、紫乃つくすぐりにも弱いけど耳とかも弱そうだね(はむっ)」

「ひゃあああっ!？」

「ほら?声出すとばれちやうよ?。(ペロンツ)」

「ひあっ!？た、立場が逆……」

そう。紫乃にしてみれば襲おうとしたのに襲われてるもんなあ……立場逆転形勢逆転?普通に考えたら情けないことだろうなあと思いつながらオレは手を紫乃の服の中に入れて、耳攻めと並行してくすぐりを開始する。

「……美波。せめて苦しまないように頼むよ……」

「……アンタってどういう思考回路しているの……?」

一方で兄さんは島田さんに暗殺か闇討ちに来たと結論付けて楽に死なせてくれと懇願していた。

「……そ、その、ウチだって勇気を出してここまで来たんだよ……?だから、その、ああいうことはメールじゃなくて、きちんとした言葉で……」

「ほえ?」

島田さんの発言に素っ頓狂な返事をする兄さん。そして、兄さんは何か使えるものがないかと周囲を見てくる。

ふむ。兄さんの視点で見て今、兄さんの周囲にあるものは――

- ・可愛らしい秀吉の寝顔
- ・カメラを構えているムツツリーニ
- ・お互いに抱き着いている双子の弟と紫乃
- ・浴衣姿で雄二の布団に侵入しようとしている霧島さん

「……………」

あまりの事に絶句する兄さん。そしてもう一度よく観察している。

- ・あどけない秀吉の寝顔
- ・静かにシャツターを切るムツツリーニ
- ・DSモード発動中の鬼畜な弟と涙目で必死に声を押し殺す紫乃
- ・慌てふためく雄二をよそに浴衣の帯を緩めようとする霧島さん

「困った……。今の僕に役立ちそうなものがない……。後、光正。あまり天草さんを虐めるのは良くないと思うよ?いくら彼女だからと……」

「虐めてないよ?弄ってるだけ(ふうー)」

「んんっ!?!」

必死に声を押し殺して可愛いなあ……もっと弄りたくなる。

「その前にお前ら!俺を助ける気はないのかっ!?!」
ないな。

「いいぞ霧島さんもつとやれー（こちよこちよ）」

「煽んじやねえよ！これ以上状況を厄介にすんなよ！」

え？そっちの方が面白そうじゃん。

「ちよ、ちよつと！木下以外は全員起きてるの!?早く言いなさいよねっ！」

そして、兄さんと至近距離にいた島田さんが慌てて距離をとった。今更気付いても遅いと思う。

「そ、そっか。周りが起きてたんだ……。だからアキは知らない振りをしていたのね……」

後、それは違うと思う。

バアンツ！

すると、部屋のドアが開く音が聞こえた。

「お姉さま無事ですか!?美春が助けに来ましたよ！」

何か来た。

「み、美春!?どうしてアンタがここにくるのよ！」
全くだ。

「さつきお姉さまのお布団に入ったら誰もいなかったから、もしやと思ったたら……。！やっぱりここに探しに来て正解です！」

な、なんだこの人……。『布団に入ったら誰もいない』から探しに行こうと考えたとは……。！切っ掛けからして普通じゃないな。やはり、この逝かれた奴が脅迫犯か。

「あ、危なかったわ……。昨日で懲りたと思って完全に油断していたもの……」

え？昨日も来たの？

「お姉さま！男の部屋に来るなんて不潔です！おとなしく美春と一緒に裸で寝ましょう！いえ、勿論イロイロするので寝かせませんが……」

「やめるんだ清水さん！それ以上の会話はムツツリーニの命に関わる！」

「……………!!（ボタボタボタボタ）」

「……………雄二、とにかく続き」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「まだまだこれからだよ？（ペロペロツ）」

「そ、そこはダメええつ……」

「な、なんじゃ!?目が覚めたら女子が四名もおる上に光正が攻めて雄二は押し倒されてムツツリー二が布団を血で染めておるぞ!？」

「ああああつ！皆してそんなに騒いじゃダメだよつ！このままじゃ、鉄人に気付かれて——」

『なにごとだつ！今吉井兄の声が聞こえたぞつ！』

階下から聞こえてくる鉄人の声。

「「「「「「……」」」」」」」

「え？なに？なんで全員が『吉井兄が叫んだせいで見つかったじゃないか』みたいな目で僕を見ているの？」

「くそつ！明久が余計な事をした所為で面倒なことになった！とにかくお前らは見つからないようにここから逃げろ！」

「何だか納得いかない物言いだけど雄二の言うとおりだ！とりあえずここは僕らに任せて！」

「任せたぞ兄さん！オレは寝る！」

「お前も手伝うんだ光正！」

「……はあ。分かったよ。霧島さん。紫乃運ぶの任せた」

「……………分かった」

全く……こうなるって分かってたらもつと手を抜いたのになあ。

「じゃあ、紫乃。行ってくるね。んっ」

「んっ………いって、らっしやい」

完全にお疲れの様子だ。まあ、オレがやったのだけども。

「で、でも……」

「お姉さま、躊躇っている時間はありません！とにかく服を脱いで美春の部屋に行きましょう！」

「美春は黙ってなさい！」

『吉井兄に坂本お！お前らだとは分かっているんだ！そこを動くなよ！』

再びドスの聞いた声。なるほど……

「鉄人の声だ！もうかなり近いよ！」

「ねえ、オレ名前上がってなかったしここに残っていい？」

「時間がない！こうなったら俺と光正が『必殺アキちゃん爆弾』で鉄人の注意を引き付けるから、その間に四人は部屋を出ろ！」

オレは参加確定なのね。はいはい。分かっていますよ。

「わかったわ！」

「美波！そこはわかっちゃダメだ！」

もう、何でもいいだろ。

「まず僕と雄二と光正が飛び出して鉄人の注意を引き付ける。その隙に四人はドアから出て一気に部屋まで走るんだ。いいね？」

「うん。……ごめんね。ウチらの為に」

「……ありがとう」

「頑張……って」

「お姉さま、愛しています」

一人返答がおかしいぞ。

「雄二、光正、行くよっ！」

「仕方ない、付き合ってやる！」

「ええ……眠いの……」

兄さんはドアの取っ手に手をかけ、一気に押し開ける。

バン！ガストツ！

「ふぬおおっ!?よ、吉井兄、キサマあああ！」

「げっ!?鉄人が扉で頭を痛打したみたいなんだけど!？」

「それはファインプレイだ明久！」

「さすが兄さん！計算通りだね！」

ふっ。これで、てっつんの殺気は全て兄さんの元へ行くはず……。

「逃げるぞ光正！明久！」

「へーい」

「了か——」

と、ここで計算違いが起きる。

鉄人が出遅れたせいで、部屋の中を覗き込もうとしている。クツ……この手だけは使いたくなかったが致し方なし！『必殺アキちゃん

爆弾』で鉄人にトドメを……！」

「鉄人！僕はこつちだよ！」

オレたちの手を振りほだき、浴衣の帯に手をかけながら走る変態……もとい兄さん。鉄人は兄さんの声に反応し、こちらを向いた。どうやら、中の人たちは見つかつてはいない様子だ。

「貴様は西村先生と呼べと何度言えば——」

「どりゃあぁーっ！」

すかさずその顔に兄さんは脱いだ浴衣を巻き付ける。

「こ、こらっ！何を」

「おまけっ！」

そしてその上から帯を巻き付ける。

「今のうちだ！」

すかさず兄さんは四人に指示を出す。四人は頷き廊下を疾走する。

「吉井兄。貴様はつくづく俺の指導を受けたいようだな……！」

兄さんの鉄拳指導が確定した。

「明久。頑張れよ」

「ファイト。兄さん」

オレと雄二は兄さんに向かって親指を立てる。ナイス犠牲。

「西村先生すいません！坂本雄二がこつそり持ち込んだ酒を隠す為に注意を逸らせと行ってきたものですから！」

「キサマなんてこと言ってくれるんだ!？」

雄二も犠牲になったか……まあ、しようがないよねえ

「後、吉井光正も、連れ込んだ女たちを見つからないようにしろと僕に命令してきましたので！」

「デメエこの場でなんてデタラメな嘘を!？」

紫乃に聞かれてたらどうするんだよ！折檻なんて冗談じゃねえぞ!?!あ、でも、疲れているはずだからいいか。

というか兄さんが笑顔でこつちに親指を立ててくる。オレも答えるようにして、笑顔で親指を下に向ける。巻き込みやがってこのクソ野郎!

「吉井双子……。坂本……。貴様ら……。覚悟は出来てるんだろう

なああああつー！」

「出来ていませんっ！」」

鉄人が浴衣を剥がす前に走り出すオレたち。畜生何でこんな目に！

「どうする二人とも！何とか鉄人を撒かないと！」

「どうするも何も、普通に走っていたら逃げ切れないのは目に見えてるだろうがー！」

「ですよねえ！向こうは化け物だし。やはりここは『アキちゃん爆弾』を……！」

「嫌だよ！雄二、もっと良い方法はないの!？」

「ある！鉄人が入ってこれない場所に逃げ込む！」

鉄人が入ってこれない場所？それって……女子部屋か！

「雄二！兄さん！……先に行け」

「光正!？」

「オレが時間を稼ぐ！お前らだけでも生き延びてくれ！」

オレは足を止め、迫り来る怪物と相對する。

「そんな……！」

「振り返るな明久！光正の犠牲を無駄にするんじゃないやねえ！」

「くっ……すまない光正！」

……すまないと思うならオレを最初から巻き込むな。

「吉井弟……！貴様どういうつもりだ！」

「未来を考えたらくっちの方がいいと思ひましてね……！」

そう言いながら蹴りを放つ。ここで、オレが女子部屋に侵入した場合の未来を考えてみよう。

← 女子部屋に侵入する

← 鉄人を撒くのに成功

← 翌日紫乃にこの一件がばれる

← 夢の内容が現実になる

←

BADEND

BADEND直行だ。というか、女子部屋に入って巨乳がいた時点でオレは終了な気がする。

「くっ……ガードされたか!」

「いい蹴りだ。だが……!」

そのまま足を持たれて……

「相手が悪かったな」

連れてかれた。抵抗しようにも片足を持たれているので上手く出
来ない。

「吉井弟。お前は覗きだけは参加していなかったな。ということは、
合宿での補習は初めてか」

「そうなりますね」

「初回大サービスだ。みっちり朝まで補習をしてやる」

「いや、結構です」

「まあ、拒否権は無いんだが」

「横暴だ!」

その後パンツ一丁の兄さんが雄二のズボンを無理矢理脱がせてい
る光景を目撃した。思わず手元の携帯でパシャッと写真を撮ってし
まったオレを誰も咎められないと思う。

そして、オレたち三人は鉄人と熱い夜を過ごすのであった……。

睡眠不足の四日目

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強することで良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰うことができたので、今後は更に頑張っていきたいと思います。夜はいつものように騒ぎがありました。これはこれで私たちの学校らしいと思います。ある人たちから内緒で素敵な写真も貰えて大満足です！』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので伸び悩んでいる科目があったということには驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはAクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験では是非とも頑張ってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないよう気をつけて下さい。

天草紫乃のまとめ

『普段とは違う環境での勉強や、レベルの高い仲間たちとの勉強はとても私にとってよい刺激となったと思う。この合宿中に私は成長することが出来た。今ではそう思っています。でも、この合宿全体を通して光正との交流が予想以上に少なかったのが心残りです。ですが、彼に勝っていない部分が多く見つけたので今後、彼に一方的にやられないように精進したいです！』

教師のコメント

天草さんにとって、この合宿が有意義なものになったようで良かったです。この成長を今後の生活で生かせると先生たちも嬉しく感じます。恋人である弟の方の吉井君とこれからも勉強を教え合ったり

して、高めていけると尚良いと思いますよ。何事にも努力は大切です。誰かに負けたくないという強い意志を持ち、努力をすればその努力は報われると先生は思いますよ。

島田美波のまとめ

『三日目の夜のこと忘れられない。ウチはどうしたいんだろう。こんなことは誰にも相談できないし、アイツとはあれ以来話ができてないし……。瑞希の気持ちを知ってるのに、これって裏切りになっちゃうのかな……。？けど。ウチのは去年からの気持ちだから、こっちの方が先で……。ああもう！どうしていいのかわかんない！』

教師のコメント

一体何があつたのでしょうか？ 友達にも相談できないというのは尋常ではありませんね。良かったら先生に話してみてください。一応あなた方よりも長く生きてるので少しは力になれるはずですが、気持ちと書いてあるということは恋愛の話でしょうか？

それなら先生から言えることは一つです。自分が後から思い出して後悔することのないように行動するのが一番です。色々悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ。

吉井明久の日記

『あまりに多くのトラブルがあつて驚いた。初日はいきなり意識を失って宿泊所に運ばれたので記憶がない。その後は覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの見る目について悩まされた。勉強についても、女子風呂を覗く為に頑張ろうと思っただけでも今のやり方でいいか不安が残るし、色々と考えさせられる強化合宿になったと思う。』

教師のコメント

そうですね。

吉井光正のまとめ

『特に書く気はない』

教師のコメント

何か書きましょう。

四日目の朝。オレたちは食堂で朝食を摂っていた。

「ふぁ……あふ……」

「さすがに眠いぞ……」

「スピー……はっ」

もっともオレたち三人は睡魔と戦っているが。(ただし、オレは半分負けている)

眠いのも当然だ。昨夜は鉄人に朝まで教育について熱く(拳で)語られていたのだから。兄さんと雄二は三日連続で辛いけどオレも合宿で初めて鉄人に捕まって語られたのでキツイ。

「お主ら、災難じゃったのう……」

災難といえば災難だ。おそらく、兄さんがあそこでオレを狩りださなければこうはならなかった。

「災難と言えば災難だったかも——ふわあああ……」

「スピー……はっ」

「光正。食べるか寝るかどっちかにふわあああ……」

ダメだ。全然頭が働かない。

「弱ったのう。お主らがそんな様子では、今夜はとても……」

「別に全く寝てないわけじゃないから。気合さえ入れれば目が覚めると思うけど——ふわあ……」

「スピー……はっ」

ダメだ。一口食べるごとに意識を持っていかれる。

「俺もダメだ……。全然気合が入ら——ふわああおっ!？」

「ど、どうしたの雄二!？」

「……ついに……頭が……おかしく……なった……? (カクツ)」

「眠そうにしていた雄二が、何かを見た瞬間。一気に覚醒した。」

「……………効果は抜群」

「あ、ムッツリーニ。おはよう」

「遅……かつ……たね…… (カクツカクツ)」

「兄さんの後ろの出入り口からムッツリーニがやってきた。手に何かを持っているみたいだけど。」

「ムッツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ? えらく興奮しておるように見えるのじゃが?」

「……………魔法の写真」

「ムッツリーニにしては珍しく、誇らしげに胸を張っていた。」

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの?」

「…………… (スツ)」

「手にしている写真をオレたちに手渡してくる。」

「魔法の写真だつて? 何を言っているんだか。僕らももう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合なんか入るわけがふおおおっ!」

「ほう。これはまた……」

「ひいひいひいっ!? な、なんて凶器を見せるんだああああ!」

「オレは咄嗟に席を離れ、即雄二の後ろに回り、頭を抱え隠れる。」

「……………おい明久。光正はどうしたんだ?」

「あーうん。光正の巨乳恐怖症つてね写真とか画像でも発動しちゃうんだ。正確には動画でもだけど。しかも何度見ても慣れないつて言う太刀の悪いヤツ。まあ、その分あまり胸の露出さえなければ直接会うよりは平気らしいんだけど……それでもこんな感じかな」

「(何か可哀想な奴だなあ……)」

「ムッツリーニが見せてきた写真の一枚目は、昨夜撮影した姫路さんと秀吉さんの浴衣姿だった。」

「そんな写真をオレに見せるなああああっ!」

「そんなことより僕、生きていて良かった……!」

「だいたい何でこいつら平気なんだよ。そもそも女子風呂なんて突

撃したら死亡確定だろうが。

「明久。二枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えっと……」

兄さんは渡された写真を捲る。

すると次は浴衣姿で迫る霧島さんの姿とハーフパンツ姿の島田さんのツーショットが出てきたらしい。うん。見なくて正解なヤツだ。「す、凄いつ！これも凄いやムツツリーニ！今僕はキミを心から尊敬している！」

「確かに凄いのう……。うまく明久と雄二が写らんような角度で撮つてあるし、もはやプロの業じゃな」

ムツツリーニって、普通のカメラマンをやればいいと思う。

「して、三枚目は？」

「あ、うん。三枚目は——」

兄さんは更に写真を捲る。すると、そこに写っていたのは……

「……………綺麗に撮れたので印刷してみた」

「放して秀吉！このバカの頭をカチ割ってやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！よく撮れているではないか！」

「雄二。兄さんが暴れるほどのモノが映っていたの？」

「ん？セーラー服姿の明久だな」

あ、コレは平気だわ。ところで、いつ撮ったんだ？

「しかし驚いたぞムツツリーニ。まさかここまで凄い写真を撮るとは」

雄二がムツツリーニを労う。あまり女子に興味を示さない雄二ですらこの反応だから、普通の男子が見たら興奮は間違いないかもしれない。

「これで増援も期待できるといわけじゃな」

「……………これ、他の皆にも見せないとダメかな？」

兄さんは一枚目と二枚目の写真を大事に持って邪な事を考え始めていた。

「明久。俺たちの目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はないぞ」

雄二が厳しい目をしながら兄さんに正論を告げる。

「う……。それはそうだけど……」

それでも未練がましそうに言う兄さん。

「ごめん。確かに間違えていた。この写真は目的の為の手段だし、そんな未練は断ち切る。後でムツツリー二に1グロスほど焼き増ししてもらうだけで我慢するよ」

「1グロスは多すぎだろ」

「未練タラタラじゃな」

「せめて1ダースにしとけよ」

オレたち三人の言葉に兄さんはそっぽを向いていた。

「よし。それじゃ早速——」

雄二がどこからかペンを取り出し、写真の裏に荒々しく何かを書き殴る。

『この写真を全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないよう注意！尚、パクったヤツは坂本雄二の名の下に私刑を執行する』

なるほど。確かにそうやって警告しておかないと兄さんみたいに盗みそうな奴がいるからな。

「おい須川。コレを男子に順番に回してくれ」

近くで食事をしていた須川君に写真を渡す。須川君は疑問符を浮かべながらも受け取って、

「ふおおおおおおお——っ！」

覚醒していた。

「ところで雄二。僕の写真はきちんと抜いておいてくれた？」

「安心しろ。あんなものを流したら士気がガタ落ちだからな。キツチリ抜いておいた」

「そっか。それはよかったよ」

まあ、それを流すと兄さんの女装壁が文月学園の皆に広まってしまふからね。それは御免だ。

「うん？ムツツリー二。お主、他にも写真を持っておったのか？」

秀吉が、ムツツリー二の手にあるもう一枚の写真に目を留めていた。

「どれどれ、何が写っておるのじゃ？」

「あ、僕にも見せてよ」

秀吉と兄さんがムツツリーニから受け取った写真を見る。

「放して秀吉・コイツの脳髓を引きずり出してやるんだ！」

「見ておらん！ワシは何も見ておらんから落ち着くのじゃ！」

そこに写っていたのは、セーラー服姿の兄さん(WITHパンチラ)だった……ねみい。

四日目のA・Fクラス合同の自習室は人が少なかった。Fクラスの49人が連日の覗き騒動で消耗した点数及び今夜に向けて点数補充をしているためだ。Aクラスの女子の何人かも同様にして点数補充に向かっている。そんな中私の愛する光正はと言うと……

「……………すぴー……………むにやむにや」

私の膝を枕に眠っていた。というか、私が寝せてました。昨日の夜の騒動で光正と一緒に囿に向かった理由に私が夜這いを……コホン。襲いに行ったからだと思う。もし、私があの場合に居なければ光正は動いてなかっただろう。そう言えば、昨夜はかなり反撃されたなあ……でも私的には光正とイチャつけたので良かったです！本当はもう一段階先のステージに進みたいのですが……まあ、さすがに合宿では不味いですよね。いろんな意味で。

「ふふっ。寝顔可愛いんだから」

そうなのです。前々から思っていたのですが、光正は普段は凛々しいというか、クールとかどっちかと言うとカッコいい系だと思うのです。ですが、眠っている時の顔は何だか可愛らしいです。こんな反則です！こんなに可愛いから私が襲いたくなるのも致し方なし

です！

「……………」

寝ている彼にキスをします。もちろん、彼の唇にですが。

ああ、思えば清涼祭の時。寝ている彼に告白をしてキスまでしたのですが、実は彼が起きているということがありましたね。懐かしく感じます。

「でも、あそこで光正が起きていなかったら、まだこんな関係にはなれていなかったのですね」

そう思うと起きていてくれて良かった気がします。……欲を言えばもう少しムードが欲しかったですが。後、光正からして欲しかった気も……まあ、いいでしょう。そこは、光正からのプロポーズに期待ですが……この男に期待しても無駄な気が……。そんなことより今は、

「昨日の仕返しですよ光正。ふふっ」

「……………ふああああ……………おはよう紫乃」

「おはようです。光正」

「……………紫乃。何か口の中と周りがべたつく気が……………」

「ふふっ。光正ったらヨダレが垂れてましたよ？拭いてあげましたけど」

「あ、ごめん。紫乃の服とかに付かなかった？」

「大丈夫ですよ。心配しなくても。……………だって大嘘ですから」

「???何か言った？」

「気のせいじゃないですか？」

「それもそっかあ〜」

「さて、勉強でもしましょうか？」
「そうだね」

いざ女子風呂へ！

カチツ カチツ

時計の針の音が聞こえる。同じ音のはずなのに心無しか昨日よりも大きく聞こえる気がした。

「明久。今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやったのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

部屋の隅で目を瞑っていた雄二が兄さんの様子に気がついて声を掛けていた。

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

今日は点数補充の為のテストがあつた為に根回しに行けず、写真を回した結果がどうなっているのかが分からないらしい。

「……………今日こそ借りを返す」

密かに闘志を燃やすムツツリーニ。昼間の補充テストの時には凄いい勢いで問題を解いていたそうだし。

「ふふん。今日はしっかりと拉致されてないよ」

そしてオレは、珍しく作戦会議に参加していた。

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

瞑っていた目を開けた雄二は兄さんの前にやってきて、秀吉とムツツリーニも集まる。

「俺たちがいるのは三階だから、三階・二階・一階・女子風呂前の四カ所を突破しないと目的地には辿りつけない」

部屋の割り振りは三階にE・Fクラス、二階にC・Dクラス、一階にA・Bクラスといった形になっている。オレたちのいる場所は女子風呂から一番遠い。

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えてくれる。二階の敵はDクラスが抑えてくれる手筈になってはいるが……………」

「Dクラスだけだと少々厳しいじゃろうな」

教師側も各クラスの生徒の強さに応じて戦力を配置してる。Cク

ラス抜きでの二階突破は厳しいだろう。

「でも、ここまでできたらやるしかないよ」

「勿論そのつもりだ。それで、二階を突破すると――」

「……………高橋先生」

「そうだ。学年主任の高橋女史が率いる一階教師陣だ。恐らくここには翔子や姫路、工藤愛子もいるだろう」

「なるほど。絶対通る場所に最強の布陣というわけだね」

学年主任に学力上位一桁の女子達。こりや、突破するのは一苦労だ。

「明久とムツツリー二を通す一瞬の隙は俺が作る。だが、高橋女史や翔子たちをそのまま足止めするのは不可能だと思ってくれ」

「じゃが、足止めできねば……………」

「ああ。明久とムツツリー二は前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになる」

なぜだろう。作戦に成功したとしても失敗したとしても現状と変わらないような……………」

「作戦が失敗しても大して現状と変わらん気がするのじゃが……………」

同感だ。

「とにかく、高橋女史は根性でなんとかするしかない。A・Bクラスが協力してくれたら勝機は充分にあるんだが」

「ふむ。Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫じゃろ。きちんと全員が、特に代表格が女に興味を持っておるからの。あの写真が効くはずじゃ」

「あははっ。秀吉の言い方だとAクラスの男子代表格は女の子に興味がないみたいだよ？」

「……………」

兄さんの台詞にオレたちは気まずそうに目を逸らす。

「そこまで行ったらあとはお前たちの仕事だ。わかっているな？」

「……………大島先生を倒す」

「そして僕は鉄人、だね？」

まあ、不確定要素が多いが……

「……………大丈夫。きつとうまくいく」

「うん」

「ああ」

「当然だな」

「じゃな」

この五人が力を合わせれば何でもできる……そんな気がする。

——ピピッ

どこかで電子音が聞こえた。これは八時を告げる時報。戦闘開始の法螺貝だ。

「……………よし。てめえら、気合は入っているか！」

「……おうっ！……」

「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ！男の底力、とくと見せてやろうじゃねえか！」

「……おうっ！……」

「これがラストチャンスだ！俺たちこのメンバーから始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「……当然だっ！……」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣るぞっ！」

「……よっしゃあ——っ!!……」

強化合宿四日目二〇〇〇時。今、覗きを巡る最後の勝負が始まろうとしていた。

作戦は概ね順調とも言えた。Cクラス、Bクラスの男子の皆も手

伝ってくれたこともあつてか僕ら五人は地下へと続く階段の前まで来ることに成功した。しかし、予想以上の壁の堅さにAクラスの男子がいない現状。Bクラスの男子だけでは到底突破できるものでは無かった。そして今……

「明久君。おとなしく降参して下さい」

Bクラス代表の根本君をも一撃で葬り去るような霧島さんと姫路さんの召喚獣と本人がゆつくりと、雄二と僕を追い詰める。

『もうこれ以上は無理だ……。姫路に霧島に高橋先生なんて、勝てるわけがない』

『だいたい、姫路と霧島が入っていないのなら覗く価値がないじゃないか』

残されたBクラス男子の弱音が聞こえてきた。

「諦めちやダメだっ！ここにいないってことは、木下優子さんや美波がお風呂に入っているはず！覗く価値は充分にあるっ！」

そんな僕の鼓舞を見て、秀吉が少し驚いた表情で尋ねる。

「明久。なぜここまで圧倒的に不利な状況にありながら諦めないのじゃ？お主は《観察処分者》じゃ。痛みのフィードバックもある。そこまでして写真を取り戻そうとして、苦しい思いをする必要はないじゃろう？」

その程度では今更お主の評価は変わらぬはずじゃ、と続けて言葉を切った。

秀吉の疑問はもつともだ。でも――

「――秀吉。そうじゃないんだよ」

「そうじゃ、ない？」

秀吉は間違っている。僕の行動原理はその程度のものじゃない。

「確かに最初は写真を取り戻すつもりだった。真犯人を捕まえて、覗きの疑いを晴らすつもりだった。……。でも、こうして仲間が増えて、その仲間たちを失いながらも前に進んで、初めて僕は気がついたんだ」

「明久。お主、何を言って……」

そう僕はようやく気付いたんだ……。たった一つの目的を。貫くべ

き僕の信念を——!

「——たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。正直に言おう。今、僕は——純粹に欲望の為に女子風呂を覗きたいっ!」

「お主はどこまでバカなんじゃ!?!」

もう脅迫なんて関係ない!真犯人なんかどうでもいい!ただ僕はあの写真に写っていた女の子たちのいる理想郷を目指して進むだけなんだ!

「明久君。そこまでして、私じゃなくて美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね……!もう許しません!覗きは、いけないことなんですからねっ!」

姫路さんが召喚獣に突撃の指示を出す。

「世間のルールなんて関係ない!誰にどう思われようと、僕は僕の気持ちに、正直に生きる!」

召喚獣を喚び、姫路さんを迎え撃つ構えをとる。

するとその時、

『よく言った、吉井明久君っ!』

どこかで聞いたことのある声が廊下に響き渡った。

「だ、誰ですかっ!?!」

氣勢を削がれた形になり、召喚獣の動きを止めて声の主を探す姫路さん。

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ち、確かにこの僕が聞き届けた」

「久保君っ!来てくれたんだね!」

「到着が遅れてしまってますまない。踏ん切りがつかず、準備しながらもずっと迷っていたんだが……さっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ」

「決心がついたって、それじゃあ……!」

「ああ。今この時より、Aクラス男子総勢二十四名が吉井明久の覗きに力を貸そう!クラスの皆、聞こえているな?全員召喚を開始して吉井明久を援護するんだ!」

『『おおおーっ！』』

「お主らは何を言っておるんじや!? 全員正気を保つのじや!」

「ありがとう久保君! 君たちの勇気に心から感謝するよ!」

ついにAクラスが仲間になった。これで文月学園第二学年男子全員が参戦したことになる。……あれ? 誰か参加していない気がするけど……ともかく! こんなに嬉しいことは無い!

「感謝するのは僕のほうだよ。そうさ、君が言ったとおり、自分の気持ちに嘘はつけない。世間には許されない思いであつても、好きなものは好きなんだ……!」

なんだろう。寒気が一瞬した。

「お仕置きの邪魔をしないで下さい!」

「そうはいかないよ姫路さん。僕ら彼に協力すると決めたんだ。西村先生を打倒する唯一の力を、ここで失うわけにはいかない!」

久保君たちAクラスの皆が僕を守るように前に立つ。今がチャンス……!

「雄二っ!」

「わかっている! 明久、ムツツリーニ! 階段へ向かって走れっ!」

援軍に驚いている霧島さんを抜いて、雄二が高橋先生の前に走り出した。僕とムツツリーニもそれに続く。

「まさか、Aクラスの皆まで協力するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから——試^サ獣^モ召喚!」

高橋先生の召喚獣が姿を現す。でも、ここで止まるわけにはいかないんだ!

「高橋女史! 悪いがここは通らせてもらうぜ! 行くぞ——起^{アウエイクン}動!」

雄二の掛け声を受け、白金の腕輪が起動する。その腕輪の能力は、召喚フィールドの作成。つまり——

「干渉ですか……! やってくれましたね坂本君……!」

「行けえ、明久っ! 鉄人を倒して、俺たちを理想郷に導いてくれ!」

「任せとけっ!」

異なる二種の召喚フィールドが同じ場所に展開され、双方の効果が打ち消される。今この場に召喚獣は一体もない。そうなれば相手

は生身の女の人。脇を駆け抜けることなど造作もない。

『吉井たちに続けーっ!』

「く……!吉井君と土屋君は逃がしましたが、あなたたちまで通しません!」

僕らに他の男子が続く前には、既に高橋先生が召喚獣を喚び直していた。

「流石は高橋女史。判断が早い……!」

どうやら高橋女史は自分の召喚フィールドを消したようだ。そうなると思二の召喚フィールドが残って召喚獣が再び姿を現す。白金の腕輪は少々点数を消費する上に使用中は使用者が召喚獣を召喚できないから思二は簡単にフィールドのON・OFFができない。つまり、この先は僕とムツツリーニだけで進むしかなさそうだ。

「ムツツリーニ。打ち合わせ通り大島先生をよろしく」

「……………了解」

他の階より若干長い階段を駆け降り、理想郷への最後の一本道へと辿りつく。

階段を振り切ったその先には思二の予想した通り大島先生と、加えてもう一つ人影があった。

「もしかしたら、来ないんじゃないかと思ったよムツツリーニ君」

「く、工藤さん……」

これは想定外だ。この廊下はあまり広くないため、敵は先生一人だと思っていたのに。

「工藤さん。そこをどいてくれないかな。僕らは君に手出しをするつもりはないんだ」

「あれ?もうコレはいいの?」

そういつて取り出したのは小型録音機。

「もうそんなものどうでもいいよ。僕らの目的は他にあるんだから」
「ふうん……。でも、ここを通すわけにはいかないよ」

予想通りとも言うべきか説得は失敗に終わった。

「仕方ない。ムツツリーニ、援護するよ」

保健体育勝負で、この二人にムツツリーニが勝てる確率は低い。な

ら、点数が少ししかなくても、僕が援護に回らないと突破は難し――

「……………作戦に変更はない。ここは引き受ける」

「え?」

思わず耳を疑う。

「……………奴らには借りがある」

でも、ムツツリーニの目は本気だった。本気でこの二人に勝つつもりなんだ!

「いけるの?ムツツリーニ」

「……………当然だ」

尋ねる僕に小粋な笑みを返すムツツリーニ。コイツは自分の力を信じている。自分の力が目の前の二人に負けることはないと確信している。

それなのに、仲間の僕がコイツを信じないでどうする!

「わかったよ!ここは任せた!代わりに鉄人は僕が倒す!」

ムツツリーニを残して僕は走る。そんな僕を二人は止める気配がない。

「ムツツリーニ君に免じて、ここは通してあげる」

工藤さんのそんな台詞が聞こえる。

負けるなよムツツリーニ……………!

そして、走ることに少し、後少しで鉄人の守る扉が見える。と言うところ、

ヒュンッ

僕を狙いすます蹴りが飛んできた。反射的に躲し、蹴つて来た相手を見ると……

「なっ!?何故ここにいるんだ……!」

それは、僕の良く知る人物だった。それと同時にここにいるとは思っていなかった人物……!

「どうして僕の邪魔をする……!答えろ!」

僕は目の前の人間に向かって問う。どうしてお前が……!何故なんだ!

激突!? 明久VS光正!?

目の前の人物は薄ら笑みを浮かべてる。

「答えろ……………光正!」

我が弟なら、なおさら止める理由が分からない。何故お前が僕の邪魔をする!

「悪いな兄さん。……………ここを通す気はねえ」

こ、こいつ本気だ。本気で僕を止めにかかっている。というか、よく見たら天草さんもいるし……………

「まさか……………裏切り者は光正だったのか……………!何故だ……………何故裏切ったんだ!」

男である光正が高橋女史を堂々と突破出来た理由……………そんなの光正が本当は防衛側だったからという理由しか考えられない!まさか、僕らが足止めを喰らっていた隙に突破していたとは……………!

「そうだね。オレは忠告に来た」

「忠告?」

「やめておけ。ここを通っても良いことは無い。あるのは絶望だけだ」

「違う!」

この先にあるのが絶望だど?ふざけるな!

「この先にあるのは絶望なんかじゃない……………僕の……………いや、僕らの理想郷だっ!」

そう。この先にあるのは僕らの理想郷。決して絶望なんかじゃない!

「……………あれのどこが理想郷だよ……………」

「確かに、光正は巨乳恐怖症で、女子風呂なんて天敵の集まりかもしれない……………」

こいつの症状は双子でなくても男なら誰でも同情したくなるだろう。女性のほとんどを恐怖してしまうなんて何を楽しみに生きているか分からない。

「それでも……………それでも!光正!君も男なら理想郷の光景を夢見るは

「ずだ！見たいと願うはずだ！行動するはずだ！違うかつ！」

「え？違うけど？」

「……………おかしい。ここで普通なら心を打たれて葛藤が起きるはずなのに……………」

「……………ふっ。どうやら交渉決裂だね。仕方ない。実の弟を倒して僕は先に進む！」

「へえくやるってのかクソ兄貴」

手をポキポキ鳴らす目の前の怪物。戦闘準備は整っているようだ。

「……………光正。最後に言っておく……………怪我する前に引け」

「それはこっちのセリフだ」

「忠告はしたよ……………」

僕と光正はお互いに対し攻撃態勢を整える。もう誰も止めるものはない。

「見せてあげるよ……………兄の方が何枚も上手だってね」

「上等だ……………行くぜ！」

蹴りを放ってくる光正。それぐらい僕でも容易に予想でき躲す。

そしてそのまま……………」

「天草さん！こいつこの合宿に来る途中で女子小学生をナンパしていたよ！」

「なっ……………きたねえぞ！」

「へえく光正。そんなことしていたんだく（ポキポキ）」

「落ち着いて紫乃！ストップ！ストップ！」

光正に迫る天草さん。

え？この流れは僕と光正が殴り合って僕が僅差で勝つ流れじゃないのかって？甘いよ。この世界はバトル漫画じゃないんだ。殴り合う必要はどこにもない。

「……………覚悟はいい？」

よし、今のうちに先に進もう。決してここから先の展開に恐怖したわけでは無い！

「……つと。もう兄さんは行ったな。紫乃演技はもういいぞ？」

兄さんが鉄人の方へと行ったのを確認してから、オレは紫乃に声を掛ける。

「覚悟はいい？光正」

「ちよつと待て！少し前に説明したよな!?兄さんの虚言だつて！」

紫乃には説明したはずだ！オレを突破するために紫乃を怒らせるような嘘を兄さんが付くつて。

「……むう。でも、凄くリアルな嘘ですよ？もしかしたら真実かもしれないじゃないですか！」

「待て待て！それだとオレがロリコンになってしまいうだろうが！」

「え？違ったのですか？」

「違うわ！」

何故そんな心外そうな顔ができるのだろうか？ねえ、オレって紫乃の彼氏だよね？

「違いました。光正はドSの鬼畜彼氏でした」

「鬼畜までに行ってないだろ……」

「あんなにやめてつて言っても無理矢理私を……」

「襲いに来たら襲われる覚悟くらい持つておけよ」

「……まあ、光正が私を好きなことが伝わりましたが」

「うっせ。そろそろだ。切り替えていくぞ」

「分かっていますよ」

鉄人と兄さんの決闘場（という名の女子風呂脱衣所扉前）に向かう
オレと紫乃。

そして、

「もらったああーっ！」

「ぐう……っ！よ、吉井兄、貴様……」

兄さんが無事に勝ち、鉄人が地に伏していた。

「やっど、やっど終わった……」

そして出てくる第三者。兄さんはまだ気づいていない。

「待ってるよ、美波のペツタンコ……！」

スタンガンを構え突撃する第三者。

「伏せるクソ兄貴！」

「……っ！」

バシッ

第三者のスタンガンを構えた方の腕を掴む。

「放して下さいこのブタ野郎！お姉様の操を守らないといけないのです！」

「清水さん！」

そう、第三者というのは清水美春のことだ。というか、このスタンガンって雄二が持つてる奴と同じじゃねえか。確かコレは触れたら服の上からでも一撃で感電する。

「昨夜からお姉様の元気がないのも、美春に振り向いてくれないのも全て貴方のせいです！死んで美春に詫びて下さい！」

「だとよ兄さん」

「ええー……」

「言うことを聞かなければ、この写真を公表します！」

「え？写真って——うわっ！僕の恥ずかしい写真」

お、これって、思い切り脅迫の証拠じゃねえか。これで裏付けも出来た。さすがに、この写真を見せられたらバカの兄さんでも清水さんが脅迫犯ってことが——

「——まさか、清水さんは僕のが好き、だとか？」

——分かっていなかったようだ。

「阿保か。清水さんコレが脅迫犯なんだよ」

「ええっ!?……清水さんってもしかして、お尻に火傷の跡があったりする？」

最初にそこ聞く？

「な、なんでそれを知ってるんですか!?さては盗撮や覗きをやっていますね!?!」

「……お前が言うなよ」

「とにかく大人しくして下さい。この写真をバラ撒きま——」
バチイッ

「——し、痺れますっつ!」

うるせえ。黙ってろ。

「兄さん。排除完了したよ」

「ご苦労。ところで光正。何で生きてるの？死んだはずじゃなかったの？」

「死んでねえよ。それより、オレと紫乃は戻るぞ」

「折角だから光正も見ていけばいいのに」

「行くかよバーカ。オレの目的は達成した。もう充分だ。それに——」

「それに？」

「さつきから震えが止まらないんだ」

「お、お気の毒様です」

ああ。また胸がある人に触れ過ぎた。

「ほら、行きますよ光正」

ズルズルズル

その後雄二たち男子一同とすれ違いそれから程なくして……

『割に合わねえーっ！っ！』

こんな声が聞こえたがオレには関係ない。

夜風が気持ちいいなあ……

オレは今外に出て、三日目の朝と同じ場所に座っている。何故かつて聞かれると今は部屋にいたくないからだ。紫乃と風呂に入つて上がったオレを待ち受けていたのは、死んだように呪詛を唱える兄さん、雄二、ムツツリーニの姿だった。まだ、比較的無事だった秀吉に話を聞くとどうやら、乗り込んでいった時に目に入ったのは、学園長ババアの裸だったらしい。

……オレの計画では女子たちに頼んで防衛に回らない人は部屋に残つて騒動が解決するまで自習してくれと頼み、無人の女子風呂を覗かせて出オチ感を味わってもらおうとしたのに……まさか、学園長がいるとは想定外もいいところだ。こりゃ、トラウマレベルだろう。

「やはり、ここにいたんですね」

「紫乃か……念のため聞いておくけどどうしてここが？」

「ふふっ。光正あるところに私あります」

「もう何も言えねえな」

もうこれ以上気にしたら負けだと思ふ。それにしても、

「月が綺麗ですね」

思わず声に出してしまうほど、今日の月は綺麗だった。場所がいいからなのか？

「死んでもいいわ」

すると、紫乃が頬を若干だが紅く染めて、何か繋がってないような返答をしてきた。どうしたんだろう？

「えーっと、紫乃……………頭大丈夫？急に死んでもいいとか言い始めて」

「なっ!?ま、まさか、光正そういう意味で使ったんじゃないんですか!？」

「そういう意味?いや、普通に月が綺麗だなあ〜っと。って、いたいいたい。どうしたの?」

「もおく私ばつか恥ずかしい想いをしたじゃないですか(ポカポカ)」「恥ずかしい思い?いまいちピンとこないけど……………」

「だから、どういう意味なの?」

「ふ〜んだ。教えて上げないも〜ん」

「拗ねた紫乃も可愛いね」

「うるしやい」

「あ、噛んだ」

「……………!／／(ボカボカ)」

「あはは、そういう紫乃も可愛いよ(なでなで)」

「ぷいっ」

「こりや、本格的に拗ねたか?」

「なあ紫乃。オレはこの合宿参加してよかった。お前もそう思うだろうか?」

「……………うん。勉強も出来たし、光正との愛も深められたし」

「後者は完全にこの合宿の目的から外れている気がする……………」が。

「愛してるよ紫乃」

「オレも同感だ。今までよりもなお紫乃の事が知れた気がする。」

「……………私も。んっ……………」

月光が照らす中、二人の影が幾度となく重なり合うのだった。

? 処分通知 ?

二年Fクラス 吉井光正

上記の者を除く文月学園第二学年全男子生徒総勢148名
この者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

ついムラツときてやった。

今は心の底から後悔している。

くどある生徒の反省文より抜粋く

停学期間中編 停学期間Ⅱ平和

学力強化合宿も終わり週明けの月曜日。

今日から二年生の男子はオレ以外停学処分で一週間いない。つまり、二年生男子で学校に居るのはオレだけとなる。まあ、だからと言つて特に何も無いけど。

いつも通り紫乃と登校してきたオレはFクラスの教室に入る。

「二人ともおはよう」

「おはようございます光正君」

「おはよう光正」

これで三人。うん。今日もFクラスは全員出席だ。

「そのお……光正君」

「何かな？ 姫路さん」

「合宿初日は覗き魔扱いしてごめんなさいっ」

「ウチからもごめんなさいっ」

頭を下げる二人。ああ……そんなことあったね。

「頭を上げてよ二人とも。オレは気にしてないからさ。まあ、兄さんたちは本当の覗き魔になっちゃったけど」

「でも……」

「この話はおしまい。でも、兄さんとかには謝つといてよ？ あらゆる面で可哀想な目にあつてたんだからさ」

まあ、本当に兄さんは今回はいろいろと被害を受けたんだ。……自業自得などともあるけど。

「でも、光正。言っちゃ悪いけどアンタは休むと思つてたわ。絶好のサボリ週間じゃない」

「そんな！ 真面目なオレがサボるわけじゃないじゃないか！」

「嘘ですね。本当はサボりたかつたのですがサボれなかつたのでしよう？ 違いますか？」

す、鋭いよ姫路さん。ああ、そうだよ！ サボりたかつたけど……

紫乃が家まで乗り込んで来たら学校行くしか無くなるじゃないか！

キーンコーンカーンコーン
ガラツ

「では、HRを始める。全員いるな？」

鉄人が入ってきてHRを始める。

「連絡事項だ。吉井光正」

「何でしょう？」

フルネームで呼ばれているなんて。もしかして、特別措置で休暇が貰えるのか？ ワクワク。

「お前は今日から一週間AクラスでHR及び授業を受けろ」

「何でオレだけ!? 姫路さんもAクラスで充分付いていけると思いませんが！」

「……これを見ろ」

えーつと何々？

【借用書】

二年Fクラスの吉井光正を二年生男子の停学期間中、二年Aクラスが借りるものとする。

二年Aクラス代表	霧島翔子	印
二年Fクラス代表	坂本雄二	印
二年Aクラス担任	高橋洋子	印
二年Fクラス担任	西村宗一	印

デジャブ!? 清涼祭の時に近いヤツを見た記憶があるぞ!? とうかその時よりも承認した人増えてねえか!?

「まあ、お前ならAクラスでも問題なく付いていけるだろう。高橋先生もそこは認めている」

「……はあ」

「というわけで、荷物をまとめてAクラスへ行つてこい。ちなみに時間割りはAクラスのに合わせているからな」

「ちよつと待て！ そんなの聞いてねえぞ！ オレ初日から忘れ物のオンパレードじゃねえか！」

「知るか」

「アンタそれでも教師か！」

「ほら、行つてこい。AクラスのHRが終わるぞ？」

「畜生！ オレに選択肢は無いのか！」

もういいい！ こうなれば教科書がないのでという理由で今日は全部爆睡だ！ 睡眠時間だ！

「それでは、今日から一週間。Aクラスで学ぶ吉井君から自己紹介をしてもらいます」

「今更必要ですかあつ!？」

「ええ。今回は一週間といつもより長いですので是非」

「……はあ。ええー二年Fクラスの吉井光正です。オレの知らないところでこんな状況になっていました。多分Fクラス以外ではAクラスと一番交流があるので、知らない人はいないと思います。一週間よろしくお願いします」

「では、席とかもろもろは……天草さんにお任せして。ああ、吉井君もAクラスの設備を自由に使つていいですからね。それでは皆さん今日も一日頑張りましょう」

ちよつと待つて先生！ 任せる人選を間違えてないですか!？

「……歓迎する。吉井弟」

「そうね。貴方なら心配なさそうだわ」

「紫乃の彼氏くんは気になってたんだよね」

「あはは、一週間よろしく。霧島さん、木下さん、工藤さん」

「ふふっ。光正。これから一週間よろしくね」

「出たな諸悪の根源！」

「なっ！ 諸悪の根源って何ですか！ 私はこのチャンスを生かそうとしただけです！」

「この計画犯め！ 折角オレがサボり決め込んでたら家に乗り込むし、Fクラスのあの設備ではなくこんなAクラスの設備を自由に使えるなんて……」

「使えるなんて？」

「……ありがとうございます」

「素直でよろしい（なでなで）」

畜生。確かにFクラスの設備に比べたらAクラスの設備を自由に使えるなんて贅沢すぎる。

そして撫でるな！ まるで子供扱いされてるみたいじゃないか！

……まあ、嬉しいから困るけど。

「アハハ、こういうところ見ると本当にあの吉井君の弟だね」

「まあ、勉強はできるみたいだから、双子でも違うみたいだけど」

「……優子と同じ。気が合うと思う」

そしてそこ。オレについて話してるんじゃない。

「……そういえば、吉井弟」

「何？ 霧島さん」

「……一限現代文だけど教科書はある？」

「あ……」

「あらら？ 光正つたらあゝ忘れ物ですかあゝ？ 情けないですねえ」

〜

「あーじゃあ、オレ体調悪くなったから保健室行ってくるわ」

「ま、待ってください光正！ しっかり渡してあげますから！ 冗談が過ぎましたからー！」

そうやって渡される現代国語の教科書。

「あれ？ 紫乃。オレに渡すと紫乃が勉強できないんじゃない？……？」

「私は自分の分ありますよ？」

「え……？ じゃあ、これは？」

「光正のですよ?」

思考停止。たつぷり十秒経って……

「何時の間に盗られたあつ!」

「ほら、朝迎えに行った時ですよ。今日必要なもの全て私が持つてきてあげたのです!」

「紫乃……」

「えっへん! 褒めてくれてもいいですよ?」

無い胸をはる紫乃。うん。

「お前が借用書なんて作らなければこんなことになってないんだけどなあ!」

「いひやいです。ひよひよほつねらにやいでください!」

あ、柔らかく。じゃなかったら今は怒らないと!

「……紫乃。楽しそう」

「そうね。やっぱり光正君のおかげかしら」

「あんな紫乃普段は見れないもんね」

そこの三人静かにするんだ。

キーンコーンカーンコーン

サツ

ガラツ

「吉井君。席に着いてください。授業は始まりましたよ」

「え? でもオレ以外の人も……!?!」

よく見ると先ほどまで皆友達と話していたりしていたのに授業の準備を整えて席に着いてるだ?! 早業か! とうるか真面目か!

……なるほど。これが本来のAクラスか。いつものFクラスのバカなノリで完全に忘れていた。

「あれ、オレの席って……」

「……」

そう言つてポンポンと自分の太腿を叩く紫乃。……冗談だよな?

「吉井君。早く席につきなさい」

「いやいや、おかしいでしょ!?!」

色々大丈夫なのか!?

「……冗談。本当はこつち」

そう言つてすぐ左隣を指差す。……こんな場所に椅子と机あつたっけ……? まあいいや。

「ええーでは、授業を始めます。テキストP……」

あく何だか朝から疲れて睡魔が……

「……………っ!?!」

「どうしました? 吉井君」

「い、いえ何でもありません」

「そうですか。ええーではここを……」

紫乃が何食わぬ顔で右腕を抓つてきた。もしや、寝るなということか! 意地でも起き、受けさせようというのか! オレにとつて地獄の現代国語を……! というか、よく睡魔に負けようとしていたのが分かったな! ……クツ。我が彼女ながら恐ろしい。いいだろう受けてやるよ! 授業ぐらい余裕で乗り切つてやるよ!

補充テスト IN Aクラス

授業ぐらい余裕で乗り切ってやるよ！ ……そう思っていた時期がオレにもありましたね。

自分の真つ赤になつた右腕を見つめる一時間目終わりの休み時間。いたるところに抓られた跡がある。まあ、本来は文句の一つでも言つてやりたいが、タイミングというべきか？ 全てオレが睡魔に負けそう、もしくは睡魔が襲つてきた時にしかやっていけないのだ。 ……なんでもそんなタイミングとか分かるんだよ…。ともかく、お礼を言つてもいいレベルの立場なので、文句の一つも言え無いのだ。畜生。

「次の授業は…?」

紫乃に聞いてみるが、その場に紫乃がいなかった。あれ？ トイレかあいつ。

「…補充テスト」

「わあつ…つて、霧島さんか。でも、補充テストつて?」

「(こくり)…先週の防衛組にまわつてた人の点数がないから」

なるほど。覗き騒動でか。

「まあ、学年に男子がいない現状、試召戦争を起こすクラスとかなないだろう」

……というか、もし今起きたりしたらオレはAクラス側で参加なのだろうか？

「…でも、男子が復帰するのと同時にテストを受けようと思つたら宣戦布告される可能性が限りなく低いけど存在している」

なるほど。確かに停戦期間でなければ、赤ゴリラとか坂本雄二とかFクラス代表とかがこの隙を狙つてAクラスに宣戦布告してそうだ。それに他のクラスも今が一番Aクラスが弱つていて分かつているからな…まあ、Aクラスだけでなく、他クラスもだけど。というか、一番消耗しているのって、うちのクラスじゃないのか？ だって、オレ以外皆戦つてたわけだし。そして男子ばかりだから補充出来ないし。

「なるほどな。でも、何で一日費やさなかつたんだ?」

「……紫乃が一日補充テストにしたなら吉井弟が飽きるって言った」
「あはは……」

否定はしない。

「……確かに一日丸々テストにしたなら、そこまで消耗してない人にとっては飽きると思う」

まあ、オレと紫乃が典型的だな。だって、向こうで一回も召喚獣を召喚してないもん。

それに、自分の点数を高めるためにやるなら各自が勝手に補充テストを受けているだろう。特にAクラスの生徒なら尚更だ。

「……だから、授業とテストを交互にしている。それに……」

「それに？」

「……いや、何でもない。後で分かる」

「……はあ」

「……受ける教科は自由。好きな教科を受けるといい」

「さつき、授業と交互っていったけど、今日は三時間分補充テストの時間ってこと？」

「……うん」

「この時間だけオレをFクラスに返却する案は？」

「……私は好きにしたらいいと思う。でも……」

「でも？」

「……紫乃が返却すると思えない」

……まあ、そうだよな……。後は、こうやってAクラスにいるとFクラスに戻りたくなくなってしまう。というか、オレ自身。この一週間に戻る気がさらさらない。

「光正」

「噂をすれば何とやら。どうした？」

「補充テスト勝負しない？」

「別にいいけど……何の教科で？」

「そうですね……。三教科ですよ。クジひきましょう」

「……今から作るの？」

「いえ、ここはノートパソコンにお任せします。えーっと、ここをこう

して……えい！」

すると、ノートパソコンに現れた三つのスロット。それらが止まって示したのは……

「えーつと、『数学』と『保健体育』と『現代国語』か」

数英国が俗に言う主要三教科だけど、オレ達が戦うのは数保国だ。

「では、まず数学ですね。フフフツ。負けませんよ」

「頑張っつね」

「むっ。余裕ですね。いいでしょう！ 見せてあげますよ私の実力を！」

そして、テスト終了し、休み時間。

「光正この点数を見てくださいー！」

一旦テストは回収され、点数を確認したい人が今その場で高橋女史による高速採点をしてくれる。もつとも、今日中には分かるのだが紫乃がどうしてもすぐに確認したいと言い出したので、高橋女史にお願いした。

で、点数を見ろつて言ってたな。えーつと？

『天草紫乃 509点』

「自己最高記録です！ どうですか！」

「おおー頑張ったんだね（なでなで）」

「えへへ」

本当に頑張ったんだなあ……4月では越えられなかった500点を超えてくるなんて。

「ところで光正は？」

「ん」

『吉井光正 510点』

「また一点差ですかあ!？」

「まあ、紫乃はオレには及ばないと言う事だね」

「この男……!」

おっと、紫乃にスイッチを入れた気がする。

「いいです! 次の保健体育のテストの勝負は勝ってイーブンにしてやりますよ!」

そう宣言し、授業に向かった。ちなみに次の授業は化学だった。

昼休み。いつも通り紫乃のお弁当を貰い食べている。紫乃の料理の腕は上がって今では二日に一度しか向こうの世界に旅立って行かなくなった。これぞまさしく成長だね! まだ二分の一で向こうに逝っちやうけど!

「……ふう。今日は当たりだったか」

「良かったです」

平和な昼食。暴動も喧騒も起きていない。本当に平和だ。

「ところで、テストは何点だったの?」

「415点です」

「あー負けた302点だわ」

惜しいってレベルじゃなかったな。100点差以上。いやゝ完敗だ完敗だ。

「紫乃にはオレでは勝てないや。さすが、変態は違うね(パクパク)」

「ふふん。そうでしょ……って違う! 誰が変態ですか!」

「紫乃」

「即答!? まさかの即答!?!」

「だって、保健体育が得意なんでしょ？」

「待ってください。保健体育のテストだからといって、その……せ、性的なこと以外にもしっかりとテストで出てくるんですよ！ 寧ろ比重的にそっちの方が多くははずです！」

まあ、その性的な知識だけで戦う男を一人知っているが。

「ん」

「何ですか？ これは光正の解答用紙……えーつと？」

一応補足しておく、オレと紫乃は同じテストを受けていた。数学もだが。同じタイミングで同じの教科のテストをすると、問題は共通なのだ。

「な、何ですかこれ……！」

「いかにもオレの実力だ！」

「嘘付け！ 何が赤ちゃんはコウノトリが運んでくるのですか！ 高校二年生がその解答をテストに堂々と書いたらダメでしょうが！」

「え〜？ そうじゃないの〜？」

「子どもか！」

「じゃあ、どうやったら赤ちゃんは出来るの？」

「そ、それは……って、それも最初の方に問題であったでしょ！」

ああ、あつたな。なんて答えたっけ？

「……光正。この解答は何ですか？」

そう言っただけで来た解答には、『キスすれば出来る』……わーお。

ポンッ

「子供にはちよつと早すぎたのさ」

「ピュアですか！」

「でも、この解答だと、オレ達にもう子供ができていても不思議じゃないな（すりすり）」

「まだ出来ていないから！ 私のお腹をさすってもまだ光正の子はいないから！」

「へえ〜まだ出来ていないんだ〜ということ、予定が？」

「……っ！ こ、高校生のうちは子供は早いです！」

「そりやそうです」

一応女性の結婚は法律上16歳からだ、高校在学中に子供はまずいだろ。

「まあ、安心しろ。避妊はするから」

「……………」

耳まで真っ赤にする紫乃。やれやれどつちが純粹なのやら。

「ご馳走様でした」

「お、お粗末さまでした……………」

「ところで紫乃。次の授業って？」

「体育ですね」

「へえ、実技か……………保健体育の」

「さっきまでの会話の流れでそんなところ強調しないで下さい！」

「え？ 普通の体育だろ？ 何想像しているの？」

「……………！ こ、光正のバカ！」

「紫乃は可愛いなあ（なでなで）」

そして、そつと耳元で囁く。

「ねえ、今から保健室のベッドに行かない？」

「……………」

本日一番に顔と耳を真っ赤にする。やっぱ、紫乃は可愛いなあ。後、弄ると楽しい。

「冗談だよ。というか、オレ体操服持ってきてないんだけど」

だって今日は体育予定なかったし。おっ？ これはサボれるのか？ 合法的に。

「私が光正の部屋から拝借してきました」

「何故体操服のありかを知っている!？」

「乙女の勘です」

「嘘だ！ あの短時間でオレに気付かれずに盗めるわけがない！」

「乙女の愛情です」

「……………え？ マジで？」

「乙女の為せる業です」

「乙女怖……………」

オレは自分がエロ本とか持ってなくてよかったと心の底から思っ

た。いや、持っても意味ないけどね。だって、見れないもん。とい
うか、拒絶反応が起きちゃうよ。うんうん。

対決!? 光正VS鉄人!

「はあ……はあ……」

「どうした? もう終わりか?」

地に伏しているオレを見下ろす鉄人。

「……まだだ!」

「ならかかってこい」

何故こんな状況になったのか? それは昼休み終了直前に遡る

……

「……本当にオレの体操服じゃねえか……」

万に一つあの紫乃が間違っているわけがないと思っていたが一応確認したら本当にオレの体操服だった。

「はあ……着替えるか」

取りあえず男子更衣室に向かうことにする。……さすがに紫乃に付いていくわけにもいかないし、付いて来られても困る。……あれ?

オレ、体育って何処でやるんだ? まあ、外か体育館だとは思うのだけど……

「というか、そもそもオレ一人で何するんだ?」

そう。一番の問題というか疑問点はそこだ。体育は男女で別れている。さすがに、女子側に混ざるわけにもいかないしな……色んな意味で。さて、どうしよう?

そう疑問に思いながら着替えを済ませ更衣室から出てくる。すると……

「着替え終わったか？」

仁王立ちする鉄じ……コホン。西村教諭がいた。

「ええ、まあ。あれ？ 鉄人が担当ですか？」

「ああ。二年生は男子お前しか今は居ないからな」

「はあ。で、何やるんですか？」

「そうだな。何か希望はあるか？」

「サボりたい。帰りたい。ゲームしたい」

「そうか」

そう言って納得する鉄人。マジで!? 帰らせてくれるの!?

「どうやら、お前には拳で教育を行う必要があるようだな」

なるほど。オレは返答を間違えたらしい。

「付いて来い」

そう言って先導する鉄人。ええーまさか、補習室で監禁か？

「ここだ」

着いた場所は体育館。全体を半分に仕切って、向こう側では女子が整列している。

「で？ 観戦でもするんですか？」

正直紫乃の体育姿には興味がある。まあ、男子高校生だから仕方ないということ。というか、体操服姿の紫乃も可愛いなあ。

「違う。少し待ってろ」

そう言っておもむろにマットを敷き始めた鉄人。

「はあ。マット運動でもするんですか？ 一応バク転とかバク宙とかも出来ますよ？」

「違うな。言っただろ？ 拳で語るって」

「ええーオレ暴力振るうのは得意じゃないですよ？」

「俺の背中をマットにつけるもしくはこの10m四方の敷かれたマットから外に出せばお前の勝ち。降参したらお前の負けだ」

なるほど。要するに、日頃の憂さ晴らしができるってわけだ。しかも、鉄人の許可の下で。

「ははっ。オレがそんな勝負に——」

キーンコーンカーンコーン

「——乗るに決まってるだろうがあっ！」

「制限時間は五時間目終了のチャイムまでだからな」
こうして五十分一ラウンドの勝負が幕を開けた。

そして、場面は冒頭に戻る。

「オラッ！」

地に伏した状態から脚払いを仕掛ける……が。

「フンッ」

そのまま受け止められてしまった。

「……ツチ」

バク転の要領で起き上がり、即座に飛び膝蹴りを喰らわそうと思っ
も、

「甘いわ！」

身体をずらされ、そのままリアットを喰らう。

ゴスッ

思い切り背中から落ちたので、背中が痛い。

「どうした？ もうギブアップか？」

「そんなわけ……！」

即座に体勢を立て直し、殴りにかかる。

「攻撃が単調だ。もっと波をつけろ」

攻撃の波……か。

不意に攻撃の手を休めて、静止する。そして一気に最高速で蹴りを鉄人の胸に放つ。

「……っ！」

これを避けきれないと判断した鉄人は腕をクロスさせ、ガードの体勢をとる。そのまま行けば蹴りが当たるといったところで、

キーンコーンカーンコーン

授業のチャイム。蹴りを鉄人に当たる寸前で止める。これ以上はルール違反だ。

「そこまでだ。吉井弟」

「あー勝てなかったですか」

「だが、向かう姿勢は良かったし、最後の攻撃は良かったと思うぞ」

でも、勝てなかったのが事実。いや、五十分フルに戦ったがまともは一発すら入れられなかった。しかも鉄人は攻撃はしてもオレに怪我させないようにしている。本気じゃないってわけだ。

「で？ 今週の残りの体育は何する？」

「今日と同じでいいですよ。次こそはって奴ですね」

「分かった」

オレはこの体育で悔しさと自分の弱さを感じた。これが敗北するって意味だろうか。

絶対に卒業までに鉄人を倒す。オレはこの時そう心に誓った。

………とここでオレはこんなことを体育の授業中にしているのだろうか？

六時限目の補充テストもオレと紫乃の受けた現代国語は無事終わった。

時は放課後になったのだ……。

「ふふっ。 光正。最後の勝負ですね」

「ああ。ここまで一勝一敗のイーブン。この教科で決着が付く」

数学はオレの、保健体育は紫乃の勝ちで終わっている。つまり、決着は最終教科現代国語に委ねられている。

「では、私から発表しましょう」

『天草紫乃 398点』

ほう。中々高いじゃないか。

「素直に感心するよ。中々点数が高いじゃないか」

そこは称賛に値するだろう。

「上から目線ですね。その余裕は本心ですか？ それともはったり？」

「ククツ。さあ、どうだろうな。ただ、紫乃は400点を超えてないだろう？」

つまり、現代文で腕輪を持って無かったということだ。

実に残念だ。

「ま、まさか光正。貴方……！」

「ああ。そのまさかさ。後1点で……」

そしてオレは満を持して自分の点数を公開する。

「後1点で5点だった」

ゴスツ

襲い来る陥没するような頭部への痛み。

プニツ

引つ張られ、千切れそうになると錯覚する両頬。

「（あ、意外に柔らかい……じゃなくて！）光正！ 何ですかこの点数は！」

「いひやひも、ほへの実力ひや！」

「バカじゃないですか！ 何が、素直に感心するよですか！」

「ひやから感心してひいひやろうが！」

「何言ってるのかイマイチ伝わってないです！」

……それは紫乃が放せば解決だと思う。

「ですがそんなのどうでもいいです！」

どうでもいいのかよ。

「今はこの感触を堪の——いえ、このおバカを怒らないといけません！」

「このおバカって誰だ？ まさか、オレのことじゃあるまいな。」

「おバカってひやれのひよとだよ」

「あ・な・た・の・こ・こ・と・で・す！」

おっと。今回は通じたらしい。

「まあ、いいです。放してあげましょう」

「……つと。全く、手加減ぐらいしてもいいのに」

「誰かさんが酷すぎる点数を取ったからでしょ？」

……否定はしない。

「でも、現代国語でこんなひどい点数とることが分かってるなら、保健
体育のテストを本気出せばよかったのに」

「甘い紫乃。アレがオレの本気だ!」

「……今度は蹴り飛ばしましょうか?」

あ、怖い。後ろから修羅のようなものが見える。暴力! 反対!

暴力! 反対!

「さてと、勝負に勝ったことですし、何か一つ命令しますか」

「……………あ?」

「あれ? 言ってなかったですか?」

「言っていないよね!」

「おかしいですね……言ったつもり（は全くありません）でしたが」

「嘘だ! 絶対に言っていないぞ!」

「……はあ。わがままですね」

何故かため息をつく紫乃。いやいやそんな約束した覚え一切ない
からね?」

「というわけで、今度の日曜日。私とデートして下さい」

「……………はい?」

あれ? これ結局命令される流れなの?

「だから。私とデートして」

「……まあ、それぐらいならいいけどさ。何処に行くの?」

「それは、光正にお任せします」

……………あ?

「行く場所とか、まあ、デートプランって奴ですね。しっかり練ってお
いてくださいよ」

「えーっと……」

「ちなみに、お家デートはなしですよ?」

……勝手に話が進んでいるが、まあ要するに。

「オレが紫乃をエスコートすると」

「はいです」

「いつもの行き当たりばったりじゃなくて、計画を立てて?」

「はいです」

……はあ。計画……ねえ。本当に立てる必要があるのだろうか？

「ちなみに計画を立てなかったら……」

「立てなかったら？」

「私がヤンデレになります♪」

「……はい？」

「それもかなり重度のです♪」

「よし。任せておけ」

決してヤンデレになった紫乃が怖いわけではない。

紫乃、現実を見る

光正とデートの約束を取りつけた私は家に帰った後、

「〜♪」

「ど、どうしたの紫乃？ あなたかなり機嫌がいいわよ？」

「えへへえ〜そんなことないですよ〜お母様〜」

「……………うわあ。こりや重症だ…………」

私はかなり上機嫌でした。それも、実の母親に引かれるぐらいに。

「そんな事より紫乃。風呂入る？」

「分かりました〜」

そして、母親に言われるように脱衣所に向かい、服を脱いでいく。

この前…………というか、合宿所では毎日のように一緒に入っていたので、今のお風呂は寂しく感じますが…………自分を綺麗にするとさええば大丈夫なのです！

「ふふ〜ん♪」

浴室に行き、丁寧に身体を洗う。普段から丁寧に洗っているが、明日からも光正と一緒に教室で私の隣で授業を受けるのだ。普段よりも念入りに綺麗にしておく。

「学校は楽しいなあ〜♪」

二年生に上がりたての頃は、主に光正が約束を破った（まあ、事情がアレだったので許しはしましたが）こともあってか、クラスが違うようになって、普段から一緒にいられる時間が減ったのは凄く残念でしたが、まあ大目に見てあげます。アレですよ。会えない時間が二人の想いを強くするってやつです。

「あ〜あ。光正が家に居候に来てくれないかなあ〜なんてね」

まあ、居候よりは同居。いや、同妻？ まあ、そっちの方がいい気がします。

そんな事を風呂で考え、湯船から上がります。すると、体重計と呼ばれる物が視界に入ります。

そうですね。ここ最近体重を計っていませんでした。ちよつと計ってみますか。

バスタオル一枚を身体に巻き付け、そんな軽い気持ちで乗った体重計。……そこで私は驚愕の数字を目にします。

「なっ……!」（ピ——）kgですか!？」

か、過去最高です……! ど、どうしましょう。

「あ、そっかーバスタオルが重いのですかあー」

それなら納得です。そうです。身につけているバスタオルが鉛のように重いのです。そうです。そうに違いありません!

そう決めつけた（半ば自暴自棄になりながら）私はバスタオルを脱ぎ捨て一糸纏わぬ姿で体重計に乗ります。

「……バスタオルって、そこまで重くないんだ……」

ガクツ……つと項垂れる私。そうですよね。バスタオル一枚で何キロも変わるわけじゃないですよ。いや、分かっていたよ。うん。分かっていたけど……

「このままでは……光正に見捨てられています……」

多くの男性は太った人を好まないどこか噂で聞いたことがあります。もし、光正も太った人を好まないのであれば……

『醜い雌豚め。オレの半径十メートル以内に入るな。いや、そもそも視界に入るな。目障りだ』

……こんな風に言われてしまいます! はつきり言っただけです! 光正にこんなこと言われた日にはそのまま死んでしまいたくなります!

「……ダイエットしないと……!」

まずは甘いものを断つ! この日は私はダイエットを決意したのでした。しかし、この決意があんな事態を引き起こすなんて。この時の私は考えもしていませんでした……。

同時刻。吉井家にて……

「一回死んで来いやあつ！」

兄である吉井明久は、弟の吉井光正に向けて発狂しながら殴りかかっていた。

「あぶねえなあ」

口ではそんなことを言うが特に危なげなく躲す光正。

「何で……！ 何で……！ お前弟ばかりいい思いをしているんだよ……」

項垂れる明久。そんな彼の姿を見て、何を言っているのか分かっていない光正。

「はあ。どうしてオレは今日あった出来事の最初の場面を言っただけで殴られるのだろうか」

呆れたように肩をすくめる光正。

そう。光正は今、明久に今日あったことの報告していたのだ。まあ、光正としては明久兄に聞かれたことをただ答えているだけなのだが……

「だって光正！ 今二年生の男子で停学じゃないのはお前だけ。Fクラスのむさい男どももない教室で美波と姫路さんと三人で授業を受けていたならばまだ許容範囲だった」

（そもそも、二年生の男子で一人を除いて全員停学って時点で異常だからな？）

と口には出さなかったが至極真つ当なことを思う光正。しかし、そこが分かっているのが彼吉井明久の実兄の悲しいところである。

「だけど！ Aクラスの女子たちに囲まれながら授業を受けていたなんて許せない！ 万死に値する！」

やはり残念な思考を持っていると言える。

女子たちに囲まれるということが光正にとってどれほどの苦痛か。その事を分かってやれないあたり残念な兄だ。

「やれやれ落ち着いてよ兄さん。オレはAクラスの女子たちに囲まれているとかどうでもいいよ」

「どうでもいい?」

あり得ないつと言いたげな感じで聞き返す明久。

「ああ。オレにとって重要なのは紫乃とイチヤつくこと。他の女子は関係ない……ただ、あんまり近付いてほしくないが」

(……光正って、やっぱり天草さんのこと好きすぎるよなあ……)

つと、明久は先ほどまでの怒りを何処かに忘れ若干引き気味に思う。しかし、この二人であれば仕方がないとも言える。なぜならお互いに周りから見たら引くレベルで好き過ぎるのだ。はつきり言ってお互い様。一方通行ではないのだ。

「……本当に光正って……バカになった?」

「失敬な。バカの兄さんに何でそこまでバカと言われなはいけないのさ」

「いや、確かに去年から天草さんに関わる話とか愚痴は聞いていたけど、正直ここ最近は惚気しか聞いていない気がするんだ! 彼女の作れない兄に対する嫌みか! 当てつけか!」

(もう姫路さんに告白してこいよ……絶対にオツケーもらえるぞ……余計なすれ違い勘違いが無ければだけどさ)

吉井明久は実の弟がモテることに対し、嫉妬しているが、実際のところ。光正にはもう彼女がいるし、明久は、光正より恋愛的な感情を抱かれている人物が多い。年齢性別生物学的な分類は不問とするが。ただ、それに本人が気付かないだけであって。

「というか光正は鈍感なんだよ! 天草さんからの好意にまるで気付いていなかったじゃないか!」

「はあつ!? 兄さんの方が鈍感じゃねえか! オレよりも何倍も何十倍も!」

「僕のどこが鈍感だつて言うんだよ!」

「じゃあ、オレの何処が鈍感なんだよ!」

お互いを罵り合う鈍感な双子。ただ、お互いに無自覚なためまるでダメージはない。これほど不毛な争いを体現できる双子はそういな

いだろう。

「まあいい。オレは風呂入ってくる」

「分かったよ。後で僕の宿題やっついてね」

「意味不明だクソ兄貴。停学中の課題ぐらい自力でこなしやがれ」

「そんな！ 今、僕が頼れるのは光正しかないんだよ！」

「姫路さんにでも教えてもらえ」

バタンツ

「この薄情者おおおっ！」

明久の叫びは光正の心に響くことは無かった。

紫乃、現実に後悔する

ダイエットを決め込んだ次の日。今は昼休みである。

「紫乃〜」

「何、光正」

「プリン作ったけど食べる〜?」

昼食を食べ終えた彼がそう尋ねてくる。くっ……正直言っただけ食べたい。もの凄い食べたいけど……!

「え、遠慮しておくわ……!」

昨日ダイエットを決め込んだ身だ。こんな一日で崩壊させるわけにはいかない!

「そう? じゃあ、誰かに……あ、木下さーん」

「何かしら吉井君」

「プリン作ったけど食べる? 紫乃が食べないみたいでさ」

「ふーん。分かったわ」

仕方ないって感じで受け取っておきながらおいしそうに食べる優子。くっ……甘いもの好きな私にとっては拷問だ。だが、我慢! 我慢だ……! 耐えるんだ私……!

次の日。つまりは水曜日のお昼休み。

「そういやさ、紫乃」

そういつてゴソゴソとカバンをあさり、何か保冷バツクのようなものを取りだし、そのまま中から出てきたのは……!

「シユークリーム作ったけど食べる?」

「食べ——」

ハッ! 反射的に食べたいと言ってしまうところだった! いけない! 耐えるの私! 甘いものは食べない! たとえ光正の手作りで無茶苦茶美味しそれでも今はダメなの!

「——いいわ。代わりに愛子にでもあげて」

「そうなの? 工藤さーん」

「ん？ ボクに何か用カナ？ もしかして保健体育の実技を……」
「はいコレ、確か好物だったよね？」

「わぁーい。ありがとう吉井君。いただきまーす」

美味しそうに食べる愛子。ぐぬぬっ……我慢……我慢です……！

木曜日の昼休み。

「紫乃〜」

「はいはい。展開は読めてますよ。今日もどうせ作ってきたんでしょ？ 私が食べれないからって。」

「だからもう答えておこう。」

「ごめんなさい。私お腹がいっぱい」

「そう？ せっかくショートケーキ作ってきたのに」

「そう言っで見せてきたのは綺麗に作られたショートケーキ。綺麗にカットされていることから、おそらく作った時は綺麗な円状であったと思われる。」

「……私がもらう」

「あ、霧島さん。丁度良かった。はいどうぞ」

「……なぜでしょう。目を追うごとに豪華になっている気がします。」

「ああ、あの翔子でさえご満悦だ。」

「……吉井弟」

「何かな？」

「……作り方を教えてほしい」

「それって雄二に作るため？」

「……（こくり）」

「よし、じゃあ、教えよう。えーつとね」

その後光正先生のケーキ作り講座（？）が行われ、参加者はAクラス的女子ほぼ全員……というか、私以外全員が必死に聞いています。しかも授業以上の集中力です。

私は、そんな講座を聞いてしまったら欲求を抑えきれずにどうにか

なりそうなので数学の勉強してます。あーケーキ食べたかったなあ……。

そして金曜日の朝。私はもの凄い不機嫌でした。

「紫乃おはよ〜」

軽い調子で迎えに来た光正に対し、

「……おはよ」

ぶっきらぼうに返してしまうほどに。

「どうしたの？ 顔。何時もより怖いよ？」

「そう？ 私はいつも通りだと思っただけだ」

「うーん。大好きなものを食べられなくて不機嫌とか？」

「凶星だ。はあ……何でこの男には分かってしまうのだろうか。さすが光正。私が愛する人だ。」

「だったら何？」

「いやあ……その、うん」

あーまただ。またこんなぶっきらぼうに返事をしてしまった。確かに甘いものが食べれなかったというのもあるよ？ でも、それに加えて今日は寝不足なのです。理由？ そんなの甘いもの食べたという欲求と戦っていたに決まってるじゃないですか。光正が三日連続で、ダイエットを決め込んだときに限って甘いものばかり持つてくるせいです。

「あ、今日も作ってきたんだ。今日はね……」

「もう、いい加減にしてよ！」

「紫乃……？」

「あ……ごめん。先行くね」

私最低だ。私が勝手に太っちゃって、私が勝手にダイエットを決め込んで、私が勝手に光正からのデザートを食べないでいただけなのに……それを光正にぶつけて、最低だ。

別に光正はダイエット中の私に、嫌がらせで甘いものを作ってきたんじゃないと思う。ただ、私が甘いものが好きだからって理由。100%の善意か好意だと思う。

その後走ったまま教室に入ったが、光正が後ろから追いかけてきたわけでもなく、それどころか……

「あら？　吉井君は今日は休みですか？　欠席の連絡は受けていませんが……」

それどころか、光正は朝のHRにすら来ませんでした。

朝のHR終了後。いつものメンバーが私の近くにやってきました。

「弟の方の吉井君がサボるとはねくボクとしては意外カナ」

「まあ、私も同感ね。彼が無断でサボるとは思ってもいなかったわ」

「……紫乃は何か聞いてる？」

「……私のせいなの」

「……何が？」

「私が光正が悪くないのに怒ってしまって、きつと私と居づらいからいないんだと思う……」

そう。私のせいなんだ。私が不条理に怒ったりするから……

「「それはないでしょ」」

三人が声を揃えてそう言った。

「何でそんなことが言えるの？」

「……寧ろ吉井弟がたったそれだけの事で学校に来ないとは思えない」
「い」

「そうそう。彼がそこまでメンタル弱いと思えないわ」

「アハハくもしかしたら、面白いことを考えているかもしれないかもね」
「い」

何だろう。確かに、そんな気もしなくはない。

「……昼休みまで来なかったら考えればいい」

「でも、外で何か事件に巻き込まれていたら……」

「まあ、彼なら死にはしないでしょ」

「むしろ、探偵のようにすんなり解決してそうだよね」

そうね。暗く考えすぎてもダメ。光正に会ったらきちんと謝る。許してもらえなかったら……あれ？ 許してもらえなかったらどうしよう？

キーンコーンカーンコーン

「では、授業を始めますね」

結局、光正は二時間目の途中に教室に入ってきたが、昼休みまで一言も話すことは無かった。

そして昼休み。私は不安な気持ちも抱えながら彼の分の弁当を持って話しかけようとします。

「あ、あの……光正……」

すると、光正は私の手首を掴んで歩き始めます。

「黙ってついてきて」

私は彼に手を引かれるまま歩きます。ついたのは……

「茶室？」

茶室です。どうしてここなのかとか、カギを何故持っているのかとか、本当に許可を得たのかとか様々な疑問が浮かびましたが。

「紫乃。目を閉じて」

光正の言う通り目を閉じます。何でしょう？ 何かされるのでしょうか？ ……でも覚悟は出ています。何をされても私は怒りません。いえ、怒る資格がありません。

すると、口の中に何かが入ってきます。何かそう甘い……甘い!?

「光正！ 私ダイエット中なのでから甘いものは……はっ！」

し、しまった！ 光正にはダイエット中って知られたくなかったのです……。くっ……まさか自分から言ってしまうとは……！ まさか、私を嵌めるとは……！

「くず餅だよ。それにあんみつ」

だから何だと言うのでしょうか。

「朝のあの反応とここ数日の挙動で紫乃がダイエット中ということが分かった。後……」

素晴らしいながら私の首元に触れてきます。ま、まさかバレていたとは……

「……甘いものだけではなく、普段の食事も減らしているね。おかげで少し栄養失調気味だよ」

「……ここまでバレるとか……本当に何者ですか？ 実は医者なのですか？ 無免許の。」

「ああ、一ついいこと言っておくと。別に和菓子は食べたくらいじゃ太らないから。後、抹茶淹れるから待ってて」

「は、はあ……って、今から作るのですか!？」

「何のために茶室に居るんだよ。大丈夫だ。オレ、こう見えて茶道を習っていたから」

「そう言い終わると静かに進めていきます。淹れる側にも作法があるのでしょうか？ よくわかりませんが、一つ一つの工程を丁寧にやっていくことは伝わってきます。」

「……というか、この男。料理に関しては、かなりの腕ですよ……羨ましい。」

「そう思いながらあんみつを一口……うん。美味しいです。美味しいので食べる手が止まりません。」

すると、目の前に抹茶がやってきました。えーっと。こういう時は……

「頂戴いたします」

「……あれ？ これってどうやって飲むんですって？」

「いいよ。作法とか気にしなくて」

「あ、うん。でも……」

「分かった。じゃあ、まずは……」

「ああ、こんなこと小さい頃に教わったなあ……使う機会が無さすぎてすっかり忘れていた。取りあえず、光正の言う通りに飲みます。……抹茶独特の苦みを残しながらも尚苦すぎない。丁度いい感じですよ。」

「……料理が作れて、裁縫が出来てその上抹茶まで淹れられる。あれ？ 光正っていいお嫁さんになれそうですね。恐らく並大抵の人よ」

り主婦スキル高いですよ？　この男。

「さてと、片付けるか……」

そう言っただけに行くと光正。

「あ、私も……!?!」

あ、足が痺れて動きません。無茶苦茶痺れています！　そう言えば久しぶりに正座をこんな長時間やったなあ……じゃ、ありません！　ど、どうしましょう。

「……（キュッキュツ）」

わあ……手際いいなあ……洗い物まで完璧じゃないですかあ……って感心している場合じゃありません！　動かないです！　だ、誰かヘルプです！　誰かって光正しかいませんけど！

「あれ？　紫乃まだ正座しているの？」

「こ、光正……あ、足が……」

「……（ツンツン）」

「ひゃあう!?!」

「……（ニタアツ）」

あ、この顔はダメな奴だ。良からぬことを企んでいるに違いありません。

「あーあ。朝不条理に怒られたなあーすつごく傷ついたなあー（ツンツン）」

「ひゃあつ！　棒読みですよね!!　絶対傷付いてないですよね！」

「本当に傷付いたなあー（ツンツン）」

「ひゃああ！　あ、謝るから！　謝りますから！　ツンツンしないで！」

「しようがないな」

するとこの男は軽々と私を持ち上げてそのまま背中に。

「光正……これはその……」

光正におんぶされています。

「あ、お姫様抱っこが良かった？」

「あれは恥ずかしそうなので遠慮しておきます」

「じゃあ、文句は無いよね？」

光正の背中……あったかいです。

「……………ごめんね」

「いいって、紫乃は重くないし」

「そっちじゃない。ここ数日は本当にごめんね」

「いいよ。前に言っただろ？ もっと自由にいいって。別に怒りたいのを我慢してストレスになってもらっても困るし」

「分かった。じゃあ、自由にさせてもらおうね？」

そう言っつて片方の手で、光正の頭を撫で始めます。

「よしよし」

「……………この場に捨ててやろうか？」

「恥ずかしいだけなんでしょ？ それに、光正は絶対そんなことしない。でしょ？」

「……………ツチ」

「舌打ちするならもっと抱きしめる力を強くしてあげますよ？」

「はいはい。ない胸を押しつけないでくだ……………」

「フンツ」

「……………く、首が締まる……………放せ……………」

「光正？ ご・め・ん・な・さ・い・は？」

「ご、ごめんなさい……………」

「素直でよろしい。じゃあ、帰りましょうか」

「はいはい」

「その前に光正……………んっ」

私は彼の無防備だった頬にキスをします。

「ありがとう。大好き」

そして、短くも誠一杯の感謝と想いを彼の耳元で囁きます。不意を突かれたせいなのか彼は珍しく耳まで紅くしていました。やはり私の恋人は最強ですね。

この後Aクラスに戻った私たちは、いつも以上の仲の良さを見てさつきまでの雰囲気は何だったんだ？ と全員に思われていたらしい。

嫌ですねえ。私たちはいつでもラブラブカップルですよ。

デートは中止!? 代わりに……

明日から男子たちの停学が解除される。そんな日曜日の朝。私は光正とデートする予定でした……

「最悪だ……コホツコホツ」

しかし中止です。私が風邪を引いちゃったので……しかも38℃越えの高熱です。

昨日、少し不調を感じて病院に行つたのですが、どうやら軽い栄養失調だったらしいです。おそらく、そこで風邪を拾つたのでしょう。免疫機能が低下している時につけ狙うとは……! 風邪め。意外と姑息です。

「……まあ、栄養失調の原因は私のダイエットによる弊害だったりするわけですが」

一応光正には心配をかけたくないので用事が入つたと適当に断つておきました。残念です。せつかくデートプランを考えてもらったのに……。

「寝ますか……」

自業自得ですね。私のせいです。

……これ以上起きてると、ずっと負の思考に陥ってしまいます。ここは寝て治しましょう。

額に伝わる冷たい感触。その感触は私の意識を徐々に覚醒させていきました。

きつと、お母さんでしょう。そう思いながら目を開けてみると……

「起こしたか？ 紫乃」

「……………え？」

目の前にはなんと光正がいました。

「全く……風邪ひくなんてな。ほら、しっかり布団着て」

そういいながら頭を撫でてきます。さすが、光正。撫でるのが上手い……………って、そうじゃなくて。

「あ、何で光正がここに？」

「ん？」

「メールで用事が入ったと言っておいたと思うのですが……」

「ああ、そのことか。あの程度で騙せると思ったか？」

はい。とても騙せると思っていました。

「だって、直接なら私の思考や嘘が読まれても携帯電話のメールではそんなの無理でしょ？」

……………まあ。私の心を読んでいた割には、私の恋心に気付くのが遅すぎですが。

「そうだなあ……一言で言えばオレの直感だ」

はい？

「オレの直感は紫乃に対してのみ9割ぐらいで当たる」

……………これは喜ばばよいのでしょうか？ まあ、私も似たようなものですが。

「まあ、今は気にするな」

「は、はい……」

「とりあえず、何か作るか。あ、厨房借りる……………」

動きを止める光正。

「ったく。お前は寂しがり屋かよ」

理由は他でもない。私が袖を引っ張っていたからです。

「ほら。温かいか？」

そう言って抱きしめてくれる光正。ああ、何でしょう。心の奥底がほかほかとして……

「すうー……すうー……」

案外寝るの早かったな。それだけ疲れていたのかな。

「さてと、行きますか」

そう言つて厨房に向かうオレ。すると、紫乃のお母さんが荷物を
持つて歩いて来た。

「あら？　光正君よね？」

「あ、荷物持ちますよ」

「助かるわ」

荷物という名の食材を持つて厨房に入る。

「調理器具お借りしますね」

「ええ。好きに使つて頂戴」

そう言われたので好きに使わせてもらう。とりあえず、下準備をし
て……

「ごめんなさいね。あの子の看病をしてもらつて」

「いいですよ紫乃のお母様。オレは気にしていません」

あらかたの下準備を終え、紫乃の為におかゆと自分と紫乃のお母さ
ん用の夕食。後は紫乃の飲み物を手早くかつ丁寧につつてゆくと声
をかけてくる紫乃のお母さん。そういや、何度か見たことはあるけど
こうやつて話すのは初めてかな？

「へえ、君は料理人でも目指しているの？」

「いいえ。料理はまあ、人より得意なだけですよ」

（手際の良さは普通にそこら辺の料理人と遜色ないレベルと思うのだ
けど……）

さてと、自分たちの分は完成かな？

「はい、紫乃のお母様。普通の男子高校生の作った料理でお口に合わ

ないかもしれないですが」

「いいのよ。じゃあ、いただくわね」

さてと、紫乃の分のラストスパートかな？ まあ、見るだけだが。

「……おいしい」

「それはよかったです」

(まさか、味もここまでおいしいとは……この子。紫乃が言うように本当にハイスペックみたいね)

「光正君」

「はい。何でしょう」

「紫乃を嫁にもらって頂戴」

「……はい？」

この人。今何て言った？

「何とおっしゃいましたか？ 紫乃のお母様」

「堅苦しいから『お義母さん』でいいわ」

「はあ……」

この人。さつき、紫乃を嫁にもらってとか………まあ、確かにもらいたいけど。

「それで……えーっとお義母さん。オレなんかでいいんですか？」

「光正君。私はね、紫乃が本当に好きになった人と結婚して欲しいと思ってる」

一般的なご家庭の普通の親はそう思っているだろう。もちろん例外は存在するだろうが。

「でも、紫乃の結婚する人って言うのは同時に我が『天草グループ』を背負って貰う必要があるの。だから、人格面とか様々なところをチェックしないとイケない」

「そりやそうですね。社会のクズに天草グループを任せられないですよね。いただきます」

如月ハイランドでの不良がいい例だ。

「そう。だから、例えば去年から凄い名前が出てきて、紫乃が狂いそうなくらい好きな光正君。あなたでもそこら辺を変えるつもりは無い。それは我が天草グループのルールであるからね」

「はあ……でも、どうやってそう言うのって見るんですか？　だって、それだつたらお義母さんの前だけ優等生を演じればいいですよね？」

まあ、オレは素で行かせてもらいますが」

そう。例えば評価される観点があつても、評価されているタイミン
グでその観点を良い風に演じられれば、どんなに性根が腐り切った人
間でもオツケーになってしまう。

「振り分け試験中、倒れた女子生徒を保健室まで運ぶ。清涼祭中拉致
された紫乃以下数名の女子の救出。如月ハイランドにて粗相を犯し
た我が社員の摘発。合宿にて、盗撮犯の検挙」

「……紫乃から聞いたんですか？」

「いいえ？　私の持つ情報網で掴んだ光正君の情報よ？」

情報網？

「別に、オレ一人でやったわけではありませんよ？」

「そうね。普段の姿では若干暴走しがちだったり、人を裏切ったりし
ているけど……」

耳が痛いです。心は痛くありません。

「でも、あなたの紫乃に対するまっすぐな姿勢は高く評価している」

「そうですか……」

「さて、これでこの堅苦しい話は終わり。ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

「それで、ここからは私的な話。まあ、気を楽しみにしていいわ」

元から気を楽しんでいるとは言わない方がいいだろう。

「ぶつちやつつけ光正君。君って、紫乃がこういうお嬢様じゃなくても
好きになつてたでしょ？」

余りの質問に笑いそうになる。

「なに当たり前の事聞いているんですか？　当然です」

「ははっ。やっぱり君は去年最初に紫乃が言った通りの子だ」

「はい？」

「人の肩書きも存在も興味がない子がいるって」

「まあ、興味ないですね。ついでに人の心も」

「それで、現代文の成績が異様に悪いのかい？」

「……そうですね」

いや、ほんの少しは改善されたはずなんだ。ほんの少しは。

「いい光正君？ 皆がそうってわけじゃないけどね。あの子は『天草グループの一人娘』として見られることばっかだったの。近づいてきた子は皆そう。でもあなたは違った。あなたが初めてだそうよ？ 今まで会った中で最初から無礼な発言を連発した子は」

「あはは……」

笑うしかねえな。

「まあ、そういう意味でもあなたになら任せられるわ。……はいコレ」

「コレは……薬？」

「市販のだけだね。看病は任せたわ。光正君」

「分かりましたよ。お義母さん」

「うむ。ああ、ダメだよ？」

「何がでしょう？」

「いくら弱っているからって襲ってエッチなことしたら」

「しませんよ。そういうのは、紫乃が元気な時じゃないと」

そうじゃないと反応を楽しめない。

「これは孫の顔を見られるのも近いかもねえ」

「そうですねえ」

そんな感じで話を済ませ、オレは再び紫乃の部屋に向かう。

「紫乃く元気になった？」

「少しはね……」

うーん。まだダメみたい。当然か。

「おかゆ作っただけど食べれる？」

「うん……食べさせて？」

「分かってますよ。フーフー……はい。あーん」

「あーん……さすが光正。おいしい」

「よかった。腕によりをかけて作ったかいたがよかったよ」

「私のために？ ……嬉しい」

十数分後……

「ごちそうさま……」

「さて、汗かいたでしょ？ 服脱いで」

「はあい……」

そう言つて脱ぎ始める紫乃。思わず目を背けるオレ。

「どうしたの光正？ 私の裸なんて見慣れているでしょ？」

「い、いやあ……何か申し訳なさというか……」

「もしかして、私の裸に興味があるの？」

「当たり前だ」

「ふふっ。よかった……もしかして、光正って私に興味ないのかって

思っっちゃうもん」

「そんなことない」

「……じゃあ、背中をお願い」

そう言つて背中を向ける紫乃。柄にもないとは分かってるし、こんな時に言うことでもないとも分かっているが……紫乃が凄い艶めかしく見える。……よし。

「……………」

「光正って、拭くのも上手いなだね」

心頭滅却。無心になれ。煩惱退散色即是空空是即色……！

「ありがと。前は自分でやれるよ」

ミッシヨンコンプリート。クツ、合宿の時もだが、ここまでオレの鋼の理性を壊しに来るとは……！ 紫乃め！ 中々侮れない！ お義母さんの前では平然を装っていたがはつきり言つて限界が近い……！

「光正。終わったからこつち見てもいいよ」

振り返ると既に布団の中にいる紫乃が。

「ふふっ。光正も男の子なんだね」

「どういう意味だコラ。」

「冷静を装ってるみたいだけど、我慢してるのバレバレ」

「……………ふん。」

「光正。頭を撫でてほしいな」

「全く……………」

「言われたように撫で始める。」

「本当は抱き着いて寝たいけど、光正にうつすとよくないからやめとく」

「配慮ができるみたいだ。……………こんな状態なのに。」

「……………もし、眠くなったら隣の部屋カリビングで寝ていいよ。……………おやすみ」

「目を閉じる紫乃。すると、数分しないうちに寝息が聞こえてきた。全く。完治してないのにそんなに喋るからだ……………バカ」

「オレは食器を洗い、風呂に入ってその後一晩中紫乃の看病をした。」